

新しい風俗文献誌

8



成人向
NO!

1970.00

作 六 鬼 団



● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

版 定 決

客号『花決定版』 定價一、〇〇〇円(送50円)

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

△ 内容主要見出し一覧 △

第一章 発端 第二章 恐ろしい探偵 第三章 美人の脱走 第四章 華麗な来客 第五章 救済者の失 第六章 救済者の失 第七章 悪魔の地獄 第八章 恐怖の地獄 第九章 淫蛇の執念 第十章 色事子の受難 第十一章 美津子の受難 第十二章 密室の秘密 第十三章 脱走の秘密 第十四章 華やかな宴 第十五章 地獄敷へ 第十六章 翻弄されるカッブル 第十七章 一千万円の身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すさまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい穢の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。
〒558 暁出版株式会社宛

■かつて本誌に連載中、三島由紀夫氏ほかの諸氏を瞠目せしめた注目の大幻想小説――

刊行後四ヶ月、今や週刊ベストテンに連続上位を占める話題のロングセラー、大增刷発売中!!

家畜人ヤプー

沼正三著

解説・

奥野健男

金井美恵子

並製普及版Ⅱ 46判函入・四六四頁／挿絵28葉／一〇〇〇円

■改訂増補限定版、予約募集中Ⅱ A5判／背皮本クロース表紙・メタル

象眼／貼箱入／五五〇頁・カラー挿絵16葉・1色挿絵12葉・一八〇〇部

限定／七月初旬発売予定／

定価五〇〇〇円／装本・挿

絵―加納光於

*限定版の改訂増補は今秋発売予定の続篇を
顧慮してなされたもので、全篇数百ヶ所に
及んでおり、初版本と対照されれば、また
興味津々たるものがあります。なお、すで
に予約が殺到しておりますので、至急本社
が最寄りの書店にお申込み下さい。

■英・独・仏・瑞、翻訳化決定 映画化決定



都市出版社

東京都渋谷区代々木4-22-13 代々木シャトー
103号 振替＝東京71588 TEL＝東京-379-4711

奇譚クラブ
昭和四十五年七月二十日印刷 昭和四十五年八月一日発行 八月号（第二十四巻第八号）毎月一回（日発行）
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十日国鉄大局特別供承認第210号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



8月号 ¥350

〔最新緊縛資料写真一覽〕

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろは)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 六〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縄縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判判三枚一組 一五〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号(いね)

本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企てるた
 めの努力はいたしません。



奇譚クラブ

△第二四巻 第八号・通刊第二六八号▽

(昭和四十五年) 八月号 目次

△本 文▽

扉で一言「SとMの快樂術」	田辺 君夫	(9)
△ボクの責め方△『宝塚二三夫論』	植田 清志	(10)
私の夢想 薔薇と鎖の日々	渋谷 俊彦	(18)
連載小説「大噴火」(第二十三回)	千葉 青鬼	(22)
懸賞入選 レポート「六つの性欲」	三木 京助	(30)
SMカメラ・ハント △続・川路叢子の巻▽		
『むら子恋狂い』	辻村 隆	(40)
「花と蛇」に想う「団先生へ」	前原 昇	(65)
Mの傾斜 壺中の園(4)	真砂十四郎	(66)
史実研究 切腹百年史 △女性篇七▽	中康 弘通	(74)
告白小説『被虐の旅』(4)	由利美千子	(78)
私の夢想 「美神ゆかり姫」	赤ちゃん	(89)
創作「紫の世界」	三条 剛	(90)
読後感 M女圭子に謝す	井上 雅人	(104)

奇クサロン

(230)

アブの追体験……………若松 一郎

我が主観「縛りの美学」(二)……………ロマン派生

イメージ画「妖しい蝶」……………小川 茂正

サロン楽我記(第七十四回)……………辻村 隆

初めて妻を縛って……………丸木土砂土

「SM日記」に羨望する……………仏山 逸富

S・コレクション「花開く季節」……………豪 城二

バツゲン七月号を読む……………国川 栄一

実写写真「トランプ」……………日夏 高視

「縛り」のモデルになってみたい……………倉島 辰子

編集部だより……………編集部

新聞を見て「現実とロマン」……………川口 治

フォト「狂い咲く湯の花」……………大橋美代子

M派愛好者の六月号読後感……………麻曾比須人

イメージ画「靴になりたい」……………岡 たかし

S男性の元へ行きたい……………佐野みさ子

縛り映画鑑賞「私の採点」……………岡田 康彦

「カメラ・ハント」に寄す……………今 二郎

僕のイメージ画集「女礼式・自害」……………室井亜砂路

神様への願い……………渡辺 好美

「ヤッター! ツカさん」……………東 一郎

和装讃美者の弁「振袖緊縛」……………山本 五郎

女体へのノスタルジア……………乃見 対造

連載・アブ紳士行状記「M派交友録」……………鬼山 絢策(108)

「ヤプー」問題に思う……………新宿 町人(118)

『家畜人ヤプー』雑観……………麻曾比須人(120)

アパートの檻(前)「反逆の罫」……………保藤 久人(122)

懸賞入選「ス・パイ・アクション」……………ラム ワカ(134)

最近の感想 逆さ妊婦……………羽鳥 水江(145)

連載小説「花と蛇」(続篇第六十五回)……………団 鬼六(150)

晴雨絵巻考 秘巻「地獄の女」……………斎藤 夜居(164)

マニアの思い 愚者の焰……………早木 夢二(173)

女性乗馬考 「異端」と「偽証」……………佐野 寿(174)

青春の陥穽(8) S的な開眼……………芳野 眉美(176)

創作 地球を鞭打つ(後)……………宇光 仙(184)

娘相撲 和子と京子の場合……………海野三津男(196)

SOSドキドキクイズ「SM受感」……………柴 利好(208)

お灸フィクション「嫉妬の火」……………香理多魔樹(210)

創作「おんな人柱」……………風流極道軒(214)

読者通信……………編集部選(252)

読者ギャラリー……………「悦虐前奏曲」岡 たかし・「美しき入荷物」宮城 昌子

目次カット「アマゾン」……………佐野 寿・扉カット「ムチあと」……………須坂 旭

女性泰子の子のマツ心をこよな

上げた若妻の臨月腹を中心に

躍動する妊婦裸像

新鮮な魅力は薄いだろう。やはり



須 坂 旭・画

SとMの快樂術

☆盗み見たいという窃視欲の反面、見せたい見られたいという露出欲がある。この二つをうまく組合わすときに、SとMの快樂が最高の位置に達するのを知る。☆SとかMとかの傾向が或る特定の対象にだけ發揮されるということが寧ろ多いのが普通である。先ず相手の心を掴むことがプレイの際でも肝要であろう。心の通わない所に眞の快樂は有りえない。☆縛られた女は自分の身体の自由がきかないのを理由に、あられもない肢体や裸身を堪能する程眺められるのを喜ぶ。見られていない時は興味は半減する。☆浣腸愛好には、浣腸を施して楽しむ者と施されて喜ぶ者とがある。浣腸を責めの方便として利用する者が案外多いのは驚くべき現象である。医療の一種としての浣腸がSM快樂術の藥味として活用されるのはやはり文化のせいであろうか。☆女でも男でも無理に裸にされると心の動揺はやがて肉体的変化にまで及ぶ。縛られた際には、心の動揺と肉体的変化は一層顕著なのは当然である。☆女は若くて美しければ美しい程脱ぎたがり見せたがる。ミニスカートの益々短くなるのは、あながち流行のせいとばかりは言えないようだ。男の眼を楽しませる季節が来た。

(田辺君夫)



「ボクの責め方」の筆者を偲ぶ……

宝塚二三夫論

植田清志

昭和二十八年頃に、本誌と併行して発行されていた『KK通信』に書かれていた、宝塚二三夫氏の「ボクの責め方」は、当時としては、誠にユニークな題材を軽快なタッチで書かれていて、多くの読者の絶讃を受けていたが、その後『KK通信』の発行が中止になったので、本誌に引続いて連載されることになった。

昭和三十年二月特大号の「ボクの責め方」の第一頁には△KK通信第六号より第二十三号まで連載、KK会員の喝采を拍したアブレ

ポート、要望によってノート数百頁の中からピックアップして本誌面に紹介することになりました▽と書かれている。

本誌に載るようになってからは、一回分の掲載量も多くなり、毎回数枚の、四馬孝描くところの挿絵を載せ、写真も豊富になって読みごたえも出来てきた。

私は宝塚二三夫氏の「ボクの責め方」を最初から読んでいて大いに注目していたし、また三回に亘って彼とも面識があったので、彼の逝去によって「ボクの責め方」が絶筆とな

ってしまったのを機会に、彼並びに彼の作品について偲んでみたいと思う。

彼の『女体緊縛』についての傾向は、女性の足狂崇に集約されると思う。しかし△足狂崇▽といっても、彼の場合はSなのであるから、Mの人が女の足を舐めたいとか、素足で踏まれたいとかいう△足崇拝▽とは自らその狙いが違うのであるが、△若い女性の素足▽に対しての彼の関心の深さは、相当強烈なものであったことは、彼の文章からも十分伺うことが出来るのである。



△女性の足への執着▽と△女体緊縛▽この二つが、彼の場合、どのような組合わせになるのか、私は大いに興味を持つのである。

宝塚氏は或は本質的にMであるのか、と思ったりするが、文章を読んだ範囲内ではそれを伺うことは出来ないし、また彼の言動からはMの気配は少しも感じられない。

次に宝塚氏の傾向として忘れることの出来ないのは、少女趣味である。彼の好んだ対象としては、十六才から十八才ぐらいまでの処女であったようだ。だから『清純な少女』と『女性の素足』とが結合したとき、彼のS心が最もエキサイトしたことが想像される。

従って彼が好んで被写体とした女性は、女

学生、深窓の令嬢、OL、ウェイトレス、舞妓、受付嬢、などの娘さんであったが、踊子とかストリップパーなどもよく撮っていた。このことについては後程書きたいと思う。

少女趣味の裏返しとして、彼の好まなかったのは、当然として年増、人妻、水商売に馴染んだ女、などであった。水商売の女でも、舞妓とか、若い踊子、ストリップパーなどには△劇団の哀愁▽を感じていたようだ。

元来、生活の辛苦がその足にあらわれてきているような年代の女性には、人妻であれ、オールドミスであれ、水商売の女であれ、彼の好き心は盛り上らなかつたわけである。

△女体の緊縛▽については彼一流の好みというか傾向がある。

縄とか紐を後手首にだけかけて簡単に括るといったのが彼の縛り方で縄や紐を胸にまで回すのは好まなかつた。彼に言わずと「ヤケクソでぐるぐる巻きに女を縛り上げるのは」



下の下であるのだそう。そのかわり、足首を揃えて縛るのは好きだったようで、彼の撮影した写真には、足首を縛り、それに焦点を合わせたものが多い。

△後手縛り▽と△足首縛り▽の二つが彼の狙いであって、大型の白いハンカチで後に回した後手を軽く縛るといった趣向が彼の好みでゴタゴタした縛りとか直接女体に苦痛を与えるようなことは好まなかつた。足首を括るといっても、自由を奪うとかいった意味は薄くて、彼の好きな△女の足▽にアクセントをつけるといった程度のもが多かつたようだ。

△女の足▽が好きだということは、彼の撮った写真の殆どが、ハダシ（素足）であることだ。中にはストッキングを穿かしたものやパンプスを履かしたものもあるにはあるが、それは何かの理由で脱がすことが出来なかつたときのものに限るようだ。

洋服又は着物を着けたままで素足をハダシでむきだしにするといった趣向が彼の好みの最たるものであった。

『朝まだきビルの一室の事務室



で、OL一年生の娘のストッキングを脱がしてハダシで机の上に立たす。まだ暖房のよくきいていない事務室の寒さの中で女の子の足の指は紅く色づいている。ボクの目の前には恰好のよい胼が恥かしそうにふるえている。硝子窓の向こうには隣のビルの窓々が見えている始業前のビル街の風情である。』

縛りとか括りとかはないが、ハダシのままで机の立たたさされるという事で、それ以上の恥かしさを女の子に与えているのである。彼の粘っこい視線を自分の素足に痛いように受けて彼女はどんなに身をすくませたことであろうか。彼の△少女趣味▽と△素足趣味▽が

ここに結集した感さえある風景だ。

事務をとる机の上にハダシで立っているといった不自然さが、冬の冷たい朝という季節的不自然さと相俟って女の子を尻込みさせただろうが、それが却って彼の好き心を一層駆りたてることに役立っているのだ。

「嫌だわ、嫌だわ」と女の子が軽い拒否をすることが、この際肝腎なので、こんなことに恥かしがる頃の女の子でないと、宝塚氏の氣にいらぬのは当然である。

後手を軽く縛ったまま、ハダシで砂利の上を歩かせて、女の子の素足の動きを一人で眺める彼。ドライブが好きで人気のない古寺や海岸、門構えのある家の前などで、よく女の子をハダシにしたものである。

乗っていた車フォードの車内は広いので、車の中でも女の子をハダシにして素足だけをアップでよく撮ったのである。カメラは私が彼と始めて逢ったとき見せて貰ったのは、ドイツ製の旧型の一眼レフで、シャッターを切るとき、パシャッと大きな音がしたことを覚えてる。

セルフタイマーで宝塚二三夫氏



は自分が女の子の後手首を括っているところやハダシの女の子を引き回しているところをよく撮っている。野外では光量が豊富なのでよいのだが室内での撮影の多くは露出不足とレンズを開放で撮っているため、焦点の甘い写真が多いようだ。このことはカラー写真では特に欠点を露呈し、発色が悪いのが残念である。

ドライブでは、神戸、大阪、京都、奈良、和歌山と近畿の周辺にはよく行ったようだ。写真撮影の目的があつてか、行楽地を避けて古寺巡礼に専念したように見受けられる。

彼の年令からして戦前に青春時代を過ごしたことが考えられるが、やはりその頃△貴の



大家Vとして有名だった八伊藤晴雨Vが彼の『責めの心』を培ったに違いない。石油箱に三箱もあったという八責めのコレクションVもその殆どが伊藤晴雨のものや粹古堂で販売しているものであった。又、伊藤晴雨の主宰する会の会員でもあった。

このことは宝塚二三夫が伊藤晴雨の八責めの傾向Vに同調していたことを意味するものではなくて、本来、伊藤晴雨、宝塚二三夫の二氏のそれは異質のものであったのだが、僅かに八女体責めVの点で共通点があったために、薬にでもする気持で会員になったのだらう。事実、当時は伊藤晴雨氏のものをおいて、他にそうした文献が存在したのだろうか。

私も、明治、大正、昭和二十年頃迄の八責めに関する文献Vを相当蒐集したつもりだが伊藤晴雨に関連したものを除けば本当に微々たるものである。従って宝塚二三夫氏にしても不満足ではあったが仕方がなく伊藤晴雨の文献を蒐集していたと推測される。

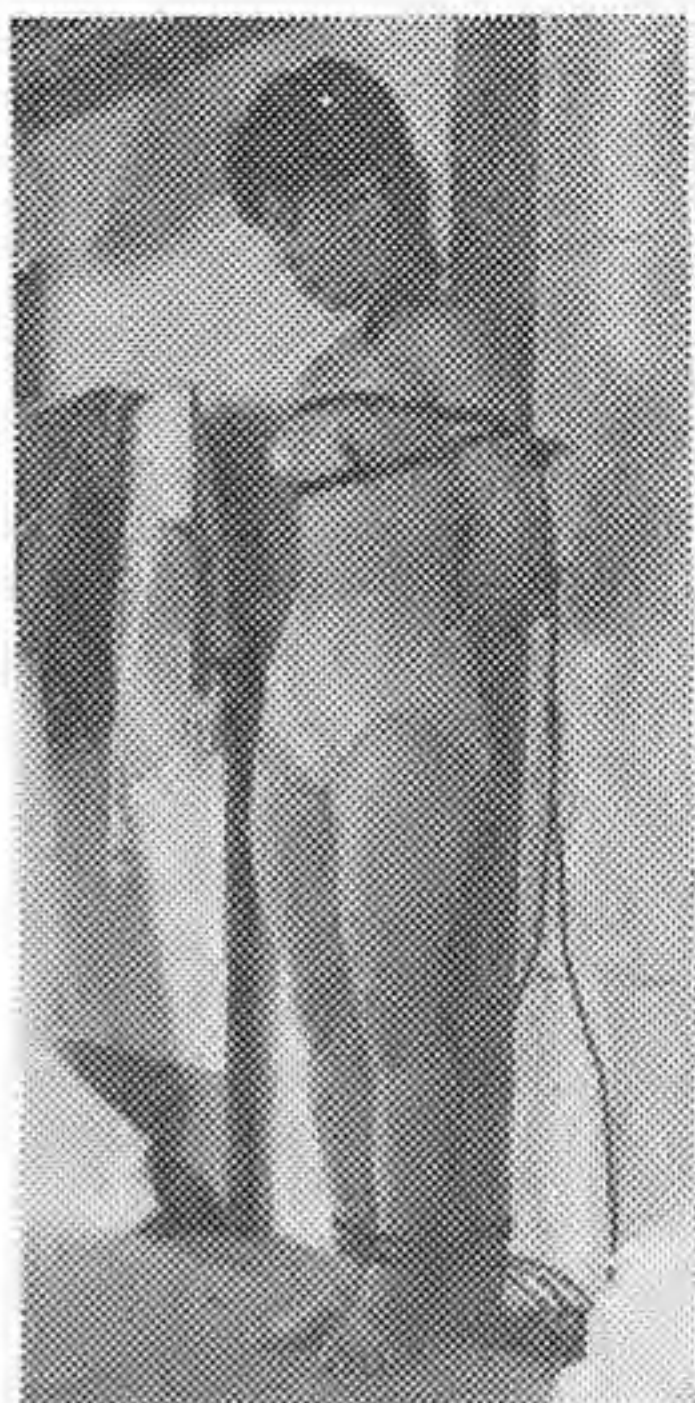
宝塚氏がその作「ボクの責め方」の中で、「アブノマリックな論壇云々」という文章を書き、八アブノマリックVという珍語を発明したのも有名であるが、彼が奇譚クラブという月刊雑誌を発見したときの驚異は相当なものであったらう。

彼が水を得た魚のように、責めの文章「ボクの責め方」を書きなぐった情熱は、十分納得がゆく。その頃、私は偶然の機会で彼を知り、彼の屋敷を訊ねて、土蔵の中でコレクションを見せてもらったりした。

元来、彼は実践派のS人士であって所詮文章を書いたり写真を撮ったりする性格ではなかった。八女責めVと八少女趣味Vと八女の素足Vに異常な興味と強い関心があったがため、文章も書き、写真も撮ったので、どちらかといえは余技としての余技であった。



後述する八文弥節Vのところで書こうと思っているが、テープレコーダーでテープを取ることも、彼としては『音を保存する』という、やむにやまれぬ必要から生じたものであらう。八文章Vと八写真Vと八テープVが彼の三種の神器であった。中条甲之助劇団とか桃谷あけみ劇団などに肩入れして、地方公演劇団の哀愁にしみじみとした共感を示したのも、彼の好きな女体責めと一脈相通するものがあつたのか。『お京捕物帖』と染めた垂幕の前で、劇団の人達と一緒に写真の中に入っている宝塚二三夫氏は中々楽しそうな表情である。ストリップ小屋の楽屋で踊子を縛っ



を脱がして、胫や足首、足指なんかを鑑賞したことが彼の文章や写真から如実に伺うことが出来る。

素足愛好とは直接関係ないのだが、彼が所謂「責め遊び」と称するものの中で特別に言及しなければならぬのが『文弥節』である。『文弥節』とは何か、彼に言

わすれば、女を責めたとき、その女の悲鳴や鳴咽に混って吐く「世迷言」とでも言うべきか。

宝塚氏が彼の文章で度々言及している文弥

て写したり、「七人の踊子たち」と題して舞台の合間に半裸のままで足を投げだしている七人の踊子の姿をカメラにおさめたりしている。勿論、彼の大好きな女の子の足を中心に写しているのだが、短焦点のレンズで撮っているため折角の足が馬鹿に大きく写っているのは惜しい。

彼の文章から推量して、彼が女の足の中で一番魅せられるのは一体どこか。私は胫ではなかったかと思う。次には足の指、踝、踵、膝、太腿、足の裏といった順ではないか。

差し当たり当今流行のミニスカート、超ミニなんか、最も彼の歓迎するところであつたらう。超ミニスカートの若い女性を車に乗せて、露わになった膝頭や太腿が彼の好色の目の餌食になったであろうことは想像にかたくなないのであるが、それ以上に、ストッキング

節は、例えば春本などで、その際の女性が思わず知らず感極まって夢中になって叫ぶ音声（敢て言葉とはいわない）と同様に、若い女性が男性から責められた時に、夢中で放つ音声だとしている。

彼の説によれば、責められる女にして、この「責め」による「がり声」／＼「世迷言」即ち文



弥節を唄わないもの程、興味の無いものはいそうである。即ち、足の美しくない女性と文弥節を唱わない女性とは、彼にとっては一文の値うちもないというわけである。

前にも書いたように、彼は責める女性に対して、苦痛を与えたり悲鳴を上げるようなことをするのは好まないもので「文弥節」といっても、耐え難い悲鳴といったものではない。

いわば、責めの羞恥に対する軽い拒否、それと、責めによる喜悅の喘ぎ、溜息、呻き、といったものの総称である。しかし「文弥節」の最もその本領を発揮するのは、責めの後に

当然のように行われる一番に於けるものである。彼がこの「文弥節」を如何に、「よい泣き声」で泣かせるかに努力したかということは、よく文章に書いている。

私が、宝塚氏と二度目に会ったとき、彼は私に「文弥節」のテープを聴かせてやると言って、わざわざ、テープレコーダーを車に積んで、行きつ

けの料亭へ連れていってくれた。彼の父は第一次世界大戦中に石炭から抽出した染料を輸出して、大儲けしたとかでお坊っちゃん育ちのところがあり、我儘で、自分の思い通りにしかやらないという所があった。自信家で積極的な行動派という性格が彼を一流の女体責めのドンファンにしまったのかもしれない。

私が聴きたいという意志表示をしないうち独り合点で、私が聴きたくてたまらない、好きで好きでたまらないと判断して準備万端を整えてくれたわけである。

何時頃から彼が文弥節をテープレコーダーに記録するようになったか、直接彼から聞いたわけではないが、一々名前を書いて保存してあるテープの数から見ても、戦後、日本にテープレコーダーが市販されはじめた頃からはないだろうかとは私は想像する。なんでも、彼の会社へセールスマンが見本の器械一台を提げて売り込みに来たのを、買ったというところである。

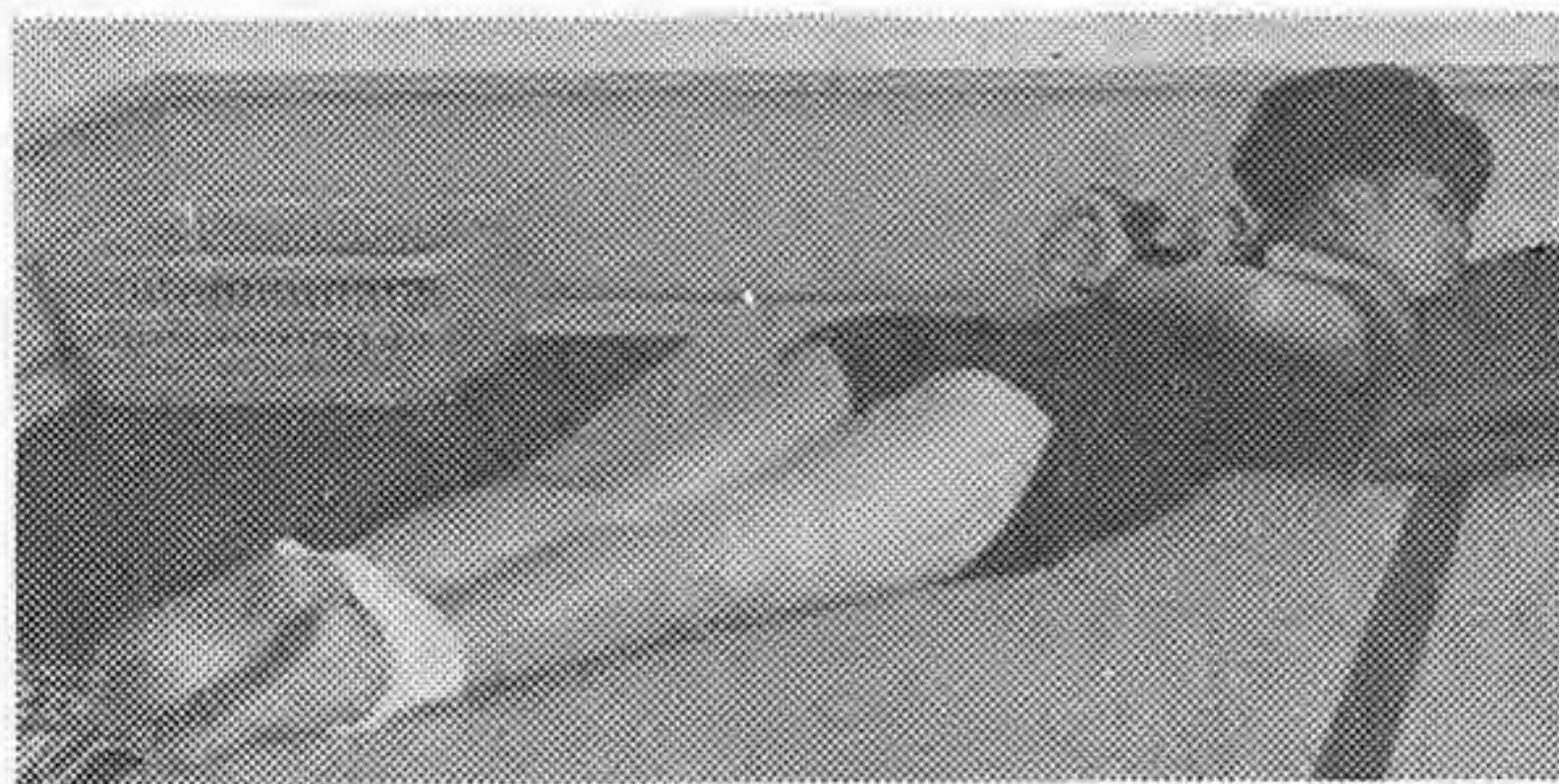


れていた。

新しく知り合った女性の飼育用として、彼はこのテープを大いに利用したことは想像に難くない。声の美しい女性、言葉づかいに魅力のある女性、抑揚やアクセントに男性をひきつける艶のある女性、彼が脚線美を愛したと同様に、注目したところで彼が自分の飼育した夥しい数の女性へ「ボクの責め方」に登場するだけでも大変な数になる」のランクをきめる際にも大いに参考にされていた。

事実、彼は京都市育ちの女性の語る京言葉には、非常に関心を持つていたようで、足繁くお茶屋遊びをしては、舞妓たち相互の自由に語りあう、京言葉のやわらかいイントネーションに喜びを感じていた。

「幸子これから責められるのネ。靴もストッキングもみんな脱いでしまっ……」とか、「桂子は



ハダシのままで机の上に立っています。あなたがもうよいと言われるまで、いつまでも立っています」とか、「いいの、もうどんなことをされても、あなたの気のすむまで、ぶって、縛ってエ」とかいった若い女性の語り口が、何の脈絡もなく、ぽんぽんと飛び出してくると、聴かされている私の方が途迷ってしまいくらいであった。

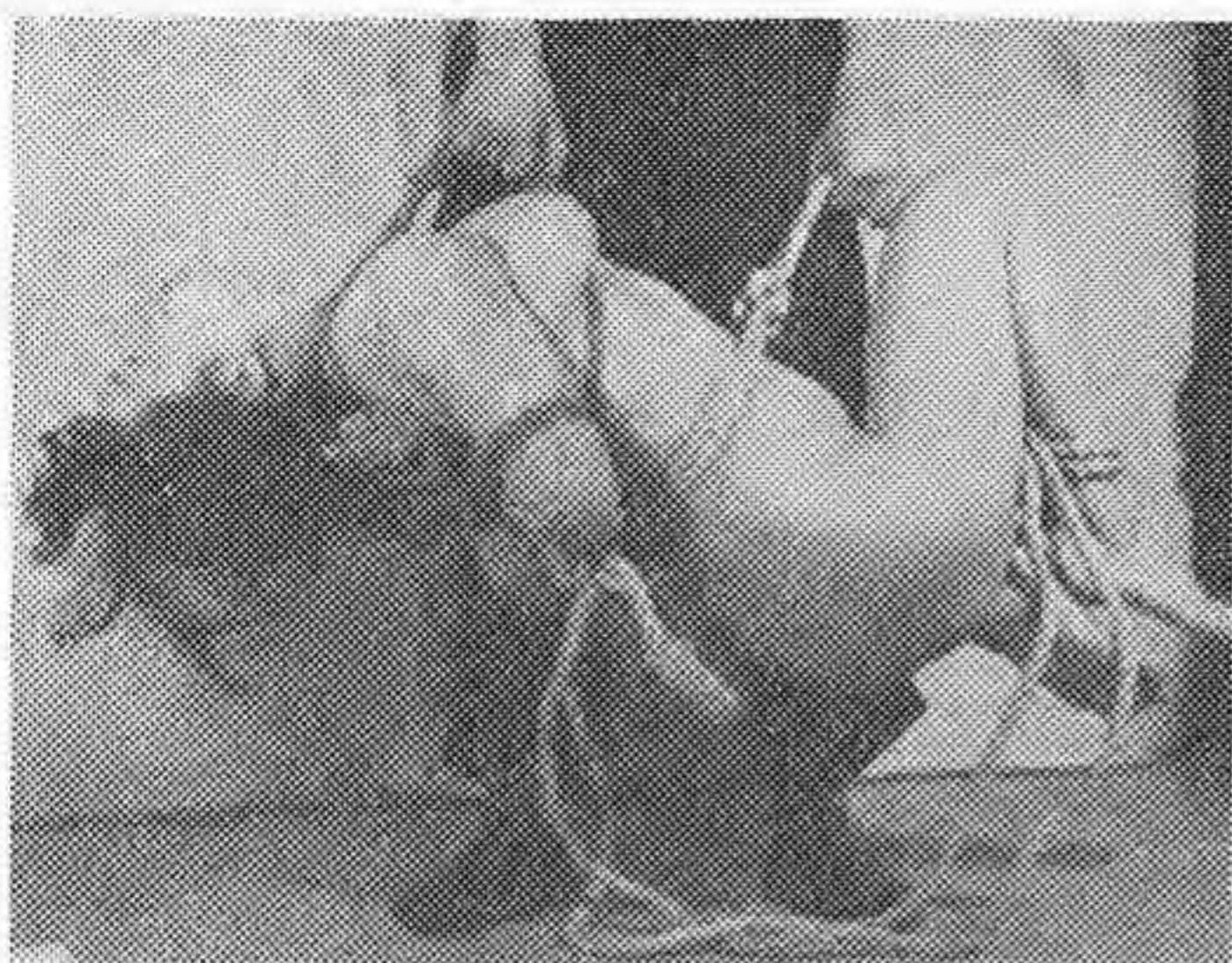
説明役の彼の説明を聞かないことには、突然聴いた私には、何のことかわからない場面が多かったが、彼は結構楽しんでるようだった。予備知識のない者にも判るよう編集したら面白いテープになったろうと考えるが、彼にはそんな気はいささかもないようだった。

彼と肉体関係のある女性の寝室に於ける文弥節は流石に迫力があつたしポルノグラフィックな魅力が、男性の好き心をくすぐる効果はあつた。宝

塚二三夫式の飼育法によって訓練された女性だけあって、ぽんぽんと早いテンポで飛び出してくる言葉やねっとりとした関西弁の世迷言も多彩であった。

私は直接テープによって聴かせて貰ったのであるが、彼の発表した文章の範囲内では、こういった春画式の文弥節の詳細にまでは筆を走らせてはいないようである。

△責め△といっても彼にとっては、言葉に依



る軽い羞恥責めといった感が深いのだが、何らそんなことに関心のない女性が、やがて自分の方から責めてほしいと自発的に欲してくるようになる過程を記録しておきたかったのである。この記録のことについては、テープの他に8ミリの映画撮影にも手を染めていたことは彼の口から聞いたことはある。しかし、私は彼の制作した8ミリ映画についての資料の持合わせは今のところない。

「ボクの責め方」の中から△文弥節△と見られるものを次に抜き出してみよう。

○

「イイツ、角い柱やから痛いナア…、……、御主人、エライもん、こしらえたナア、アッ、イッ……」

「やかましい！ どんな責め方してやろう」「どうなと、どっちみち泊って来たのが悪いんやから……」

「朝っぱらからイヤーン、なにもこんな事して来えへん！ フンフムーツ、アーン！ やめてエー、いやヤッ」

「ものすごい恰好さして……イタイナア」「何とかしてエナァー」



「アーン、もう勘忍してエ、もうしびれて……」

といった具合である。(昭和30年3月特大号「ボクの責め方」『浮気に対する罰責めの巻』△お秋より△)

○

「じゃ、今されている恰好を云ってごらん」「でも……」

「云えないなら、ウソか」

「そんな事…、はだかにされてるんですワ」

「着物着てるじゃないか？」

「でも、はだかみたいでしょう……」

「ほんとの裸にだよ」

「ハイ、されます」

「そして、……」

「くくられてるんですワ、手も……あし……」

も」 — 中略 —

「マア、くくられていたのですワネエ、マア、フフフフ」

「勘忍、許してエ……」

「そんなに见ないで……」

「じゃ……」

「あたし、何もしませんわ、今、縛るっておっしゃったから……」

「縛られるの、イヤ？」



「エエそれは……でも、悪趣味ネエ」

「じゃ、もう縛らない……」

「アア、どうして？」

「かまわないんですよ、あたし、自分の思う通りする人が好きなんですもの、あたしも、やんちゃするものネ、くくられて折檻される人があっていいのネエ、ネエ」

（昭和30年2月特大号「ボクの責め方」『令嬢浜江の巻』）から手

当たり次第に会話の部分引用してみたが、こうして文章にして書かれたものと、直接テープにとったナマの声との受け取り方は大分違ってくる。

ナマの声といっても勿論テープにとる際、今販売されているカセット式とは違って、リール式の録音器であるから、秘密にとるということも困難であつたろうから、女との合意による演出であつたということも、十分考えられる。

中には、自分の声を記録して貰えるということ、一層ハッスルしたり亢奮したり、或は茶目ッ気ぶりを発揮する娘も現われたことだろう。



宝塚二三夫氏のアウトラインについて、私は私なりに手持ちの資料に依って書き綴ってみたが、まだまだ書き足りない部分が多かったように思う。

また第三回目に彼と会った時、京都の料亭でプレイに興じたことなど、書きたいことはあるのだが、いずれ機会を見て、改めて書きたいと思う。

……………

掲載した写真は私が宝塚氏から貰った分の中から「発表禁止」と指定されたものを除いて、その一部を提供した。

私——の——夢——想——

薔薇と鎖の日々



洪 沢 俊 彦

(カ ッ ト も)

サディスト、マゾヒスト、そういう言葉が
日常会話の中に、さりげなく使用されても不
自然でない今日。

しかし、それらには中世のあの華やかなり
し頃の、エロティシズムとロマンチシズムが
秘められているのに……。

それらは、私のノスタルジアを刺戟し、母
親の胎内の、あの淡い暖い記憶をよみがえら
せ、ローソクの燃える音と、そして、鎖のす
れ合う音、美しいはずの女からもれるすすり
泣き、それ等が交錯し、私は幻影を見る。

私は、名もない絵画き。

モデルのロクサーヌは私の恋人、セーヌ河
の畔で、今、私のひざにまるやかな腹部をの
せ、タータンチェックのミニスカートをたく
られ、花模様のコottonのパンティをのぞか
せている。

「おお、ピエール、お願い。許して、もう決
して遅れてこないわ」

私の手が、パンティにかかると、私の可愛
いロクサーヌは、こういって許しを乞うので
す。

私もロクサーヌも、セーヌの畔を歩く事を
他のどの風景よりも美しいと思うので、デー
トのおきまりのコースにしています。

ところが、ロクサーヌはいつも約束の時間
を守らず、十分、ひどい時には一時間も遅れ
て来るのです。

始めの頃は、私も、ただ会えることのうれ
しさに、幾らでも待っていました。日が経
つにつれてだんだんいらだたしくなりました
ので、ある日、

「今度から、一分遅れる度に一つずつお尻を
ぶつ事にするからね」

と、一方的に宣言をしたのです。

ロクサーヌは、

「ひどいわ、まだママにもぶたれた事ないのに……」

と、だだをこねましたが、

「ロクサーヌ、お前を愛してるからこそなのだよ」

と、やさしく抱きしめて額にベレーゼをしてやると、ほほをふくらましながらも、しぶしぶ承知したのです。

「今日は十分だから、十発だね」

そういいながら、私は、あの花模様のコッソンのパンティをひざまですらします。

私のロクサーヌは、両手で顔をおおい

「ピエール、カンニンして。お願い、何でもいう事を聞くわ」

と、足をばたつかせるのです。

白いお尻は、みる間に恥じらしいの色にかわります。私は、

「ロクサーヌ、約束は約束だよ。手加減はないからね」

と、一つ一つ大切に打ちおろすのです。

「おお、ピエール、痛いわ。他の人に聞こえてよ。あっ、イタッ」

「あと三つだよ。辛抱するんだ」

ロクサーヌのお尻は、私の手の跡が重なって、美しい模様を描いています。

私は、いとおしくなり、打ち下ろす手をやめると、赤く染まった上へ何度も何度もベレー

ゼをくり返すのでした。

二

マロニエの五月の朝は、気持がいいものです。そんな日の、カフェ・オ・レと、クロワッサンは格別の味がします。

私とロクサーヌは、近くのカフェテラスで朝の食事をとっています。

ところが、ロクサーヌときたら、先刻から週刊誌から眼をはなしません。

「ロクサーヌ、いい加減にしろよ。でないとまた、お尻をぶつからね」

たまりかねて、私がいいました。すると、

「ピエールは、たしか、山羊座ね」とロクサーヌが顔を上げました。

「ああ、そうだよ、一日だからね。それがどうかしたの」

「やっぱり」

「何が、やっぱりだ」

「山羊座の人は、サディスティックなんですって」

「へーえ」

「だから、いつもひどいのね」

「ああ、そうだよ。俺、サディストだよ」

「嫌ーね」

「どうしてだい」

「だって……」

「処女座は、マゾの気があるって書いてある

だろ」

「そんな事、書いてないわよ」

「そうかい。でも、昔から、そういわれてるんだよ。ロクサーヌ、ぶたれてて、気持ちいいだろ。うれしいんだろ。だからいつまでたっても遅刻が直らないんだろ」

もちろん、口から出まかせです。

でも、ロクサーヌは、顔をあからめ、まわりを見まわして

「ピエール、やめて。そんなに大きな声でいわなくたって……。他の人に聞こえちゃうわよ」

「図ボシだろ」

「違うわ、私、帰る」

そういって、ロクサーヌは、席を立ちました。こんな事は、よくある事なので、私は、さほど、気にもしないで、カップの中の残りをのんで、たばこをくゆらすのです。

たばこが、半分位になった頃、再び、ロクサーヌが、やって来ました。

片手に紅いバラの花をもって……。

私は、そ知らぬふりを装い、タバコを口にくわえます。ロクサーヌは、だまって椅子に腰を下ろします。

少しして……。

私は、あいかわらず、タバコをくわえたまま何もいいません。

すると、ロクサーヌは、白いきゃしゃな手

をのばして、私のタバコをとります。

「さっきは、ゴメンなさい」

そういつて、ロクサーヌは、紅いバラの花を私に差し出します。

私は、その手に軽くベーズし、席を立ちます。ロクサーヌが、後から、私の腕をとり、私達は、アパートに消えるのです。

部屋に入ると同時に

「ロクサーヌ、罰だよ。服をおぬぎ」

ロクサーヌは、いわれるままに、パンティ一枚になります。(いつも、ブラジャーは身につけていないのです)

「それも、おとり」

と、私は、無表情に、残りの一枚を指さします。ロクサーヌは、ムツとして、こちらを見ますが、すぐにあきらめて、それに手をかけます。

私は、彼女を四つ這いにして、お尻をたたきます。

「ピエール、ひどいわ。もう、あやまったじゃない。私のバラの花を受けてくれたじゃない。ベーズしてくれたじゃない」

そういつてロクサーヌは、泣きじゃくりまします。私はかまわずに無表情で、手を打ち下ろします。

そして、おもむろにバラの花を手にとるとロクサーヌのお尻をチクチク刺してやるのです。

「痛、否よ。ピエール、ひどい人ね」

ロクサーヌは起き上がり、それをとろうとしますが、私が、ほほを思いっきりぶったので、そのまま、うつぶせて泣き叫びました。

私は、しばらく、立ちすくんでいましたが何故か、いたたまれなくなって部屋を出ました。五月の太陽が、まぶしく、私の眼を刺激しました。歩いていると「ジュスティヌ」の映画看板が眼にとまり、フラリと入ってしまったのですが、ジュスティヌとロクサーヌが一緒になってスクリーンにダブリ、ここでも、いたたまれなくなって外に出ました。

三

行きつけのジャズ喫茶のカウンターに坐ってコーヒを飲みながら、コルトレーンを聞いていました。

すると、シモーヌというこの店の店員が、
「ねえ、ピエール。ジュスティヌ見た？」
と、私に近づいて来たのです。

「ああ、先刻見て来たところだ」

「どうだった？ 私見たいの」

「へーえ。どうしてだい」

「ロミナ・パワーが、どんな事されるのか見たいの」

「サディストだね」

「違うわよ。何となくよ」

「ふーん。俺はサディストだよ、どうする」

「どうもしないわ」

「今夜、つき合うかい」

「こわいわね。……でもいいわ」

「じゃ、待つよ」

シモーヌとは、以前一度、一緒にお茶をのんだ事があるのです。

やはり、セーヌの畔を歩きながら

「今日は、ロクサーヌ、どうしたの？」

「別に。……たまには、別々に行動してもいいだろ」

「ケンカしたのね」

「イヤ。アパートでねてるヨ」

「じゃ、私の処へ来る？」

「ああ」
シモーヌのアパートまでは、5分とかかりませんでした。

女性の部屋らしく、ピンクのカーテンがあつて、家具は白で統一されていました。

「どうして、ジュスティヌの映画が見たいんだい？」

ソファに腰を下ろしながら、私はたずねました。

「うん？ 本を読んだからよ。サドの本は、ほとんど読んだわ」

「へーえ。やっぱりサディストだね」

「違うわ。あのムードが好きなの」

「ムードね。じゃ、やってみるか」

「何を？」

「ジュスティヌを」

「いいわね。でも……」

「でも、何だい？」

「痛くないでね」

「わからないよ」

そういうが早いのか、私はバンドをぬいて彼女のお尻を思いつき打ちました。

「痛い！ 何するのよ」

シモーヌは、驚いてお尻に手をやりました。が、その手の上にまた一つ打ち下ろします。

彼女は、必死になって部屋中を逃げまわりますが、部屋の広さは知れたものです。私の答を避ける事は出来ません。

ついに彼女は、たおれて泣き出しました。

「ひどいわ、ピエール」

ロクサーヌと同じ言葉をくり返します。

「ジュスティヌ、お前は殺人犯だ。烙印を押してやる」

そういつて私は、彼女の鏡台からオレンジの口紅を持って来て、彼女のブラウスをひきちぎります。

胸から、ブラジャーにおおわれた豊かなバストがのぞき、私は、そのブラジャーも荒々しくとりまわす。

シモーヌは、抵抗もせず、私のなすがままになっています。こぼれでたバストの谷間に「M」の烙印がおされました。

「さあ、ジュスティヌ。お前は、もうどこ

へも行かれない」

そういうながら、私は、シモーヌを抱きかかえ

「痛かったかい？」

そういつてやさしく乱れた髪をなぜつけてやります。シモーヌは、眼に涙を浮かべてうなずき、私にベーズを求めるのです。

しばらくすると、シモーヌは、再びジュスティヌになります。

「シモーヌ、今度は、ドレイとして売られるジュスティヌだよ」

そういつて、私は、彼女に全裸になる事を命じます。

シモーヌは、後向きになってぬぐうとしますが、私は

「こちらを向いたままだ」

と、彼女のお尻にムチを一打ちします。

シモーヌは、一瞬、体を固くしていました。が、そろそろとこちらを向くと、

「恥ずかしいわ」

といいます。

「又、打たれたいの？」

というと、しぶしぶ、それでも恥ずかしそうに、パンティに手をかけます。

そうして、身を被う事の出来ないジュスティヌは、ソファの上に上がられ

「さーて、お立合い。次は、とっておきの女だよ。ごらんのようにまだ汚れを知らないヴ

ァージンだよ。少し値は、はるけど、早い者勝ちだ。信用出来ない者は、この上に上がって、とくとお調べ下さいよ」

と、私の名演説が始まります。

「どれ、どれ、俺が調べてやる」

演説が終わると、今度は、街の名士に早変わり、ソファに上がって

「両手を挙げて見ろ」

ジュスティヌは、従おうとしません。

すかさず、私のバンドが彼女の手を打ち、

「両手を挙げろとおっしゃってるんだ」

ジュスティヌは、しぶしぶ手を上に挙げ

ます。

「ふむ、ふむ」

「足を開いて、もっとだ……よし。後を向いて……よし。両手両足を開いて……よし。四

つ這いになって……」

シモーヌは、もう私のいう通りのポーズをとります。

「よし、買った」

そういつて私は、彼女を抱きかかえて、下に降ろしてやります。

「どうだい？ 気分は」

「恥ずかしかったわ」

「でも、まんざらでもなさそうだったよ」

「嫌……」

そういつてシモーヌは、顔を赤らめるのでした。

女囚B七五三号

有明がエミー司令に夜伽を命じた夜、ジャンヌは嫉妬のあまり一睡も出来なかった。彼女にはアマゾン女兵のベッドが一つあたえられていたのだが、隣合う三段ベッドに寝ている女兵たちを起こすまいとするのが、やつのこと。枕を噛んで泣き声を殺さなければならぬのである。

裸の生活をはじめとして、数々の奇妙な風俗にも進んで馴れようと勉めている。有明に好かれようとする、いじらしいまでの努力の



第二十三回

結果なのであろう。恋をしてしまったのは、全学連で鳴らした女丈夫も、さすがに、めっきり弱気になる。不思議なことに彼女のレズ性は、あとかたもなく消えさってしまった。もう林美玉に対する思慕も遠い昔のことのような気がする。いや、たった一人の姉を殺した下手人だと知ってからは、可愛さが逆に憎悪を倍加させた。林美玉に対する憎しみが募るに反比例して、有明に対する慕情が深まって行ったのだといえるかも知れない。そうでなくとも、有明には女の心をトロカすような何かがプンプンしているのである。

なのに、有明は平然とジャンヌの捧げる愛

の奉仕を受け容れるだけで、一つも報いることをしてくれないのだ。素気なくされればされるほど、恋しさが燃えさかって行くのだ。うわべはニコヤカにしながら、ジャンヌは、じれて悶えた。

昼の間は呼びつけて勝手気侭なことをしていながら、夜になると帰されてしまう。その代わりエミー司令や高橋副長などのような高位者が伽に誘われるのである。

そばに坐っているときは、もっと愛して貰いたいと想いこがれるのに、こうなっては呼ばれるだけでもと、心弱く考える。呼ばれない限りは、絶対にあの房のついた紐の下をく

ぐることは許されないのだから。

三日目の晩に、やっとのことで有明から呼ばれた。心を躍らせて房紐に近づく。

これをくぐることからして奇怪なことだ。地上だったらトンデモなく珍妙な姿勢で四ん這いにならなければならない。それが、この世界では何ともいえず奥床しく見える。特にエミー司令が殆どヒップを上下させずにスツと房をくぐるのがスゴく優雅なので真似をし

前号まで「原子力潜水艦ネプチューン号は、まっしぐらに、故国に向かっていく。それは有明の王国だった。そこには世界各地から誘拐してきた美女が囚われている筈である。司令の星恵美子、副長の高橋淑恵をはじめ、乗組員は悉く美しい女性ばかりで、それが有明の手足のようになっていて活躍しているのである。哀れな囚人の中には絶世の美女といわれる山本百合子をはじめとして、数百の美形が裸に剥かれてセルの中で呻吟している。有明に臣従を誓った全学連の女斗士、ジャンヌこと小林敏子だけは例外的に自由を与えられた。それは彼女が裸の生活に同化したことを意味する。一方、脱走を企てたB二〇三号は惨烈な〇号重拘束に固定されてしまった。」

たいと思うのだけれども、それを何気なくやるのが如何に難かしいかが痛感されるのだった。

その夜、ジャンヌは燃えに燃えた。小さいのやら大きいのやら、仕掛花火のような炸裂が断続して息も絶え絶えにのたうち廻った。体内のドロドロしたものが一滴も残さずしぼりつくされてしまったようになって、やっと有明がスパークするのだった。瞬間、忘我の歓喜に彼女は狂ったように哭いた。無意識に有明の肩に爪を立てた。

しばらくして、疲労の雲がかかりはじめた頃、有明が語りはじめた。

「私のお手付きになったというだけ、おまえの地位は保証されるだろう。しかし、だからといって、正式に入国することは、許されない。そして、正式に入国しなければ自由が与えられないのだ」

「どうしたら……」

ジャンヌがオズオズと聞いた。汗に濡れた乳房が一層、大きくみえた。

「どうしたら、正式に入国させていただけられるのですか」

「先ず予備検査を受けること。これは特別扱いを願うことが出来る。第二に忠誠試験にパ

スすること。第三にトレーニング。第四にゴールド・リング資格をとること。この四つの段階を避けることは出来ない。どうかね、志願してみるかい」

「はい」

即座にジャンヌは答えた。愛する人に少しでも近づけるためなら、火の中でも水の中でも喜んでとび込んで見せたいというところであつた。有明も、わが意を得たというようにニッコリした。その微笑が又、何ものにも変えられない程、ジャンヌを幸せにした。

そのあと高橋副長に、ジャンヌの肉体番号を決めて、タトウーマシンを持って来るようにいつけた。

この入れ墨をする機械は、小型のナンバーリングのようなもので、文字盤を合わせてから皮膚にあて、ボタンを押すと墨を含ませた鋭い針が文字の形に急激に飛び出し、皮膚に喰い込むのである。

「ナチスは昔、薬品で入れ墨したのだが、これでは痛みを伴わないという点で不十分なのだ。矢張りタトウーは古式のままだが、いい」

とりよせた機械をいじりながら、有明がいった。

「イタイんですか」

「それは痛いさ。一度に注射針が何十本と、ささるのと同じことなのだから。だが一般の場合は逆吊りにされて、それよりもっと酷い検査を受けている最中だから、殆どが入れ墨されたのを気付かないでいるがね。あとで鏡に映ったのを見せつけられて、アッと驚く手合が多いんだ」

「どうしてそんな目に遭わせなくっちゃならないんですか。よくお話してあげれば、おっしゃる通りになる方も多いでしょうに」

「それはそうかも知れぬ。しかし、手易く入った者は又、手易く出て行くものだ。大きな努力、大きな犠牲をはらってこそ永続性のある忠誠が期待できる。誰でも、予備検査までは先ず物として扱われる。更に忠誠試験にパスするまでは畜生でしかない。共に人としての意思を認めないのだ。その段階を経て、はじめて奴隷となることが許される。その後、努力次第で自由奴隷の資格が与えられると、やっと私と話が出来るようになるのだ」

「それまでには、どのくらいかかるのでしょうか」

「資質と努力とチャンスによって様々に異ってくるさ。だが、早くて一カ月、遅いのでは



でも離されることさえ大変な苦痛となった。どうにもならない愛欲の絆に、肉体ばかりか心までも、ガンジガラメになってしまいうジャンヌであった。

「ツ、痛イッ」

歯を喰いしばっていても、思わず悲鳴が、洩れてしまった。

産婦人科の診察を受けるような恰好で待つ間に、当てがわれた器具から墨をタップリ含んだ針束が噴き出して皮膚を縫った。

痛みは、しかし一瞬のことだった。でも、むしろタオルをあてて止血を待つ間に、シクシクと歯の痛むような疼痛が残る。

それでもジャンヌは、入れ墨が有明一人の手でなされたことを幸せだと思った。一般女囚の例を見聞きしていたからである。

「もうよくなったらう。動かなかったから、



数年かかっても到達出来ない者がいる」

「早く、早く、おそばに侍れるようにお願いします。必ず一生懸命に頑張りますから」

「いいとも、私もそれを望むよ。どんな苦し

くっても、はじめの一念を貫き通すことだ」

と人のことのようにいう有明は、本当に憎らしいと思うけれど、一旦こうなっては一寸

文字がキレイに入った。七五三とは縁起のいい数だ」

覗き込みながら有明がいった。

「そんなにご覧にならないで」

顔を真赤に染めて恥ずかしがるのに、有明はなかなか腿を閉じる事を許してくれない。そこには、肉体番号F七五三号の文字がクッキリと彫り込まれていた。

「イジワル」

と、すねてみせるのに、

「おい、そんな馴れ馴れしく口をきけるのも今日限りだぞ、明日は入港だから。そうしたら、しばらくの間は一般女囚と一緒にしていなければならぬ」

「せめて……」

と、もう声をつまらせて

「今夜だけは地上のままにさせて下さい。明日からの身分のちがいは、ああ、天と地ほど

に離れてしまふんですから」

「しかし、その隔絶を近づけるのは、お前の努力と根気しかないのだよ」

「一生懸命、やりますわ」

「まもなく高橋が迎えにくる。お前は今夜はセルの中で一泊しなければならない」

「エッ、それじゃ、今夜はおそばでお伽することができないのですか」

「そうだ」

「アア、どうしてそれを前からおっしゃって下さらなかったのですか。それならそれで」

「それが甘えというものだ」

ピシャリと有明がいった。

「これから、私の気まぐれを責めることはできぬ。私の国では、私だけはどんな嘘をついても構わないのだ。私のいうことだけが正しく、それに反対することは許されぬ。私がいかなかったからといって、それはお前に関係のあることとは考えられない」

「その通りです。わたしが間違っております」

消え入りそうな声でジャンヌがあやまる。

「それより私の手で未決服を着せてやろう。せめてもの手向けだ」

山本百合子が裸でいるよりも恥かしいと思ったアノ未決服が一人分、ジャンヌのために用意してあった。

「未決女囚F七五三号、立てッ」

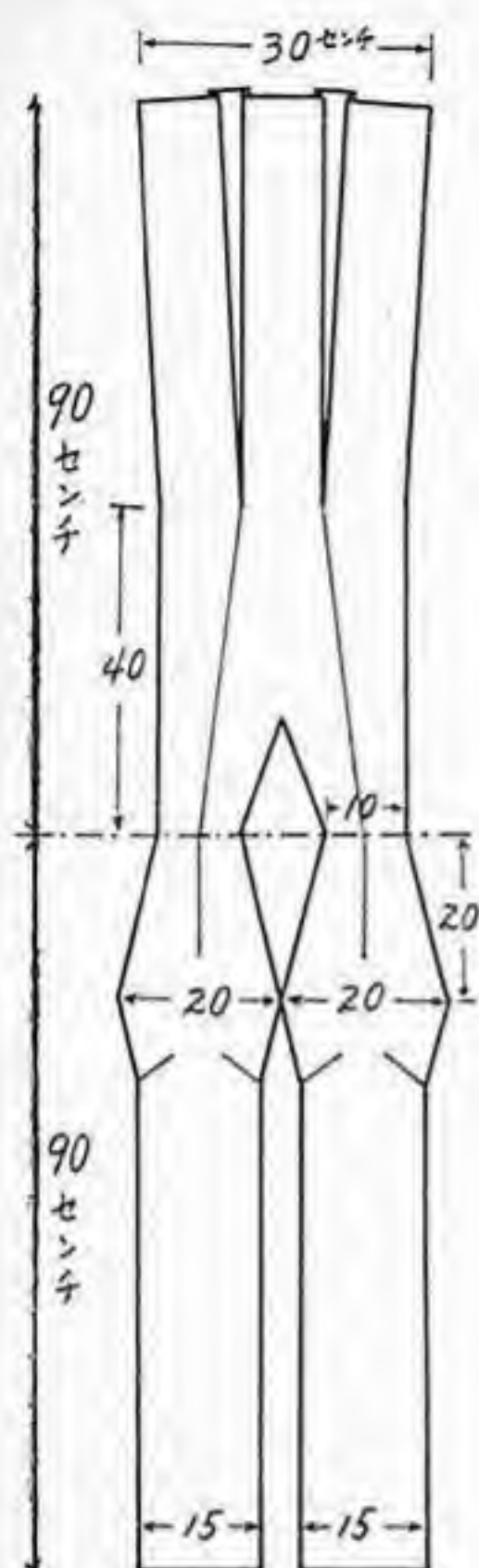
わざとらしく有明がいった。ギクツとしてジャンヌは立ち上った。もう完全に気を吞まれてしまっているのだ。

T型の下帯がキツチリとヒップをしめつける。更に例の奇妙なハンテンが着せつけられる。

首輪、手錠、足錠のアクセサリーも、それぞれとりつけられた。首輪にブラさがついている迷子札のような金札にも、F七五三の文字が刻まれている。

もう一つ、長さ20センチ直径3センチほどのパイプが首輪の後にカチリととりつけられる。パイプの両端には金輪がついていて、そこへ夫々手首のバンドを固定するようになっていた。このパイプは写真の三脚や自動車のアンテナのように折畳み式になっているので必要に応じて一メートル以上にも伸びる。

とに角、ジャンヌの両手は頭の後で組んだときのように縛りつけられてしまったことに



なる。足首の間にも、30センチ位の鎖が渡された。

丁度そのとき、高橋副長が扉口に伺候して来た。ジャンヌを受け取りに来たのだ。

「じゃあ、元気で頑張ってこいよ」

未決服からハチ切れるようにハミ出しているジャンヌの艶々と丸い腰のあたりを、ピシヤリと叩いて有明はジャンヌの首輪に繋る手綱を高橋副長に渡した。平伏してそれを受けとった高橋副長は、もう一つの手でジャンヌの首輪を押えつけ、絨氈の上をひきずるようにさせながら房紐をくぐらせるのだった。覚悟はしていたものの、牛馬のように引立てられて行くことの屈辱感に、ジャンヌの心は煮えかえるようだった。全身の血が逆流して、五体が朱に染まっていた。

彼女の行手には、もっともっと非人間的な取扱いが待っているのだ。あの望月レイ子が受けたと同じ耐えがたいまでに詳細な検査もそうだし、セルでの生活自体が人間的自由どころか家畜的自由すら許されない。全く生きものとしてではなく、家具や何かと同じように意志のない物体としてしか認められていないのである。有明に甘やかされていただけにジャンヌは急転直下の凌辱を更に手酷く感じ

るであろう。

事実、サリンジ・ルームへ入れられるやいなや、彼女は有明が着せてくれた一切の布切れを再びハギとられてしまった。こういうとき、未決服はまことに便利に出来ている。手足を拘束したままでも、簡単に着脱出来るからである。

入 港

「艦首部ヨーソロ」

「艦尾部ヨーソロ」

水中リーダー（ソナー）を操作する男奴隷から太い声で報告があった。海中トンネルを三十分ばかり息を詰める思いで通って来た挙句のことである。もう島の中心部に近いのであろう。

「オールエンジンストップ」

エミー司令の、女にしてはひどく威厳のある命令が司令室にひびきわたる。

司令室の中央に縛りつけられていた主舵操縦員達がホッとしたようにハンドルから手を離した。

「メインタンクブロー」

再びエミー司令の声。

シューツという圧搾空気の排出音と共に、

艦は静かに浮上しはじめる。すでに水中作業員が艦首と艦尾を夫々防舷材に繋ぎ止めていた。地底にポツカリと洞穴のように出来上がった入江は、海中トンネルを通じてのみ外海と連なっていた。火山噴出のときのいたずらであらうか、この入江にはネプチューン号位の艦を数隻繋留出来るに充分な広さがあった。

有明のシンジケートは、一連の地殻調査の結果、これを発見。ここを秘密根拠地に決定したのだった。外部はゴツゴツした火山岩に蔽われた小島である。勿論、住人はいない。出入は潜水艦によるだけであるから全く人目に立たない。附近を航海しても誰一人、ここに有明の秘密基地があることを想像する者すらなかったのである。

洞穴には煌々と照明が輝いていた。

満々と海水を湛えた水路の一隅に埠頭が設けられていて、ネプチューン号はゆっくりと引綱に曳かれて、そこへ近づきつつあった。

艦内では丁度、一昼夜前から女囚たちの上陸準備が行なわれて、やっと三十分程前に完了したところだった。

女囚たちの食事は一日前から、排泄を極度

に少なくする宇宙食のようなものに切りかえられていた。ペースト状のドロドロした主食以外、水分は一切、与えられない。その上、入港五時間前から次々と例のサリンジ・ルームへ曳いてきて浣腸のあとカテーテル訓練を行なう。その前に自在パイプによって両手首を首の後に固定されてしまっているの、カテーテルをどうすることもできなくなる。そこで順番を待つため、もとのセルに戻されている間はダラダラと垂れ流しでいなければならぬ。かなりの間のセル暮しで、大抵の辱かしめには、もう馴れかかっていた女囚たちでさえ、今は、あらためて惨めな身の程を痛哭するほかはない。このことは、移動の途中での粗相を出来るだけ少なくするために採用された。又、両手を首の後ろで縛る方式は両肘で顔を挟むようになるので、投げ出されたとき顔の傷つくのを避けようという配慮からであった。

入港予定一時間前に、セルの自動装置はフル作動に入った。セル内には洗滌水が噴射され女囚の裸身を含めて一切が清潔に洗い流される。それが終わると、暖い乾燥エアが嵐となって吹き込んできて、忽ちセル内をカラカラにしてしまう。エアには防臭香料が混せて



あったから、セル内には、すがすがしい香気が満ちた。そうしている間にも、運搬装置が次々と女囚を攫いはじめた。透明な円筒に掬い込まれた女体は、身動きも出来ぬままリフトでサリンジ・ルームへ運搬された。そこでやっとのこと、カテーテルから解放してもら

う。未決服の下帯がギュッと締上げられる。上衣の前垂が肘の間から差込まれ、やっとう乳房を蔽ったところで、錠のついたベルトでウエストに固定された。

その上で頭から特製のガニーバックをかぶせて、全身をスッポリと包み込んでしまう。これには三カ所に頑丈な皮ベルトが縫いつけてあって、夫々、女囚の胸、腰、膝のあたりを締めつけるようになっていて、頭部にある鉄環をフックにひっかけると、女囚たちはミノムシのように、なすこともなく次から次へと吊り下げられて行く。狭い潜水艦のハッチから手早く女囚たちを荷揚げするために考案された方法だった。

埠頭にピッタリと横づけになったネプチューン号には陸上からコンベアーベルトのラインがとりつけられ、やがて陸続として「ミノムシ」が吐き出されてきた。コンベアーのつなぎ目でガタンと落ちるたびに、その柔らかい荷物から呻き声が洩れた。かなり早い速度で埠頭を横切り、反対側にポツカリ口をあけている直径80センチばかりの洞穴の中に吸い込まれて行った。

こうして運ばれて行くのは積荷の殆ど95パ

ーセント以上を占める二等扱いの女囚たちだけで、三等扱いの男囚、新津謙介やホセ・アマビスカなどには当てはまらない。彼等は余程特殊な技能やその他の目的で本意ならずも連行したのだから、女囚の場合程、受け入れ態勢は整備されていないのである。とに角、彼等は仮死処理の上、嚴重な木箱に梱包して揚陸されることになっている。

今回の航海は日本に寄航する航程だったから、女囚ばかりでなく、夥しい数の補給物資も陸揚げされた。この国の指導的人種構成はどうしても日本人が多いので、当然のことであつた。

生きるために必要なもの——という限りでは、この国に不足するものは何一つとしてなかった。原子力、地熱、海流などは勿論、太陽からもエネルギーを活用する施設が完備していたし、海洋利用によって人間が生命を保つに必要な栄養源は殆ど百%自給自足されている。豊富なエネルギーは電力、熱力に転換されて最高の文化生活を可能にしていた。

考えてみれば、裸の生活ほど高度の文明を必要とする生活はないのである。寒冷酷暑に適応せざるを得ないように育てられた未開野蛮の時代はいざしらず、二十世紀も後半とも

なれば、人体は余りにも保護を必要とするようになってしまっている。これは進化であろうか、又は退化であろうか等と議論をする前に、現実には裸体の習俗を不可能にしているということを先ず認めなければなるまい。それを可能ならしめるということに座標をおけばそれには人工の空間が必要となってくる。有明の建国はそのようなコンディショニングを基盤としていた。最高の技術と恵まれた立場条件が揃って、はじめて実現する計画であつた。有明がガボンで権力と富を獲得してからまだ十年と経っていないのに、彼はこのような理想郷を建設していたのである。

「さあ、目的地に着きましたよ。上陸です」
エミー司令が、にこやかにいった。わずかな数日の間に、山本百合子はめっきりやつれてしまった。そして、救われようとする望みを完全に断念してしまっていた。

「ただしお約束があります。私のいう通りにしていただきたいのです。嫌だとおっしゃるなら、私はあなたを縛らなければならないのです」

というエミー司令の言葉に、百合子はカスれた声で答えた。

「もうおしまいですわ。おっしゃる通りにするしかありませんものね」

「よくわかりただいて助かります。あなたは、この国で最も幸せな地位に着かれる可能性を持った方なのです。それだけにわれわれも、あなたに大変な注意を払っています」
「どんなにして下さっても、私は嬉しくございません。私はただ、ただ家へ帰らしていただきたいのです」

ともう涙ぐんでくるのへ、かぶせるように「サア参りましょう。元気を出して下さい。泣いても笑っても同じことなのですから」

美しい人はどんな姿でも美しいというが、あの不恰な未決服をまとうていても、天のなせる百合子の麗質は蔽うべくもない。それでも、はるかしげに肩をすくめるようにして歩き出すと、エミー司令が背中を押すようにして従う。

今日のエミー司令は、アマゾン女兵の戦闘服を着ていた。階級によって鞆皮の色が変わるが、彼女のは抜けるように白い。白色は、この国で最高の地位をあらわしているのだということは後に詳しく述べる。

艦外へのハッチがある司令室へ出たとき、一人のアマゾン女兵が素晴らしいインドシルク

のサリーを百合子の身体に巻きつけて、更にその余った布地で頭部までスッポリとかぶせてくれた。

「艦外はまだ外城なので、男奴どもが大勢、働いています。あなたに彼等の卑しい視線を注がせてはなりません」

その理由は、すぐわかった。

エミー司令と一緒に百合子がタラップをあがって行くと、埠頭では今、荷役作業の真最中だったのである。

ネプチューン号の巨大な艦体は、洞穴の黒々と光る海水にドッカーリと腰を据えていた。そのハッチというハッチが全開されて人が忙しそうに出入りしている。

前部船艙からは例の人間梱包が芋虫のようにコンベアーシステムの上を動いていた。そのラインのあたりを多勢のアマゾン女兵達が拳銃を持って看視している。アマゾン女兵も戦闘服の上にマントのようなものを着て、挑発的な裸身をかくしていた。

次に百合子の目に触れたのは、忙しそうに働いている男達の姿だった。忽ち百合子の顔色が変わった。それは彼等が生まれたままの姿でいるという理由ばかりではなかった。たしかに、全裸というのは正しくないかも知れ

ぬ。彼等の頭部は、顔の部分を除いてピカピカ光るステンレス製の兜で包まれていた。この兜は男奴の顎を固定し、後頭部で施錠することによって着脱を不可能にしている。更にその罅穴も熔融した金属で封印されているというもののしきだった。しかし、それとも百合子をおどろかせる原因ではなかった。

それは、あまりにも醜い下腹部の傷痕だった。男奴たちはことごとく、その器官を切断されていたのである。たくましい男性の肉体をしていながら、下半身だけは女のようにだった。百合子は東洋史の講義で宦官のことを知ったが今多勢のそれらを現実に見て、あまりの嫌悪感に思わずゾッとして立ちすくんだのであった。

エミー司令は、それを勘違いしていた。

「あのヘルメットには男奴が勝手な行動をしないような電波装置が組み込んであって、彼等の行動はすべてコンピューターが見張っています。ですから、おしゃべりしてはならないときに口をきいたり、命じられた以外の行動をした場合はコンピューターが処罰するのです。ヘルメット内のレシーバーから物凄く不快音が出て、男奴が命令に服するまで鳴り続くのです。でも実際はほとんど必要ありません。

せん。というのは、このように働けるまでには充分な洗脳と調教が終わって、忠誠度がある許容量に達していなければならないからです」

エミー司令の説明は、兜に関するものだった。しかし、百合子には男奴たちの傷痕の方が、よりショックだった。そして、自分と同じ哀れな犠牲者だと理性は認めていても、感情はこのいやらしい男奴どもを嫌悪以外の何者にも見ることが出来なかったのである。

埠頭には小型のジープのような電気自動車が待っていて、二人を乗せると軽快に走り出した。埠頭の一番奥の方に大きな鉄扉があった。エミー司令は、その横に小さな見張り小屋があった。エミー司令は、その中に、つかつかと入って行く。しばらくすると、鉄扉がゆっくりと開きはじめた。ジープはライトを照らして暗い扉口を入った。背後で扉が閉まるのと、エミー司令が再び乗り込むのと殆ど同時だった。まっ暗な坑道のようなところを、運転するアマゾン女兵は馴れたハンドルさばきで車を走らせるのだった。

百合子のえり首に冷い水滴が落ちて、彼女をゾッとさせた。この暗黒のトンネルはどこまで続くのだろうか。

(未完)

懸賞入選作品

レポート

六つの性欲

三木京助



あらい・かず画

小生がこの世界に憧れ始めたのは、今を遡る十五年前の十四才の春でした。その当時の思い出としては、実にたあいのない独り遊びにふけり、幼稚な空想の世界を慕っていたに過ぎませんが、SMに対する実感と言うものが年と共に大きく成長し、十八才の時、独語で書かれたSM誌を手に入れましたが、情けないかな独語は読めず遺憾でなりませんでした。そこで私は独、仏、英語と三人の先生について語学を学びましたが、「Bonjour Tristesse」、[Erste Liebe]等の純文学を読む楽しさと、翻訳にない原文からにじみ出る感情と実感の楽しみを知るにつけ、SMに対する願望が次第に薄れてきました。

その後、学校も出、真面目な会社員として働き、そして恋もしましたが、五年後にエンジニアリングの仕事に独立したのです。

この仕事は人目には華やかに映りますが、実は非常にじみな仕事で、いつも孤独感におそわれ、いつとはなしにSMに対する、心に残したものが甦ってきたのです。その時、埃にまみれた独語のSM誌が目につき、それから色々な本の蒐集が始まったのでした。古いもので一九二六年発行の物を含め、六十三冊が、今、手許に並んでいます。これらの

中で、特に異常性欲に關した精神病理学の興味を引く症例について、書き抜いてみたいと思います。○

現在、異常性愛の本質を理論的に見た方法が二つ有り、その一つはフロイトの精神分析理論で有り、他の一つは、ゲープザッテル、E・シュトラウス、F・クンツ、及びO・シユワルツの「人間学的」な倒錯理論であるとされています。

これらはいずれも、皆さんご周知のフロイトの「性欲理論に關する三つの論文」(S. Freud: Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, 1905, Ges. Sch., Bd. V)に始まることになっていますが、あらゆる異常性欲(同性愛、サド・マゾヒズム、手淫、フェチズム等)について詳しく分析し、理論的に定義づけることは、これら異常性欲者の生立^{おいたち}やら生活環境迄立ち入る必要があり、これ等が判ったとしても、精神病理学者でない私にとっては不可能であります。なぜなら私自身が異常性欲者である(つまり学術用語から言えば、性的倒錯者である)からです。

そこで性的倒錯に就いて多くの文献の中から特に本内容に關連のあるものを、抜萃し紹

介するしかありませんが、次の六つの事項に分類することが出来るようです。

- 1、のぞき—露出癖者
- 2、窃盗癖の女性
- 3、三人の同性愛者
- イ、神経症的同性愛の女性
- ロ、精神病的同性愛者
- ハ、「体質的」同性愛者
- 4、毛皮—ゴム類フェチシスト
- 5、糞便愛好者及びクリステライズ・カテ—テル導尿愛好者
- 6、サジスト—マゾヒスト

となると思いますが、これらが単独、或いは複数に重なり合って一人の性的倒錯者が生まれるようです。（もちろん、これは外国人の場合で、日本人に合うかどうかは分かりません）例えば、(4)のゴムフェチシストと、(5)のクリステライズ、或いは、(3)の同性愛者から変形した(5)のカテ—テル導尿に入る、といった具合ですが、時としてサド—マゾヒスト一本槍といった場合が、ある事と思えますので、これらを分類する事は非常にむづかしかったのですが、あえてこの様に致しました。

参考 SINN UND GEHALT DER SEX-

UELLEN PERVERSIONEN

Ein daseinsanalytischer Beitrag zur
Pay chopathologie des Phänomens der

Liebe 1947

○

1、のぞき—露出癖者

この傾向は、少なくとも十二才頃より芽ばえたとされています。オイゲン・ゾンマーは「驚異にみちた精神的快感」とのべていますが、身体的に強いエレクトションをきたしたがそれをオルガスムスに迄おし進める事は、殆どなかった。彼が二十才の時、裸のまま鉄道線路土堤に寝る事を覚え、列車が通る時、彼は多くの女から注視されるように思った。そして列車が通過して消え去る度に、彼の興奮は強いオルガスムスに高まり、恍惚がさめると共に深い堅坑を通過して日常世界に「墜落する」ように思い、後悔と羞恥の念で一杯になって家に帰った、と言っています。

また露出癖女性ガフェリエ・レイノルズは「人が何故、男と一緒にいたがるのか判りません。私には男に近づく事は禁じられています。もし男の前で裸でいたり、体を触れる事が出来ず、私を見ているだけのときは……。」

つまり、私は性的興奮を覚えても、男に直接に近づく事は出来ないのです。男が遠くにい

るときは、私は恥かしさに堪え、少なくとも男の視線にさらされる事は出来ず。その時は楽しくて、しかも怖しくありません。私が秘所を見せる時、私は、それをもて遊び撫でるように感じます。その時全くすばらしい。その時、男は天使の様です。そして私を天国的な喜びで満たした様に感じたからです」

とのべ、さらにいっているのです。

「そうです。私の性的な結び付きは、いつも眼を通して行なわれます。視線による接触はやわらかな天国です。直接の身体的な接触はそれに反して不恰好で動物的な罪を感じさせます。何故か私には、実際の性的結合は人間の最もみにくい罪に感じられます」

要するに、性的な対象として、男が余り近づかないこと、少なくとも2、3m離れている必要性を生み、この規定された距離を自分の「精神的な純潔及び羞恥心を守る鎧」とステ—エリンは明確にのべています。このことは、愛媛の鈴川露子様のように「私は異性から体を見られると、それだけで、立っておられない程の快感を感じてしまうのです」その変質的な彼女の中に、「私の操に触れない約束」と単的に表現されていますのも同心理なのでしょう。

羞恥心の限界については、シューラー及びE・シュトラウスも「羞恥心の中に極めて特徴的な様式で、精神と肉体とが、永遠と時間とが、本質と実存とで結びついている」と、しています。このような露出癖に依って男を驚かせ、怖がらせることに興味をもった女性が「高慢な」男の人格を「おどかし」に依って「心の奥底まで」ゆり動かし、彼を「子供の様におどおどぼんやりさせ」それに依って性的な喜びを倍加させる様になった時、彼女は単なる露出癖的な領域を越えて、明らかにサディズム的傾向を示すのでありましょう。

その次にくるものとして、ハニー・ラクス・トン嬢は述べています。

「私は直腸に7、外部に3の割で親指径の棒を挿入し、裸の上にレイコートをひっかけ、陸橋や、デパートメントの階段での昇り降りに、男の眼につく様に行動します。そして、男を征服した満足感にオルガスムスを感じます。時として満員列車の中で、その棒に男が触れて刺戟される快感は、いつのまにやら声を出しそうになります。そして車内に、自身が排出した臭いがただよい、男達がとまどう姿を見ると私は純潔を守り、羞恥心を守った天使であるように思えます。また或る時

私は乳首どうしを縛りつけ、映画館の中でレインコートの前のボタンをはずし、前の男が振り返った時、その男の眼に映る露出した姿に、自己に対する羞恥の消失と快楽とは魔術的に思えてなりません。そして私は、これらだけではあきたらず、ウエストが挟み切れてしまう程、緊く縄を巻きつけたり、レインコート下の裾に位置する太腿を縄で縛り、人通りの少ない町中をさまよい、足が痺れて地面にたたきのめされ、男より介抱される時、その男が自分の何を見たかに依って、羞恥心を守った純潔を見出すのです。そして男が、ウエストと太腿を見、そして緊く縛られた乳首どうしと、直腸よりの棒の中に私の裸体を見出す時、私の肉体内に何がおこり、何が燃えているかを空想させる喜びで、私の興奮は頂点に達します」

この様に、露出癖女性がサド・マゾヒストにエスカレートする行程は、自分を縛るというフェティシユな行為を含めて、極く自然な状態で進んでいく時間的経過を物語っています。この事から、ガフェリエ・レイノルズ及びハニー・ラクス・トンは、皮膚のエロティクや皮膚刺戟の苦痛の快楽と、直腸の攻撃と衝動を加味した露出癖の傾向を強くしていっ

たようです。

参考 1. J. E. Saehefin : Untersuchungen

an 70 Exhibitionisten, Zeitschr. f. d. ges. Neur. U Psychiatrie 1926

2. M. Scheler : Über Scham und Schamgefühl, Schriften aus dem Nachlass I, Berlin 1953

3. E. Straus : Die Scham als historisches Problem, Schweij. Arch. f. Psychiatrie 1933

2、窃盗癖の女性

窃盗癖の人の多くは、盗んだ物品に対してフェチシズム的な愛情を傾ける。またこの窃盗癖には性欲異常者の全てが極めて著名に見られ、エリカ・ペスナーのように、良心の苛責と不安とに打ち勝って、銀貨を彼女の簞笥の中に入れた時の激しい興奮は、彼女の全身を何度もなくぐったような激しい快感となった。この体験が強い性的オルガスムスであったことは、現われた生理的随伴現象からしても疑う余地がないし、また内臓を圧迫されるような感じがおこる時の、この感じが強ければ強い程、盗みを遂行した時の快感が強く、この内臓圧迫が、身体的衝動的な興奮としてクリスタール及びカテーテル導尿への侵入点

を意味し、また衝動的な身体との構造から云って露出癖と密接な関連をもっている。

これらの事からサド・マゾヒスト愛好家が好んでハントするのも、これら女性の身体的衝動を生かしたものだと思われます。

参考 M. Chodwick: A case of Kleptomania in a Girl of Ten Years, Int.

Journ. of Psychoanalysis, 1925

3、三人の同性愛者

男性的恋愛及び女性的恋愛は、同性愛的倒錯に於ては重要な役割をもっています。即ち同性愛的な愛は、人間存在を男性と女性とに分類する（女性の一方が男性化する行動）矛盾に始まり、このことについて、フォン・ハッチングベルクは「精神的な男性及び、女性の区別は、心理学的には把握することが出来ない。何故なら、実証的な意味での男と女との本質は、心理学的に把握しうる、範囲外にある」と断言し、またフロイトは、

「心理学はこの男性及び女性の概念に就て、純粹に解剖学的生理的な区別以外には、何ら新しい内容も与えていないし、今後それを明らかにすることも出来ない。何故なら、心理学的に追究すると、この問題は単なる男性の能動性と女性の受動性となり、それだけでは

無意味だからである」

と、述べています。

同性愛は、他の性的倒錯と意を異にしています。即ちフェチシズムと糞便愛に於いては不安と羞恥と嘔吐による枠によって、甚だ狭小化されており、異性の身体的な存在形態の一部分を通してのみ、愛を多かれ少なかれ実現することが出来、また一方、窃藏癖、露出癖及びサド・マゾヒズムに於いては、これら世界の堅さと狭さと抵抗性とは、著しく拡大され強化され、この制限を常に暴力的な方法と様式とに於いて破壊することにのみ愛情を可能ならしめるようです。

しかし同性愛的な性欲は極めて多様で、愛情の抑圧と狭小化、及びこれを破壊する為の多かれ少なかれ暴力的な方法の様相、或いは身体的な刺激（クリステライズの苦痛）の範囲と、きわめて様々でありましょう。

4、毛皮・ゴム類フェチシスト

毛皮及びゴムフェチシストについて、クラフト・エビングは、フェチシスは「性器とは何らの直接関係はない」と力説し、フロイトもそれに賛成しています。この事は、全く動物的な性欲のみが体験するのであるとするのに対し、ゲープザッテルが「性器的フェチシズ

ム」と名付けるなら、我々は、通常の性器から遠ざかったサド・マゾヒストや、糞便愛好家に向かうフェチシズムと性器に向かうフェチシズムとを対立させねばならない様です。この二つの現象は、全く異った世界の狭小化であつて、これを一緒に考える事は間違いでしょう。

このことは、関悦子さんが『飴色のゴムパンティや生理帯の替ゴム、ゴム管等は、とてもエロチックに感じられ、あのムチムチした手ざわりや肌ざわりが私にはとても好ましいのです』と語ってられるように、性器から遠ざかったフェチシズムに向かったことを定義づけています。何故なら、それは単にクリスツールの道具であるから、とされているからです。

一般に女性は羞恥心が発達している為、男の場合よりもフェチシズムの傾向が抑圧されやすく、非道德的な点で、フェチシズムにまさるとも劣らない窃盗狂や同性愛は、女性に於いて多くみられるようです。男性の「能動的な外部対象のフェチシズム」に対して女性の「受動的自己フェチシズム」は女自身だからで、「自己の身体部分を誇示したい欲望。装身具の一部を流行に従って作りあげる。装身具

や、化粧や、髪飾りに工夫をこらす……等によって、女性特有の自己自身を飾り立て、それを崇拜する傾向が強い”ことから見て明らかです。

要するに、女のフェチシストは極くまれで男の能動的なフェチシズムが、女性の裸体上の特徴に惹かれ、空想すると共に至福的なものとなっているからで、この空想が実存に結びつくには、青春期に於ける旺盛な感覚性と衝動から生まれ体験する事に始まるのです。

それは、毛皮の下着をつけ、水につかって毛皮の収縮による圧迫感や、膚に感ずる皮特有の肌ざわりによる恍惚や、緊いゴムタイツやゴム服を着て町を歩く衝動と快楽を通してフェティッシュを感じ、これらの行動を得て女性裸体に対する加虐フェチシズムやサド・マゾヒスト行為に進むとされ、女性に対するこの種のフェティッシュには少し時間を要するとされています。逆にサド・マゾヒストが、ゴム・毛皮フェチシストになることは極くたやすい行為なのです。それは至福的なことだからでしょう。

参考 1. フロイト「性理論に関する三つの論文」全集第5巻28頁註1及び「フ

エチシズムス」全集第11巻396頁

2. Schultz-Hencke Der geheimte

Mensch, Leipzig 1940 及び M. Boss

: Die Gestalt der Ehe, Bern 1954

5、糞便愛好者及びクリステライズ・カテゴリー導尿愛好者

糞便愛好家に於いて恋愛の感覚的ニエロスの遂行の場として、人間の全ての領域内は、もはや最上の末梢部、即ち空想の世界がほとんど残されていず、最下の部分、即ちもっとも身体以下的な性以前の「前生殖器」（フロイト）の領域が開かれていくに過ぎないようです。この点からフェチシズムの広い領域を描写するのに適して居り、それ故、上品な毛皮や手袋を愛したエーテル的なフェチシストとは意味を異にしているといえましょう。糞便愛好家リコ・ダテラルは次の様に述べています。

「妻の直腸に侵入し、深く進むと一番奥の所で一つの大便の塊につき当ります。すると私はまるで彼女の真の中心部に達した様な気がします。そこは人を溶かしてしまう程熱い。

まるで地球の中心で溶けてしまう様です。しかし私自身のか、或いはどこかの公衆便所の他人の大便の塊だけでも、私を感覚的に強く興奮させることができます。臀部を除き、女

の身体の部分は全部私にとって単なる物質と同じであり、彫像の様に生命がありません。女の皮膚や性器は、私には大した意味を持たないのです。これらの全ては余りにも完成され過ぎ、形が整い過ぎ、きちんと停滞しています。生命は皮膚の下ずっと深く、腸の中で初めて始まるのです。大便のあるその所で、生命に火がつくのです。大便は死んでいません。それは、全てのものの始まりです。それは温かく、そこでは全てのものがそれから作られ、あらゆるものが形成されます。結局人間は泥から捏ねあげられた虫けらの様なものです。私は本来直腸の中だけ、また田畑で私の昆虫達の傍に居る時だけ寛いでいます。それですから私は、私が大便の塊に触れた時に、初めて今一番奥の何物かに触れたのだと正しく感ずるのです。そのことは、私を酔わせ、私はすっかり幸福になり、時間も何もかも忘れてしまう程です。いつまでもその休止まっている事が出来たらと思います。でも、その感激の波が過ぎ去ると、私は恥じ、そして思います。お前は豚だ……と。併し、各人は所詮各々の方法で救済せねばならないのです。

彼はその世界、つまり直腸のみに、恋愛の

時間を超越した喜びと安住への入口を見出し
ていたのです」

一方、ジョージ・ウエルスは、

「私はその世界の一番奥の室で、放出される尿が多ければ多い程、性的興奮を覚えます。それは、女の下腹部が大きくふくれるに従って、女が吐気と内臓圧迫の苦痛にもがき、助けを求める姿に前生殖器的な女の性を見出すのです。そして女の生理的現象とは別の行動つまり、排泄作用とは逆に門扉をきつくしめつける行為や、女におこる現象が意志に反した肉体的、生理的、精神的な発作を表わし、羞恥心で一杯になったとき、私は陶醉し、そして快楽を覚えるのです。それは女のハートの深部迄、登攀したことの満足感と征服感だからです」

と述べています。

このことからジョージ・ウエルスは、サディズム的傾向を含む分裂病質的『肛門愛』的な印象を与え、真性の体質的な發育障得であるか、或いは、もはや豊富な存在可能性に救い出すことの出来ない早期の分裂病過程によって狭小化された現存在の形態、と考えられましよう。

また、これらのことは別に、肛門愛、尿導

愛をしめすには、二つの場合が言われ、その一つは手術直前のクリスタールの苦痛や検尿によるカテーテル導尿が忘れられずに、発作的に甦がえる場合。窃盗癖者の衝動的な下腹部の圧迫感による場合。或いは、一種の衝動にかり立てられた時や、人からの暗示によるところが多いとされ、それは麻薬患者の衝動とよく似ており、精神的に不安定であればある程、このような直腸に苦痛を伴った、サディズム的肛門愛の傾向を示す、とされています。又、他の一つは、同性愛的な遊びが変じた場合や、特殊な状況下（刑務所の中とか、戦争とかいった状態）の場合ですが、これは臓器に直接多量のものを入れる迄に至らないようです。

以上のように転落し頽廢した梓は、先に述べたエーテル的領域に於いても人間的現存在の肉体的感覺的領域に於いても直腸と糞便、直腸と苦痛、直腸と排泄を通して以外には、恋愛の実現を不可能ならしめるようです。

参考 L. Binswanger: Der Fall Ellen

West, Schweiz, Arch. f. Neur. u.

Psychiatrie, 1945

6、サジスト＝マンヒスト

エリッヒ・クロッツは八才から十四才迄、

強い肉体的欲望と自制への堅い意志との間にはさまって、自慰に対する非常に激しい戦いを続けたといっています。

自慰行為を始めた頃、彼は、誰にでもいい自分の臀部を打たれるという空想によって性的に強く興奮し、また純粹にサディズム的内容の空想も、彼を興奮させたようです。例えば、「彼が室に入ると床の上に沢山の裸女がいて、彼は彼女らを鞭打ち、女の体が痛みのために、まるで虫のようにうごめく」と云うような……。

○

「十八才で、彼はある娘と、最初の性的関係を結び、やがて街の淫売から伯爵夫人に至るあらゆる値段の女達を多量に消費した。しかし彼は前以て、どんなことがあっても自分が恋愛しない事を全部の女にはっきり述べた。なぜなら、女出入りが彼の仕事を少しでも妨げることがあってはならないからである。女達と性的に、正常な方法だけで関係していると、彼はすぐにこの『色事』にあきてしまった。クロッツはいう。

「何時も全く同じ事だ。何時も、どの女も着物を脱いでベッドに寝て関係してもらいたがるだけだ」

彼は、彼を何時も退屈な女共と、このあとで不愉快な後味を残すだけの、空虚で退屈な出来事を繰り返えさせる自分自身の性欲に対して、腹を立てるようになった。又、女共はその様々な振る舞いで、自分をだましているが、実際には彼女らは総て『冷たい動物』で自分を利用しようとしているだけだ、と彼は常を感じた。

性的関係が、彼に本当の喜びを与えるようになったのは、彼の以前の自慰行為の際の空想を実際に現実化するようになり、女がすっかり、女の面目を失ってしまう程罵倒し、最も汚い言葉で侮辱する事を敢えてするようになってからであった。又、彼は、多くの女共はこのような取扱いをそれ程不愉快に思わないことを知ったので、彼は、やがて相手の女共を身体的にもいじめ、縛りつけたり、紐でつるして、空中で無抵抗にもかくようにしたりするようにになった。又、彼は女達の手を鉄の鎖で縛ったり、革帯でベッドにくくりつけたり、息の出来なくなる程、コルセットをしめあげたりすることを好んだ。

彼を最も刺戟したのは、女達が全く真っ青になる迄、首をしめることであった、これは彼に最も強い性的興奮をもたらした。彼は又

性的行為の前、又は途中で女をかんだり、鞭打ったりする事を望んだ。彼はこの目的の為に様々の鞭の蒐集を始めた。そして好事家的な細心さを持って、個々の女に最も適した鞭を選びだす事が、事前の大きな楽しみとなった。女達が鞭で打たれて身をもがき、その背中や臀部に赤い条がつき、時には血が流れだしたりすると、彼は非常に興奮した。そして女の体をひきさき、その心臓から直接にその血を飲みたい衝動にかられた。そして断言した。

「職業に於ける無遠慮な暴力への喜びや、競走者を打ちまかしたときの痛快さに伴う喜びは、女達をいじめる時のサジスト的な喜びとは全然別個のもので、この二つは、まるで昼と夜の違いである。ただし、性的な快感への前提条件として、女達が実際に、自分と共感し、彼女達はその苦しみを喜び、実際に感じることである。女達が私の鞭打ち、残酷さに快感をもって喜ぶと、その女に対する私の愛情は激しく高まった。私は、彼女が私に完全に胸衿を開き、そして私が堅苦しい社交的な粹を取除いて、単なる礼儀正しい紳士クロツツではなく、やっとのことで、自然そのままの一個のアダムとなることが出来るようにし

てくれたことに対して、彼女に心から感謝した。そのとき私は本当に幸福になることが出来た」

従って、彼にとっては単に芝居をするだけの娼婦の場合は何の意味もなかった。又、女が苦痛をこらえたり、冷静にしていたり、彼に反抗をしたりしようとする、彼はやはり激しい怒りにおそわれ、全てのエロティックな魅力は消え去った。例えば或時、このような一人の相手、『大理石のように堅い』『冷たい魚のような』女に対し、彼は怒りのあまり衝動的に、彼女の寝ているベッドに火をつけた。そして彼女が火に焼かれて死んでしまつたらすばらしいだろうと思った。そうすれば彼女も軟かくなり、彼女の熱情をひき出す事が出来るだろうし、血のように赤い何物かを彼女の中から、取り出すことができたであろう。

彼は又、時々彼女達に自分を鞭打たせ、縛りつけさせ、又自分の首をしめてもらった。「この時の方が、鞭打つ時よりも、喜びは大きかったのです。しかし、それは私にとって遥かに危険でした。その際、私は容易に自制心を失い、深淵に落ち込んでしまふ惧れがあるからです。その時、私は全く自尊心を失い

何の責任もない赤ん坊のようになります。自分が鞭打つ時は、私はまだある程度自制力を持っているが、女に鞭打たれる時は、時々、女が自分をいつまでも押えつけ、そこから逃れる力がなくなってしまうはしないかと感じるのです。私はそれを考えるだけでも戦慄を覚えます。鞭打ち、また打たれる場合、女達は魔法使いとなり、その際、私が能動的であることに依つてのみ、辛うじて彼女達を柵の中に押えている事が出来るのです。

私が女を罵り、侮辱し、乱暴な言葉でけがすのは、それによって、彼女が一人前の女としてもっている高慢な態度をぶちこわし、十米もある私と彼女の体との距離をこわそうとするのです。私が女達をなじり、女達が泣き叫ぶようになると、このような女達も非常に静かでやさしく温和しくなります。私の性的な快感は、女達が私の云うことに全く従順になり、我儘だったり反抗したりしなくなると急激にたかまります。すると急に私達の体の間に共通の電流のようなものが流れ、女の体は私によって快感で充された無抵抗な存在になります。このような絶対的な服従と無抵抗状態の瞬間には、私はもう暴力を用いる必要を感じなくなります。私に必要なのは意志の

喪失ではなく、完全にやさしい、服従なのです。女の意志がなくなってしまうのではなくそれがやさしくしなやかになる必要があるのです。一個の人間なのだ、然し完全に私に服従している人間なのだ、と感ずる必要があります。その時には私と女をへだてる如何なる我意もなく、私はすっかり幸福になります。すると呪縛がとかれ、彼女の魂は私の魂の全ての動きに従うようになります。

彼女が泣いたりうめいたりして、又その涙によって氷がとけたということを証明してくれた時、初めて私は女のやさしさと従順さとを信ずる事が出来るのです。従って鞭で打ったり、いじめたりする事は、二重の意味で、私のエロチックな体験の開幕曲にすぎないのです。

それは時間的に云ってもそうですし、内的な心と感情とが実際に『開く』という意味でもそうです。

しかし私は、いつも何かを得ようとすればそれをなぐりつけ、強要し、掠奪しなければならぬ気がするのです。私は、反抗的で敵意に満ちた多くの丸太にかこまれて居り、私自身も丸太なのです。私が女達に、身体的な献身を強制せねばならなかったのは、私が元

来一度も人間の体と（私自身の体にも女の体にも）、直接な関係をもったことがなかったからです。生きているものとしての肉体というものを、私は全然理解できませんでした。

今でも私が妻と一緒にベッドに寝る時、私が妻の体を抱くことが出来ると云うのは、非常にあるべからざる事のように思えます。それで私ははっきりした証拠がほしくなり、その体を縛りつけなければならぬのです。

女が、殊に女の体が自発的に私に向つて来ると云う事は、私には全く感情的に理解できない。勿論私は、そういう場合を何度も見ましたが、それを信用する事が、出来ないのです。彼女らが苦痛の為に叫んでいる時のみ、私は彼女らの無抵抗性を確信できるのです。痛みのみが、あらゆるものに侵入し、体の外部から骨髓に迄侵入出来るのです。

この事を私は、歯医者からひどい痛みを与えられた時、初めて体験しました。その時に非常に深い喜びを感じ、性的欲望がおこりました。何故なら、この痛みは、あらゆる外面的な外殼的なもの、最も堅い歯をこえて中心へ、内的なものへ、私が実際に存在しているところのものの中へ、侵入して行きましたから。

それは、実際の生命の神経にふれたような感じですが。神経があらわになり、真の現実が開かれます。そこには何らの隔壁はなく、事物の真髄そのものがあります。それで女達の場合でも、彼女達が痛みの為にもがいている時には、もう壁がない、性的なものに対する壁も否応なしに取り去られてしまったのだと思うのです。この時、彼女は身の周りに壁をもっていないだけでなく、抵抗しようとする事とさえ出来ないのです。この時、初めて私は抵抗を恐れなくてもよくなるのです。

その時彼女は、もはや貴婦人でなく、すっかり感覚的な存在となり、その血液は、私に向って流れます。そして市民的世界の総ての堅い柵がこわれてしまします。

女の皮膚の赤い鞭のあとや、血の滴りを見るとき、初めて私は、女の血が実際に感覚的に沸き立っているということを信用出来るのです。彼女はもはや冷たい石像ではなく、高慢さはたたきこわされてしまったことを感じます。その時初めて、私自身の人間性を塗りこめた土の壁がこわれ、女と融合することが出来るのです。

私は社交界の自信に満ちた高慢な婦人達によって特に強く刺戟されますが、彼女らは私

の気持をわかってくれないだろうと云う不安を持ちます。それで私は、むしろ女店員位の小さい娘達の所へ行く方が好きです。

私の快感は首をしめたり、縛りつけたり、窒息させる時の不安と深い関係があります。それで単に鞭打つよりも、首をしめる方が好きです。私が女達の首をしめても、女達に首をしめられても、それはどちらでも良いのです。女が私に比べて、より男性的なタイプである場合には、当然相手が私の首を自然にしめるようになります。しかし女が女性的で、能動的でない場合には、私が彼女の首をしめます。要するに、問題は首をしめるという事実にあるのです。

首をしめ、縛りつける事は非常に不安を伴い、そしてこの不安の中に生命と快楽とが圧縮され、ますます狭い空間の中に緊密にとじこめられるのです。外部からの不安が強ければ強い程、内部に於ける快楽は活発になり、最後に不安による束縛が破壊され、全てが爆発します。初めの不安による圧縮が、強ければ強い程、爆発は喜びに充ちたものになります。この際、不安と快楽との、どちらが大きいかは、はっきりといえません。快楽殺人が最も不安の状態でしょう。不安や圧迫に伴う

快楽が極端に強くなり、体全体を引きさくことによつてしか、快楽を解放する事が出来ないようになれば、それが快楽殺人になるのです」

要するにエリッヒ・クロッツは、家族神なる「仕事」と「司祭」なる彼の父によつて、彼の生活可能性を次第に狭められ、遂に灰色の棒及び鉄の鎧として、世界内存在に生きる事を余儀なくされ、従つて小さいときから、『極端』に孤独であり、スチルネルの意味の絶体的孤立者となった” (M. Stirner: Der einzige und sein Eigentum, S. Aufl., Leipzig.)

○

しかし女達は、彼の憎惡的な世界のただの存在とは異なり、単に抵抗的な柵と限界とだけを意味するものではなかったでしょう。彼は、深くかくされてはいるが、女の成熟した人格の厚い壁の下に、又、女達の皮膚の冷たい大理石の柵の背後の何処かに、彼自身のものと同じではあるが、しかも他の種類の生命的な核心があることを感じていた(サドH3ザドガース及びランクはこれに関し、なぜサドIIマゾヒズムの際の皮膚刺激が、常に身体的或いは精神的個体の限界の統合を破壊する

ことを指し示すところの、出生時の苦痛と快楽の疼痛の形だけをとるのかも、これによって初めて把握できるの意)ではないでしょうか。

むしろ彼は、精神的及び身体的な征服、暴力的な鞭打ちや緊縛などの倒錯的な空想、及び行動の総てを武器として、彼のいう『丸太の世界』の抵抗と壁によって隠されてはいるが、純粋な憎悪的破壊者の場合とは反対に、この世界に於いて至当としようところの女の愛情の真髄を獲得しようとしたのでしよう。そして彼が到達しようとしたのは征服と粹

のそれ自身でなく、復讐の喜びや勝利感も含まれていたと思われます。そして性的な喜びとして、女を『優しく抵抗の出来ない状態』におき、彼女の『涙によって氷がとけさったことが明らかに』そして二つの体を『共通の電気』が結びつけるのを感じたときに享受したものを、価値としていたのでしよう。

一方、カレン・ホルネイは、フロイトのリビド理論に対する反動的傾向を發展させ、「いかなる異常性欲(サド・マゾヒスト、肛門愛同性愛等)に於ても性器に由来する。例えば、口唇部の興奮も性的なものでないし、如何なる性的行動に於ても、最後の満足は、

結局性器に於て行なわれるからである。すべての種類の身体的感覚は、官能的エロスのなものとして感じられる。そして肛門でさえ、それが愛情的な世界内存在に、引き上げられた時に限り、実際に「肛門色情的」^{エロチック}になりうる。その興奮の強さは勿論、器官によってちがうし、普通には「性的肉体」(ゲープザッテル)は性器に於いて、その頂点に達する」と述べ、さらにマゾヒストの世界はきわめて適切にも「無情で不平にみちており、自発的な愛情の如きものは全然みられない」と述べています。

シュワルツは、

「女性の征服は真の意味の男性的な愛とはいえないし、これはサジズム的亢進した形についてのみならず、女性を獲得せんとする『正常』な性的形態についてもいえる」としていますし、原始的衝動的感情(男の子の陰茎のかかる器官感情)を、フロイトは「自分でも意味のわからない欲動、暴行や侵入や紛砕や、どこかに穴をこじあける事等への盲目的な衝動」

と、記述しています。(参項い—小児性欲論 フロイト全集 第5巻 一七七頁)

次いでフェーデルンは、精神分析の理論に

従って男の攻撃性の全部を、原因発生的にこの器官感情に帰因せしめることに、右記のフロイトの観察を利用し、更に『人間学的』性研究者のなした如く、これをサド・マゾヒスト問題圏の中心に置いて、

「女性をとらえ、征服しようとする傾向は、男性を誘惑し征服されようとする女性の傾向と共に、それぞれ男性的、或いは女性的恋愛の特徴であり、それは有限性及び分割性として、世界に対する愛の複雑多様な対決の中の二つの形式である。従って両性の完全な愛の融合に対する内的、或いは外的な抵抗が強ければ強い程、恋愛は男性的、或いは女性的行動の有限的な意図を、即ち男性の側では侵入と征服、女性の側では、誘惑と招請の手段を時には、サド・マゾヒズム的な過激さで使用しなければ、愛の全体性に到達することが出来なくなるのである」と、しているのです。

考項 1. 性的倒錯、恋愛の精神病理学

2. K. Horney: New ways in Psychoanalysis S. 51f

3. Beitrag zur Analyse des Sadismus und des Masochismus, Int. f. Psychoanalyse, Bd. 1 (1913)



二度あることは三度あるという例え通り、いすかの嘴の喰い違いが重なって、始めての出会いには箕田氏と会えず、心ならずもむら子と二人のプレイが、思いも掛けぬ方向に走り二度目には、塚本鉄三氏と一緒に撮れなくなり、彼一人「片えくぼのマリア」と題するル

SMカメラ・ハント

続・川路叢子の巻

むら子恋狂い

辻村隆

ポにある様な結果になってしまった。三度目の正直と、今度こそ塚本氏と一緒に行く予定をしていたら、万国博の宿泊がわりの突然の来客があったとかで、彼から断わりの電話があった、又ぞろ私一人ということになってしまった。川路叢子は、よくよく一対一のプレイにむいているらしい。

私の書いた「あっと驚く人妻の豹変」を読んだ彼女は、かなり私に対して言い分があるらしい塚本氏の口振りであった。

私が描いたむら子像と、塚本氏描く「片え

くぼのマリア」のむら子像では、これが同一人物かと思われる程の観念の違いがあった。

私が余りにも赤裸々に書き過ぎ、彼女の内潜せる欲求の現れにまで、筆を伸ばしたことが、或いは憤懣のタネかも知れなかった。無口で羞恥にまみれていたあの人妻が、塚本氏とのプレイでは、饒舌に過ぎるくらいに応待し、喜々としていたという。私の感じたむら子が本当なのか、塚本氏とプレイしたむら子が本当なのか、何となくめまぐるしく豹変するむら子に、今ひとたび出会って、その正体

を究明してみたい——そんな意慾にかられての、彼女との出会いであった。

土曜日がいいという彼女のために、五月連休前の一日、京都駅に向かう。待合わせ場所は前回、散々箕田氏を待った八条口の新幹線出口である。最初の時で、すっかりこの場所で待ち草臥れたから、今日は間違ふこともない筈であった。

万博ルートに当たるので、相当の混雑を予想して家を出たのに、思いがけずスムーズに走れて、こだま到着の二十分位前に八条口に辿りついてしまった。時間まで待つのは私の勝手と、空いた待合のベンチに腰を下ろして週刊誌を買って拾い読みを始める。

彼岸過ぎの不順の季候で、私に又一つ持病がふえ、新緑の候だというのに、ほんの数日前まで肋間神経痛で、間歇的に左脇腹が痛みこの陽気に古めかしい懷炉を入れるやら、サリチル酸系のアスピリンを基剤とした神経痛薬をのむやらで大騒ぎであった。急に暖かくなったのが私に幸いして、どうやら痛みも納まったものの、一カ月後に控えた長女の出産で、もうお爺ちゃんになる日も間近になると、もう体が弱まるものかと、心ばかりは逸つても、漸次ゆうことの効かなくなった肉体の

哀えに、フト過ぎにし過去をふり返る私であった。

列車がついたのか、出口にぞろぞろと人の気配を感じて、雑誌から眼を上げる。私の視野の中に、数カ月振りの川路叢子の、いそいそとした姿が映じた。

「まあ、辻村さん。お待ちになって？」

塚本氏の讚美する、その片えくぼを深々とくぼませて、あでやかに微笑むと、川路むら子は若やいだ、人妻らしくない春の装いで私に近づいて来た。始めて出会ったむら子とは正に隔世の感を、しみじみと感じさせた。

「やあ、お久しぶり。お元気そうですね」

「ええお陰様で。恰度、丸半年振りですわ」

彼女はよく覚えていた。あれは去年の十一月初旬だったから、確かに半年振りの対面であった。会えそうで会えなかったうちに、半歳が経過していたのだった。あの時ボブに刈り上げていた髪が、頸筋まで垂れていて、それが半年の経過を示しているかの様である。

地味な女教員タイプだったあの時の服装にくらべ、ハイネックセーターに、かさね着ルックの、ミニのサロペットワンピースを着込んで、これがあの川路むら子だったのかと、眼を瞠るおもいであった。今、眼のあたりに

みた印象では、確かに塚本氏に凱歌があがった。それにしても、どうしてあの様な地味な服装をして来たのだろうか？それが私の第一印象に、控えめ勝ちな人妻とうつつた原因だったのに——。何か訊さずにはおられない気持であった。私のタイトルではないが、確かに川路むら子は豹変していた。

「お食事は？」

「まだなんですの」

「じゃあ、どこかで……」

私は彼女をともなつて、駅前駐車場の愛車に歩みよる。

落ち着いた雰囲気求めて車は走る。しらずしらず辿る岡崎への道。

平安神宮大鳥居前の傍らにあるレストラン

“A”の道傍に駐車して自動ドアに立つ。

左近麻里子とここで会って以来、久しくやってこないレストランであった。

「変わられましたね」

「そうでしょうかしら。私自分じゃ、ちっとも変わったとも思わないんです」

「でも第一印象とは全然、違いますよ。失礼な云い方だが、四、五才は若くみえますよ」

「矢張り固くなっていたのですのね。何しろ始めてなものでしたから……」



あった。

「こうした貴女だと知って
いたら、人妻だなんて書く
んじゃないかった」

「私、あの日のことが、余
りにも生々しく、在りの俚
書かれてありますのでドキ
リとしました。お喋りする
んじゃないかと後悔した
のです」

「そうでしょうか。例え

ば、どんなこと？」

「私が余程スキな女のようにとられますもの
……羞かしいですわ」

「誰に羞かしいの？」

「沢山の方が読まれるでしょう。いつ又どん
な折、違った方とプレイする可能性があるか
も知れないんですもの。ハシタない女の方
に思われるでしょう」

むら子は一旦、覗かせた本心を、今更、隠
す必要もないという風に、あけすけにいつ
のけて、舌を出した。めくるめくような羞恥
にまみれた人妻の、あの日の姿は、最早想像
しようもない変貌であった。

むら子は、ツト話題を変えてきた。

「塚本さん、何か私のこと言っていらっしゃ
って？」

「ええ、私のイメージと全然、違う凄く官能
的な、素晴らしい人妻だって……珍しく極力
褒めていましたよ」

「まあ、私の前ではチットも、そんなこと仰
有らないくせに、そうですもの」

嬉しそうに笑って、むら子は内心の歓びを
隠そうとはしなかった。女性は褒められたら
悪い気はしない。事実、度々やりとりした塚
本氏と私の会話で、二人のイメージは、いつ
も対立していたのであった。

しかし今ここに、まぎれもなく華やいだ、
やや饒舌に走る、むら子の姿がある。それは
塚本氏のイメージに、ほぼ近い彼女の在りの
俚の姿であった。

折から注文したランチが届く。しばらくは
食慾に二人の心が走る。

コーヒーをのみ乍ら私はフト問いかける。

「何か私の書いたものに不満があったそうで
すね。多少のフィクションはあったけど、私
としては決して悪く書かなかったつもりなん
です。その証拠に、随分読者の反響がありま
したよ。勿論、ハントに対する批評を書いて
こられた方に、フォトを進呈するという、奇

「始めてじゃなかったのでしょうか。塚本氏か
ら、きましたよ」

「まあ、そんなこと仰有って。本当いって、
一度だけプレイの経験はあったのです。でも
カメラハントの辻村さんとは始めてでしょ」

「ずるい逃げ方だなあ。お目当ての箕田氏と
も会えなくて、何となく妙な雰囲気でしたよ
ね、あの時は」

「そうなんです。本当いって私、あの時どう
しようかと思いました。まして、ハントでか
ねがね噂に高い辻村さんと二人きりだったで
しょ、つい力タくなっちゃって」

塚本氏のいう通り、確かによくハキハキと
喋り、自分の意志を判つきり伝達する彼女で

クのサービスも効いたと思うのですが——」
「もういいですわ。お会いしたら、何もいえなくなりまして」

「いや仰有って下さい、御遠慮なく」

「お怒りにならないかしら」

この人妻はフト危惧の眼で私をみた。

「ゼッタイ……悪いところはいつて下さい。謝るべきは謝りますから」

「じゃあ申し上げますわ。私、あの程度のフオトなら、何もああまで正直に書かなくても思ったのです」

「どんなことを？」

「私のカラダのこと。例えば、私のオッパイが、乳液を出し尽してしぼみを感じられたとか、乳首が黒ずんでいるとか、妊娠して子供があるから、おなかがたるんでいるとか、二回も中絶したとか——。私、あれをよんで、ひどく辻村さんを恨みました。誰しも人妻になり、子供をうめば、大なり小なり、そうした欠陥が生じるものです。まして私が奇クファンで、私が読むことを承知していながらああしたカラダの欠陥を、書かれた辻村さんが、すごく冷酷な人のように思えたのです。ごめんなさい、判っきり申し上げちゃって」
私は、むら子の言葉に愕然とした。確かそ



うしたことを書いた記憶はうっすらとあるが、さして気にも止めていなかったのである。

今、むら子からそれを指摘されて、私は絶句し、正に一言もなく、うなだれた。

「そんな非道いことを書いたのでしょうか」

逆に質問すると、キツパリと

「まあ……自分のお書きになったものに、もっと責任をもって下さらないと——」

ときめつけられ、むら子はさして怒った風もなく、ややあきれ顔に、私をマジマジとみつめた。どちらかというと大抵のハント女性を美化して書き、多分にフェミニスト調の私

である。何の気なしに感じたことをウカウカと書いた私の一文に、彼女が相当のショックを覚えたことなど、思いも及ばなかったのである。

「私、あの日わざと地味な服装で参りましたのも、箕田さんや辻村さんに、軽々しい浮薄な女と思われなくなかった気持ちもありますし一つは、余り人目に立つ服装をして、万一御迷惑をおかけしてもと、思ったからなんです。だから、あの時、辻村さんが受取られた感じは、それでいいんです。唯、裸のあたしを、あの様に書かれたことに抵抗を感じただけですの。でも、もういいんです。お会いしたら、恨みつらみをいうつもりでしたのに、何だかこれ以上は、いえなくなりました。気にしないで下さい」

「いや、済みませんでした。正に筆禍問題です。どうお詫びしたらいいか」

「そう仰有られると困りますわ。私、辻村さんから指摘されて、あの時はそれが本当なんだと反省もしています。この六カ月間、一日も休まず美容体操をつづけ、かなり矯正につとめてきました。辻村さんから、そういうわけではないように——」

「いや、恐れ入りました。もうそれ以上、責

めないで下さい。何だか皮肉にきこえます」
 ホトホト私は恐縮した。ハントした女性から、かくもコテンパンにやられたのは、むら子をもって矯矢とする。今、眼の前のむら子は、塚本氏のいうように、確かに私のあのハントの一文とは、およそ遠い隔りのある、才気あふれた人妻であった。

プレイ半ばにして積極的な攻勢に出た、むら子が彼女の本来の姿であって、前半の羞恥にまみれていた彼女は、今にして思えば、才

女むら子が、プレイ開始の時の擬態であった様である。それを見抜けぬ私は、プレイ歴二十年になんなんとし乍ら、綾に乱れて交錯する女心の妖しさを、うわべだけの浅慮で考察していたようであった。豈に図らんや、彼女の意図を裏返せば、私はむら子の折々の発想に翻弄され、振り廻されていたのである。

慨然として、私の心に、とある決意が走った。「あっと驚く人妻の豹変」が、或る程度むら子の計算通り進行したものであれば、今日こそ、更にも一つ輪をかけた、あっと驚くようなプレイをしてみたい——とそんな不逞な意慾がムラムラと湧き上ってきたのであった。知るや知らずや彼女はランチを喰べ終わり、静かにコーヒーを含んでいる。

妖艶な人妻と相対して、私の嗜虐の慾情は急速に膨れ上っていった。

× × ×

間の悪い時は悪いもので、京都でゆきつけのホテルが、二軒が二軒とも土曜日の午後の悪条件で、満員お断りされ、片っ端から飛び込めば、どこかに密室の罫を求めることも出来たであろうが、更に万博の貸切りが、こうした

アベックホテルにまで蔓延していいとは思わなかっただけに、今更乍ら、毀誉褒貶交々の万博の根強い景氣に驚かされたのである。

料理が高くてまずい、イチゲン客のぶったくりだ、万酷博だ、待つこととの根氣くらべだと、やいやい騒がれながらも、或いは現代に生きる人間にとって、一生一度の世界的なお祭りさわざとあつては、物見高く、弥次馬根性旺盛な日本人のこと、何のかんのと文句をいいながら、それでも出掛けて行くのが人情である。その煽りで、ひっそりとアングラ的に愉しんでいる私達同好者は、こうした、時によっては、思いもかけぬ締め出しをくわされるのであった。明日に飛び石連休を控えての土曜日とあれば、ホテルも稼ぎ時で、時間つなぎの偶に現われる私なんか、見向きもしてくれないのは当然である。

その時、天啓の様にひらめいたのは、同好者E氏の存在——。彼は下着マニアの、どちらかというと虐められたい方で、少々意見の合わぬ同好者であるが、商売の方は仲々のやり手であった。

京極寺町近くの市場通りで、塩干、缶詰類の問屋を経営する傍ら、醍醐辺りでレストランを二号さんに任せ、太秦近くで、大衆マン



ションを次々に建てては、かなりの権利金をとって、確実に儲けていた。

時々、彼の云うSの女王様に奴隷奉仕するために、このマンションの一室を、貸さずに自家用にあけてあって、若し何かの時は、いつ何時でも利用してくれとの、有難い仰せであった。彼の常駐する缶詰会社に電話をする、多分レストランだろうと、その電話番号を覚えてくれる。

電話がつながって、何カ月振りかの、彼の声に変わる。最初は誰なのか咄嗟に分からなかったらしいが、やがて判っきり私だと分かると、幾分威張った調子の電話口の声が、途端に低姿勢にかわった。斯々如々で、ホテルがうまくゆかなくてという、皆までいわず、

「じゃあ、遠慮なく使ってくださいよ。冷蔵庫にビールも入っていますし、電話で頼めば、何でもたべるものは配達してくれます。それでその女性、Mですか、それともSなんですか——」

ときくから、大いなるM女性だと答えると一寸ガツカリした口調で、

「じゃあ、一寸お門違いですね。ああそれからマンションの部屋は階上の端っこの八号室

で、鍵は階下の管理兼居住者のMという人間に云って下さい。合鍵を、いつも預けてあります。尚、我儕なお願いですが、若し許されるのでしたら、その女性のパンティを払い下げて下さいな。新品が座敷の押入れの、メイズウェアと書いたハコにいらてありますから、是非是非……」

と、この下着マニア氏、流石に治にいて乱を忘れず、手廻しがいい。一応、借賃をきくと、パンティ一枚の交換でO・Kだというがそれとても、私の心次第で、女性がイヤだといえは結構ですと、いとも低姿勢であった。



「今、一寸、手が離せませんが、或いは一時間ぐらいお邪魔してよろしいでしょうか？」

といわれて勿論、断われず応じたが、プレイの性向は違っても、チラリ覗いてみたい心理でもあろうか。中から施錠していただいたらしいから、行く時は、前もって電話しますといいて、更に、マンションまでの道のりをかなり精しく説明して電話がきれた。

太秦までは、かつての日、東映撮影所へ日参した頃に通いなれた、勝手知ったる道筋である。そこから先は、迷えばきくつもりで、私は忽ちスタートを起こした。

「どうでしたの？」

「ええ、都合よく貸してくれましたよ。マンションの一室をプレイ用にいつも明けてあるのです」

「じゃあ、お見えになるのですね」

「かも知れません」

「何だかイヤですわ、見も知らぬ人の前でなんて——」

川路むら子は軽く眉を顰めて、やや批難めいた口調になった。

「くる前に電話するそうです。その間に身支度出来ますよ」

「折角盛り上った時に、電話がなったりする

とガツカリしますわ。でも仕方ありませんのね」

「まあ、我慢して下さい。その代わりホテルのように気を使わなくていいかも知れませんよ。彼はMでフェチなんです。あなたの下穿きを欲しいとかいっていた。チャンと新品がおいであるそうです」

「まあ、ヘンな方——でも私、今日お会いする為に、真新しいのと換えて来ましたのよ、意味ないんですよ」

「じゃあ、オシッコでもかけておいてやりますか」

「そんなこと……」

艶な眼付で、ハンドルを握る私の手の甲をキュッと、かるく抓る。

双ガ岡を過ぎて御室のほとり、京福電鉄の北野線を踏切ると、やがて目指す目標がありそれと分かるマンションが見えて来た。

かつては静かであったこの御室周辺にも、都会の騒擾を避けて住宅地が移動し、車の流れも激しくなってきた。

マンションとはいえ高級アパートである。アパートと呼称するより、マンションとかコーポとかいった方が、近代的な匂いがする

今である。新建材の今様建てのマンションの横手が、数台駐車出来るよう、有棘鉄線で囲った、広場になっていた、それがミソでもあった。モータープールつきですよとE氏がいったのはこのことであろうか——。

車を入れて鍵をかけると、とも角プレイ道具はその尽トランクに

入れて、私独り、彼に云われた階下のMという人を訪問する。

主人は留守であったが、若い奥さんにわけを云うと、キサクに鍵を出して、わざわざ階上へ上って扉を開いてくれた。

「何かご用事があったら、ご遠慮なくいって下さい」

と如才がない。居住者であっても管理兼任だけに、F氏の息のかかっていることが十分に察せられた。厚く礼をいって、階上の手摺から、車の傍らで佇む、むら子に手を振る。うなずいて、急ぎ足に昇ってくる。恐らくM氏の細君は、私達の行動を細大もらず観察しているであろうことは推測された。

午下りの、うたかたの情事——。その程度には、とっていたに違いない。

むら子を部屋に招じ入れて、再び外に出ると、トランクから、黒革袋、縄袋、それに、そっと辺りに眼をやり、人気のないのを確かめて、数本の棒と三脚を持ち、両手一杯の荷物をさげて慌てて部屋に戻ると、嵌込みの差込みを挿して、ホッと一息つく。

入ったすぐのキッチンには、ガスコンロ、食器類などが、洗われて、あるべき位置にちゃんと整頓よく置かれてある。いつ何時でも



快く情事に耽り得る準備が、整えられてあった。

風呂もすぐ沸くようになっていて、コックをたしかめてひねると、冷水がやがて仄かに温かくなり、次第に熱くなってほとぼしり出る。セントラルヒーティング式になっているのだろうか。

扇風機やクーラーがあつて、片隅にガスストーブが鎮座していて、何とも奇妙な四季混同の居間である。

「やっと二人切りになれましたわね」

むら子は熱っぽい眸を私に向けて、早くも身をにじらせて両手を差しのべてきた。

× × ×

「ねえ、入っていらっしやいませんか？」

むら子がバスの扉を半開きにし、首だけ出して、私に声をかけた。入口の扉のすぐ右手がもうすぐにこじんまりしたバスで、トイレがそれに隣り合っている。マンションといつても、所詮は狭い坪数を、最大限に活用したごく手狭なものであった。それでも親子三人ぐらいなら、楽々生活出来るように設計されている。

「狭くて入れないでしょう」

「何とかありますわよ」

バスにつづく三帖のこの居間にまで、濛々とした湯気が流れてくる。立ち上って見に行くまでもない。バスに湯を注いだのは私である。桃色のポリバスは、私一人肩までつかれば、半分ぐらい湯量がひりこしそうな小ささであつたし、洗い場も一平方メートルに足りない。抱き合えば何とかなつても、その狭さは、肩の凝る思いで私を躊躇させる。

「もうすぐ、注文した寿司がとどくかも知れないからね」

「いいじゃありませんの？」

むら子は大胆放恣な言葉で、或いは寿司屋に二人の濡れ場を見せても構わないという気配すら窺えた。既にこの人妻は、今日の日を待ち兼ねてリラックスし、ときめきは急速に昂揚しているらしかった。

ビールをとり出したものの、ツマミが何もないので、缶詰屋にも似合わぬ迂濶さに苦笑しながら、壁にはられた電話メモを頼りに、寿司や茶碗蒸しを注文する。腹は減っていないが、ツマミ代わりに喰べる気でいたのだ。プレイをすれば腹も減ろう。そのさなかに注文も出来ず、かくは早手廻しになったのである。あきらめたのか、むら子は首を引込めて、やけにザブザブと湯を流す音がきこえ始

めた。家では滅多にしたことがないのに、甲斐々々しくもこの私、むら子の入浴中にガスコンロで湯を沸かしにかかり、急須に茶を入れて、湯呑みを運ぶ。

バスから出てきたむら子は、憶面もなく裸身の体を私にむけて肌を拭い、一寸思案していたが、ふちとりのした薄手のパンティをはき、シュミーズをつけた。

つけ終った途端、扉がノックされる。ハツとした様に私の顔を見て、彼女はあわてて居間の襖の蔭に身をひそめた。

寿司屋の配達はタイミングがよかった。岡持ごと運び入れ、即金で払って、よいしょと持ち込む。

「未だ、たべられますの？」

あきれた様にむら子は、とり出した寿司や茶碗むし吸物などを立った俤みつめている。「まあ、ぼつぼつやるさ。あなた何時に帰るの？」

「何時でも……。辻村さんの気が済むまで」艶に笑って、ベツたりと机を隔てて前に坐ると、

「少しいただいでいいかしら、私ノド渴いちゃった」

とビールの栓をあけにかかる。

テーブルを挟んで、俄か夫婦の、ささやかな、そのくせ水入らずの愉しいひとときが始まる。

座敷との境の襖を開き、三脚に据えた自動巻きカメラのレリーズが私の手許に伸びている。例えハプニングが前触れもなく起こっても、広角レンズが、私達の戯れの記録を細大もらさずフィルムに納めるように仕掛けておいたのであった。

「まあ手廻しのいいこと」

チラリとそれに眼をやって、むら子は微笑を泛かべる。

「どう、私のハダカ……以前にくらべて少しはマシになりました?」

「よくみなかった」

「ダメねえ、ハダカでしばらく立っていたのに……」

甘える様にクスンと鼻をならして、この人妻は、全身に媚態を漲らせて、イヤーンというように体をくねらせた。

「何だかこうしていると、辻村さんと夫婦になつたみたい。あなたと呼んでいい?」

火照った顔が、私の琴線を憐るように、囁きかけてくる。むら子は、すっかりこのマイホームめいたムードに満足し、陶醉している

ようであつた。ポーツとうるんだ瞳が、私に淫らごとを早く早くと、せき立てているかのようである。特徴の片えくぼが、くっきりと凹んでいる。

車を運転するまで数時間はあるという安心感が、ついビールの度を過ぎさせ、忽ち二本の瓶が空になる。けだるく、その癖ズキズキする様な嗜虐の思いが頭を拾げてくる。

いそいそとむら子は私のコップにビールを注いでくれる。それは世の一般の、世話女房と何ら変わらぬ態度であつた。

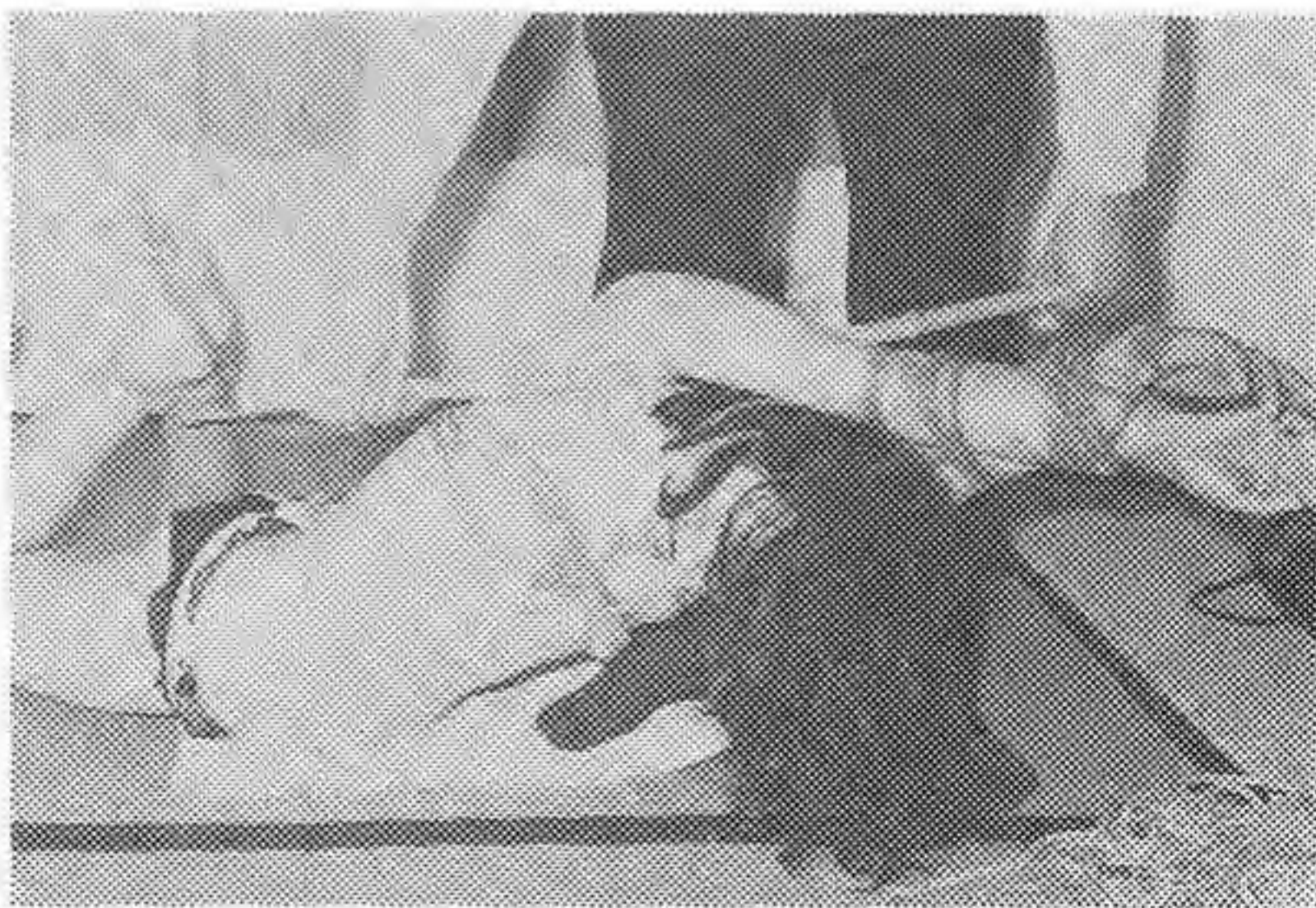
よるめき——という、一言では単に説明しにくい、この人妻の今の心理状態は、一体どのような思いにみたされているのであろうか。

始めて逢つた時の、あの羞恥にまみれ、消えも入りたげな風情は、眼の前の彼女からはその片鱗だにうかがえなかった。それは何か遠い過去の夢魔のかげらのようにすら思える変貌である。

きかずもがなであつたが、聞いてみたい衝動にかられ、

「あなたの御主人は、今でもやはり何も御存知ないの?」

ズバリたずねると、流石に一寸眼を伏せ、「知らないはずです。第一、もうこの処、三



カ月以上も顔を見ていないんです。出張が海外ですから、あと数カ月は、帰ってこないと思いますわ。私を、悪い女だとお考えになります?」

「良い、悪いなんて私には云えない、でも今も愛しているんでしょう、御主人を」
「ええ、或る意味ではね。月々チャンと生活



体をもみくちゃにしてほしいという念願はどうしても消えないんです」

「子供さんの面倒は、矢張り御主人の御両親が——」

「ええ、可愛がってくれますから、反って親の方になつてしまひまして。月のうちの半分ぐらい、両親の方で寝ています。ねえ、もうこんな話よしましう。何だかシメっぽくなってきましたわ。私、プレイの時は、独身にかえったつもりになっていますのよ」

確かに彼女のいう通りであった。正にプレイしようとする一対一の男と女。そのなりわいなど、何らプレイに、関係はなかった。いやむしろ、燃え盛りつつあるプレイへの執念に水をさすような結果になるだけであった。

ここには過去も未来もない。人妻と妻子ある男が、現在にすべてを燃焼させて、唯うたかたのひとときを、ひたすらに一途の情念に邁進させてゆけばよかったのである。

ハイネックのセーターの上に、薄いジャンパーを羽織った軽装の私も、熱っぽい雰囲気と、軽い酩酊が体を暑くさせる。ジャンパーをぬぎ捨てると、薄い毛糸のハイネックセー

ター一枚になり、いきなり俄破と机をかき分けて、むら子に素手で襲いかかった。

呀っと突然の動作に声を立てたものの、むら子は私の羽搔いじめを、内心待ちうけていたもののように、甘美な喘ぎを洩らして身をよじらせた。唇を近づけると、むしろ彼女の方からそれを求めて、ひたと吸いつく。

長いくちづけ——万魁の思いを篋めて、むら子は吸いつづけた。その折々に隠しレリーズが閃光をきらめかしている。

爪を立てるように女の両手が、ヒタと私の首にまとわりつき、ぐいぐいと力が籠る。

やっと離れた唇が大きく息を吐いて、ねっとりとからみつく瞳が私を見上げ、喘ぐ口調から洩れたのは、

「ああ、会いたかったわ。あなた……あなた……あたし恋狂いよ——狂いそうだったの。

ねえ、思いつきり虐めて。お願い……虐めて——」

むら子は、むしゃぶりつく様に私の顔に、ところきらず、熱い唾液をまきちらして、くちづけしていった。

思わず日頃の理性を忘却の彼方へ押しやって、私の心は激しく傾斜し燃熱してゆく。大胆な求愛のきれぎれが、妖しく私の胸を、か

費は届きますし、これといった不自由はありません。でも、夫婦なんてそれでいいものでしょうか。かりに死ぬ程好きで一緒になった人であっても、その人が仕事一点張りで、私を一人ぼっちにしておいたなら、やはり私はこうしたことをしていると思います。けれども随分我慢して孤闘を守っているのです。けれど、胸のうちに疼く、虐められたい、私の



き乱していった。

SとMが真向から衝突し、火華を散らして相剋した。

抱きしめた俛、片手を伸ばして、細いまだら紐を掴みとると、私の両手は闇雲に、轟しとむら子の体をしめ上げていった。

「ああ、嬉しい。もっと……」

喘ぐ歓喜のうわずった眩きに、嗜虐の血はみるみる逆流を始め、締め上げた縄をクルクルと外すと、シュミーズの肩紐にがっとな手がかり、引き裂くように一気に腰の辺りまで押し下げていた。

確かにむら子の肌は艶を帯び、乳房は丸味を帯びて豊かに膨れ上り、女人の若々しさが

上半身に溢れていた。最早、今ここにある女体がかつてのむら子と同一人とは、どうしても思えぬ不可思議さに、めくるめく思いで私の縄は、唸りを生じて、ひたと巻きついて行く、忽ちそこに乳房を挟んだ、強烈な緊縛が出来上る。二の腕の縄は、血行を止めん許りに

深々と喰い込み、ぽっくりと盛り上った両の乳房は、激しい愛撫を待ち望むかのようにブルブルと顫えていた。

言葉にならぬ眩きが切々と洩れ、そのきれぎれの呻きに似た歓喜のたわ言が、ニンプの国の愛の囁きかのように、私の耳朵を甘く擦るのであった。

ぐりぐりと揉みしだく指先に力がこもり、むら子は齒を喰い縛り、キリキリと奥歯をかみならして歎歎した。閉じた眼尻にまざまざと恍惚が流れ、吐く息は微かなビールの香をのせて熱く私の頬を撫でていった。

人妻むら子の陶醉の表情に、ハツとするような清新なあどけなさが走り、それは歌手の

伊東ゆかりをホーフツとさせる若さに変貌した。俄破と髪を掴み、押し倒すと、二の腕に私の指が爪を立てる。一際高く悦虐ののろしを挙げて、彼女は咽ぶように泣き喚く。その声は徐々に高く、泣き声に混って

「もっと……もっと……あなた——」

と、飽くなき欲求の自分の声に、むら子自身、激しく溺れてゆくのであった。

× × ×

堅いゴツゴツした麻縄が、高々とかかげた両手を轟々としめつけ、長い縄はむら子の胸をしめあげていった。ぐいぐいしめつけるのに私は自分の足を用いて力を入れた。

「恋狂いした、むら子よ、私の奴隷になりたいか、いえッ」

私の芝居がかった嗜虐の口調に、鸚鵡返しに応えて、

「ハイ、なりたいです。ああ、あなた。ならして……」

と、さも嬉しそうに叫ぶ。高々と交叉して縛られた両手が、鮮かにスラリと伸びきっていた。

「よし、では立つのだ」

ハイ、とうなずいて、腰で加減をとりながら、むら子は直立する。荒々しくシュミーズ

をむしとり、襷つきパンティ一枚にすると、足払いしてドサリと倒す。

両手が縄束の上に落ちて、女はウーンとうめいた。

あの、ややたるみ始めた腹部はピンと張り切り、臍窩も形よく、乳首も黒ずみの色は薄れて、微かな赤味すら帯び始めていた。

私の不用意な発言によって、一念発起して女体改造を目指した女の執念が、今まざまざとそこに展開されて、私は息をのむ思いで、改めてまじまじとこの柔肌の甦生に、駭きの眼を瞞っていたのである。

塚本氏が、いみじくもいった様に川路叢子の肌に、人妻のくたびれを感じないといったのは、正にその通りであった。

この撓やかな、匂いこぼれる女体が一児の母なのかと、私は今になって、彼女の抗議が当然すぎるぐらい当然のことのように思えてきたのである。

可愛い恋の奴隷は、私の足下で息づいて、私の苛手をいじらしく待っている。

グイと足蹴にして俯伏せにさせると、余った麻縄で、両足首をしっかり縛りつなぐ。

嗜虐に猛り狂う、一匹の鬼となった私は、持ち込んで来た竹棒で、いきなりピシリとパ



ンティの臀を叩きのめした。ヒーツと叫んでピクンと裸身が躍り、すぐぐったりと俯伏してしまふ。

俯伏せの体を、ぐいと靴下の足でふみにじり、竹棒をきしませて、腋の下へ挿し込んでゆく。ほぼ中心部まで挿し込み、力を入れてぐっと一気に持ち上げると、縛られて自由の

利かない腕の附根がぐぐっと盛り上り、上半身をうかせて、むら子はハッハッと激しく息を弾ませて、それに耐えようとしていた。

「どうだ、痛いか——」

「ウーウン、か……ま……わ……な……い」

「よし、では降ろしてやる。まだまだ序の口だ。いいな」

「ハイ」

この暴君は今、ひたすらにむら子に責苦を与えることに喜びを見出していた。綺麗に梳いて整えてあった髪が、いつしか藻と乱れてむら子の顔に蔽いかぶさり、凄艶なSMの悦虐のあとを露わに示していた。

その乱れた髪に、私の心はひたぶるに荒れ始め、いきなり黒髪を掴み上げると、背と足首をつなぐ縄を一方の手で握って、よいしょと掛声もろとも抱き上げたのであった。

逆海老に弯曲した苦痛に、ヒーツと悲鳴して、むら子はそれに耐えた。

すれすれに座布団に付いていた腹部が、もう一息力をこめて引き上げた時、肌身が座布団を離れて、完全に宙に浮き上る。髪と連結縄との吊り上げは、強烈な痛苦を彼女に与え、たに違いなかった。

必死にこらえるその苦悶の表情の中に、ハ

ッ息を嚙む悦虐の陶醉を見出して、その譬えようもない恍惚の気魄に、私の大脳神経はキリキリと激しく昂ぶるのであった。

ユーラ、ユーラと空間に体を泳がせ、重味に負けて手を離す。

「恋の奴隷よ、どうだったか、プレイの味は……」

「……………」

「応えないのか」

がくつとタタミに埋めた顔を、髪を掴んでのけぞらせ、その頬に音のいい平手打ちをくらわせると、ハッと意識が回復したかのよう

に、

と、皓齒をのぞかせて、むら子はうわ言のように云うのであった。

途中で縄を買い求め、心の準備もなく、果ては、むら子に押しまくられた初回にくらべて、今の私は意馬心猿にいきり立ち、最初からその気になって、激しくむら子を苛めつけていた。それがむら子にとっては堪らない快楽と変化して甘受していた。

「ああ、あなた……私を好きといって——」

「ああ、好きだよ」

ボツリというと激しく首を振って、

「イヤ、もっと本気でいってえ」

と身悶えする。又しても髪を掴んでぐいとのけぞらせ、片手で強く女の尻を叩くと、

「バカッ、分からないのか——」

もっと叩かれないのか

つづけさまに、三つ四つバシバシといい音を臀部に立てると、むら子はもう堪らない声になって、

「ああ、あなたあ、もうどうにでもいようにして」

と、激しく身をよじって、輾転反側した。フト黒革袋のバイブの存在に意識を走らせ、その時真弓の顔がチラリ泛かび上ったが、私

はやはり誘惑に負けて、それを取り上げていた。又しても——。

女悦を呼ぶ、この軽便快楽器が、やがてもうのうい音色を響かせて、ポクリ突き出たむら子の乳房を這い始めた時、身も世もあらぬ絶叫が、部屋のしじまを破ってつんざくように静寂を引裂いていった。

× × ×

「今夜帰さないといったら、どうする？」

「あなたの本心なら嬉しいわ。私どうなってもいいの」

「プレイは夜までつづくかも知れない。新幹線が間に合わなくなるかも知れないぞ」

「その方がいいわ」

熱っぽい眸に、愉悦の極致の名残りを留めて、むら子はうなされたように応えた。

僅かビールの一本や二本と思ったのが、プレイで体を動かす間に、いつしかかなり酔いが廻りつつあった。むら子はビールとプレイの悦虐の双方に酔って、剥き出しの体の尽、私の膝元で倒れていた。依然として高々と両手を挙げさせて、堅い麻縄で縛った俣であった。恐らく、十指は麻痺し、感覚を失っているに違いなかった。

苛めるというより、何か女体をイビリたく



て仕方がない。この人妻は今や、私の一挙手一投足の意の俛に、奴隷となって、私の自由になりたがっていた。

思いきり強烈に苛めてみたい、黒い慾望が渦を巻き始め、膝下に倒れ伏している彼女に嗜虐の眼をやる。

私の責めの手を待ちあぐねるかのように、悦虐に酔い痴れた女の眼は、じっと私に向かって注がれていた。

ゆっくりと立ち上ると、部屋の片隅に転がっている二本の棒をとりあげ、轟と縛った両手首の縄を荒々しく攪んで、上体をぐいと起こして、あぐらに坐らせる。

じわじわと、腕の付け根から、開いた両腿へ向かって、節くれだった二本の棒を押し込んでゆく。柔肌をこする棒の摩擦に、むら子はチラッと眉をひそめ、それでも私のなすが俛になっていた。

肩から突き出た二本の棒に縄を掛け、外れないように腕に縛りつけ、長く余った縄で、棒を巻いてゆき、腿の付け根でしっかり縛りつけて、組んだ両足首の縄につなぎ留める。無慚に開ききった両腿に、冷めたい堅い二本の棒が、深々と喰い込んでいた。

もうかなり長く掲げた両手は白く色が変わ

りつつあった。

身動きのならぬむき出しの背に、ピシリと一振り、縄むちをくくると、喘ぎが叫声にかわった。

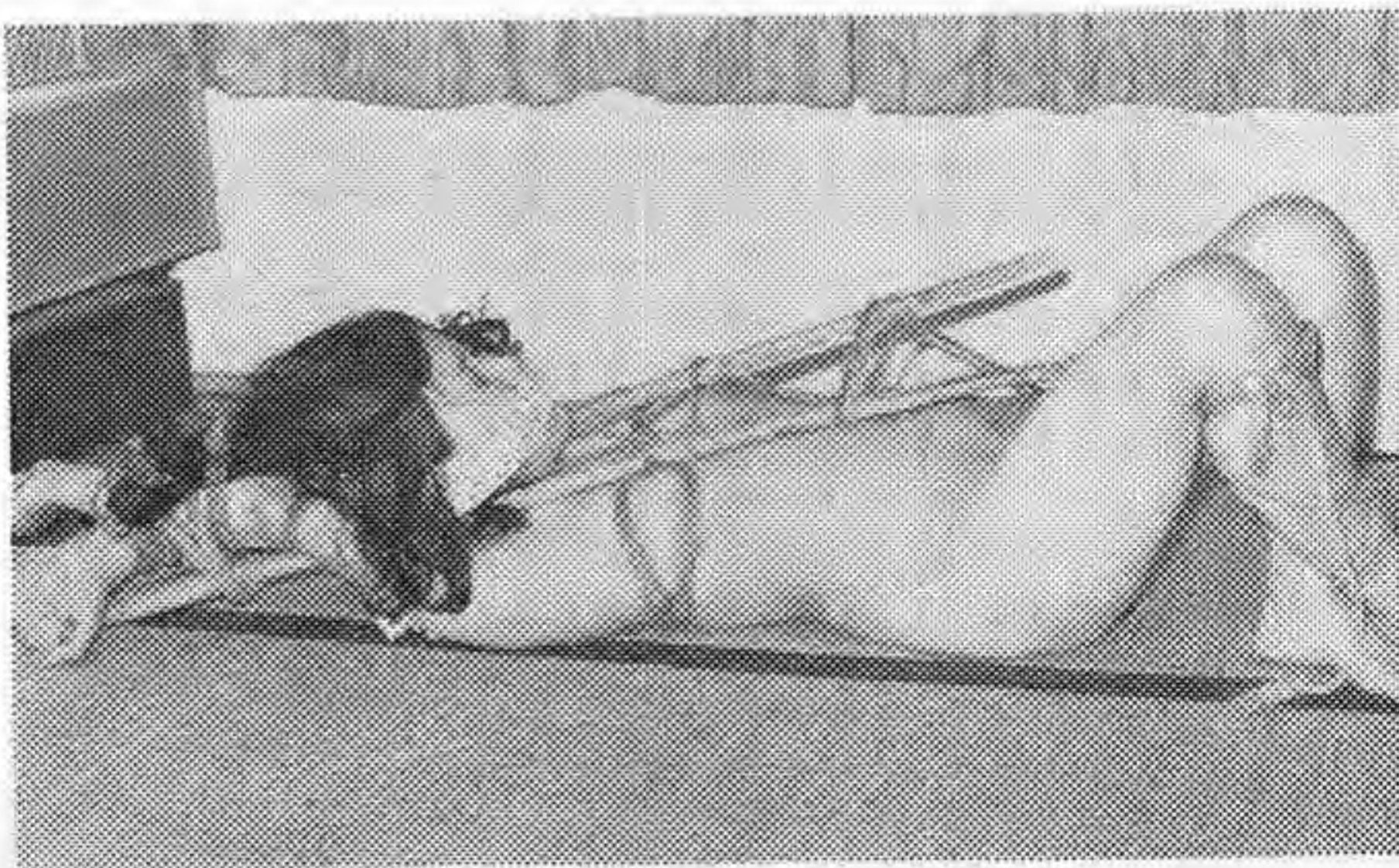
軽い女臭の漂う彼女の襷つきパンティを丸め、素早く口腔に押込み、その上から豆絞りの手拭で猿轡を嵌める。

蹴るようにして横ざまに押し倒すと、あぐらの足が、その俛ピョンと上を向き、棒がこじれて腿の肉を挟んだのか、猿轡の奥から、苦痛の叫び声が連続して流れた。くぐもり声は、

「痛い……足がいた——い……」

といているようであった。棒のしまり加減を確かめ、足首に連結した縄をといて、腿の束縛を外してやり、膝下で結び直す。幾分ラクになったのか、むら子の阿鼻叫喚の声は止まった。二本の棒が首枷となって、ぐいと前に突き出た不自然なポーズの俛、彼女は直立の棒によって、体を屈曲させることも出来ず、転がされた俛、女体のすべてを曝け出していた。

冷めなくなった両手を攪んで、テーブル近くまで引寄せ、無慚な姿で転がるむら子の、緊縛のポーズを肴に、私は更に一本のビール



をあけて咽喉の渴きをうるおす。

プツンと飛び出した乳首をひねり上げ、裸身を平手でパンパン叩きながら、「どうだ、いい気持だろう」

と云って、酒臭い息を吐きかける私であっ

た。動けぬ首が、微かにうなずいた様で、私は満足の笑みを洩らし、二度三度、乱れた髪を撫んで、苦悶の反応を確かめるように、ぐいぐいと揺すり上げるのであった。

じわじわと仰向けにさせてゆくと、二の腕も折れん許りに締め上った両の腕が、二本の棒の上にのり上げて、首を挟まれた痛々しい姿で、この人妻は必死に責苦に耐えていた。

外れた下腹の棒を両手で握り、ぐいぐいと揺すると、キレギレの悲鳴があがり、悦虐の果ての打ちひしがれた、最後の愉悅めいたかげりが、むら子の頬に流れた。

ぐりぐりと、棒で乳首を押さえつけるようにして、尚も私は苛めつづける。

苦悶と悦楽の混った歓喜が洩れて、女は腰を浮かし、自由にならぬ体を必死にのたうたせて悶え、腿がビリビリと顫えて、ありありとエクスタシーに咽ぶ歎歎が、のどの奥底で絡みつくように洩れ始めてきた。

私の悦楽はとどまるところを知らない。真赤に火照る顔をふり立て、俄破とむら子を引き起こすと、手早く棒を引抜き縄をといてゆく。もっともって強烈な、身内のジーンと疼くような緊縛を試みたい意慾にかり立てられたのである。



解き放つても、その場にぐったりと俯伏した俤のむら子に、私は躍りかかり、颯々と斑ら縄で後手に縛ると、易々として思いの俤になる女体を、胸を中心にきつく縛り上げてゆく。

「ああ、もう……わたし……」

激しく息を弾ませて、何かいおうとする彼女の顔面に、私の縄がいきなり飛ぶと、もう雁字搦目に、鼻も唇もひん曲る程に、犇々としめ上げてゆく。からくも吐き出したパンティが、足許にベツトリと濡れて、小さくなつて転がっていた。

両手を握ってぐいと立たせ、引裂くように股縄をかけて、両脚に刀の柄を巻くようによ

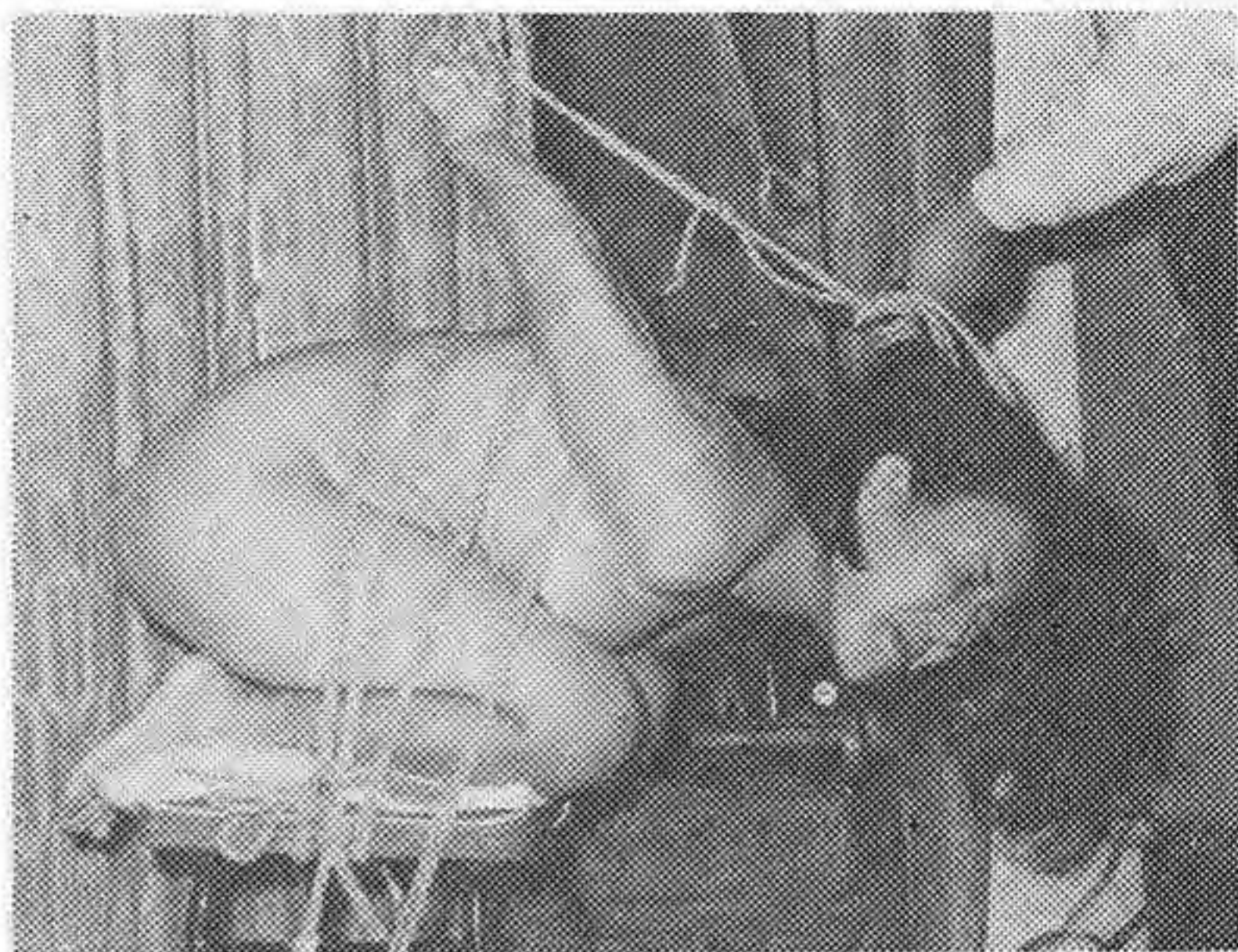
じらせて足首まで、ぎっしりと縛ってゆく。

ヨロヨロとよるめいた女体を押さえてやり、うしろから抱きかかえるようにして、俯伏せにすると、腰に手をかけて高々と引き上げる。両肩と、キチンと揃った両膝が、腰高のむら子の体を、辛うじて横倒しにならぬように支えていた。ボンと軽く突いても、ドサリと横ざまに倒れる不安定なポーズである。豊かな双臀のみが、これ見よがしに私の眼前近くに屹立している。

脇腹の縄に左右から棒を挟み込み、これを支えにしてやると、いくらか、体は安定したようであった。後手の上で三角形に交叉する棒の先端を、彼女の縛られた後手の指がきつく握りしめていた。縛られた顔が、ベツタリとタタミに這い、如何にも息苦しげである。

パシリ、パシリと私の平手が、小気味よい音を立てて、むら子の双臀を交互に叩く。やがてうっすらと五指が赤く浮上り、掌のレリーフが彼女の双丘を染め上げてゆく。

双臀に爪を立ててぐいと力をこめ、私の顔がおもむろに近づいていった。



その苛責が、むら子にとって、悦虐を伴った、限らない快楽のようであった。もう幾度か桃源境を彷徨し、エクスタシーが五体を震わせて、むら子の体内を駆け巡っていったことか――。

絶叫や高い悲鳴を挙げないから猿轡を外し

て欲しいと、この女奴隷は私に哀願した。

「どうだ、もっと虐めてほしいのだろう」

「ハイ、もっと、もっと苛めて下さい。いくらでもあなたの気の済むまで……」

かつては、彼女のこの激しい要求にタジタジとなり、その余りの執拗さに、ほとほとアゴを出して疲れ果てた私であったが、今日は私がすっかりそのイニシヤティブを握り、私の気のおもむく儘に、行動していた。それが又むら子にとってはたまらぬ魅力でもあったらしかった。飽くことを知らぬ私の快虐に、女の眼は官能の塊になってうるみ、激しく燃えさかって、喜悅に酔っていた。次はどうした緊縛で、どの様に苛められるのかと、一プレイ終ったあと、すぐに又次のプレイへの期待に胸を疼かせている様であった。

今も、キッチンから持ち出してきた、食卓用の小さい椅子に正座させて、椅子ごとぐるぐる巻きにし、危うく体が前に倒れそうになってガクガクする彼女のために、倒れぬように両手を高々と吊るし黒髪を一纏めにして縄で結んで、吊り上げた両手に結びつけ、ぐいと顔をのけぞらせていた。この浅ましい姿をみせてやるために、鏡台を移動させ、むら

子の緊縛のポーズが否応なく眼に入るように髪を掴んで、姿見の方へ振向かせてやる。

片手で髪を掴んだまま、彼女の顔の前へ坐り、苦しげに歪む顔を片手で挙げて、唇を吸い始める。むら子の舌腔は生温かくぬめつき齒をかちかち噛み合わせ乍ら、私の舌端を引き抜かんばかりに強く吸い、時には喜悅の余り齒を立てて噛みついてきた。

「ああ嬉しいのよ、あなた……あたしの長年の夢が叶ったわ、もっと虐めて――いいようにしてえ」

喘ぎ喘ぎ、むら子は嬉しげに欲びの上ずつた声を吐いていた。使うまいと思いつつも、今は半ばむら子自身の希望をかなえている、バイブレーターであった。彼女の両踵がモゾモゾと動く。その動きにつれて、身をよじり絶え間ない歓喜の声をあげて、今、むら子はもう、身も世もあらず桃源境を彷徨し、夢とうつつの境に遊泳していた。

激しいプレイにつぐプレイに、流石の私もいささかゲンナリしつつあった。責める手段を次々考えついても、動き廻り、女体を苛めているのは私一人であった。むら子にしてみれば苛められているという観念など、恐らく毛頭もってはおらず、只管に、願望しつづけ

てきた被虐の快感に溺れきって、苦悶も疼痛も、すべてが快楽に転換しきっていたに違いなかった。責めといい、虐めるといっても、それがむら子の場合、あたかも女体に対する特別のサービスのようなものであった。こうして手を変え、品を換えて、苛められれば苛められる程、快楽は急増して、心の燃焼は止まるところを知らず、烈々たる情炎のほむらとなって燃えさかっているようであった。

プレイのイニシヤティブを握っているつもりの私が、いつかしらずしらず、その情炎のほむらに巻き込まれて、飽くことなき彼女の哀願めいたプレイの要請に、肉体の疲労を忘れて努力していたのである。二台のカメラから発する閃光が、めまぐるしく、瞬間の白光を私達に投げかけている。

「ああ疲れた。もうそろそろ奴隷ごっこは終りにしようよ」

結局、音^ねを上げたのは私の方であった。椅子から解き放すと、手首をさすり乍ら、むら子は、ねとつく視線を私に投げてよこし艶冶な眼付でじっと私をみつめ、スローモーションカメラの動きで、両手をゆっくり水平に伸ばすと、私の首に絡めて来た。裸身が私の体にまとわりつく。

「ねえ、おぬぎなさいよ——いつまでもキチンと着ていないでさあ」

やや連つ葉な口調で、私のズボンのバンドに手をかけてくる。女の心は妖しく乱れ、猥らになりたがっていた。その誘いの手に却ってタジタジとなり、下った女の手をそっと払いのけ、私は苦笑して、丸首セーターとズボンを脱ぐ。

「寒くなんかないのよ、さあ、全部お脱ぎになつて——」

——考^{かんが}えようというのだろう、私をぬがしては、凡そ私にも察せられた。鮮烈な刺激が体内をつらぬいていったプレイの数々に、女体

はすっかり熱っしきって情事への陥没を求めていたに違いなかったのだ。

纏れて絡んでいた体がすっと離れ、
「何だか、オシッコがしたくなつたわ。フフ
艶消しね。きつとあのビールのせいだわ」

間髪を入れず

「じゃあ、縛ってさせてやろうか、前の時みたいに」

「あの時は随分、恥かしかった。でも今ならいいわ。あたしのみせるもの、すべてあなたにみせちゃったんですもの。いいわ、やっぱり縛るの？」

「ああ、縛ってさせてみたい。簡単でいいからね」



胸縄をかけてさっと両手を後にし、縄尻と、三脚から外したカメラをもって、バスに隣接する、トイレの扉を開く。

型通り、一段上って、むら子はもう躊躇せず、私に背をむけてしゃがんだ。

「それじゃ、みえやしない。向きを変えてよ」

「ウフフ、やっぱり羞かしいなあ。でも、まあいいわ」



狭いトイレ内でやっと方向転換すると、しやがみ込み、妙に真剣な表情になったが、忽ち激しい音を、白い陶器に向かって、沛然としぶきをあげて立て始めた。

カメラを構いて、ペーパーを切裂こうとすると、むら子がイヤイヤをするように体をにじらせ、私の顔に口をよせて、

「ネエ、あなた、奉仕して……」

「えッ！」

とききかえすと、チラッと頬を染め、

「この俤でいいのよ、あなたのお口で……分かったでしょ」

と、それが快楽に通ずる行為の連繋となるのか、女はイヤイヤをして一段下ってスックと立った。M人種なら垂涎の一コマであろう

が、被虐を好むむら子にして、尚且こうした男性の奉仕を求めるところに、倒錯したSMの感情が介在しているようであった。

キッチンの小さい椅子に、縛られた俤腰を降ろして、彼女は大胆に迫った。キラキラと輝く瞳が、淫らな行為を待っているかのよう

に、私に妖しい秋波を投げてよこす。

それは、羞恥の限界の女体の姿であったろう。かつて、あれ程までに羞恥にふるえ、身悶えたむら子が、まるで人が変わったように大胆なポーズをとっている。それは人妻の、羞恥のヴェールを剥ぎとった、赤裸々な真の姿であった。虚飾をかなぐり捨て、ひたむきに恋狂いする彼女は、人妻なればこそ、むしろ大胆に、破廉恥に振舞えるのかも知れなかつた。

めまぐるしく、そんな想念にかられ乍ら、私は惹きつけられるように、パンティ一枚の裸身でひざまずいた。独特の香気を鼻孔一杯に吸って、私の奉仕は長々とつづく。縛られた

女王は背をのけぞらせ、又しても快楽の軽い呻きを洩らすのであった。

悶えがガタガタと椅子を後退させ、軽いケイレンが、私の頬に微かに伝わる。SとMがまるで転倒したこのプレイに、私もむら子も何の不自然も感ぜず、暫くは陶酔の谷間にひたりきっていた。

ほろ苦い香気を口辺に浮かべて私はむら子に接吻する。その香気をむら子自身に味わってもらおうべく唾液と共に私は吐き出すように口移しに、むら子の口腔をぬらし去っていった。

やっと唇を離れた時、彼女は大きく溜息をつき、

「あなたと二人なら、なすことすべてが快楽につながるのよ、どうしてかしら」

「あんたの心が、SMプレイに傾斜しているからさ。でも、私は確かにあんたを見損なっていたよ。私の書いたカメラ・ハントの”あ”と驚く——”を”読んで、嘸かし、見当違いな私の想念に笑っていただろう」

「いえ、あの時は慥かにあしたの気持ちもあつたのです。だって辻村さんという、緊縛師のベテランに一对一で会うハプニングになったでしょう。それこそどうされるのかと、体が震えちゃって……」

彼女は敢えて「緊縛師」という呼称で私を呼んでいた。会わぬ先からハントを愛読した先入観念が、私という人間に対し、一種の畏怖めいたものを抱いていたに違いなかった。

それは読者通信などの夫婦プレイの方が、掛けていたので、では私がと思って連絡すると、とてもあなたとは月とスッポンでプレイは出来ませんと慇懃に断わってくる。すべては、虚名の私という人間の買ひ被りに過ぎないのであるが、やはりそうした一種の断層を感じているのは事実のようであった。

だから夫に内緒で、そっとプレイに走る川路叢子が、いきなり私と相対したのでは、戦



慄と畏怖の、いわれなき圧迫を感じ、それが羞恥というベールによって、心ならずも演出されていたのであった。川路叢子があの時、徐々に昂揚する自分の心を、私にぶつけて来て、執拗にプレイの継続を求めた、あの姿が彼女の偽らざる本心であったのだ。それだけに、塚本氏とも既に経験し、二度目の今は、そうした畏怖の観念を抱かず、私という人間の持ち味を失っていて、最初から身を投げ出して来ているのであった。それが大胆、奔放に彼女をみせ、私のイメージを否定なくチェンジせざるを得なかったようである。

心落ちついた私は、やおら立ち上ると、彼女の体をかかえるようにして、キツチンの硝子障子を片手で開き、座敷に通ずる扉を開いて、おあつらえ向きのはりつけ柱となった境目の柱に彼女を直立させ、先刻縛った上半身はその俤にして、麻縄で、ぐるぐると柱に女体を縛りつけていたのであった。

その時、電話のベルがなる。ハツとして或いはE氏

の到来かと等しく表情の強ばったむら子をその俤にして、仕方なく他人の受話器をとる。

意外にも電話の声は女性であった。

「Eさん？」

「いえ、留守番を頼まれた者ですが……」

「あらッ、あなた誰方なの？」

「E氏の友人です。何か御用でしょうか」

「ええ、用って程のこともないんだけど……困ったわね、そうね、こう告げて頂戴。ヤツチンだけど、新しいランジェリー持ってきて来て下さいって……。頼まれたもの、とってありますからってネ。分かりました？」

私には、その鋭い口調や、横柄な言葉つきから、咄嗟に、E氏の相手にしている、S的女王ではなからうかという、カンがひらめいた。相手は私を知らない。多分マトは外れていないとタカをくくって、ズバリと

「分かりました。女王様のパンティですね」

「えッ？ あらッ、あなた御存知——」

びっくりした様な声が撥ね返る。チラリとむら子の方へ眼をやると、懸命に顔をこちらへ振り向けて、表情に好奇心が浮いていた。

「彼の下着マニアは有名ですからね。女王様に無理をいったのでしょ」

「そうよ、十日ぐらい穿き替えないで、身に

つけていてくれだって……あらッ、こんなこといいのかしら——」

電話の向こうで含み笑いが聞こえた。

「ひょっとすると、あなたも同じ穴のムジナね。留守番とか何とかいって適当にイイことやってるんじゃない？ あの人、ヒトがいいから、すぐ貸しちゃうんだわ。まあいいわ、そういつといてネ。今夜七時、いつもの処で待っているからって、いいこと……」

電話はプツリと切れた。やれやれとほっとして戻り、この連絡せずばなるまいと、むら子を柱縛りにした俣、服からメモ帖をとり出してきて、先日聞いたばかりの二号さんの経営するレストランへ電話のダイヤルを廻す。机上の腕時計をみたら、もう四時半を廻っている。運よくE氏は未だレストランにいられた。

手早く、かかって来た用件を話すと、彼の声が弾み、

「そうですか、そいつは有難いです。じゃあアタシ、悪いけどアパートの方へは一寸、行けませんよ。夕暮れ近くで忙しくてね、何とか七時にあちらに行きますから……。適当にやって下さい」

私はビールを平らげたことを述べ、いつか

会った折、今日の御礼をすることを告げ、いんですよというE氏の声をきき流して電話をきった。幾分、心の底に引掛かっていた何時E氏の来訪があるかしれないという、落付かぬ心掛かりが、この電話で払拭され、されば心のおもむく俣に、とことんまでプレイに没入出来そうに思えた。むら子はそうしたことは全然我れ関せずで没入していたが、私にとっては虚心担懐には、なれなかったのである。

「ヘンな電話でしたのネ」

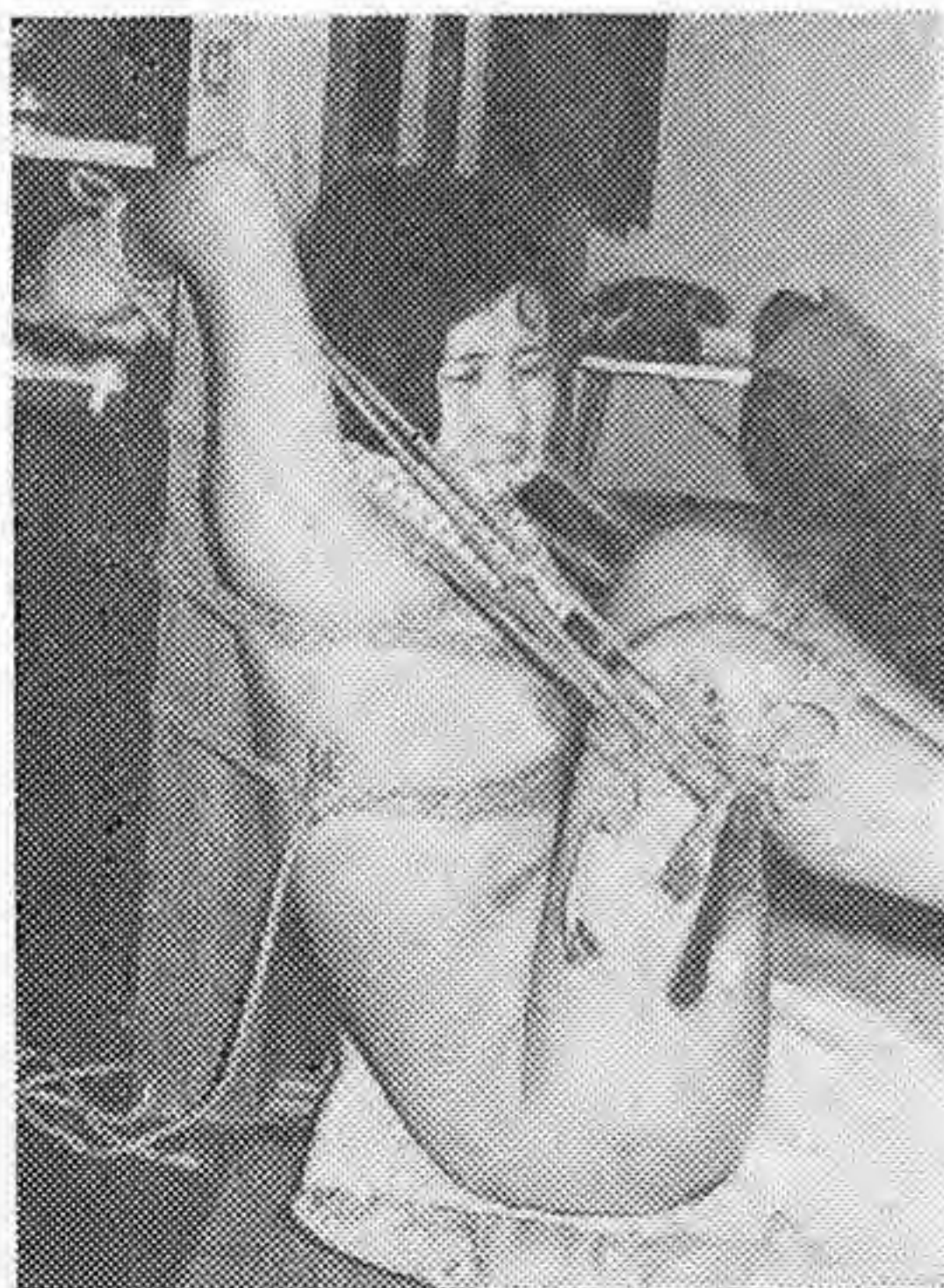
「ハハ、同好者の女性らしいよ」

チラッと不安とジェラシーめいた視線が私に走り、それはすぐ消えた。女心として、私を独り占めしたくても、カメラ・ハントで次々と女性を求めて探究をつづける私と、承知の上でプレイしていることに、彼女はスグ気付いたのであった。女心として、そうは割り切れぬ何ものかがあることを知っても、そうしなくてはならぬ私である。なればこそ妻も私の行為を許容し、それに応える義務は無形的に存在していた

のである。

むら子の、あやにめくるめく恋狂いは、私にとって、甚だ危険であった。しかし私が或る心の一線を画する如く、むら子も亦、人妻としての、心の一線は保持しなければならぬ筈であった。

柱縛りした俣、私は煙草を苦くふかす。舌がザラザラに荒れていた。糖尿病特有の吹出ものが数カ所、私の後頭部に出来ている。これが出来始めると、体調のよくない証拠である。それを承知で、こうして女体苛めに憂身をやつす私は、それこそ死ぬ迄治らぬ、一つの厄介な心の持病でもあらうか——。



煙草をぐいと指先でねじり消してノロノロ立ち上ると柱ごとむら子に猿轡をかませる。豊かにたゆたう女体が、私のプレイの手を待ち兼ねるかのように、身じろぎもせず直立していた。

いつもなら、ここで当然パイプの登場である。しかし、私には、佐々木真弓がいった言葉がどうも引っ掛かり、あれ以来、余りパイプを使う気がなくなっていることは慥かであった。

(オジさんもやっぱり使うのね……道具にたよるより、何故……)

そんなマユミの言葉が、どうしても心の隅に引っ掛かっていたのである。人妻であるむら子は、パイプには恐らく馴れてはいないだろう。いやむしろ、それを望んでいるかも知れないのだ。しかし私の心がそれを拒否していた。被虐を欲び乍ら、むら子は強烈なムチ打ちに余り好まない。痛さが快楽に通ずる程度までで、それは女人の等しく抱く、征服されたい被虐の喜びであろう。ムチ打ちよりむしろ、緊縛されての愛撫を待ち望んでいるのが彼女の実体であった。

私の指先がむら子の乳房をつまむ。私の唇が、胸を這い始める。忽ちにして形相は喜悅

に代わり、一刻も早くそうなりたかったかのように、ゆるい猿轡の奥から、絶え入るような悶えの喘ぎが、乳房に顔を埋める私の耳朶をうった。それがもう幾度目のエクスタシーなのか私にも判然としない。唯苛め、プレイすれば、むら子は寸時を惜しんで恍惚の状態に陥っていったのである。

立った儘、二つの裸身が絡む。熱い肌と肌の接触到、私の大脳神経はいつしかときめきをジーンと敏感に伝え始めていた。

× × ×

夢想の悦楽を可能にする女体が、現実到现在にある。時間の流れを感じさせない川路叢子であった。若しも彼女を、緊縛モデルという言葉で表現するなら、彼女程協力的な女性は一寸見当たらないかも知れない。しかしそれを裏返せば、むら子はプレイに対して、人一倍、いや数倍も貪婪であったのである。

さりげない言葉、或いは、淫らな媚を含んだ眼付が、私に一つ終ったプレイの緊縛のあとから、すぐ次のプレイを要求していた。

プレイにつぐプレイの連続で、始めてあったあの時も、もう終盤近く私はヘトヘトであった。今も亦、それに近い状況が起こりつつあった。

柱を背にして、両手は掲げて柱を抱くようにして背後で手首を縛り、乳房を×字に分けて、胸の上下で柱に結びつけてある。敷居にじかに坐って、その凹凸に臀部が痛むのか、彼女は遠慮がちに一枚の座布団を要求した。一杯に開いた両膝で、粗棒を膝下に縛りつけてある。

「もうこれで最後だよ。私は、くたびれ果てたからね。おしまいの大盤振舞いで、ウンといじめてやるから、覚悟はいいね」

嬉しげにうなずくと、

「もし、差し支えなければ、泊ってもいいのよ。明日は日曜日だし」

と判っきりいい切る。数々のプレイのうえ夜と朝の間、ずっとプレイに耽溺していたら私の体が持たない。恐らく彼女は夜もすがら私を寝かせず、求めてくるだろう。

私に飽きがきた、というのではない。ぶっ続けに数時間も責めつづけ、縛りつづけていると、激しい疲労の蓄積で、何となくプレイの世界から脱したくなってくるのであった。人によれば、それは贅沢の極みだというかも知れない。しかし一度試みにやってみ給え。心を燃焼させる激しいプレイのやりとりは、精々五時間までぐらいでないと、あとはダラ

ドラと、マンネリズムに陥るだけであるから――。

私はそろそろプレイにピリオドを打ちたかった。何かピリッとした、凄く強烈な刺激のある、羞恥の極のような態位で、思いきり苛め、それが最高頂に達した時、サラッとやめたかった。兎も角一緒に泊るなんてことは考へてはいなかった。我とわが心の傾斜が恐ろしかったからでもある。夫と子供のある人妻と、愛する妻と子供のある私が、同衾して激しい一夜を送った時、二人の間の心の中に芽崩える恋慕と恋狂いの絆をどう切離せばよいものであろうか。女体が燃えに燃える人妻が私にすべてを、投げうってぶつかってきた時の、カタストロフが想像出来るのであった。

所詮はプレイだけで綺麗に別れなければならぬ。それは私の鉄則のようなものであった。過去のハント女性の中でも、一夜を共にした女性は何人でもどまらない。しかし執れの場合も私がイニシャティブを握り、私の意志でどの様にもなってきた。しかし、川路叢子の場合、そうした単なるプレイという言葉だけでは納まりそうもない気配を感じるのであった。

叫喚を予想して、齒と齒の間に豆絞りの手



拭をかませ、しっかりと猿轡にする。これとても、その極になれば声は洩れるだろうが、しないよりは遙かにましである。

柱にしっかり縛りつけておいて、私は立ち上ると、女体責めの小道具を求めて、E氏が新しいパンティを蔵ってあるという、押入れを無断で開いた。何か面白いものはないかと物色する。

小型のスチールケースがあるが、錠がかかっていて開かない。恐らくは、E氏愛用の女王への奉仕道具や、己れに対する屈辱のアクセサリーが、大切に保存されているのである。頼まれていた事に気付き、机の傍らに、小さく丸められてあった、むら子の襪つきのパンティをとり上げ、ビニールの小袋に入れると、メンズウェアの箱から、新品のセロファン袋入りの水色のパンティをとり出し、チラッと振ってみせる。心ないうなずいた彼女の、それは諒解の意味であった。

女体責め具もさてとなると、何を使っているかトンと思案が浮かばない。余りにもパイプに偏重して来た、過去の使いすぎをしみじみと思い返されてくる始末である。

この場はやはりその御厄介になろうかと、フトそんな気持ちも走ったが、結局は空しい努力をして、ひたすらに喜悅するのは、外ならぬむら子だけで、私はもうパイプの効果を、数多の女人に見尽して来ていた。

見廻す室内の、玄関先の釘掛けに、羽毛の車の塵払いがブラ下っているのが目にとまった。円錐型の羽毛の塵払いは、もう大分よごれて、かなりくたびれていた。

それを外すと、ふと浮かんだ一つの想案は

いわゆる機り責めである。未だ試してみない彼女に、これがどんな反応を与えるであろうか。そんな未知の興味を抱いて、私の手にした羽毛の塵払いが、いい具合にむき出しになった、彼女の腋窩をくすぐり始める。

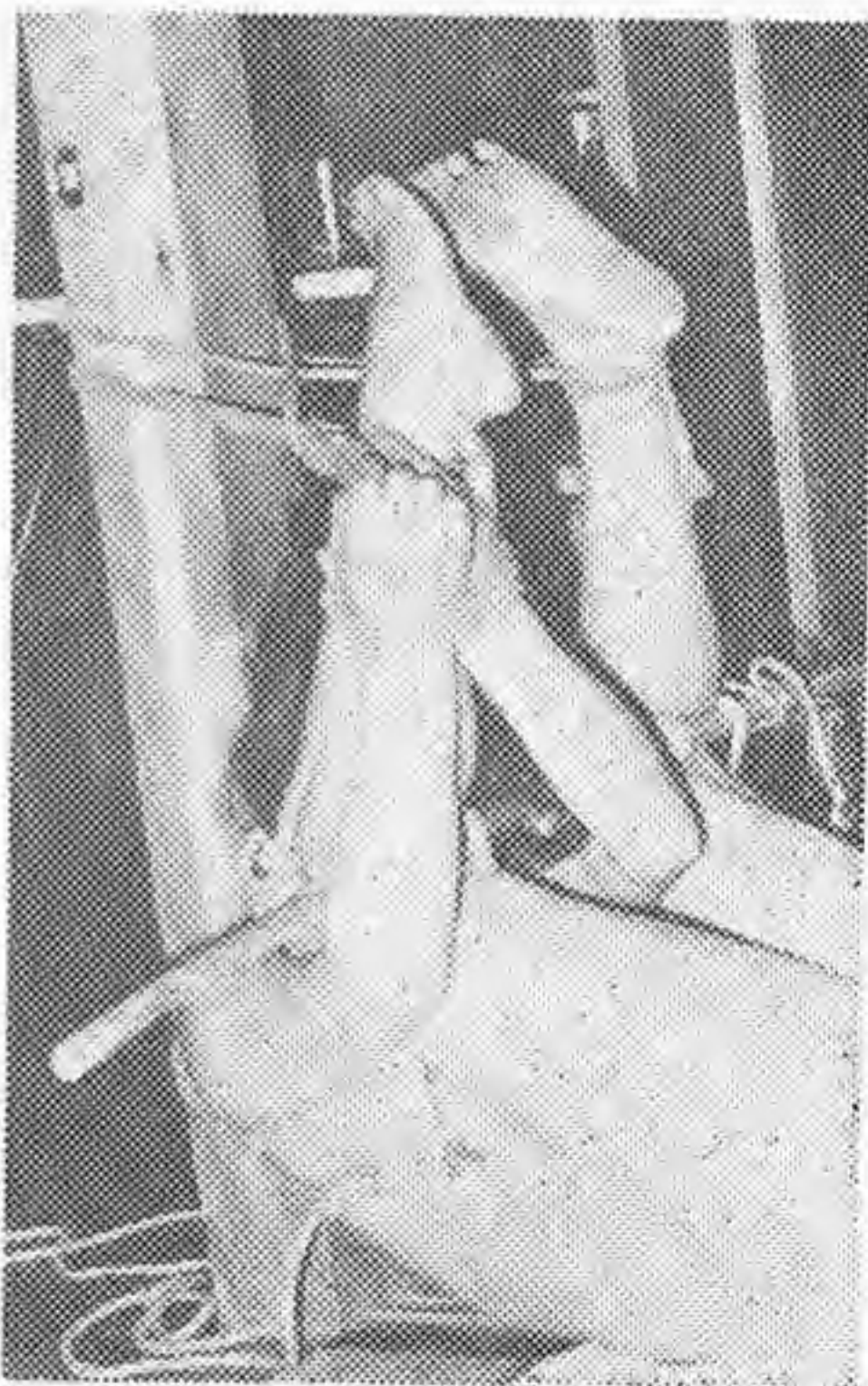
むら子はいやいやという風に身をよじらせた。委細構わず、私の作業はつづく。腋窩から左右の乳房へ、下降して腹辺を這って、伸びて投出した、足裏を擦ってゆく。

いやいやというように、むら子は激しく首を振る。彼女の好むことばかりやっていたならば、それは最早責めではなく、快い愉悅を与えるだけであった。

素肌のくすぐりは、慥かに女体にとって何らかの刺激を与えたことは間違いなかった。

塵払いをその場に投げ捨て、私は更にもっと強烈なものを求めて、押し入れやキッチンなどを物色する。バスを覗いた時、掛鏡の上においてあった、泡沫式のシェービングスプレーがフト私の眼に止まった。思わず、そのかたわらの西洋剃刀をとりあげスプレーを握って私は引返してきた。ハント女性には余り試みたことのない剃毛——。それがむら子の心理にどんな影響を与えるだろうか。

彼女の夫がそれに眼を止めた時、どんな結



果が生じるだろうか——。

どう弁解し、どう云い訳するだろうか。そんな嗜虐の念に憑かれると、もう私の心は制御出来なくなっていた。

両膝で縛った棒をぐいと持ち上げてみる。膝と乳房が、すれすれに接触するまで押し上げ、棒の両端を縄で結んで、肩越しに柱に廻して強く引き上げて止める。

真向に位置して、泡沫のシェービングスプレーを放つと、ニルニルと、忽ち吹きつける泡沫がとぐろを巻いて、神秘的な女体に、一コの白いデコレーションケーキが出来上がった。泡沫は、流れも消えもせず、こんもりと盛り上って停止していた。私の手が、白い泡

沫をまんべんなく拡げてゆく。レザーのかみそりの刃を出して一寸引っ掛けてみる。きしっと髪にかんで、そう切れ味が悪くもなさそうであった。

何か、猿轡の奥から、訴えるように聞こえるくぐもり声を無視して、私の手許は器用に動いてゆく。

泣きべそをかいた、あきらめに似た表情がむら子に浮かび、それすらも悦虐のとばりの中に融け入って、鼻をならし、奥歯をキリキリとかみしめて、彼女は私の行為を許容していた。いや、許容せざるを得ない緊縛の極限にあったといった方が正しいかも知れない。

その結果が、若し夫に発見された場合、人妻としてのむら子の立場は、極度に不利になるであろう。それを承知しながら、激しい抵抗もなく、緊縛にことよせて、私のなすが儘になっているむら子の心理は、或いはその行為に対し、激しい被虐の願望をみだしているように思われるのであった。

より強烈を求めて、私の胸は疼きに疼く。剃りあとを潔めたあと、様相を一変させて、

吊り上げた棒の麻縄をとくと、ホッと足を延ばしたのも束の間、彼女にとって、更に強烈きわまる緊縛が待ち構えていた。

冷たく、白く冷えきった両手の縄もとき、獲轡も外してやる。この俤解かれるのかと誤解して、

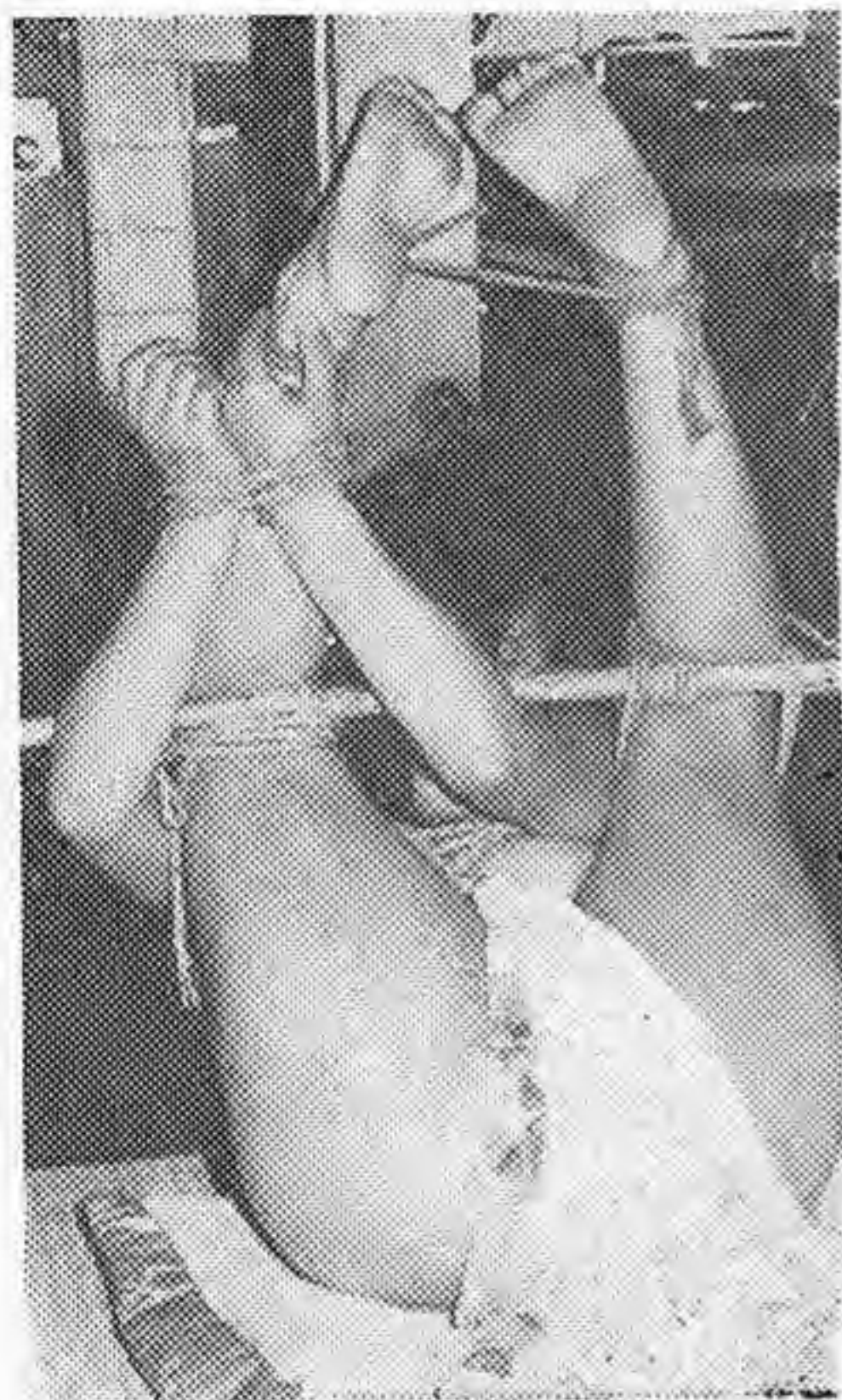
「ああ、苦しかったわ。困るわあたし、もしみつかったらどうするの、こんなことしちゃって……」

と愚痴るむら子にニヤリと笑いかけ、黙って私の手は彼女の両手を掴んで、右足を真中に挟んで、棒を貫ぬき返して、手首で縛っていた。余った縄で足首を縛ると、えいッと掛声と共に、力一杯柱に向かって引き絞り、素早く柱に巻いてもう一方の足も引張る。

むら子のノドの奥から、ギーッという声が洩れ、きれぎれに

「く、くるしいわ、ああ」と、呻く声もとぎれ、し

っかり結び終った時、棒が彼女の鼻面を強く押しつけて、極度の弯曲ポーズが出



来上っていた。

膝が肩につき、両の足先が、柱に添ってピクピク躍っていた。

獲轡のはめていない口辺から洩れるのは、最早切息の喘ぎだけであった。

若し仮にこの場に、エネマなり、ポンプがあれば、私は躊躇せずクリスタールに走ったに違いない。

もっとも叩きよい臀部の位置に、思わず手が縄束を握りしめている。

ピシリ——悲鳴——

ピシリ——絶叫——

ピシリ——叫喚……

狂おしいように私は打ちつづけていた。みるみる縄跡が赤く染め上り、白い豊かな臀部に交錯した。

それはもはや、理性の限界のように思われた。押しひしがれて顔面を覆った黒髪を俄破と握りしめ、極限の苦悶の状態の中で、むら子の姿は私の肉体の蔭に隠れていたのである。

× × ×

ふしぶしが痛い、川路叢子は眉をひそめて、しきりに肩や腕をもんでいた。そのくせひそめた眉尻に、惑溺の果ての、華やいだ飲びの淫蕩のかげりが、薄黒いくまとなっていた。だよっていた。

おこりが落ちた様に、私は裸身をねそべらせていた。ものをいうのすらも気惰るい倦怠が、私の全身を覆っていた。

窓の外は暮れなずみ、電灯もともさず、悦楽のあとのむなしさを噛みしめる私の心は、何故ともなく空しく、淡い後悔がともすれば胸をかすめていった。

結局なるようになったではないか。——男と女が、マンションの一室で、咆哮し、牝と牡との素朴な戦に果ててしまったのだ。挑んだのは私であったにしても、結局、終始挑ま

せる様な挑発をうけて負けてしまった恰好であった。

「暗くなったわね、もう何時かしら？」

「七時前じゃないかな」

「もうお別れなの？」

「その方がよさそうだ。もう起きる気力も尽き果てたよ」

「フフフ、いやねえ、あなたの独り角力じゃないの。私はあんな非道い縛られ方して、苦しいだけで、身動きも出来なかったのよ」

「本当に苦しかっただけなの？」

「というのはウソ。生まれて始めてよ、あんな強烈な思いは……。一生忘れられないわ」

「プレイだけで終るつもりだったのに……。何か罪惡を犯した感じだよ」

「私が人妻だから？　そうでしょう。でも気にしないで——。夫が世間並みの夫らしい愛情を私に注いでくれたら、幾ら願望があっても恐らく出て来られないでしょう。数カ月に一度ヒョッコリ戻って来て、二、三日いて、その間も夫婦の生活はまるでお義理みたい。又出張で出ていったら、何時戻ってくるか分かりやしない。悪い人だと思いたくないけど夫婦ってそんなものじゃない筈だわ。やり切れなくなつて、無茶苦茶に自分の体を虐めて

みたくなるのよ」

むら子は、仰向けに横たわった私ににじりよつてくると、遺瀝ない淋しさをぶちまけるのであった。私の胸にヒタと顔を埋め、かすかな、おえつが洩れていた。

乱れた髪を静かに撫でさすり、もうお互いの顔すら判然とせぬ夕闇のほとりの垂れこめた一室で、いつしか私達は、かたい抱擁にかわつていった。

「そろそろ帰ろうか——」

「イヤッ、もっと……」

激しく拒否して、尚も強く体をこすりつけてくる。軽い困惑といじらしさのミックスした気持で、又してもまさぐる手と手。

鼻をならしてしがみつくむら子に、私の心も再び意馬心猿に走りつつあった。

しかし、中年であり、糖尿の肉体の欠陥は如何ともしがたかった。むら子の必死の工作も空しく、みじめな気持になって、私は女体を押しつけて立ち上る。

壁間のスイッチをパチパチ押すと、またついた螢光灯が寸時にきらめき、眩しげに私達はお互いを確認して、奇妙に白けた空氣が二人の間に壁となつて流れていた。

「ダメなのね」

呟くようにいつてむら子は立ち上ると、トイレへ入った。

私はその間に素早く身支度を整え始める。混迷の脳裡は、次第に形態を整え、我知らず溺れたあのひとときを反芻しながら、乱雑に拵がり散らかした部屋を片付け始めた。

(E氏よ有難う、又使わせていただくかも知れない。その節はよろしく)

心中で謝して、せめてもの償いにおいた、むら子の襲つきパンティに、フト苦笑を覚え乍ら、それが彼女のいう通り、今日穿き立ての新品であるだけに、女臭の香の薄さを気の毒に思い乍ら、化粧を終えた川路叢子と連れ立って外に出る。

余りの長時間に、管理人室へ鍵を返しに行くのが照れ臭かったが、奥さんのさりげない顔にホツとして車にのり込む。

既に上弦の月は蒼く、夜の気配と共に、人通りの絶えて少なくなった御室を抜けて、私の車は一路、繁華を求めて、河原町界隈へ向かつて走つていった。カーラジオから流れる奥村千代の「恋狂い」を一入、身に沁みる思いでききながら、信号で停止して、フト傍らの、むら子を見ると微かな寢息を立てて、みち足りた表情で無心に眠っていた。(終)

「花と蛇」
に 想 う

団 先 生 へ
前 原 昇

私は「奇ク」における作品中、最も「花と蛇」に興味を持っているのですが、多くの愛読者も私同様に、そのSMにおけるリアルな表現と、生き生きとしたストーリーに魅せられ、特に責められる美女の象徴としての静子夫人に、日々のやるせない不安や欲望を投影されているのではないのでしょうか。

しかしながら私にとっては、一面、絶世の美女たる静子夫人はおしとやかな人妻で、小夜子や他の美女達のために自分を犠牲にし、抵抗しながらも、結局は責められることを求め、それにマゾ的な喜びを感じとる女性に過ぎぬ、と思えるのです。

たしかに「花と蛇」には、マゾ的な喜びを知る女性の存在が絶対に必要かもしれませんが、要望もあることでしょう。しかし、私としては、女の持っているそれぞれの特色を活かしながら、やはり最後まで激しい抵抗を止めず、肉体的には屈伏されても、精神的には絶対に敗北しないという女性の登場を望みた

いのです。そういう美女こそ「花と蛇」のヒロインとして適しているのではないのでしょうか。その意味で、私としては「京子」の活躍以外にないと確信するようになりました。

京子のこれまでのことを振り返ってみると一貫して抵抗し続けており、ジャジャ馬娘にふさわしい過程だと思います。彼女の受けた二度にわたる一〇〇ccの浣腸や、数々のしつこい責め、二人のシスターボーイによる調教など、そこには静子とは異ったいたぶりと、京子の頑強ぶりとが存在しているようです。

すでにマゾ化した静子夫人に対する調教と強情をはる京子に対する責めは、本質的に変わったものになるでしょうし、スター養成のための奉仕的サディストではなく復讐的憎悪を持った男の出現もあっていいのではないかなと思うのです。清次あたりにその性格を持たせて欲しいもので、少しくマゾ臭を匂わせる京子を、再びフレッシュな、激しく抵抗する娘に戻し、ジャジャ馬娘の華麗さを希望出

来ないものでしょうか。

マゾ的な京子なんて、まっぴらです。

SM小説には、その責めに何らかの発展性と一貫性が必要なのでしょうが、静子夫人にはマゾ教育によるスターへの調教が徹底し、それが見事に成功しているようですが、京子にはどちらに向いても無理のない余地が残されているように思います。折角、シスターボーイなどによるいたぶりなど、余りショーには関係のなさそうな責めの洗礼を受けた京子なのですから、静子夫人の足跡をいつて行かないようにしていただけないものではないでしょうか。そして、京子だけは、スターに仕立上げることを男達に断念させてもらえないものかなと思うのです。

団先生、京子をもっと登場させ、サディスティックな責めに悶えさせてやって下さいませんか。絶対に降参しない京子が、責めるためだけの目的による大量浣腸に、転がることも出来ずに苦しみのたうつ姿など、私としては求めて止まない風景なのです。

すばらしいジャジャ馬娘京子。責められ続ける京子。加虐に頑として対抗し続ける強情娘京子。その京子に『浣腸を！』と望む私の気持を、団先生にお願いするものです。



11

「郁子は二十三才になりました。沢田の所に女店員で勤めていたころは、成熟はしていましたが、まだ娘々したところがありティーンエージャーの感じでしたが、私の喫茶店へ勤めるようになって二年。その間、愛人の矢沢とはずっと関係をつづけていたのでしょうか、いや、現在もつづけているのですが、今の郁子は胸のふくらみ、腰の重み、足の線、どこをみても、もうまったくの「女」です。」

店へ住込みで寝泊りするようになって五カ月。店主の私をまったくなめきっていますから、二階の私の部屋も平気で独占して、私が三帖の方に寝ているのも当たり前のような顔をしています。

「ねえ、ちょっとオ、お水のみたいわ。コップに一杯、持ってきて」

彼女が床に入ってから、寝たままで一度や二度は必ず私に用事をいっつけます。

「あいよ」

私はさっと立上って階下へおり、コップに

M
の
傾
斜

壺

中 ちゅう

の

園 その

真 砂 十 四 郎

水を満たして彼女の枕許へ持って行ってやりま。彼女は床に腹匍いになったまま、上体をそらせてゴクリ、ゴクリとうまそうに水をのんで

「ふん」

と空のコップを私に返します。

「はいきた」

私はそのコップを持って自分の部屋にひきさがり、底に残った彼女の飲み残しをごくりと飲みこんでから、また蒲団の中にもぐりこみます。

「ちょっとオ。タバコがないじゃないの」

また彼女から声がかかります。

「ああそうか、もうなかったかい。それはすまん。忘れてた」

私はまた起き上って新しいシガレットの封をきり、彼女の枕許に伺候してセット容器の中に詰め、その一本を、寝ている彼女の口許に差し出し、す早くマッチをすって火をつけてやります。

「手を出すの、めんどくさいわ。マスター、そこにいて持っててよ。あたしが吸いこんだら、タバコをあたしの口からはなして持っているの。そいであたしがまた「タバコ」って言ったら、あたしの口のところに当てがってくれるの」

「おやおや、これは厄介だな。よしきた、オ―ケー」

私は彼女の枕許に中腰で坐ったまま、彼女の指図通り、タバコを手にとったり、また口に当てがったりの繰り返しをつづけます。

まったくもって呆れた女、とお思になるかもしれませんが、実を言えばこれも私がその仕向けたようなもので、私はこれで満足なのですから、これでいいのです。

「郁ちゃん、矢沢君とは結婚する気なの？」

「うん、するかもしれないわ。だけど、家もないし、いろいろお金もいるでしょ」

「そうだな、家が問題だな。文化住宅とかマンションとか、いろいろあるけど……」

いっそ、矢沢君がここへ来て、この部屋で二人一緒に暮したらどうか――と、口の先まで出かけたのですが、一応ぐっとこらえました。私の打算がそこまで踏みきることを許さなかったのです。

矢沢と郁子と結婚して、この部屋で結婚生活営んだら、どうなるか。私にとってそれほど支障はありません。現に今でも矢沢はときどきやって来てはこの部屋で郁子と一緒に寝ています。私は、心の中ではホクホクと喜んで、二人のための用事を果たしてやっているのですから、その点においては異存はありません。

だが、その果ては、二人がこの家の主人になり、私がその下男になることは、わかりきっています。労働の上での主人と下男なら文句はありませんが、ことが経済問題に入ってきますと、私はそこまでハメをはずして満足していただけるかどうか。これはよく考えて行動しないと、去年の警察事件のようなことが再びおこらないともかぎりません。

「じゃアお休み」

と、次の間に下って床に入った私は、こうした理性と感情とのめまぐるしい交錯に頭の中がもやもやして、しばらくは眠ることも出来ずにいるのでした。

12

その五月。私たちの行く先に思いもかけぬ変化をあたえた、一つのアクシデントが突発しました。

それは郁子の母親の急死です。まだ五十をいくつか越えた程度の年令で、病気をしたわけでもなく、元気で暮していたそうですが、一夜、心臓麻痺でコロッと死んでしまったのです。

郁子の家は、前にも申しましたように、その母親と、キャバレーのホステスをしている姉の玉枝と、妹の郁子の三人暮しでしたが、郁子は私の店に住込みできていますし、姉の玉枝もまた、家へ帰ったり帰らなかったりというだらしない日常でしたようで、母親一人が台所で洗いものをしていたとき倒れて、そのまま死亡してしまったのだそうです。

頼りになる親戚もなく、「母死去」の知らせでオロオロしている郁子のために、しかたな

く私が郁子の家へ出向いて、葬式事務をしてやることになりました。

葬式といっても、近所の人が焼香にくる程度で簡単なものでしたが、そこで私は郁子の姉の玉枝と初めて会いました。その玉枝も郁子も、ここでは神妙に私の指図に従い、焼場でお骨にしたあと、二人で頭をさげて私に礼を言いました。葬儀屋の仲介で借りた貸衣裳の喪服でしたが、お化粧もおとした黒と白の地味ないでたちでも、一見、水商売の女という感じが身体にしみついているような印象を私は、玉枝から受けました。郁子と姉妹ですから、顔かたちも似ているところがありますし、背格好もちょうど同じくらいですが、郁子よりいいかなと思われたのは眼、郁子より劣ると思われたのは口もと。まあその程度の印象で、私はその玉枝のもとに郁子を残して店へ帰りました。

その翌日、別に忌引とかどうかという勤務規定ありませんので、郁子が店へ来てくれればよし、休むなら休むで仕方がないと思っていたのですが、昼すぎ、思いがけず郁子が姉の玉枝をつれて出勤してきました。

郁子は白いブラウスに赤いタータンチェックのミニスカート、その上に水色のカーディ

ガンという近代スタイルですが、玉枝の方は絵羽の羽織に着物は一越の萌黄地、大柄な花模様で、着付けも色街好みの派手な抜き襟にした、和服姿でした。髪型は、カールたくさんアップヘヤー、メーキャップもアイライン、アイシャドー、口紅と濃化粧で、終電車などでよく見かける、所謂ホステス・スタイルです。

一応、昨日の葬式の挨拶がすんだあと、ちょうど店に客もいましたので、私は玉枝を郁子と一緒に二階へあげて、玉枝の接待を郁子にまかせました。

ときどき郁子がおりてきて、紅茶とか、果物とか注文にきますが、姉妹で久しぶりにゆっくりしたのでしょうか、いろいろ話がはずんでいるようです。

夕方——「これから店へ出ますので……」
 といって、玉枝は帰ってゆきました。

「またどうぞ、お暇のときは遊びにきて下さい。どうせ客は時折入ってくる程度なんで、郁ちゃんも淋しがっていますから、話し相手にぜひどうぞ……」

などとお愛想を言って送り出したあと、私は郁子に大いに玉枝のことをほめあげておきました。

「とっても魅力があるなア、郁ちゃん以上だよ。姉さん、いくつ？」

「二十……七」

「まだ結婚してないの？」

「きのう、来てくれてわかってるでしょ。目下、夫はございません」

「目下……って、以前はあったの？」

「う、うん、あったのかもしれないけど、あたし、よくわかんない。二、三年前に別れちゃったんじゃないかしら」

わかってるのでしょうか、適当にごまかしています。ま、そんなことはどうでもいいでしょう。

「郁ちゃんからも誘って、また遊びにきてもらってくれよ」

「うん」

東京に親戚とて別にないようで、郁子は昼間一、二度、家の方へ帰ったりもしていましたが、初七日も三七日も省略で、また引続き店の二階で寝泊りしています。

郁子からの口添えもあったのでしよう、玉枝は店の出勤前に私の店へ遊びにきてくれました。

「玉枝さんのお店というのは、バー？ キャバレー？」

「キャバレーですよ。ロマンスって店」

「どこにあるの？」

「五反田の駅からちょっと……。ねええ、たまには、お遊びにきてちょうだいな、指名で……。ほほゝゝ」

「指名するにはなんて呼んだらいいの？ 君の名？」

「本名と同じ、玉枝よ。ほんとに来てくれる？ まあうれしい」

玉枝は横に坐っている私の腕に、オーバーなジェスチャーでしがみつきました。

別に玉枝が来てくれたお返しというわけでもありませんが、ある日の閉店後、私は大急ぎでタクシーに乗って五反田の「ロマンス」へ行きました。私の店は閉店後でも、ここまではまだゴールデン・タイムです。

「まあ、来てくれたの。うれしいわ」

振袖ほどに袖を長くした桃色の長襦袢に赤い伊達巻をしめた、いうなれば、お妾さんの寝巻姿とでもいいいたげな、これはまことに肉感的ですが、あまり品はよろしくないスタイルで、玉枝は私の前に現われました。キャバレーの趣向で「長襦袢サービス」なのだそうです。

「うれしいわ」

彼女は私の肩から首へ両手をまわし、胸元を私の胸に押しつけるようにして、ぎゅっと私を抱きしめました。私もそれに釣られて、思わず彼女の腰を抱いてしまいました。

さて、ビールが出、音楽が鳴りひびくムードの中に入っていますと「その節はご厄介をかけまして」などといった固い空気は一ぺんに消しとんでしまつて、肩に手をかけ、ねえあなた……といった小唄情緒になつてしまうのですから、まったくキャバレーなればこそその有難さです。

その夜、私はカクテルをあけたり、彼女とダンスを楽しんだりして、ラストまでねばつて家へ帰りました。

13

そうして私が「ロマンス」へ一、二回かよつた後のある日。お店への出勤前に私の喫茶店へ遊びに寄ってくれた玉枝が、六時出勤を「八時まではかまわないの」などといってぐずぐずしていましたが、八時近くなつて「きよう、あたし、お店休むわ」と言うのです。こっちはもとより歓迎するところで

「それはいい、郁ちゃんも喜ぶよ。じゃあ二階へ上つて少し休んでいてよ。九時前には閉

店するから、あとで三人で大いに飲もう」

というわけで、私は客のとだえるのを待つて大急ぎで閉店のドアを閉めました。それから二階で三人、卓をかこんでの「玉枝歓迎パーティー」となったのです。

郁子も喜んで、ビールなど相当飲んだようでしたが、そのうえ私がウイスキーを持出したので、郁子も玉枝もストレートで三、四杯は飲んだでしょうか。店とちがつて三人だけの遠慮のいらぬパーティなので、気がゆるんでいる点もあったでしょう、郁子も玉枝も少しロレッツがまわらないほど酔つてしまいました。

「ねえ、マスター、介抱してよ。あたし、酔っちゃったのよ」

郁子はさっきから私に何のかのと命令しつづけです。そのたびに私が気軽に立つて用をたしますので、玉枝の方もいささかそれに同調しているようです。

郁子の方はスカートがミニで、いつも足が出ていますから、そう目立ちませんが、玉枝の方は着物姿ですから、酔つて乱れて、裾からのぞく桃色の長襦袢と、その下のまっ赤なお腰は、まことに男の目をくらまします。

「ああ、あつい……。あたし、足袋ぬぐわ」

玉枝が足を斜めに出して足袋のこはぜに手をかけますが、酔っているので手もとがさだまりません。

「よし、よし、僕がぬがしてやろう。さ、足をこっちへ出して」

「あらア、マスターに脱がしてもらって、いいの？」

「いいのよ、姉ちゃん。あんた、足を出していたらいいの。マスターがちゃんとしてくれるから」

「あらア、すみません。はい……」

私の前に、膝をくずしてつきだしてきた玉枝の足から、私は丁寧に片足ずつ脱がしてやりました。

玉枝の素足の恰好も、郁子の足とよく似ていて、踵の上のくびれ、甲の厚さ、指の太さなど、まことに魅力のある肉づきです。

それに郁子より趣きがある……といいますが、この素足にからまる、まっ赤なお腰です。かつて私が郁子の、白いブラウスに赤いスカートでみた巫女の幻影を、私はまたここで玉枝の赤いお腰と、そこからのぞく白いふくらはぎから浮かびあがらせるのでした。

「姉ちゃん、ちょっと見ていて。この人、なんでもあたいの言うこと、きくんだから」

郁子は酔っている足をふらふらさせながら立ち上りました。

「さ、あたいの馬になれ」

私の坐っている側へきて、郁子は私を足でこづきます。

「おい、おい、姉さんのいる前で……」

「姉ちゃんも知ってるのよ。あたし、話したんだから。そしたら、一ぺん見たいって言うてたわ」

「えッ、そんなことも姉さんに話したのかい？ 供せいごっこを……」

玉枝も足を斜めになげだしたまま、両手をうしろについて身体をもたせかけながら

「聞いたわ。だから、一ぺん拝見したいと思ってたのよ」

と言うのです。これには閉口しました。しかし知っているなら仕方ありません。私は覚悟をきめました。

私は郁子の立っている横で、両手と両膝で四つ匍いになり、馬の姿勢をとりました。郁子は押入れをあけて、蒲団のすみにまるめてあったパンティストッキングをとり出しました。そしてそのまん中のところを、いきなり私にくわえさせ、両足の入るストッキングの部分に左右の手に持って、ドンと私の背中に

またがりました。

「はい、ドウ——」

郁子はまたがった太腿で私の脇腹をポンとこづきます。これが「歩け」の合図です。私は郁子を背中に乗せて、ノソノソと座敷を歩きはじめました。

「きれいで可愛い郁ちゃんは、マスターにまたがり、お馬のけいこ。はいしどうどう、はいドウドウ……」

郁子はいい加減の歌をうたいながら、パンティストッキングの手綱を右に引いたり、左に引いたりして、私を右へ左へと歩きまわらせます。

「あらア、すてき、すてき。いい眺めだわ」

玉枝もしどけなく裾を乱して、上と下の二人に拍手をおくります。

「ねえ、姉ちゃんも乗らない？ いい気分なのよ、お馬って……」

「あらいやだ。あたし、郁ちゃんほどおつきあいしてないのに」

「かまわないのよ。あたいが姉ちゃんも乗せろって言ったら、絶対よ」

郁子は手綱を引締めて私を止まらせ、またがった腰で私をぐっと踏んまえたまま

「おい、馬、姉ちゃんも乗せるか？」

口を締められた手綱で、私は声を出しかねていますと、郁子はおかまいなしに

「姉ちゃんにも乗ってもらうんだから、有難くヒーンと返事をおし」

と両足で私の脇腹をしめつけます。私は、彼女のまたがった腰で、私の服従のツボをおさえられているかのように

「ヒヒーン」

となきました。

「ほら、ネ。ハイって言うてるでしょ。さ、姉ちゃんよ」

郁子は私の背中からおりました。

「マスター、いいの？ あたしが乗ってもかまわない？」

「ヒヒーン」

私はいなき声とともに首をふってウン、ウンとうなずきました。

「じゃア、乗るわよ。あたしと郁ちゃんとどっちが重いかしら。あたしの方が重いかもしれないわよ。でも、よくって？」

「ヒヒーン」

「あら、これ、手綱？ うまいことしてあるのね。じゃア……」

玉枝は郁子から手綱をうけつぎ、郁子より少々しとやかですが、足をひろげて私の背中

にまたがりました。

乗られるときの感じは、郁子はドシンというドライな感じですが、玉枝の方はズシツとした、ややウェットの感じです。これはまあ郁子は洋装で、玉枝は和装の差なのでしょうが、私の横目にふれる乗り手の色彩がまた、白黒テレビとカラーテレビほどの違いです。

郁子の方は、素足のままという原始的な感じですが、玉枝の方は桃色の長襦袢にまっ赤なお腰、その下から柔らかな足先がのぞいていて、なんとなく笛の音か、鼓の音でもきこえてくるような、しっとりとした感覚です。

どっちがいいか……は、俄かに即断もできませんが、郁子の方はもう再三のことで、玉枝の方はきょう初めてなので、新鮮感玉枝の方が数段上です。

私は、ハレンチ女の郁子の馬にさせられたうえ、今またキャバレーのホステスのその姉の馬にさせられて、女二人の命ずるまま、ヨタヨタと匍いまわる自分自身の情けなさに、胸のうずくようなときめきを、感じるのです。

玉枝も、すでに郁子から私の性向など聞いていることでしょう。一ぺんまたがってしまったら、酔っているだけに、すぐ興にのって

きたようです。

「はい、ドウ、ドウ」

ストッキングの手綱を引きしめたり、うしろへ手をのばして私のお尻をピシャ、ピシャと叩いたり、私は二回も三回も座敷を廻らさせられました。

「ああ、重かった」

やっと解放されて、へたばる私に、玉枝の遠慮は、もうすっかりなくなっていました。

「二人のお馬になって、おなががすいたでしょ。あたしが人參、食べさせてやるわ。ええと、人參はないかしら。ないわね。このトマト、赤いから人參のかわりよ」

玉枝は料理のならんでいる茶卓の上に腰をのせて、トマトの小切りを一個とって、自分の足の指にはさみ

「ハイ、お食べ」

と、その足を私の方につきだしました。郁子は私の襟首をつかんで「姉ちゃんが食べさせてやるってサ。さあ、食べろ」

玉枝の足の下に私の首を持ってゆきます。

私は観念して玉枝の足先を口にふくみ、指の間からトマトをくわえとって、ムシヤムシヤと食べました。玉枝の足の指先がトマトのお

つゆで濡れています。私はさらに玉枝のその足指の間を、丁寧に一つ一つペロペロとなめて拭き取りました。むせたような塩っぱい味が私の舌の上にひろがります。そのうえ、ご念がいったことに、私はそばにあったハンカチを口でくわえて、再び玉枝の足先へ顔をよせ、なめたあとをきれいに拭いてやるのでした。自分から余計なことをするのですから、先方もいい気になるわけです。

「もう、いいったら」

いつまでも丁寧に拭いている私の顔を、彼女は足の指でポンと蹴りました。私は恐れいってうしろに下がり「どうもありがとうございます」

「しました」と平伏するというわけです。その晩は、玉枝もここに泊ることになりました。郁子の部屋に二人で一つ蒲団で寝て、私は次の間の三帖。これは郁子が矢沢と寝るいつもと同じ方式で、別に面倒はありませんが、二人とも酔っているだけに、次から次へと、私へいろいろの用事を命じるのには弱りました。

飲めない私は酔っていませんからいいようなものの、それでも彼女たちが眠るのを待って床に入った私は、まったく、た、たに疲れはててしまいました。

翌朝、起きてきた玉枝は

「きのうは酔っちゃって、ごめんなさいね。あたし、何をしたのか、全然おぼえていないのよ」

などと、恐縮した様子を私に見せてくれましたが、でも、よくしたもので、他人行儀の固苦しさは、まったくなくなっています。

しばらく郁子と二階で遊んでいましたが「きょう、美容院へ行くので、ちょっと早く出るわ。どうもありがとうございます。いろいろご馳走になっちゃって……」

午後、玉枝は昨夜とはうって変わった、しとやかな態度をとりつくろって、私の店から出てゆきました。

「ねえ、マスター。あんた、あたしの姉さんと、結婚しない？」

突然に郁子が私に話しかけます。

「え？ 結婚？」

私も思わず提案にびっくりしました。

「けさも、姉さんと話し合ったのよ。姉さんも、マスターさえいいって言ったら、結婚してもいいって言うの。そしたらサ。姉さんはこの家へ住むでしょ。そうすると、あたし

の家が、お母さんも死んじゃったし、まるっきり空くってわけよ。そうすれば、あたしと矢沢さんと結婚して、あの家へ住むってことになるよ、全部うまくゆくのだサ」

私は「うーん」とうなっていました。

「結婚か、……結婚ねえ……」

玉枝と結婚などとは、まったく考えていません。

あんな安キャバレーの女給で、土建屋のあんちゃんや、トラックの運転手に抱きついたり、キッスしたりしている、いわば浮気女の玉枝を私の妻に……。私がもしサラリーマンだったら、私の上司や同僚に「これが私の家内です」などと、まったくもって紹介できるような女ではありません。

「うーむ」と、二の句がつけずにいる私に郁子は

「マスターは姉さんが好きなんですよ。だったらいいじゃないの。商売の方も都合よくいくし」

「うーん、でもねえ。……結婚となると、こ

れは考えなきゃいけないからな」

郁子にとっては（マスターはあたしも好きだし、姉さんも好きなようだ。でもあたしには矢沢という恋人がいるので手が出ないが、

姉さんの方は誰という人もいない。もっともあんな水商売だし、別れたとはいえ以前、男と同棲したこともあるので、マスターにしても多少、考えるかもしれない。でもあの人はあたしの言うことは何でもきく。あたしが結婚しろと言ったら、結局承知するにちがいない」といったふうに考えていたようです。

しかし、いかに郁子の命令でも、結婚となると、これはちょっと問題が別です。

私の理性が求める妻は、前にも申しましたように「教養があつて、身だしなみよく、貞淑な妻」でなければいけません。いけないと思つてゐるのです。

しかし、私が三十八才の今日まで結婚しないでゐることは、理性では、教養があつて身だしなみのよい貞淑な妻を求めながら、感情

ではまったく相反して「教養が低くて、ふしだらで、不貞な妻」を求めていることが、徹うべくもない事実であるからなのです。

ふしだらな女にぶつかりますと、私の理性の上では、そのはしたなさに眉をひそめますが、さて蒲団の中に横たわってから閉じた私の臉にうつし出される映像は、そのふしだらな女の様々なふしだらな姿態なのです。始末におえません。名家の令嬢ジュリエットの純情よりも、タバコ工場の女工カルメンの奔放さに参つてしまふ私は、どうしても「理性の結婚」にふみきれなかったのです。

今でも同じことです。理性と感情はいつも相剋してゐるのです。ジキールたらんか、ハイドたらんか……なにも理性に遠慮することはないじゃないか。素直に感情に従つたらいいじゃないか。人生の幸福とは、自分の感情に素直に従うことから生まれるので、理論の

いじゃないか。人生の幸福とは、自分の感情に素直に従うことから生まれるので、理論の楼閣から生まれるものではない——。

とも思ひながら、いつも私は右にも左にも行き得ずに宙ぶらりんでゐるのです。

「そうだなア、一つ、考えとくよ」

私は郁子にどっちともとれる生返事をしてお茶をにぎしました。郁子も、そうなたら都合がいいと思つただけで別に即座に、はっきりした返事をもらおうとも思つていなかったのでしょう。話題はほかのことに移つてしまいました。その夜、床の中に入つた私は「馬鹿々々しい、誰があんな女と——」と思ひながらも、例の臉の映像は、玉枝がだらしなく裾をひろげて、べっとりとまといつく赤いものの間から、すんなりした素足をのばして、私の顔の上に蔽いかぶさつてくる光景で一ぱいになつてしまふのでした。こうして私の心の天秤は、理性と感情が相剋しながら、どうやらどっちへも傾かず、平均を保つてゐるようなものでしたが、どっちか一方にほんの僅かでも重みが加わると、天秤の針はたちまちどっちかに傾き崩れてしまふおそれが多分にありました。

(未完)

ハカット・春川ナミオ

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。

史実研究

切腹百年史

女性篇 (その七)

中 康 弘 通



「私説大奥残酷絵譚」

浪速伸浩・画

二〇、計数的に見た女腹切り再説

先ごろ女性の切腹について、計数的に調べたデータを記したが、そのついでに、やはり新聞記事から見た女腹切りを、他の角度から計数的に調べてみよう。

まず、切腹と一口にいうが、男でもなかなかむつかしいのに、女の身で本当に腹を切ったものかどうか、腹を切れるものかどうかともかく見出しに「切腹」と大げさにあって

も、よく読んでみると、刃ものを腹へ突き立てただけで、引き廻すことも出来なかった。というような話があるから、一応その辺から分類してみよう。

戦前

戦後

腹を切ったもの	戦前	戦後
腹を刺したもの	八五%	五四%
腹を貫いたもの	一二%	四六%
	三%	〇%

こんな数字が出た。先に用器で百分率をとってみたところ、戦後は日本刀が激減してい

るから、出刃包丁なんぞではなかなか整然たる切腹が出来るものでなく(例外もないではなく、出刃包丁で腹一文字にかき切った娘さんもあるが、珍しい)突き刺すのが精一杯というところかも知れない。

腹を切るのに、はらわたがあふれるほど切ったのが、戦前十七例から、戦後二例と激減しているのも、戦前は「切る」戦後は「突刺す」という傾向の差が出ているものと見てよいであろう。

筆者の知人に、最近ではテレビや映画で、武士が日本刀を腹へ突刺して簡単に死んで行く場面が多い。従って、女の人でも腹を突くくらいは出来るわ、と思い切りよく突刺すが、戦前と違って切腹の作法なんて知られていない時節がら、あとが続き幸い切腹未遂という結果になるのだ…… とう推論する人があ

る。面白い見方かも知れない。
三島由紀夫さんのように、「憂国」「人斬り」と二度までも、本当に男ならかくべきといわぬばかりの、凄烈でしかも作法になかった真一文字の割腹（あれはもう、形式的な切腹なんてもんじゃない）は、割腹というにふさわしい演技だった）は、映画でもなかなかお目にかかれぬ時世である。たしかに前掲、筆者の知人の言も一理あろう。

さて、「腹を切ったもの」の部類に入る側で、今度は「形式」で数字を見ると

	戦前	戦後
一文字	一四%	二〇%
十文字	一〇%	八%

あとは明記されていないが、多分、一文字に切ったか、少くとも切ろうと試みたものと思われるのである。
では、切創の長さの明記されているものを見ると、

戦前 戦後

	戦前	戦後
五寸以下	一九例	二例
五寸以上	一二例	五例

そこで、腹を切ったり刺したりだけで死に切れず「とどめ」を他の方法に依ったものを方法別にみると、未遂も含めて

	戦前	戦後
咽喉を突く	五四%	二〇%
胸を突く	一一%	二二%
頸を切る	九%	二〇%
縊首	九%	四%
手首を切る	〇%	一五%

主なものでこんな数字が出る。

昔の女性は、殊に武家では、女の身で腹を露わにする切腹よりも、咽喉を突く、胸（左乳下——心臓）を突く、あるいは頸動脈を断つ、という方法が多かったから、戦前はその伝統が残っていたように思え、腹を切ったのち手首を切る、というのは、戦後の新しい方法と見える。

次に動機別にみると、未遂、既遂を合わせ

	戦前	戦後
精神神経病症（含厭世）	三〇%	一八%
愛情問題	一二%	九%
心中（各種）	一二%	三六%

	戦前	戦後
病 苦	一〇%	一四%
不 明	一七%	一八%
その他	七%	二%

戦後の心中の増加はおおむね母子心中によるもので、一方、家庭不和の減少は、おしゃもじ族が若い世代に移ったこと、家族構成が核的に分裂したこと、また離婚を安易に考えるようになったことなどで、若妻の家庭不和による自殺が減少したことを示しているように思える。

二一、性質からみた女性の切腹

男まさりな切腹をする女性というのは、ずいぶん気象の勝った人だろうと思える。たしかにこんな例をみると、そうだといえる。

昭和四十一年の大晦日真夜なかずぎというか、昭和四十二年の元旦未明というか、ともかく零時四十分ごろ、九州のS市で里帰りしていた二女（二十四才）が、四女（十七才）と口論の末、つかみ合いのけんかになった。

母親が引き離れたのだが、興奮していた二女は、台所に下りて両手に刺身包丁と出刃包丁を提げて上がって来ようとする。

驚いた母親が、とめようとして腹に出刃包丁が刺さり、刃ものをとり上げようとした父親も腕を刺されながら、母親を抱え出して通りがかりの入院。

その間に二女は土間に坐って、出刃包丁を

今度は我とわが腹に突き刺し自殺をとげた。
この事件は頭痛の持病のある女性とて、日ごろから「死にたい」と口走っていたとはいうが、やはり勝気すぎたのではないかと思える。

四十二年の八月三十日夜、大阪市住吉区のアパートで内縁の夫を刺した、もとOL「二十四才」も、やはり勝気な女性の破綻といえなくもない。

同棲していながら外泊の多い男に不審を抱いて、戸籍を調べ既婚者と知った彼女は、口論の末、刃わたり五寸の切り出しナイフをみずから腹に突き刺して死のうとしたところ、男がとめたのもみあううち、男を刺してしまったというもの。自殺のつもりが傷害に発展した事件といえよう。

反対に、結核療養所で親しくなった男が他の女と親しくなったので、刺そうとして刺身包丁をふるい、もみあううち自分で自分の腹を突刺して絶命した娘さん（二十二才）も、勝気すぎた例かも知れない。

一方、三十八年九月十四日夜、九州S市の実家で床の中で刃わたり四寸余の出刃包丁を以て、腹を四〇五寸、四たび、かき切って死にきれず、首を三寸余り突き切って自殺した

三十一才の人妻などは、離婚成立後一カ月ほどで切腹してしまったについては「生理も重なって」とあるが、内攻的な性格の持主だったのではないかと思われる。

三十六年二月二十二日早朝、広島県下自宅納屋に入り、刺身包丁で腹を切って苦悶していた農家の娘さん（二十二才）は、あと旬日ばかりで結婚するはずのところ、ワキガの治らないのに悩んでいたというから、もう少し気を強く持てば、死には至らなかったのではあるまいかと思われる。

同じ年の三月十三日夜、京の春に叛いて伯父の家の仏前で、死なせて、と腹を切った女工さん（十七才）も同様である。

ある事情から勤めを休んでいたところ、母や兄に叱責され、刺身包丁を持ち出して伯父の家まで行き、まず入口で腹をひと突きしたのち「お仏壇の前で死なせて」と口走りながら、上がりこんで更に、胸や腹を突き刺して翌未明死亡したものである。

退職願を所持していた、というから、事情の深さを母や兄にもいいかねて、悩みに悩んだ末、さびしく自刃して果てた娘ごころがいたまれる。

気が強いのか弱いのか、一向につかまえて

ころはないが、南国乙女らしく何の弁解も遺言もなしに、サッパリと腹を切って死んだ、長崎県S市の旅館の女中さん（二十才）は、変わった事件であった。

三十六年の一月六日のことである。正月といえ書き入れどきの旅館で、十二月二十九日郷里熊本に帰ると称して休暇をとり、恋人宅に泊り、やっと五日に帰って来るなり同僚に叱られた彼女は、その夜、入り口にフスマを立てかけた離れのひと間で、セーターなどをたくしあげシュミーズ一枚の上から腹に出刃包丁を突き刺し、更に左手首の内がわを切り、舌までかみ切って、その夜半に絶命してしまった。

恋人といわれる青年は、深い関係はなく、動機もわからない、ただ別れぎわに「正月の忙しいとき無断で休んで申しわけない」といっていた、という。それだけのことでさう一つ割り切れない事件で、どんなものかと思われる。

第二次世界大戦中、もともと華々しい、切腹をとげた女性は、陸軍将校の夫人（四十八才）である。

夫人は、昭和十四年一月十九日、広島市の下宿先に於いて、紋服に身を正し、短刀を以て腹真一文字にかき切り、返す刀で頸動脈を

断って、あたかも古武士の最期を偲ばせる壮烈な最期をとげた。

殊にこの事件の原因は、夫君の所属部隊に失火事件があつて、その責めを夫君に代わつて負いたい、という気持ちと、同時に、夫君をして後顧の憂いならしめようという気持ちの合わさつたもので、皇国のために一命を捧げるという烈々たる精神が、この立派な最期を招いたものかと思える。

烈挙は新聞紙上だけでなく、婦人雑誌にも詳報され、また伝記も出版されたので、ご存知の方は少くないと思うが、ともかく夫人は当日の決行に備えて、絶食までしておられたという。その心がまえの見ごとは、嗟嘆のほかはない。

戦時下には、こうした壮烈な例があつた反面、やはり、ありふれた恋愛とか家庭不和とかの動機によるものもあつて、先に一度簡単に記したと思うが、昭和十八年六月二十四日北関東某県下で、許されぬ恋愛ゆえに、心中の目的で切腹した農家の娘（十九才）があるが、哀れである。

前夜家出して待ち合わせ、炭焼小屋に死に場所を選んだ彼女は、かねて互いに咽喉を突いて死ぬ予定だったのを、どうせ死ぬ身の、心ゆくまで腹かき切つて死にたい、といい出した。

用意の短刀は一とふりゆえ、まず女が腹を切り、絶命後に男が咽喉を突いて後を追うと決めたのだが、結局男は死に損じ、しばらく生きていたのでこの悲痛な事実が伝わったものらしい。

彼女は手拭いで巻いた短刀を両手で握り、左の腹へ切先を当ててしばし呼吸を整えたのち、腹に力を込めながらウムと突立て、一旦かがめた背すじを直ぐ立てなおすと、ギリギリ右へ引いた。

臍の辺りまで引くと、たえ切れず大きく呻いて、左手を床につき、刀を抜いた。

「しっかりしろ」と男がはげますと、宙を見つめて刀を取り直した彼女は、一度突き損じたのち、二度めに深く突き立て、呻きながら斜め右上へ引き切つたのち、左乳下へとどめを刺して絶命したという。

従つて、この実話からみると、

- (一) 臍から一寸ばかり下がって腹の左脇から正中線へ二寸余りの切創
- (二) 正中線上で更に少し下がったあたりを突き損じた刺傷
- (三) その右上から斜めに右脇腹へ四寸ばかりの切創

があり、いわゆる真一文字の切腹というものが、どんなに困難なことであるかが判る。

と同時に、許されぬ仲の情死とはいえ、さすがに「どうせ死ぬ身なら心ゆくまで腹かき

切つて死にたい」という最後の言葉に、当時の日本女性の心意気がうかがわれ、非常時局下に情死する罪をわびる心とも、また、日本人なら腹を切るほかはない、という気合いともとれて、悲壮をきわめている。しかも、それが、わずか十九才の娘と思えば、今どきのフーテン、ヒッピーの女性と思ひ合わせて、一層感慨ぶかいものがある。

いま一つ、昭和二十年三月二十八日早朝、千葉県下で、夫を戦陣に失つた、農家の主婦（二十五才）は、家庭不和に悩んで、野良着も襦袢もぬぎ、モンペの紐を腰骨の下あたりにしめると、刃わたり二尺の日本刃を、刃先三寸残して白布で巻き、麻ひもできっちりしめて、やはり是も、右上腹部を約二寸切つたが、引き廻し切れず、更に臍の真下一寸のところから右へ三寸ばかりかき切つた。

更に右脇腹へ突き刺したが死に切れず、咽喉を突いて絶命した。

家庭不和が原因とはいえ、この壮絶な最期ぶりは、やはり亡夫への追腹を切る意図もあったのではあるまいか。

是ら二例は、当時極度に逼迫した新聞紙面には載らなかつたが、研究家T氏のご厚意でその秘蔵の資料からここに摘記することが出来たのである。

告 白 小 説

被

の

虐

旅

(四)

由 利 美 千 子



カ ッ ト
神 戸 ・ 狂 四 郎

寝返りをしようとして、お尻の痛さに私は目をさました。腰痛のようなものではない。皮膚の痛みだった。

幼い日に日本舞踊を習い、中学から高校の頃は、休み休みながらバレエに精進した私の体は、足をなげ出して、爪先に顔がつくほど体を折りまげることが出来た。だから、彼に

無理なポーズで縛られても、筋肉の痛みは、そんなに感じないですむ。

しかし昨夜みたいに、肉の盛り上ったお尻を、太鼓にみたてて打たれては、さすがの私も皮膚がヒリヒリするのをどうしようもなかった。

パンティをはいているとすれて痛いので、私は無防備で宿の浴衣を着て眠った。

彼が襲っても当然のように思っていたし、私はそれを待っていたのかもしれない。

しかし、はじめから「友達でいこう」といった言葉にこだわっているのか、彼は接吻以上には進もうとしない。

もっとも、夜の寝床の中で襲わなくても、後手に縛った女を自分のものにしようと思えば、チャンスはいくらもあった。しかし、あえて彼は、それをしなかった。

「眠れないの？」

隣の寝床から彼が言った。

私が目をさましたのに気がついたらしい。

私は私から彼の寝床へもぐりこんでいきたい思いをおさえた。

縛っていじめられて……。私たちは恋人以上の深いつながりをもっているように思うのに、清潔に夜をあかそうとする彼を私はまだ

恋人とはよべないもどかしさがあった。

しかし恐かった。私は心の奥で彼の体が完全な男でないのを心配していたのかもしれない。

一つ部屋に二人で寝て、女を犯かさない男の秘密にふれたくなかった。深まってきている彼への愛情のためにも、彼から言い出さない以上、彼との交渉は自分から求めてはいけないのだと思った。

月が昇ったのか、欄間ごしに薄ぼんやりと光が洩れていた。

仰向けに寝ても、皮膚がすれなければ痛くはなかった。

「眠れなければ、睡眠剤をあげようか？」

彼が言うのに

「いいの。でも何故、先生が人をいじめることが好きになったのか話して下さない？」

私は言った。

「それは、いつか言う時があるだろう。ボクは過去の話をするのは好きじゃない。キミだっけきたくないだろう？」

「ええ」

「ボクもキミのことは知らない。知らない方がいいんだ。知ってしまうと縛ったり、縛られたりしにくくなるよ。さあ、おやすみ。へ

ネシーが残っていたろう。少しのむと眠れるよ」

彼は枕許のスタンドをつけると、寝床からはなれた。

そして、コップを洗って、ヘネシーのブランデーを少し注いで私の枕元へ持ってきてくれた。

私が起き上ってそれをのんでいる間、彼はトイレへ入っていた。

トイレから出て来た彼が、私の寝床へ入ってくるのではないかと、一瞬、期待と不安に私は体をかたくした。

しかし彼は、

「おやすみ」

と、自分の寝床へ入り、私に背を向けた。そして言った。

「あしたは、どうしても金沢へよるからね。覚悟しておくんだよ」

私の二の腕は、又しても逆さになでられたようにチリチリした。

何をしようというのだろう。

しかしそれは、もう不眠を誘う不安ではなかった。

(あした又、先生にいじめてもらえる) と思うことに安堵があった。

つまりそれは、彼が私を愛してくれているということなのだ。

私は静かに目をとじた。

私が目をさました時、欄間の光はもう朝の色に変わっていた。

風呂から上って朝の食卓に向かっても、彼は縄のことは忘れたようにふれなかった。

宿の丹前を服に着かえる時、スリッパまで着たところで彼の手が私の手首をとらえた。

私は思わずクスンと笑ってしまった。おいでなすった——と思ったのだ。

「笑ったね」

彼はジロツと私を見た。その目の光に私は身のすくむ思いがした。

それは、もうやさしい彼の目ではない。獲物をつかまえて、料理しようとする残忍な猟師の目だった。

彼は私の右の手首に細引をかけると、それを腰にまわして、手首を腰骨の所で固定させた。その上にスカートをはくように言った後

「さあ、これを着るんだ」

彼は、セーターをなげてよこした。

私は、片手のない人のように、彼に手伝ってもらって、彼が出してくれたセーターを着

た。片方の袖がブランとして、私は本当に自分の手がもがれてしまったようにゾーッとした。

すると彼はセーターの左の袖をたくしあげて、左手の手のさきから白いホータイをまき出した。私の左手は手のさきから、手首、二の腕まで、白いホータイにまかれ、腕には副木まであてられた。

彼は黒い三角布を私の首にかけて、ホータイをまかれた手をそれに通させた。

私の上半身は、もう縛られたのと同じように何一つ自分の意志では動かせなくなった。彼がその上からケープを着せてくれたのはまだしもだった。

宿の女中たちの前だけでも、私はホータイだらけのみじめな姿をさらさないですむ。

「ねえ、本当に金沢へよるの？」

車が走り出してから私は彼にきいた。

「ああ、成巽閣を見てなかったからね」

彼は言った。

「この恰好で？ ケープは着ていいんでしょね」

「ケープは宿の人にあやしまれないためさ。」

一と晩で片手がなくなり、大げさに負傷したとなると、うるさいだろう」

「じゃあ、ケープをとって歩くの？ 厭よ、そんなの……。ねえ、ホータイをとって……。片手を縛られているのは我慢するわ。でも、左手までこんな……」

「そうはいかないよ。キミはボクの囚人だろう。まさか後手に縛って、縄尻をとっても歩けないじゃないか。本当は、そう出来たらいいんだけどな」

「じゃあ、一昨日のように、ケープの中で縛ってよ。あなたのいう通りに、どこでもいくから……」

「それはもう実験済みで面白くないし、囚人に注文された形には出来ないんだよ。キミはだんだん図々しくなるね。よし、注文をつけた罰だ。もう一つ、おまけをつけてやろう」

彼は又、広い自動車道はずれて農家が散在する畠の中のこんもりした森へ向けて車を走らせた。鎮守の社なのだろうか、小さな祠をとりかこんで、大きな木が茂っていた。

車の入れられる所まで進んで彼は車をとめた。あたりに人影はなかった。

「お化粧してあげるから、こっちをおむき」
彼が言った。

「厭！」

私は顔をふせた。何をされるか恐かった。

彼は私の髪を手でつかんで引いた。手の不自由な私は、彼のするままに彼の方向へ顔を向けるより仕方ない。

「女丹下左膳にしてやろう」

「厭！ 厭！」

私は首をふろうとした。

しかし、髪の毛をしっかりと握られているのだから、首をふれば生えぎわの毛が引張られて痛いだけだった。

車のドアをあけて逃げ出したくても片手はスカートの下で腰にくくりつけられ、片手は副木まであてて、首から吊られていては自由にならなかった。

彼は左手で私の髪の毛を握り、右手で私の左の目に、ななめに肌色のバンソウ膏をはった。いつそんなものを用意してきたのか知らなかった。

「さあ、見てごらん」

彼は車の中のミラーへ私の顔がうつるように髪の毛をつかんだまま向けた。

彼は私のアイシャドーを目の上から頬にかけて、まるで青いアザのようにひろげてつけた。そしてその上に絆創膏がはられている。

こんな姿で人目の多い観光地を歩かせようというのか――。

ひどい……あんまり、ひどい……。

私は思った。

彼への愛情が失われる気さえした。
縛られて、責められていても彼を嫌いには
ならなかった。

しかし、こんなカタワのような姿にして、
見世物のようにつれていこうというのか――

あんまりだ。

「厭よ、もう厭よ」

私は言った。

「とうとう本音をはいたね、もうボクとつき
あうのはごめんだろう。ボクと来たことを後
悔しているんだろう。それでいいんだよ、あ
したは大阪だ。もう会わなければいい」

「もう会わないの？」

私は今感じた彼への憎しみはどこへやら急
に不安になった。

「これっきり会えないの？」

私は彼を愛し出していた。その思いにふと
影がさしたとはいえ、これっきり会えなくな
るなんて考えてもいなかった。

「しかしキミは、こんなひどい姿にしてと怒
っているんだろう」

「……」

「ボクは縄付の女をつれて歩くように、みじ

めな女の姿を衆人の目にさらして歩いてみた
いのだ。キミは、ボクの願いをかなえてくれ
ないんだろう。仕方ない、ボクは又、誰か探
すよ」

私の胸に嫉妬の火が通りすぎた。

「誰が……」といった彼の言葉が痛かった。

「行くわ、この姿で……。どこへでも……」

私は半分泣き出していた。

（好きになったからいけないんだ。仕方ない
んだ）

私は思った。

彼はニコツと笑って、私の唇に口づけして
くれた。

（私はやっぱり彼のとりこなんだ。人がどう
思おうと、彼に縛られておどらされる……。で
も仕方ない、彼が好きなんだから……）

私は私の不具のような恋に、その姿はふさ
わしいのかもしれないと思い出した。

車は再び広い道へ出て金沢へ向かった。

成翼閣は兼六園の南側にある。

駐車場で車をとめると、私は彼に促がされ
て坂道を登っていった。

片袖はブランとし片手は白いホータイも痛
々しく、黒い三角布で肩から吊られている。

顔半面のアザに、どうして私は顔をあげて

歩けるだろう。

囚人のようにうつむいて、よろめくヒール
をふみしめて歩いているのだ。

通りすがった人が振返っていく。

私の背中には羞恥で熱い板を背負っているよ
うに硬くなった。

「あんな姿で見物にこなくなつてよさそうな
ものなのに……」

同情よりも、あざける声がきこえる。

そうだ、それが囚人をつれているのと同じ
なのだろう。

もし、私が縄付きの囚人だったら、人々は
「あんな若いのに……」と同情とあざけりと

半々の目で私を縛る縄を見るだろう。

白いホータイは私の縄なのだ。

顔のアザは拷問の痕なのだ。

私は今断頭台へひかれていく罪人なのだ。
成翼閣の豪華な部屋や廊下は、私をよけい

みじめにみせるのに効果があった。

私は彼が促がすままに、その美しいたたず
まいを片目のはしに入れるだけで、終始おど
おどと、うつむき、針のムシロにいる思いで
観光客の好奇の目に耐えた。

一とまわりするのに、三十分とはかからな
い。

しかし、それは長い長い拷問のように、私を責め続けたのだ。

「ついでにもう一度、兼六園を散歩しよう」

彼が言った。

「ゆるして……おねがい」

私は歎願した。

公園と同じような兼六園の中は、成巽閣よりも人が多い。

「かんにんして……」

それは彼に一つ、借をつくることだった。

けれど、二人きりの所のなら、いくら苦しくてもいい、こんなむごいお茶番を続けるよりいい。

「仕方ない、車へ帰えろう」

彼は、さきへ立って駐車場へ向かった。

「怒ったの？」

私は後から小走りに彼のあとを追った。

通りすがりの人が振り返ったり、立止まったりして見ている。

私はハダカで歩く方がましだと思った。

恥かしい。

けれど、もし転んだら羞恥は輪をかける。

私は、ハイヒールのカカトの高さをうらんだ。かけ出したくてもかけ出せないのだ。彼はどんどん先へ行ってしまふ。

駐車場へつくまで、私の体は火の玉のようにほてりっ放しだった。

車は海岸にそって走って行った。

助手席に坐っていても、私の異様な顔はすれ違う車からも見えるのか、わざと徐行してのぞきこむようにして行く運転手もあった。

「ねえ、顔のパンソー膏をはずして下さらない？ そのかわり今晚、どんなことでもするわ」

「晩は晩だよ、何でもするなんていわれたら何にも出来ない」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「そんなに厭か？」

「だってみんながじろじろ見るんですもの」

「仕方ないさ。まだそれはメイクアップと同じだからとってくれなんていえるんだよ。本当にそんなめにあわしてやろうか」

「こんな……？」

「そうさ、青いアザが出来るほどなぐることで出て来るんだよ。キミは縛られたら、打たれても蹴られても、抵抗出来ないじゃないか。いつもそんな顔をしていなければならぬ。日がきたらどうする？」

彼は皮肉な微笑を向けた。

「うそ！ 先生はそんなことしない」

「ばかにみくびったもんだね」

「本当にしないわね。しないと約束してくれないと私、もう、縛られるの厭！」

「厭だといってもダメだってこと教えてあげようか」

彼は又車を広い道からそれて、別の道へ入れた。

県道か国道か知らないが、今まで通ってきた道は乗用車もトラックも通っていたが、その道は通りすぎる車もなく、人も通っていなかった。

土地の人は働いている時間だし観光客はそのあたりの小さな名所まで足をのばさないようだった。ましてウィークデーときている。

早春の陽がやわらかく曇り、まだ鉄もいれられていない田圃を照らしていた。

車は海へ近付いているようだったが、大きな松の木にかこまれた丘陵が見えていた。

彼はその丘に近付いて林の中へ車を取り入れると車をとめた。

彼は私の左手を通して三角布の結び目をほどこしてくれた。

私がほっとして手を下へおろした瞬間、私の胸には縄がまわされていた。

「キミが縛られるの厭だといっても、ボクは縛りたくなったら縛るんだよ」

彼はいった。

「厭よ、こんな所で……」

私はもがいたが、せまい車の中で、片手はすでに不自由な身で、どうせふせぎようもなかった。

彼は副木をあてた私の手を下へたらしたままの形で、胸から胴と、ぐるぐると縄をかけた。

「痛いわ」

副木ごとぎゅうぎゅうしめつけるのが痛かった。

「さあ、おりなさい」

彼はドアをあけた。

「人がくるわ、厭よ、こんな恰好で……」

「大丈夫だよ、人がきたらケープをかけてやる。さあ、おりるんだ」

それでも私がためらっていると、彼は自分からさきに外へ出て、私をひきずり出した。

靴がぬげて私はハダシだった。

「さあ、歩くんだ」

私はおそおすとあたりを見まわした。人影はなかった。私はそれでも人に見られたくないと思って、松の木の影へかけていった。

それは彼にとって思うつぼだった。

彼はケープをまるめて持っていたがその中に別の縄も用意してきたのだろう。私は松の木に縛りつけられてしまった。

（人が来たらどうしよう）

私は心配だった。

しかし彼は大胆だった。

「さあ、面白いことしてやろう」

彼は手品師のようにケープの中からハサミをとり出した。

「厭よ、顔を傷つけちゃいやよ」

私は身もだえた。しかし、それはただ松の木に体をこすりつけたにすぎなかった。

さっき彼は、メイクアップではなく、本当にアザをつけることが出来るといった。本当に丹下左膳のような傷をつけることも出来るのだ。

「厭！ おねがい！」

私は何とかして縄からのがれたいと必死に身をよじった。しかし、棒のように縛られた身で、木にくくりつけられているのだから、どうしようもない。

彼は裁ちバサミを、わざと私の顔に近付けた。

「厭……厭……」

私は首をふった。

彼はハサミをひらいて皮肉な笑いをうかべた。

（ああ、誰か来てくれないかしら？）

私はあたりを見まわした。

小鳥が枝から枝へとぶのが見えた。

遠く波の音がしていた。

（ああ、神さま……）

私は信者でもないのに、そんなつぶやきが体の奥から湧いてきた。

顔は女のいのちなのだ。

顔を傷付けられるなら、他のどんなことでも出来る。

彼は私の恐怖を冷たく見ていた。

「キミはボクの囚人なんだよ、ボクのいう通りになるね」

「なります。でも、顔を傷つけちゃいや！」

「どこを傷つけようと、ボクの勝手じゃないか。キミは囚人だろう」

私は返事をしなかった。「ええ」とうなずいて、そのハサミのさきで頬をつかれたらどうしようと思ったからだ。

「答えないんだね。答えないとこわいよ」
彼はいった。

「キミはボクのとりこなんだ。そうだろう」

私はうなずいた。そうするより仕方なかった。

「キミは囚人だ。今夜も又、痛い目をみるんだよ、いいね」

私は、だまってこっくりした。夜になってどんなにいじめられてもいい。早く縄をといて、この恐怖から解放して……。

「よし、じゃあ、ボクの囚人らしくしてやろう」

彼はハサミを近付けた。

私が思わず目をつぶると、彼は私のセーターの胸をジョッキジョッキと切った。

下に着ていたスリッパの紐も切りとった。

皮膚に刃物の冷たさを感じた時、私は二の腕がそう毛だつ思いがした。

ジョッキジョッキと彼はセーターを切りまくった。縄がかかっているからその間を切る時、まるで肌が切られそうにハサミがおしつけられた。そして縄にさえぎられ、切られたセーターはボロのように縄の間に残った。

私はそのボロをまといながら、だんだんに裸身にされていった。

丸い乳房がむき出しになった。

その乳房の上をきつく縛った縄の間に残っているセーターを切ろうとして、ハサミが乳

房に近付いた時、

「ああ……」

と、私は思わず声をたてた。

乳首を切り落とされそうな恐ろしさを感じたのだ。

「もうやめて！」

私は泣き声になっていた。

グミの実のような乳首は、キューツと硬くなった。チョキンと、もしそれを切り取られたら……。

「厭……厭……」

私はもう耐えられなかった。

ボロと縄をまとった身を、松の木にこすりつけてもがいた。

顔のアザはまだ消されていない。

どんなひどい拷問をうけているかのようにみえたらう。

彼は時々離れて、私のそんな姿を見ては又ハサミを近付ける。

私は乳首が痛くなるような気さえた。

本当には、何も痛いことをされていないのに、痛さに耐えるように私は疲れた。

「お願い……もう、やめて……」

それより言いようがなかった。

私はとうとうだらんと首を垂れて、まるで

気絶したように縄と松の木に身を支えられていようになった。

彼はやっとその姿に満足したのか、松の木へ縛りつけていた縄を切ってくれた。

「ああ……」

と、うずくまる私の肩にケープをかけ

「さあ、お立ち」

と私を立たせると私の縄を切り落とした。

私は裸身の上へケープをはおり、ほっとして、顔のバンソー膏を自分ではかした。

海の香が漂っていた。私はそれにはじめて気がついた。

○

海が見えたり見えなかったりする道を車は走り続けた。

途中でおそいお昼を食べた。

東尋坊へついたのはもう夕方だった。

能登の景色を見た目にも、柱のような岩の群れは新鮮な美しさを感じさせた。能登の大きな岩とは違い、まるで動物園の猿の島のような感じだったが、直立した岩の間に波が白く泡立っているのを、またいで岩から岩へ歩いていけるのが面白かった。

夕方の光が、興をそえていたのかもしれな

い。

私はやっと解放された子供のように、岩から岩へ渡っていった。

ドテラのままの観客と、これから宿へ行く客とで、能登よりも人が多かった。

人が多ければ、さすがの彼も私を縛ることが出来ない。

安心してながめたせいか、私は東尋坊が気に入った。自分からすすんで岩のかけでヌードを撮ってもらってもいいと思った。しかしそれすら無理なほど点々と人影があった。

「ここは又、今度一度こよう」

彼は言った。

（人がみんな帰えってしまって、夕方の残光がかすかにものの形をみせてくれる頃までねばっていたら何か傑作が生まれそうだけれどキミも疲れたろう。又、今度こよう」

彼は少し残念そうだった。

人気のなくなった岩影は、能登とは違った責めが出来るのだろう。柱のような岩は、そのまま仕置柱に出来る形の所もある。

岩と岩との間の海の水の入りこんでいる入江のような細い淵も、拷問の道具になるだろう。

誰もいなかったら……。

私は、いじめられてもいいと思った。

そして、おかしかった。

恋人同志が接吻や抱擁の場を求めるように彼の思いを私は反映して、責めの場を考えている。私は不死鳥のように、いじめられてもいいじめられても、まだいじめられ足りないと思う思いが湧き起こってくるらしい。

もしかしたら、彼が私を清潔なままにしておくのは、私の若い体がじれて、いじめられることにあとを引く効果をねらっているのだろうか……。

（でも、今夜はわからない）

と、私は思った。

今日泊れば、あしたはもう大阪である。

今夜は最後の夜なのだ。

「芦原温泉へ泊るかい？ それとも、もっと他へいくかい？」

「他ってどこ？」

「山代とか山中へ引きかえしても一時間半ぐらいでいけると思うけど……」

「芦原でいいわ」

「芦原は町の中で、男にはいいが情緒がないよ」

「でも、折角ここまで来たんだから、私、永平寺っていうのも見たいわ。近い所で泊った

らあしたの朝ゆっくり出られるでしょう」

「じゃあ、芦原にするか」

そして私達は、芦原の町を車でぐるぐると廻って、あれこれと、よさそうな旅館を探した。

何もいわなくても、二人とも今晚又、二人だけが知っている遊びをするのに、隣屋敷へ聞こえないような宿がいいと思っていた。

やがて私たちは一軒の旅館をえらんだ。駐車場があることが便利だった。

風呂は部屋についていた。それも私にとって有難かった。私の肌には、薄れてはいるがいろいろな痕があった。人目にさらしたくはなかったのだ。

彼は大きい風呂へ入るといって部屋を出ていった。

私は浴室の鏡へ自分の体をうつしてみた。

腕が紫と青の紋り染めのように、大きくアザになっていた。肌が白いからよけい目立つのかもしれない。乳の上も下も赤い痕がついている。同じようにかたく縛っているのに、腕が一番縄がくいこんでいたのだろう。縄で縛った痕なのに、まるで打たれた痕のように大きく広がっていた。

私は、そんな自分の体をいとおしむ。

浴槽に深々とつかると、今までの疲れは、一ぺんに消える思いだった。

(今夜こそ……)

私は期待と不安に溜息の出る気持だった。私は用意してきていた匂いのいい石ケンで体を丹念に洗った。

湯上りの私の体は花の香がしていた。

宿の料理はどこも同じようなものだった。

ビールをのんで私は少し上気した。

彼も珍しく目先を赤くしていた。

食事は、わりに早くすんだ。二人とも早く遊びにかかりたいと思っていたのかもしれない。

けれど二人とも思ったのは、私の間違いで、女中が食膳をさげ、寝床を二つ敷いて出て行ってしまうと彼は言った。

「最後の夜だ。静かに寝ようか」と――。

昼間は「今夜も痛い目をみるんだよ」と言っていたのに……。

「ボクはキミに無遠慮すぎたのと違う？ はじめて一緒に旅に出て、ボクはしたいことをした。キミが解放されたように東尋坊でたのしんでいる姿をみて、可哀想なことしたなと思ったんだよ」

「いいのよ。先生、私、いじめられてもいいの」

「いけない、やっぱりいけないよ。キミはまともな女として結婚しなければいけない人なんだ。今夜きり、もう会うのはよそう」

「厭！ 先生、そんな厭！」

「ボクはキミを不幸にするよ」

「いいの、先生のとりこにして！ 私を縛って……先生の囚人なのよ、私は……」

「しかし……」

「いいの、先生、今夜きりなんて厭！」

私は、自分から着ているものを、さっと、ぬいだ。

私は生まれたままの姿になった。

「先生、縛って……」

私は自分から彼の前で、手をうしろにまわした。

「後悔しないね」

彼はまだ念をおしている。

「いいのよ、何しても……」

手首にキリキリと縄がかかった。

「もっと強く……身動きも出来ないようにして……」

私は、あえいだ。

乳の上にも下にも縄がかけられた。

私の体の芯にジーンと走るものがあつた。私は、とうとうマゾヒストにされてしまったのだろうか――。

「もっと強く……」

私は私が恐かった。その恐さを忘れるには痛苦が必要だった。

紫色のアザをさらに濃くするように、二の腕にも二重三重と縄がかけられ、さらに又、縄は胸をまわされて、後手の結び目とかた一つにされた。私の上半身はピタッと固定され、肩から胸、腕、手首にかけて、鈍い痛みがおそってきた。

それでも私はまだ首を振ることもうつむくことも出来る。

「もっと動けないようにして……」

私は、しきりに首を動かした。

「よし」

彼はいうと、洋服ダンスからハンガーを二つ、もってきた。

二つのハンガーで私の首をしめ、別の細い紐でそれをくくりあわせた。

私は首かせをはめられたように、首を動かすことは出来なくなった。

けれど私はもっと一糲すら動けないように縛られたくなった。

私は彼のとりごととして、もう自分で自由に出来るものがないようにされたかった。そうされなければ不安な気がした。

「まだ動けるわ」

私は挑発するように脚を動かした。

彼は私を畳の上に転がして、両脚を別々に

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

首のハンガーに結びつけギューツと引いた。

私は後手に縛られた手を畳につけている形で体の他の部分が畳から浮くようになった。

後手が畳から浮けば、私は前かがみになっ

て首と足首を接近させられる。

しかし、彼は私を仰向けに転がしたまま、足首と首かせを一つにしようとするのだから無理である。

私は脚を宙にうかせ、膝を折り、股を開く

恥かしい姿にされた。

私は目をとじた。

自分で自分の姿を見まいとしたほど恥しかった。

私は出来るだけ股をとじようとした。

しかし、そのポーズで力をいれると、後手に縛られた手首に体重が全部かかるのが、とても痛かった。

私の息は、だんだん荒くなった。

「お望み通り、身動き出来ないだろう」

彼は言った。

「苦しいか」

私は答えられなかった。

手首が痛い。

「可哀想だから、股はとじてやるよ」

彼は太腿へも縄をかけ、一つに縛った。

股はとじられたが、無理してかけた縄が太股にくいこんだ。

私は横に倒れることも出来なかった。

ハンガーが邪魔をして、くずれおれるように、横向きに倒れてしまうことが出来ないのだ。

彼は、そんな私の姿を見ながら煙草に火をつけた。

私は捕えられた白い獣のように、ぐるぐる巻きのまま足を上に向けて転がされている。

「さあ、どうやって可愛がってやろうか」

彼は言った。

「タバコの火をつけちゃいやよ」

私は、それが彼を促すようになるとしてもいかなければならなかった。

彼が悠々とタバコを吸っているのが無気味だった。

すると、彼はタバコを灰皿でもみ消した。ほっとする私の足のうらを、彼の指がスーッと走った。

「あっ！」

私は思わず足をひっこめようとした。しかし、動かしようもなかった。

彼は片方のあしのうらを、同じようにくすぐった。

「あっ！」

又しても私は、あえいだ。

彼は私のあしのうらを交互に指でもてあそんだ。

「ああ……ああアア……」

私は動きようのない体をゆすって悲鳴をあげた。

彼は、やめようとしなかった。

「かんにんして……もうダメ……」

私は言った。

それは彼を刺戟するだけだった。

彼は私の脇の下へも指を動かした。

「どうだ。いい気持だろう」

彼はいう。

「ああ……ああアア……」

私はのどの奥をふるわせて身をよじるだけだ。

不意に彼は私の乳首に指をふれた。

「ああ！」

文字に書けば、ただ「ああ」とより書けないが、その言葉の音色は違う。

今度は彼は、指で私の脇の下をきつく圧した。

「あっ！」

又しても私は音色の違う声を発した。

彼は音楽師のようにその音色をためしてみているのだろうか。

私は縄に巻かれ、自ら望んだことなのに、彼の指に翻弄され、あえぎ続けていた。

大きな音もたらず、静かに私の責めは続けられている。

ただ、縄と、彼の指によって……。

あしたは、もう大阪だ。

あとは、どうなるのだろう。

しかし、そんなことを考える余裕はなかった。

私は彼の指の下であえぐだけだった。

あしのうらも、乳房も、わきの下も、もうどうなってしまったのか、肉体の一部でありながら、バラバラにされているように思われた。

「つらい……やめて……もうかんにん……」

私は泣き声で訴える。そして

「ああ……ああアア……」

と間奏曲のようにうめいた。

芦原の夜気が、私のうめき声を吸いとっていく。

遠くで三昧の音がしているのを、苦しさの中で私の耳はとらえていた。



私の夢想

美神 ゆかり 姫

絵と文 東京・赤ちゃん

ゆかりさんが、振り向いてニッコリ笑ってくれた。ゾクッと総身が慄えあがるような気持ちになる。すばらしい笑顔だ。兼のヤツはオカメもいいところなんていいやがる。パツキヤロウメ！ あんな美人がザラに居るものか。見る。スーツを脱いだあの肉体美を。ピチピチと音を立てそうな肌のハリを。兼のヤツは黒ブタだと吐かす。フザケルナッ！ そりゃあ雪白の肌とはオレも云わん。しかし、あの小麦色の艶々しさこそ「美」なんだ。

あの伸びやかな肢体のすばらしさは、オレをうっとりさせる。兼のヤツは……出てくるナッ！ 自分より大きいからって、女レスラ

ーか？ なんていうやつは絶交だ。ゆかりさんはオレの女神だ。憧れの美神なんだ。

そら、女神が歌を口ずさみながら近づいてきた。この世の人の声とは思えない素晴らしき声だ。……食用ガエル？ ブッコロスぞ！ 絶交だといっただろう、消えろッ！

ヘサイシヨはア、好きだとオ……。

どうだ。あの女神の玉声と、ふしに合わせたの玉体のクネリ具合。まさに天女だ。へおもわなかったアーン……。

ついに出了、ゆかりさんお得意の悩殺ポ！

ズ。おしまい。……たアーンに合わせてひと捻り、クルッと回ったあの腰の動きのなやましいと。

オレの、荒くなったこの血の騒ぎ、心臓の高鳴りがわかるだろう。ガクガクする膝、緊張しきった腕がしびれている。

へいいちどだアけお茶なんかア……。

お茶？ お茶じゃいやだ。お酒、女神のお酒、神酒をオネガイ！

へ飲んでほみたけどオ……。

ダメだよ、飲むのはボ、ボクだ。

へなアんとなく……。

冗談じゃない、誠心誠意ですウ。

へにイどが三度にイ、たび重ってエー……。

そう、なん度でも……。いやなん十度、な

百度でもおねがいたいと……。

へ好ウきになったのオ……。

感激ですウ。オレは、いやボクはその言葉を待ってたんです。素敵です、素晴らしいです

あなたのような女神が、飲ませることが好き

になったなんて……。

へタタタのタタッタア……。

どうして？ どうしてあなたの、いやオマ

エのことを、って歌ってくれないの？ そこ

に居るボクをどうしてくれるの？ 居るじゃ

ない、縛られたボクがサ……。早く降らし

て下さい。ネエ、ゆかり女神さまア。消えち

や駄目、ダメだよ。

創

作

紫の世界

三 条 剛

朝子は、和子への軽い平手打ちを加え、ピ
ンクのネグリジュエの胸元を押し広げ、こぼ
れ落ちそうな乳房を爪先で二、三発弾いた後
無難作に突き飛ばした。

「縛って」

倒れた身体を揺すりながら和子は叫んだ。

してね」

朝子が、彼女と二人きりである時、突然言
葉使いを優しくするのは、決まって荒々しい
欲望が燃え上がっている時なのだ。

朝子は、俗に言われるレスビ안의男役で
ある。しかし、普段は服装その他にしても、

露わになった見事な乳房が揺れるの
を、黙って朝子は見詰めていた。

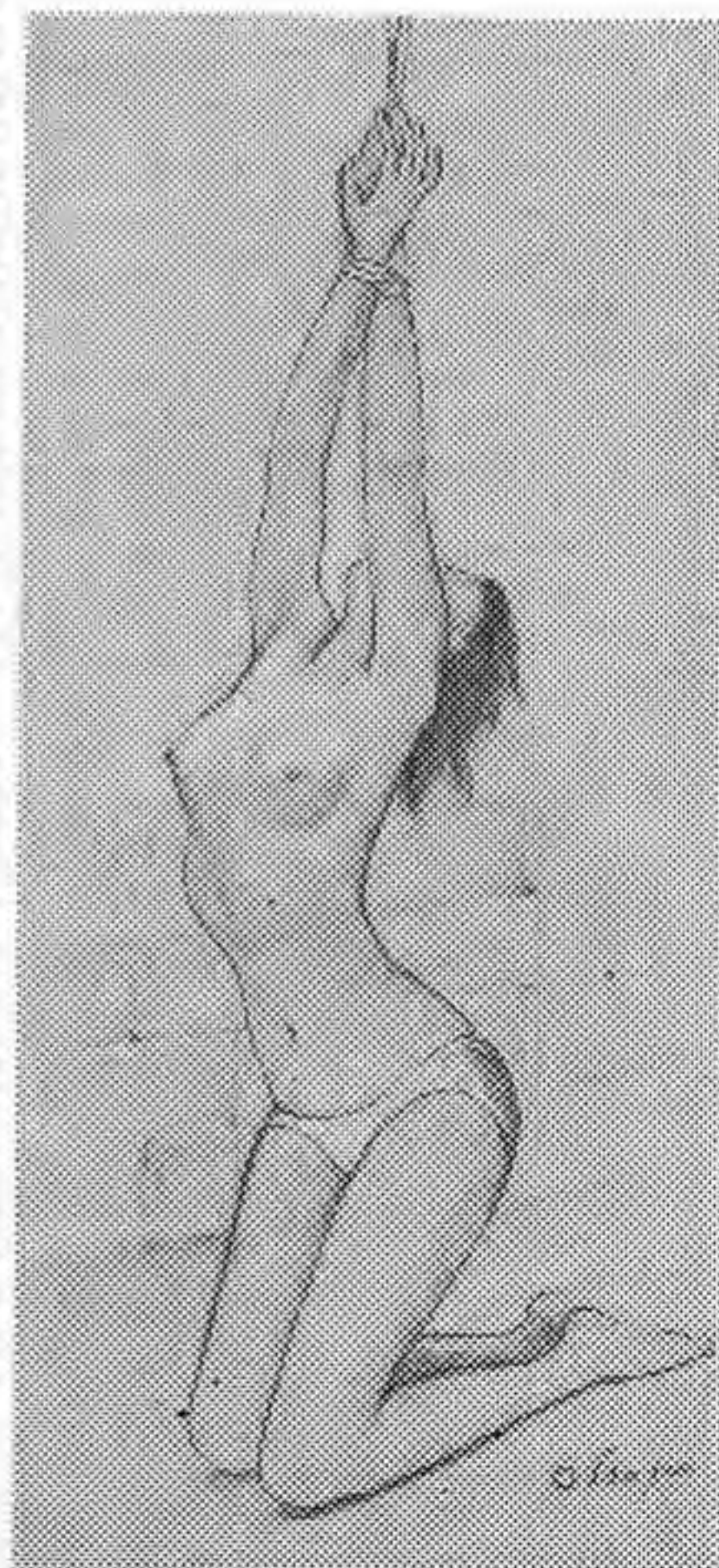
「縛って頂戴」

紅い唇を半ば開いて悶える和子。

「お願い。責めて……軽蔑して……」

懲罰を求める和子の叫びに甘えが
ある。

「両腕を頭の上に廻して土下座しな
さい。額を絨氈にこすりつける様に



カット・室井亜砂路

完全に女性の型を崩さず、可愛いタイプを、
演出している。ただ、女性を見射る目付きに
異様な輝きを持っているだけである。

「わかってるだろうね、和子」

和子の身体が小刻みに震えているのは、朝
子が恐ろしいからではない。これから始まる
うとする仕置きを想い、いいようのない期待
の故なのである。

朝子はベッドに投げ出してある黒のバッグ
を取り寄せ、その中から二本の輪ゴムを摘み
出すと、一本を口に銜え、一本を、頭の後に
交差している和子の両手の親指に引っ掛け、
幾重にも巻き付けてゆく。

土下座している和子の頭を膝で押さえつけ
る様にして、両手指を束ねて輪ゴムを掛け終

わると、一旦膝を外して、土下座している姿勢を前の方に崩させ、白い足首を掴むと無雑作に後へ引き出し、その親指にも輪ゴムを巻き付け始めたのだった。

物慣れた手付きには、物体へのいたわり等と云うものは微塵も無く、全く幾何学的に幾重にも巻き付けて、ゴムの伸びの限界で手を放すやり方である。

僅か二本の小さな輪ゴムであるが、これにかなり厳しい、拘束具に早変わりしたことになる。

「御感想は如何が——。和子奥様」

「はい、嬉しいです。でも、少しくついわ」

「それ位が丁度良いのよね、奥様には」

「あー止めて、その奥様と云うのは」

それに答えず、和子の甘えを振り切る様に

「顔を上げて御覧」

と、朝子は言った。

ゆっくりと緩慢な動作で和子が身を起こした。長い黒髪が汗ばんだ餅肌に絡み付き、両腕を首の後で交差している為、当然、脇が無防備に晒され、女の体臭が鼻につく。

「正座——」

厳しい朝子の声に、和子はびくっとした表情で乱れた膝頭を整える。

「黙想——」

叩きつけるような、朝子の調教用の言葉が飛び出す。

和子はネグリジェの乱れを直す事も出来ず正座したままじっと身を固くする。ネグリジェの下は薄いナイロンのパンティー一枚だけである。

昨夜、和子は夫の激しい責めプレイに身を悶え、まんじりともせぬ内に朝を迎え慌しく出勤して行った夫と入れ代わりの様に、朝子の来訪を受けたのである。

朝子の方は、市内にカメラ店兼スタジオを三軒受け持ち、その内の一つで、コマーシャルフォートを徹夜の強行軍で仕上げて、すぐその足でMGを駆使してやって来たのだ。

朝子は、和子の夫、武の妹なのである。つまり義妹とのレズ関係ということになるが、朝子とのプレイは夫の了解済みなのである。

朝子は武と異父母兄弟であるが、結婚前、一度武の留守に訪ねて来た和子を、朝子が戯れに誘った時、受身型の和子は、容易に朝子の策謀に乗ってしまったのである。その時以来、二人には特別な秘密を抱く者同志の連帯感が芽生え、今日迄その関係が引き続いてい

るのである。

和子が自からのマゾ性を自覚したのは、夫からの度重なる調教によるものであったが、その芽を完全に咲かせたものは、朝子の飼育に他ならなかった。

夫のそれは夫婦間のものとして取り入れられる、SMPの世界感であり、飽く迄、和合の刺激剤であり、かつ愛情への期待に繋がるものである。が、朝子のそれは完全な支配者と、被支配者との関係で、朝子の傍に居る限り、和子は徹底的に、精神的肉体的加虐を甘んじて受け、その苦痛の中から随嬉の涙を流す女奴隷に成り切る事であった。直接的な快楽への期待感、朝子との関係では全く事務的に処理されるのが常であり、絶無であるとも云えた。

和子の肌は、俗に餅肌と呼ばれるのである。日頃から縄目を受け、ムチの雨を受けて肉体を酷使しているにも関わらず、そうした傷跡は少も目立たず、むしろ何も無かったかの様に、プレイの後には水々しく、生き生きとして来るのである。

和子は激しく肉体を責められ、強い屈辱に身を責め苛まれる時、最も美しく、最も可愛く見えて来る、デビルの如き女といえる素質

があり、武も朝子も共に一人の女、和子と、形を変えてこそいるが、押さえようも無い感情で愛しているのであった。

「女奴隷の服装規定を云ってごらん」

朝子の眉が引きつった様に上がり、声がヒステリックにカン高くなる。

和子は黙想のまま顔を上げ、一語一語噛みしめながら言い出す。

一、私ことと和子は、朝子様の女奴隷として、絶対の服従を誓います。

一、奴隷和子は常に糸纏わぬまま、朝子様の命令に忠実に仕えます。

一、命令に逆らった場合には、如何なる懲罰でも、お受け致します。

一、女奴隷和子は服従規定を三唱した後は、

その日一日を奴隷日として、朝子様を始めとして、その他、朝子様の全ての御友達にも服従致します。

女奴隷　和子

和子が服従規定を三唱している間に、朝子はコーヒを沸かしに行っていた。

「今、ムチ打ちの目覚ましを掛けて上げるから、其処で立って待っていなさい」

朝子の、まるで冗談とも本気ともつかない口調に、和子はビクツとした。

「昨夜は随分派手にやった様ね、まるでベッドルームが目茶苦茶じゃないの。幾ら手足がしびれていたって、シーツ位きちんとして置くものよ。これじゃ、あたしが寝れないじゃないの。徹夜続きなのよ、ここんところ」

「あつ、すみません。手さえ自由だったら、私片付けますのに……」

「駄目よ、貴女は其処に居なさい。私の命令のある迄は、一步も動いてはいけないわよ」

「でも……」

「お黙り、さっきも言ったでしょう。徹夜で神経が疲れて居るのだから、余り逆らうと、その分じゃ済まないわヨ」

「わかりました、朝子様。あのオ、チーズとバターは、冷蔵庫じゃなくて、ベッドのキャビネットの上に有りますから」

「もう黙りなさい。今度声を立てると、猿轡を噛ますわ。脅かしじゃなくてよ！」

朝子の語気が、鋭く和子の胸に突き刺さった。本気でやり兼ねない調子なのだ。USA製で皮製のゴム球付きの拘束具だ。一度冗談でそれを装填された時、余りの苦しさに泣き出した事さえある。

それだけは嫌だと、和子は怖れた。虐められるムードより、実用オンリーで融通性の無

い拘束具だけはたまらないと確かに思った。しかし、反面、朝子を怒らせて無理矢理にゴム球を口に銜えさせられてみたい衝動が、心のどこかで起こる自身に気が付いていた。

だが、強いて逆らわなかった。何故だかわからない。唯、昨夜来の疲れか、今頃になって鈍痛が五体に広がって行くのを、気だるい感覚で受け止めていたのが作用しているようだった。

「どう、貴女も奴隷生活に少しは慣れた？」

「……」

「こうしてベッドから、命令通りになっている貴女を見つめていると、仕事で、ムシヤクシヤが、嘘みたいに抜けて行くようよ」

「……」

「そうやって、黙っている無抵抗の貴女に、私はたまらなく愛を感じるのよ。こまめに立ち働く必要なんかは全然ないの。いわゆる人間臭さが有ってはいけないのよ。貴女はね、縛られて、ムチ打たれて、屈辱的なポーズを取らされて、それでいて人間的であってほらないのよ、わかる？」

朝子の手が、昨夜夫が用いた皮製のムチを壁から取り上げ、二、三度空を切ってしごいて見せた後、右手にムチを、左手にコーヒ

カップを持ち、和子の傍に立った。

「自分の惨めな姿を誰か、他の人に見られた
と思う？」

朝子はムチの先で和子の顎を掬い上げながら言った。コーヒーカップの底が和子の眼前にあった。和子はムチにのぞけりながら、自分の言葉を探していた。

「私はネエー、一度貴女を他人の前へ引き出して、それこそ、徹底的にぶちのめしてみたいのよ。又、他人に責められる貴女の姿を、ベッドで寝ながら、ゆっくりと観戦してみた
いなあって思うんだけど」

唇をコーヒードで濡らしたまま、朝子が抑揚の無い調子で言った。

和子は、朝子なら本当に実行しかねないと思った。今更反抗出来ない身であるだけに、返事をするのもどかしく、唯、黙って朝子の次の言葉を待っていた。

朝子が突然、カン高い声で笑った。渴き切った感情を押し殺した笑いであった。同時にヒュー、ヒューとムチが空を切る。

朝子が振るムチ捌きは、夫のそれと違って狙いが適確であった。ムチ先だけがピシッと目標点に決まるのだ。それだけに一瞬の痛みは厳しい。とたんに、和子のじーんと背中を

走るマゾの血は、押さえようもなく燃えて来るのだった。

ネグリジェの裾が乱れ、ムチに絡み付く様にして舞い上る。

脇から入った一発で、和子の身が鈍く横転し、両の手と足が奇妙に振れて、不恰好な姿をさらけ出した。親指が千切れるかと思う程の激痛で、和子は思わず呻いた。涙が頬をよぎった。そこへ又、ムチの雨が降り注いだ。

和子の顔を覆い隠す様にしている腕の一方にムチが炸裂し、思わず洩れるのは、グエツというような奇妙な悲鳴だった。だが、のたうつ和子にとっては、狂おしい限りの苦痛の中での悦びがあるのだった。他に譬え様も無いマゾ女の性というべきだろうか。

夫のムチ打ちとの決定的な違いは、その振り込みの強弱もさる事ながら、気迫がまるで異なるのだ。朝子の激しさ、巧みさ、見事さに比べたら、夫のそれは、全くお遊びの域を一步も出ぬものである。

夫のムチは時間をかけ、ネチネチと肌を弄るようにして打ち、良く言えば優しさ、悪く取れば生ぬるさが目立つのだ。しかし、夫のムチ打ちが、飽くまで、その後に来るものを誘い出すためであるだけに手加減するのは当

然ともいえた。

「ノビた真似をしてもダメよ、私はまだ物足り無いのだから……」

「いいえ。私、大丈夫です。もっともっとお気の済む迄お打ち下さい。和子はそれが嬉しいのです。どうか、このネグリジェを脱がせて下さい。和子は素肌へのムチ打ちの方が好きです。ネグリジェなんか……」

ネグリジェのあちこちに裂け目が出来、上半身の方へ捲れ上っていた。

「そうね、ネグリジェやパンティを身に着けた奴隷はみつともないわね。それじゃ、お望み通りにしてあげようよ。うっかりして居たわね。私、奴隷の奥様が露出性マゾヒストである事を忘れるなんて」

「あー、もっと言って。もっと沢山、虐める言葉を言って……」

「ムチ打ちだけじゃ、物足りないのは困ったことね。でも精神的マゾヒストとしての奥様でもあるのだから仕方が無いワ」

「お願い……。もっと目茶苦茶に縛って、もっともっと辱かしめて下さい。妾は朝子様の女奴隷です。イヤ……早く打ってエ……」

「止めなさい。和子、私は貴女の希望を叶えてやる為にやって来ているのじゃないのッ！

私の好きな様にするだけよ」

「は、はい、わかりました。おっしゃる通りです。でも、あア……早く虐めて……」

和子は、言葉を求めた。激しい屈辱の言葉を、唾を、ムチを、縛めを、又、あの大嫌いな猿轡でもよかった。とにかく、燃え上がって来るマゾの血が踊る場所を求めている。

「妾は、朝子様の女奴隷です……」

そう言っている和子の目は、焦点の定まらぬ空を見詰めている。

朝子はチョッと、小さく舌打ちし、和子の独白を物憂いな表情で聞いていたが、

「立ちなさい。和子、立つのよ！」

と言って、ふざまな恰好の和子の脇腹を、足先でこじり上げるように蹴りつけた。

「はい……」

和子が両手両足をゴム輪で縛られたままの状態で、全身をいも虫の様にモゾモゾ動かし、立ち上がろうと腕くのを、強く朝子の足が踏みつけた。

「早く、立ちなさい」

「あア、堪忍して……、立えないわ」

「何を言っているの。出来なきゃ、何度でも努力して立つのよ」

立ち上がるには、まず腰を据えねばならな

い。起き上がろうと片肘ついて、腹に力を込めた。上半身が浮き上がった。

その胸元を朝子の足が蹴り飛ばした。

「ゲェッ！」

「さア、立ち上がるのよ」

朝子のムチが空を切って、和子の内腿へピシッと命中した。和子はバツタの様に全身を痙攣させ、腕き苦しむ。

紅いムチ跡がさつと一筋、白肌に咲いた。

朝子の足が、歪む和子の顔に掛かった。鼻を押しつぶし、踵が口をこじ開ける。

「アアッ、ムウッー」

「昨日、何故、私の呼び出しに応じなかったの、わざわざこちらから電話をしたのに」

「アアッ、ウー」

「実家の明子姉さんが来ていたからって言いたいのでしょう。けれどそうは言わせないわよ、私と明子姉さんとどちらが大切な人か、わかってはいるはずだわ。許せないワヨ」

朝子の口と足が巧みに和子を責める。

腕き廻り、汗と涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、和子は、悶えている自分が愛しく、哀れでならなかった。が、朝子を恨む気持は毛頭、ありはしなかった。唯、涙の中で自分が悦びの中に咽んでいるのだと、言い聞かせ

ていたのである。

「明子姉さんに、夜、電話で訊いてみると、何でもない事だったって言ってたわ。無理をきかせれば良いのよ、そんな時にはねエ」

本当は家業の事業に必要な、五十万の回転資金の調達に困り果てて、和子を訪ねて来た明子だったのだ。朝子に一言、言えば、簡単に解決する問題であったが、明子も和子の立場を氣遣って、何も言わなかったのに違いはない。

「折角昼の奴隷タイムが取れると思って、二度も電話したのに、和子ったら、二度目には留守だったじゃない。どう言う事？ それ」

朝子は、ムチの柄で乳首の上を小突く。

「一緒に買物に出掛けたのです」

和子は、やっとの思いで言った。

「どうせそんな事だろうとは思っていたけれど、これから私の電話があった時は、絶対、私の都合に合わせることを。わかって！」

「はい、わかりました、朝子様」

「よし、それでは立ってついて来なさい」

朝子がショートカットの髪にヘアバンドを掛けながら、バスルームの方へ行くのを見て、和子はポーツと頬を染めた。

そこでは決まって流腸をされるか朝子の神

酒を顔に浴びせられるのだ。朝子のバスルーム行きは、いつもその二つの内のどちらかが伴うのである。

和子はヨロヨロしながら立ち上がった。

指にはもう感覚がなく、動くとき切れるような痛み思わず呻いた。内腿のムチの跡が薄く腫れ上がっているが、痛みは無く、ただ熱っぽい。

「早く、来なさいっているでしょう」

朝子の苛立った声が飛んできた。

早く、と気は急ぐのだが、足の親指同志をゴム輪で交差されている為、歩く事は殆ど不可能な状態で、兎の様に、跳ねるだけであるが、ベッドからバスルーム迄には、ルームチエアーやテーブル等が、所狭しと並べられているので思うに任せず、目の前にあるルームスタンドのコードに足を引っ掛け、スタンドごとその場に引っ繰り返った。

「何やっているのよ！ これ以上、怒らすと後が大変よ」

シャワーの線を捻ったらしく、バスルームの中から水しぶきが上って見えた。

朝子はバスルームの中で、シャワーを一定に固定して湯水を出しっぱなしにした後で、さっさとパントロンスーツを脱ぎ捨て黒一色

のファンデーション姿を覗かせた。

小麦色の引き締まった身体つきは少年のような固さがある。学生時代に乗馬をやっていただけあって、多少外股ではあるが、二本の肢体はスラリと伸び切り、きゅっと括れたウエストラインは正に女のそれである事を表している。

小柄な割には胸も張り、黒のブラジャーから溢れるような隆起を覗かせている。朝子は確かに少年らしい顔立ちと肉の引き締り方ではあるが、女以外の何者でもなかった。

「和子……」

「はい」

「今から十数える内にバスルームへ来なかったら、乳首責めをするわよ！」

「でも、無理です、そんな事……」

「乳首責めが受けたいと言うのね」

「あアーン、それだけはゴメン」

体をくの字にして跪きながら、和子が鼻声を鳴らす。

「じゃ、早く来ることね、昨日の分と二日分の責めを、して上げるから。貴女って可愛い女よ。さあ、いい子だから立ちしなさい」

朝子は今日、徹底的に虐めるに違いない。

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ……。どう

したの？」

朝子の教え方からして、どうしても乳首責めをする肚なのだと和子は悟った。

「命令に背くつもり？」

答えている暇は無かった。和子は、やっとの思いで立ち上がり、二、三步進んだ所で、十を数え切った朝子の、勝ち誇ったような笑い声がバスルームにこだました。

「お願い、堪忍して。これで精一杯なの。ネお許し下さい。輪ゴムが痛くて、もう限界だわ。指が千切れそうなの、許して……」

和子は本気で泣きつきたい思いであった。

笑いが止んだとたん、バスルームから朝子が飛び出して来て、和子の右の乳房を振り上げた。

「あ……堪忍して。妾が悪うございました」

本能的に、詫びの言葉が口について出る和子だった。しかし、それを無視した朝子の手が、緩やかに大きく、弱く、強く、和子の胸元で乱舞し始めた。それは後に行なう乳房責めへの備えでもあった。

和子はもう詫びはしなかった。その責めを期待して目を閉じた。一瞬バランスを失い、ふらりと倒れ掛かるのを、朝子が受け止め、軽々と和子の身を抱き上げていた。

もともと、朝子はカメラ操作の為、かなりの重量の物を担ぎ上げる力があつたのだが、少ないとは云え、成人した女の重さを抱き上げるのは、大変な負担になるはずであつたが朝子は足元を乱しめせず、悠々と和子をバスルームの仕置場へ運んでいったのである。

広くもないバスルームの片隅にトイレが併設されており、花模様のカバーが縁を色どつていたが、その上に和子は坐らせられた。

両腕は頭上に引き上げられ、シャワーの取っ手から引き降ろした銀のクサリに縛られ、吊るされた形である。

朝子は高々と上がった両腕の腋下をしげしげと見詰めていった。

「武つて変な人ね、どうして手入れさせないのかしら。わからないわ、こんな気持。ネ、貴女はどう思っているの？」

「いやッ。そんなに見ないで頂戴」

「貴女さえ良かったら、私が手入れしてあげようか。ここにカミソリもあることだし……」

「許して。お願い。彼、きつととっても怒るわ。この前、妾がうっかりエバクリームで処理してしまつたら、大変だったもの」

「でもやりたいなあー」

「お願い、後生だから、堪忍して……」
「仕様が無いなァ、せつかくカミソリがあるのに……」

と言って、ミラノの下の安全カミソリに手を伸ばした。朝子は、和子のネグリジェとパンティをそのカミソリで剃いであつたつもりなのだ。

「恐いわ。肌を切らないでね、お願い」

「いちいちうるさいぞ、和子奥様」

「でも……」

「でももへちまもないの。黙っていないと本当に肉を切り取ってしまうわよ、いいこと。じつとして居ないと痛いから」

朝子の手が機械的にさささと動き、たちどころにネグリジェの方が取り除かれた。最後迄手首の辺りで絡み付いていた布切れがパタリと落ちると、残りは薄いナイロンパンティ一枚である。

「さあ、動いちゃダメよ。本当に危いから」

朝子は人差し指でゴム紐を引っ掛け、グイーと力を入れて引っばつたが、一気にカミソリを当てず、一度、二度と引いたり戻したりして、和子へのいたづら続ける。その度に和子は身体中を熱くさせた。

「厭、止めてよ、お願いだから」

和子は挑発的な声を出した。薄目を開け、朝子の表情を窺っている。

「早く、ひと思いに切り取ってえ……」

和子の鼻声は妙に生々しい艶があつた。プツンと云う鈍い音がした。ついにゴム紐が切られ、ザクザクとカミソリの刃がパンティを切り裂き始めた。

朝子は、女性のヌードは仕事上でも慣れていたが、こんな方法のお面白さを初めて知つた。それは情事に溺れる男の心理に共通するものではないかと朝子は思った。

和子は一瞬消え入りそうな声を立て、上歯で下唇を噛みながら、言葉にならない音を響かせていた。

ズタズタの布切れと化したパンティを荒々しい手付きで取り払われた和子は、両手を頭上に吊るされ、妖しい女体の美を朝子の眼前に晒け出していた。豊かな胸が激しく上下に弾み、赤味を帯びた愛らしい両の乳房に、朝子は何か自分が女であることのどうにもならない苛立ちを感じていた。

「厭！ 厭ヨッ」

朝子の気配を察して、和子が媚を含んだ声で言った。

「独りにしないで。……さあ、虐めて。好き

な様に賜りものにして頂戴」

和子の声が浮わずつていた。自己懲罰の調子が消えていた。

適当に豊かな肉付き。女盛りを思わすボリニームは人妻の持つそれ以上の艶があり、肩の丸みや、両腕から指先きに迄走る曲線は、やせ過ぎの女にないふくらみを持ち、きゅっと括れたウエストあたりの引き締まり方は肥り過ぎで無い事を物語り、適度な張りを持った、若々しいニンフの如き裸像であった。

むせ返る様な湯気の立ちこめる中で、和子は紅い唇を震わせながら喘いでいた。

朝子は、自分のショートカットの髪から二本のヘアースピンを抜き取り、しばらく掌の中で遊ばせた後、一本を口に銜え、他の一本で和子の無防備な形で豊かな実りをさらけ出している乳房を、チクチクと刺し始めた。

乳房の周りに円を描くようにして突く、乳房責めが始まったのだ。

「あっ！ ウッ！」

甘い和子の声が唇から洩れる。

乳房を回り、軌道を外したヘアースピンが時々伸びきった腋の下を容赦なく突きまくる。

「イッ！ あっ！ 厭」

和子の腰が思わず浮き上がる。すると朝子

の足が待っていたように、太腿を踏みつけるようにして、トイレカバーの上へ押し戻す。

執拗に続くヘアースピンの攻撃は、だんだん円周の大きさを縮めてゆき、輪の大きさが乳頭を中心とした僅かばかりの円になった時、ピンを横に倒して、乳頭をはじき上げる。

「あっ！ もう、狂いそう……」

「フン、喜んでばかりいちゃ、お門違いよ」

朝子は和子の顎を掴んで厳しく言った。

「何でもいいわ。どんな事されてもいい。好きなように虐めて……」

「ほえずらいでもないからネエ」

「ううん、かまわないの」

和子は、激しく首を振った。

朝子は、突き立てていたピンの先端を少し開き、いきなり和子の乳頭を挟みつけた。

「ヒィ！ 痛い……」

「一人前の声なんか出したって、今更、私は知らないわよ」

朝子は冷たく言い放った。

ヘアースピンのパネは、かなり強いものである。柔らかく感じ易い乳頭にピンを挟まれると、如何にも痛いのかは朝子自身も知っていた。

「嬉しいですか？ 和子奥様」

「あっ、痛い！ いいえ、嬉しいです」

「無理言って、このオー」

と言って朝子は、乳頭を挟んでいるピンの端を指で強く閉じ合わせた。

「ヒィッ！」

和子の悲鳴が、ひときわ高く響いた。

「嬉しいのだね？ 和子奥様」

乳頭を強く挟み付けたまま、そのピンをグルグル回転させた。

「ヒェッ！ 堪忍、堪忍して……」

泣き声である。

「嬉しいんだろう？ 和子」

かさにかかった朝子の声。

「ハ、ハイ嬉しいです。……ああ、堪忍」

頭上に交差して鎖に縛られている両手の指が、むなしげに空を掴む。

「嬉しいのだろう？ それじゃ、なぜ堪忍してって言うのよ」

朝子の責めは肉体への苦痛を与えると同時に、言葉でも相手を屈服させるやり方なのである。これでは否応無く朝子のペースに巻き込まれてゆくのは全く仕方の無いことだ。

「もっと、優しく虐めて、お願い……」

「お気の毒様。和子の注文通りにする程、私は甘くないからネ」

朝子はもう一本のピンを手にすると、挟み付けられたままの乳頭の真中を容赦なく突きまくり始めた。

瞳を凝らして単調な責めを繰り返している朝子の表情には、責めることにだけ溺れきったような、風を弄ぶ牝猫の眼があった。

「ウツ、クックウ……」

和子は泣く事が恥ずかしい事だとは思わなかった。頬を一筋二筋伝わって流れる涙に、喜びの証しを見る思いで感じとっていた。

「和子の弱虫、いくじなし」

「ごめんなさい、私……」

「そんなに涙を流して私を責めるんなら、始めから頼まなきゃいいのよ」

「許して。妾、いつになっても弱虫ね」

和子は無理に作り笑いをしたが、涙で朝子の顔がぼやけて見えた。

朝子は乳頭を突き刺し続けていたヘアープインで、もう一方の乳頭も挟みつけた。和子は両腕を頭上に吊るされ無防備な乳房に二本のヘアピンが装飾された姿になった訳である。

和子をそのままにしておいて、朝子は身に着けているファンデーションを脱ぎ、湯舟に身を沈めた。

昨夜来の疲れが湯に誘い出されたのか、手

足を伸ばし軽く目を閉じると、ふっと予期せぬ睡魔に襲われ、スーッと五体の力が湯舟の底に沈んで行く様な錯覚に陥った。

ウトウトとして、はっと気付いて目を凝らすと、眼前に、女奴隷和子の惨めな姿があった。

否、湯気の中での和子のポーズは、惨めと言う言葉は当たらない。むしろ、首垂れた被虐の裸身は、女の朝子さえ嫉妬を覚える程の美しさであった。

朝子は、武が憎いと思った。こんな美しい愛玩動物をわが物として、その気になれば全く自由に弄ぶ事の出来る武がむしろに恨めしくもあった。

睡魔と戦って苛立っている内に、朝子には和子を優しく労わる気持より、激しく虐めぬくサドの血潮がふつふつとしてたぎって来るのを押えようも無かった。自分が並みのサディストでない事を、尖鋭な感覚で意識していた。

「和子ー」

「はい」

首垂れていた和子が、ビクンとしたように目を開け、小さく答えた。

「和子。どちらを愛しているの？」

「えっ？」

和子には、朝子の言おうとしている事がはっきりわからなかった。

「武と、私と、どちらの方が余計に好きかって訊いているのよ」

和子は、とっさに言葉を失った。

「夫より私の方が好きなのだネエ。……好きだ、愛しているってハッキリ言ってごらん」

朝子の強引な誘導に和子は途惑った。

朝子を愛し、好きなのは違いなかったが、

夫も又、和子は深く愛していた。武は彼女に普通の状態では、寛大な良き夫であった。

父親譲りの森建設は衰運だったが、三十を過ぎたばかりの身でありながら、彼は三代目として見事に再建し、社内外共に、俊才としての手腕を示したが、家庭運に恵まれなかった武には、和子の所だけが文字通り憩いの場であった。

表向きには、和子の存在は日陰の妻のそれであったが、武の帰巢はこのマンション以外には無かったし、親類縁者からは未承認ではあっても、武は和子を妻と呼んでくれた。

朝子への愛は確かに隠しようも無いものであるが、だからと言って、武の存在を無視する事の出来ない和子であった。いってみれば

二人共に同時に愛している不可思議な女であった。

「和子は確かに朝子様を愛しています。確かに……でも、夫も強く愛しています」

せつなげに和子は言った。

「正直ねえ、貴女って。……わかっているわよそんなこと。和子が、どう仕様もない人だってこと、よくわかったワ」

「すみません、我俣ばかり言って……」

「いいのよ、止めなさい。謝る事なんて無いわ。何だか、私、自分に腹がたって来たワ」

——こんな時には、和子を虐めるに限る——

「和子。私だけが暖まって貴女はそのままっ
ているのは可愛想だから、貴女にも暖かいシ
ャワーを浴びさせてあげる」

と言って、朝子は無雑作に湯舟から出て来た時、和子は本能的に身をきゅっと萎縮させた。

予感通りであった。

朝子は、和子の手首を拘束していた銀の鎖をガチャガチャ云わせながら取り外し、親指に輪ゴムを付けたまま、再び頭の後に手をやらせ、トイレから腰を浮かさせ、一步前へ引張ってタイルの上に正座させた。

和子の前には朝子が、仁王立ちの状態で立

って居るばかりであった。

「目を瞑って大きく胸を反らしなさい」

和子は命じられるまま、乳房を上へ突き出すポーズを取った。

「顔をもっと上げて。あア、早く！」

サーッと生温かいしぶきが飛んだ。

額から目、鼻、口に勢いよく小つぶの雨が

降り注ぎ、和子は思わずむせ込んだ。

スペシャルシャワーの洗礼の儀式は、気だるい思いで縛られていた和子の身に、強烈なパンチで活を入れた。

「唾を吐いたら承知しないよ」

朝子が、たたみかける様にして言った。

和子は、じっと口元のしずくが落ちるのを堪えていたが、やがてたまらなくなって、息をつくようにして振り払おうとした。朝子がその瞬間、和子の乳頭に挟まっているヘアピンの端を捻り上げた。

「ウッーイッーたい……」

思わず呻いた時、汗に似た苦味が、舌先を刺激した。

「どう、スペシャルシャワーの感想は？」

「はい、とても結構な……」

「結構な？ 何よそれ」

「……」

「アッハハハ……」

朝子は掌を腰に当てたまま男の子のように笑った。和子の額から一筋、さーっと残滴が走って、目に入った。和子は首を振り、目を瞬いて堪えようとしたが、かなりのつらさであった。しかし、和子は黙ってうつ向いたまま正座して居た。

とっぜん朝子の足がニューッと持ち上げられ、和子の顎をしゃくった。

「足を洗って頂戴」

と言って、和子の口元を突く。

「はい、和子は御足を洗わせて頂きます」

和子は、いつもの口調で言った。

こうしたことは、何も今、初めてのことではなく、いつも和子の舌で行なわれるのが常であった。

どの様な朝子への奉仕も和子の舌で行なわれるのだ。朝子と一緒にバスルームに入る時余程の事が無い限り、和子は手錠を掛けられるか、ロープで縛られているかのどちらかであったからである。

「指を一本ずつ、丁寧によ」

朝子は湯舟の縁に尻を乗せ、膝を組んで和子を待った。

「歯を立てちゃ駄目よ」

朝子の命令が続く。

返事しようとした途端、和子の糸切歯が朝子の指を軽く噛んだ。

「痛いーっ」

朝子が大げさに顔を顰める。

「お許し下さい。和子が悪うございました」
「当たり前よ。洗いながら口答えしようとするからよ。洗うなら洗う。話すなら話すと、どちらか一つに、決めて置かないといけないの」

「分かりました、今度から気を付けます」

「きつとよ、もう一度こんな事が有ったらカミソリを使う事よ、分かって！」

「はい、きつとお守り致します。ですから」
それだけは、武の為にも守らねばと和子は思った。

朝子の足は細くすんなりとしてはいるが、健康的な小麦色の艶のあるものである。石鹼を使っていないのに球のように水をはじく。その素足に、和子は奉仕を重ねた。心をこめて和子は朝子の足を舐め続けた。そうする事が彼女自身の役目でもあり、それが欲びと成っている自分に気付いていた。和子の奉仕が足の指から脹ら脛へ移り、膝を越えようとした時。

「もういいわよ」

と朝子が言った。心なしか朝子の表情に上気したように紅味が差していた。

朝子は同姓の一人の女が、それも自分より年上の女が、命令されたとは言え、唯、ひたすら自分の為尽し、いたぶりを甘受している姿に、むしろようにいじらしくてたまらなくなつて居たのだ。

本来のサドの冷血はこの様な場合に遭遇すると、ひとたまりも無く崩壊してしまい、単なる女の感情になり下がって来るのを、どう解釈してよいかわからない思いであつた。

——朝子は和子が可愛い——

と思つていた。決して失つてはならないヒトと、心秘かに呟いていた。

ふつと、この世に、和子のような女が他に居るのだろうか疑問が湧いて来るのだ。

朝子はこれ迄、幾人と無く同性の女と関係を持ち、虐めもしてみた。金に糸目を付けず漁色をする度に、後には言い様もないむなしさが残るだけであつた。

そんな中であつて、マゾの化身であるような和子を知つた。この和子のような女こそ、もう二度と再び巡り合えないタイプの女であろうと朝子は思つた。それだけに、知らぬ間

に一瞬、一瞬が過ぎて行く時間と云うものが疎ましくさえもあつた。

この世に現在と云うものはない。有るのは過去と未来だけだと朝子は思つた。未来を喰ひ潰すのは愚かな過去の集積だ。

朝子は立ち込める湯気の中で、しだいに意識が霞んで来るのがわかつた。目の前が急に真っ暗になり、焦点の絞れない瞳孔に赤と黄の虹がよぎつた。次の瞬間、朝子は和子の方へゆっくり倒れ掛かつていた。

「朝子さァーん」

和子の叫ぶ声が、遠くになり近くになりして聞こえている。耳鳴りのような音が間断なく朝子の脳裏に去来した。

気が付いてみると、真っ青な顔をした和子が朝子を支えて居た。胸の当たりが押し潰されたような痛みが走つた。

和子の脇が朝子の胸を突き上げるようにして持ちこたえて居たのである。

「和子、……私、どうかしたの？」

「朝子さん、今、貴女、貧血で倒れたのよ。きつと、疲れているのだわ。徹夜でお仕事なさつた後、お食事もせずバスルームに長く居たものだから」

「私が倒れた？　そう、そうなの」

意識は確かだ。和子の言う通りだと思い当たった。和子を責めていた自分が和子の前で倒れるなんて……と、朝子は舌打ちに似た気持で、心配そうな和子の顔を見返していた。

その顔に、ようやく血の気が戻って来た。

「みっともないザマを見せちゃったわね」

「いいえ。そんな事よりこの縛めを解いて下さい。手当てをして差し上げますから」

「いいのよ。もういいの、本当よ」

と明るく朝子は笑ったが、その顔が、妙にひきつっている様に和子には思えた。

「大丈夫？ 又、倒れちゃったら大変よ。心配だわ」

「もういいの。貴女に迷惑は掛けないわ。こんな所で女が独りで死んだりなんかしたら、大変な猟奇的事件になるからね。それに私って昔から心臓は丈夫なのよ」

「でも、少し涼しい所で休んでないと……」

「軽い目まい位で大袈裟に言わないでよ。いと云ったらいいのよ。それより今度は私が和子の背中を流して上げるわ」

朝子の表情に、ゆとりが戻っていた。

「私の事ならいつでもいいんです。それに輪ゴムさえ外して頂けたら、自分のことぐらい致しますから」

「じゃ、輪ゴムだけは外して上げるわ、今のお礼よ。でも鎖で繋いで置くわよ、和子を蒸し上げにしてやるから」。

「いやーん、そんなのないわ、もう許して」

「泣き声を出しても知らないから」

それでも嬉しそうに和子は、朝子に輪ゴムのはめられた親指を差し出した。

締めつけられていた親指は、紫色に腫れ上ってさえた。輪ゴムを急に抜き取ると激痛を伴うので、ゆっくりゆっくりと、一輪ずつ

回転させながら抜き取り、指先にマッサージを施してやる朝子であった。

朝子が手足の拘束を解き終わると、和子は思いきり、自由になった手足を屈伸させてみた。ポキポキと関節が異様な音を立てる。

それが自由の音なのだと和子は思った。

ロマン派的マゾヒスト和子にも自由の有難さが骨身にしみて感じられた。虐められる事を喜びとするマゾヒストにも、自由の欲びを無視する事は出来ない。むしろ自由を保障されているからこそそのプレイなのだ。

しかし、つかの間の自由も朝子の異常なまでの執着心により無残にも奪いとられ、再び銀の鎖に両の手を縛られ、壁の上のルームライトの横に設置されてある、金属性の器具に

引っ掛けられ、朝子はその端をグイと引き絞ると、和子は完全に両腕を頭上に交差した立ち縛りの裸身を晒け出していた。

「ああ、和子、もう恥ずかしいわ」

「何が恥かしいものですか、散々今迄悦んでいたくせに」

朝子の冗舌にも逆らって和子は身体をくねらせ、出来るだけ背を見せるようにしてポーズを整えようとした。

「ちよつと向こうで休んで来るから貴女はそのままにして居るのよ、少しでも動いたら後が恐いわよ」

「ひどい人……」

「何とでも言いなさい。所詮、貴女は私の女奴隷なのだからネ」

「ああ。それ、言わないで」

「どうして？ 女奴隷って嫌や？」

「ううん。でもその言葉だけで燃える事、知ってるくせに！」

和子が朝子から言葉で責められるだけで燃え上がると云う事を意識して言ったのだ。

朝子は軽い投げキッスをする、さつとバスルームから抜け出していった。開け放たれたドアの透き間からスーッと、冷たい風が吹き込んで来た。その新鮮な冷たさに和子の

火照った身体がかすかに震えた。

快い震えに違いなかった。

和子は、いつの頃か、こうした被虐の世界の虜になった自分自身を振り返っていた。

この様な積極的な責め苦を甘受する性癖の女になったのは、勿論、武や朝子の飼育に依ることには違いないが、全くこの世界への芽ばえが、それ以前に無かったとは云えない。

和子自身、子供の頃から遊びの中ではいつも虐められっ子になっていたのだ。男の子からも、女の意地悪な子からも、和子は仕置きを受ける羽目に立たされるのが常だった。子供時代のそうした一コマ一コマが想起されてくる。

勿論、縛りの厳しさや屈辱性は、今と比べようもないが、多勢の子から引き廻しの刑を宣告され、町内を引きずり廻されたり、放課後学校の講堂の片端の小屋での牢屋生活を強いられたり等の、和子を主体とした遊びが種々に行なわれたのだ。

子供達はいっしょか、和子がそうした哀れな役柄を喜々として受け入れているのだと云う事を意識しだし、時には和子を奇異な眼差しで見る事があった。よく和子と一緒に虐められる子の役をする女の子の一人が、和子の事

を、

「好きな子やねエ、和ちゃんは」

と他の子に言っているのを聞いた時、恥ずかしさで一杯になり、その後は家から一步も出ず、家人を大いに困らせた思い出等が強烈な残像として、和子の胸奥に生きている。

二人の姉や家人達は、今もなお、和子は氣立ての優しい良い娘としての評価を変えていないが、和子はそんな女なのであった。

生来のマゾヒストであるか否かは、別として、子供の頃からの和子自身の性格は、どのような事でも他人を傷つける心など、微塵も無く、ただ自分以外の人の為に役立つ事なら、素直にそれを受け入れる許容範囲の大きい性質の娘であった事は事実である。

姉二人も優しい人達である。他に先掛けて利を追うタイプとは程遠く、常に姉妹が労わり合って生きて来たのだ。しいて言えば、和子がその中で一番おとなしく従順な娘で有った。

例え、話が割れて言い争いになっても、和子は事の良い悪いは別として、自分を引き下げて相手の立場を尊ぶタイプである。今でも和子の事を氣立ての優しい娘だと言うのも、けだし嘘では無かった。

和子のそうした生来の性格に、武と朝子の調教が加わり、和子の本来の持味にマゾヒストの芽を植え付けられ、今では言いようの無い世界に嬉々として生きる女に変身したともいえるのだろう。それが和子にとって、倅であるかどうかは別としても、それぞれ武や朝子が倅ならば、これ以上の幸福は無いと心から思う和子であった。

朝子の呼ぶ声で和子は、はっとして身を縮めた。バスルームの中で吊るされながら、うつらうつらとしばし仮眠を取っていたのだ。「呆れた人ねえ、こんな姿で眠れるなんて」「あっそうじゃないのよ、ちよつと考えごとをしている内に、良い気分になってしまったものだから。……冷やかさないで頂戴」

「素裸で吊るされていて、考えごとしたり、いい気分になれるの？ 私じゃどう考えても和子の気持は理解出来ないなあ。マゾヒストってのは、大器の人物になるのかしら？ 余裕があるのね、心の持ち方に……」

「そんな事言わないで。唯、湯気に当てられてボートとして居たものだからなの」「そうかなあ。そんなことって、又、何か夢想してたんじゃないの。きっと自分を誰かに置き変えてみて、うっとりしていたんでし

よう」

「厭！」

「図星でしょう。夢の中で美しい姫になって何処かへさらわれ、責められている事でも空想して居たのだな、きつと」

朝子の口元が笑いを浮かべ、和子の表情を覗き込む様にして言った。

和子は、もう何も答えなかった。朝子に何の弁解も通じるものではない。唯、素直に従うしか方法が無いのである。

「さっぱりした気分になったところで、今度は和子を洗って上げるわ」

「いいのよ、私……」

「いいからいいから。私の気持よ、それを無視する権限は貴女にないわよ。すると云ったらしますからね」

朝子のやりそうな事だ。女が女を洗うと云う事に不思議はないが、単なる流しをするのではない。朝子流の洗い方があるのだ。

シャワーを取ると、朝子は和子の全身を洗い流し始めたが、突然にシャワーの勢いをかなり強いものにする。

どどっと、熱い湯が鋭針のように肌に突き刺さる。痛さと熱さの感覚が同時に降り注ぐので、和子は声もろくに立てられない。

「あっ……うっ……」

と呻くばかりだ。

朝子は尚も容赦なくシャワーの雨を、肩や乳房に降りかける。その都度、和子は朝子に背を向けようと努める。体の前面より背部の方が刺激に強いからだ。

しかし、そうはさせじと、朝子の手が肩を掴んでグイッと前向きにさせ、シャワーの筒先を遠くから当てたり、近くに寄せてみたりして和子の反応を楽しむのだ。返り湯が朝子の身に激しく突き刺さるのだが、いっさい構わず続ける。時にはシャワーを噴水のように逆上げを試みる。これが和子にはたまらない苦痛の一つである。水の勢いが相当に強いので当たり具合によって飛び上がらんばかりの痛さもあり、瞬間、方向を変えると、その痛覚が奇妙なシビレに変化する。朝子はホース責めのコツを知っているのだ。それでなくては、この責めは長続き出来ない。

和子が蚊の鳴く様な声で呻吟した。

「うっ……うっ……」

それが合図であるかのように、朝子の手がシャワーを止めた。

「御気分は如何かしら？ 和子奥様」

朝子が、濡れた和子の額に絡み付いている

髪を掬い上げながら訊いた。

「……………」

和子は声が無かった。

「和子……。シャワーのお仕置は、これでおしまいよ」

朝子が耳許で囁くように言った。

「ああ。耳を噛んで頂戴」

「おや、又、私に奉仕させるつもり？」

「あっ。いえ、そんなんじゃないんです」

和子の頬にポーツと赤味が射し、吊るされた両腕の中へ顔を隠す様にして言った。朝子は和子の耳たぶを軽く噛みながら、両の手を和子の胸へ背後から廻し、ヘアピンを挟み付けるようにして握りしめる。和子はまさに失神寸前の状態であった。朝子の熱く、荒い息吹きが、強く弱く噛まれる耳たぶの鈍い痛覚と相まって、和子は次第に夢の世界に運ばれていった。朝子の、耳許での痛烈な責め言葉に和子は酔いしびれる、脇腹辺りに、軽い平手打ちが加えられる。そのいずれもが和子の気を遠くする。蹴き、呻き、泣き叫んでも、両手の自由は効かず、逃がれるすが失われている。その中で和子は、責めを求め、縄目を求め、ムチを希求し、いつ迄も奴隷でありたいと願っているのだった。

カット・志羽利也



M女圭子に謝す

井上雅人

……六月号読后感……

「奇ク」六月号のSMカメラ・ハント「孤独から遁れて」を楽しく読ませて頂いた。今回辻村氏の愛の対象となったモデル嬢は、四月号の奇クサロンで「SMプレイへの反省」を書かれた伊藤圭子さんであったが、夢にまで見たSMプレイを無残に引きさかれたあとの優美なイケニエに自らの身を投げ出した彼女に、まず、心から感謝する。

本来ならば、我々S族共一同が、貴女に深く詫びなければいけない問題である。ほんの一時の悪夢にこりる事なく、勇気をふるって誌上に再び登場してくれたのは、本当にうれしく思う。

さて、近頃のカメ・ハンであるが、辻村氏

の慣れた手さばきで縛めを受けるM女性の皆さん。根っからのMだったり、すでにいとしい男性の手で飼育を受け、円熟しきったその肢体からムンムンとMの熱気を発散させるタイプであったりする場合が多く、プレイ報告の写真や文章も、丁度、脂ののり切ったトロの様な感があつた。

無論、これに対して反論する事など、ひとかけらもないし、常にカメ・ハンを読んだ後の私の腹は、満腹である。飲みすぎ食べすぎは、胃を悪くするそうであるが、六月号での圭子嬢へのプレイは、こうした中で、一種の清涼剤となった。二月号の手記での、ニガイ物を味わった後だけに、ひとしお、そう感じ

るのかも知れない。

ミキやマキの様にはアカぬけしていない、それでいて、二十六という青春の散りぎわにありながら、どこことなくさびし気のある風情が私の好みでもある為か、プレイの進み方が何となく自分の妻に対したのと似ている様で（と言っても、月とスッポン程の内容に差があるが）それにも興味を持った様だ。

義兄との悪夢——現実からの逃避——猟奇書の探求——かなわぬ夢——プレイ……どことなく絵になるような気がする。考えてみれば、自らを悲劇の主人公にしてしまった様な被虐女性特有なパターンではないだろうか。

男性に対する極度なまでの警戒心と、義兄

に対する何らかの思慕の情、孤独な環境がやがて彼女をM性に変えて行く。全て、女の性がなせる事かも知れない。カメ・ハンのSMプレイを、あえて辻村氏の家で望んだのも、何か解る様な気がする。

「はずかしい。いっそ、荒々しく暴力的に振るまって……」

願望が果たせる段になっての、彼女の言葉には、まさに被虐の荒波に心をさらわれていく己れの姿を見つめつつ、思わず出たにちがないと思えるフシがある。

半ば自ら求めた通りの筋書きとは言え、つい先程までお茶を飲み、自分の過去を語り、いたわりを受けていた男性から、暴力をもって着物を剥ぎ取られ、下着のまま縛られた自分が、これから先どんな目に合わされるのかあと何分か後には現実として身にふりかかってくる危機の不安に、彼女はじっと酔っている。

辻村氏が、シュミーズの上から縛めを受けたままのふくらみに手をやるまでの一瞬、圭子嬢の頭の中では、未知への不安や緊張もさることながら、全裸にされ、息も出来ぬ程の緊縛と責めとのたうつ羞恥の姿を、床に、柱に、宙にとさらしている自分自身をも、想

像していたのではなからうか。

辻村氏の手によって、自分の長い間の願いがかなえられる——この一瞬は、一月にも、半年にも相当する時間であったにちがいない。

動揺した心を打ちくぐくかの様に、辻村氏は悦虐の炎に油をそそぐ。両足も縛り、逆エビにする。百三十頁の写真など、肌の色、縄の色に、シュミーズの白さがやけに目に灼きつく。

「いつまでも、こうしてほうっておくなんて……」こんな彼女に対した辻村氏の作戦には「できるな」と言わざるを得ない。

冬物のズロースの下に、もう一枚パンティをはいていた圭子嬢だからこそ、ここに数年前の「カメラ・ハント」の一シーンを再現出来たのではあるまいか。というのは、痛々しく（本当に痛々しい）くびれた乳房、後手に喰い込むロープ、首縄が足首に連結し、無理な姿勢の彼女は、泣こうともせず、さわごうともせず、ただじっとこらえている。髪が短かいせいもあってか、清潔ムードあふれるポーズである。

業を煮やして、辻村氏が、その女体から最後の一枚を役目を果たせぬ所にまでやってし

まい、その双丘に平手打ちを食わせる。ますます彼女の心は、被虐の世界でメラメラと燃えていったことであろう。

膝とひたいを下に、うつむいたポーズをとらせられた時、緊縛のままの、ラーゲのポーズと、内心彼女は知っていたのだろうか。美しい腎部が辻村氏のSの心をいっそう沸き立たせたことであろう。

しかし、次に行なわれたプレイは、残念ながら私の好みではなかった。女性にとっては、解らない点を起こさせる痺も、私にとっては、解らない点があり（この点、申し訳ない）又、平らな帯状のヒモで縛っても、緊縛感が薄れるので、良く理解出来ない。

ただ、自分が、同性の婚礼に用いた布地で縛られるという点で、ある種のちがった被虐感を味わえたことと思ひ、その点はうなづける。

私の妻の場合でも、長めのネクレスや、スカートのバンドで手首を縛ったり、和服の時など、今、自分が身にかけていた帯止めやしごきで、後手に縛りあげると、一段とMの境地に陶醉する。自分で締めたのと、締められたのでは確かに異なるし、又、身近なもの、うらやましいもの等を道具にされて責められ

る事にもM性の反応は強いという事だろう。

圭子嬢に「早く結婚したいわ……」と言わせたのも、又、しかりである。

途中、辻村氏の奥さんが現われるというハプニングのあと、全裸にした圭子嬢を、又、あのうらやましい白い布が襲う。縄と異なり痛さより快さが先に立つ。横倒しにころがして足げにし、胸を踏みにじり、そして、そのまま女体を持ち上げたり、あくまでも甘いムードの責めである。最後は、可愛い乳房をパイプに襲わしめる——絶叫。

小休止に爪びくギター。それは彼女自身の胸の鼓動ではなかったろうか。

SMプレイは、第四章へと進み、持ち出されたイスは、前回のカメラ・ハンで、天下の秋山夫人をくるい舞わせたものであったろう。

あのきたえ抜かれたMの最高峰の様な夫人に強いポーズを、何も知らぬ圭子嬢に再び求めると言うのか。

その肘掛けに、両足を固定されてゆく彼女は、身を切られる程に、はすかしいにちがいない。そして、もっとも恐れ、しかし望んでいるプレイが、これから展開しようとしているのを、どう感じ取ったことだろう。

普段から、奇クを読み、SMカメラ・ハン

トを愛読している彼女にしてみれば、辻村氏の流れ作業にも似たプレイぶりについては百も承知であつただろう。羞恥心の限界における、耐え切れない時間帯に引き込まれてしまったことは疑えない。

『この頃から、SMプレイが、最終的には肉体の快楽につながるんだと言う事を、圭子嬢が悟り始めた』と、辻村氏は書かれている。きつと内面も、外見も、精神的にも、肉体的にも、その兆候が見られたにちがいない。落花寸前の乙女の姿がそこに現出しただろう。

ローソク責めは、彼女にとって少々酷であつた様だ。だが、それだけに初体験の彼女の必死なひとつひとつの動作が、辻村氏の記事と綾をなして、目に浮かんで来る様だ。

拷問椅子から解放され、ローソク責めの恐怖から逃れた女体に、息をつがせぬ新たなきびしい縛めが行なわれ、タスキ掛けにされ、丸い小さな乳房が細引きに無情なまでに押しやられたそうであるが、しかし、彼女の表情は意外と平静で、それはむしろ悦んでいるかの様であつたとか。

も早や、辻村氏やカメラアイを気にしないほどに陶醉したのだろう。ポーズを求められそれがハント用である事を知る心のゆとりさ

え持ち合わせないまでに至るであろうことは百三十三頁の写真と、百四十五頁の写真を見比べた時、はっきりと断言出来る。屈辱のあとに来る陶醉、苦痛を越えて訪れる快楽。：虐げられる事を願っていた圭子嬢だからこそでもあろうが、さすが御大、辻村氏のなせるワザである。

すかさずSM論をぶつ氏の作戦、ますます恐れ入る。「自信が出来たら、飛びこんでおいで」と、SM論を結ぶ辻村氏の言葉に、必らずや彼女は、又、氏の手もとに、くぐられに戻ってくるであろうという気がする。

足首を持つてのエビ責め。双丘のなだらかな曲線が美しい。計算された写真の構成、とてもセルフで撮った様には思えない見事さである。

理屈めいたSM論議のあと、こうして突然襲った、新しい恐怖に、圭子嬢のMのオブジェは、最後の仕上げにかけられた。不安定な重心と、息も出来ぬ程に弯曲させられた己れの裸身を、圭子嬢自身、どう見たのか、手記でも書いてもらえると面白いのだが。

乳房を狙ってローソクの熱いしずくが落とされる。拒む事を忘れたかの様に、悶え、呻きながらも、ひとみを閉じてこの強烈な責め

に甘んじている圭子嬢にとって、次々と苦しみを与えている辻村氏は、神様である。

緊縛のままのくちづけ——。神前での儀式は終了した。信者の流したひとしずくの涙は一体、何を意味するのか。

カメ・ハンのラストを、辻村氏はこう結んだ。

——野暮ったく、保身に汲々としていた孤独な彼女の口から、その行為を求める言葉を吐かせたところに、SMのプレイヤーとしての言うに言われぬプライドを感じた——

読んでいる私も、満足であった。氏の尊い教えに、今一度、頭を下げたい。

× × × × ×

この他、6月号で気が付いた記事と言えば連載小説「花と蛇」は別格（小生の如き青二才が口をはさむべきでないと判断）として、まず、鳴山能平氏の「時代劇映画に見る猿ぐつわのシチュエーション」。細部にわたっての念いりな説明といい、なまめかしい日本髪女性の緊縛場面の絵といい、相当、名の通った方の様だ。

「一枚の写真」（幻のプレイ）は、どうやら「緊縛写真集」の何シーンかをつなぎ合わせてモチーフした様だ。千草氏自身、こうした

場面を設定しつつ、写真集を見ながらSMプレイのマスターベーションに侵ったとすればその想像力たるや、努力賞ものである。

読むためのシナリオ「異譚・三億円事件」

は、映画通の風流氏らしい、作品である。本当にこの様に犯罪の影で泣く女が居るとすれば、三億円はともかく、責め役ぐらいには金を出してでもなりたいたいものだ。場面の設定が中央線沿線から総武沿線へと移っていくが、以前、独り者時代に別のペンネームで「千恵子という女」という小生の愚作と同じ郷の方の様な気がしてならない。妻とのプレイの写真やコレクションの数々を持ち合わせているので、いつかお近づきになりたいもの。

ハカメラ・ルポ／塚本鉄三氏の「金髪美女を縛る」も、大変興味深く読ませて頂いた。ツンと高い鼻をへし折る事の出来た同氏の胸中察して余りある。あくまで白い肌が、喰い込む縛目に、色づき、むしゃぶりつきたくなる様な大きな乳房がひしゃげられ、タタミの上で悶えるのだ。カメ・ハンとちがって、塚本氏はライティングにこだわる。印刷が鮮明でないのが残念だが、さぞ、肌一面にそよぐうぶ毛まで、緊縛にあえいでいる事だろう。

異なる人種の女性を、裸にひんむいて縄で

自由をうばい、心ゆくまで責めあげる小気味良さは、計り知れない。一寸、我々ではおがむ事の出来ない姿であつたらうに。普段、あまり縁遠い存在の美しい白人女性が、かくもあっさり日本式の縛りに身をまかせる事が、出来るものかと、驚くばかりである。——シラー嬢、果して万博の国・日本の印象を、どう母国の友に報告するか楽しみである。今一度、日本を訪れる事があるならば、鼻へのいたぶりや、乳房への責めなど、アタックして頂きたい。たのみます塚本氏。

さて、大部蛇足がついてしまったが、最後に『奇クサロン』の中で、佐野みさ子さんのプレイ告白が載っていたが、人妻のチョップリ脱線気味のアバンチュール。うらやましいかぎりである。

それにつけても、数カ月前に「自首」を誓った前田カオル嬢、今はどうして居るのだろうか。読者通信欄でも、貴女への問いかけが多い。観念して、その姿をS族の前に現わすべきではないだろうか。前々月号で「お前を逮捕する」を書いた私としては、貴女に信用して頂く為にも、逮捕状がわりに、妻のドレイ姿をフォートにしてあるので、送りたい。

連 載



春 川 ナ ミ オ

本村 信雄 の 巻 (2)

M 派 交 友 録 (八)

鬼 山 絢 策

奴隷馬の暴走

由紀さんが風呂から上ってきた。
私はカメラの準備ができていた。
「僕も裸になりましたか」

本村氏は私の返事も待たずに洋服を脱いで
申又一つになった。

この前の花村も裸になりたがった。M派の
人々は、これと目指す女性の前で裸になりた
がるものらしい。

M派の人であると噂される三島由紀夫氏も

裸を見せるのが好きらしい。もっとも三島氏
の場合は、ボディビルをやって筋肉隆々たる
肉体美だから、あのくらいの身体ならM派と
は別の意味でも見せたくなるかもしれない。
M派の人々は自分の裸体（どう見ても美し
いとは見えない）をさらして、相手の女性か
ら、さげすまれたいという、自ら羞恥を招く
心理があるものと解釈してよいだろう。

本村氏のヌードも肩から腰までがズンドウ
で、はんぺんのように色が白く、ぶよぶよし
た肉体である。

今日は由紀さんは自製のガウンを持ってこ
なかつたので、宿の浴衣を羽織っていた。

本村氏は由紀さんのパンティをサツと拾っ
て、みごとに禿げあがった、やかん頭にかぶ
ってしまった。

その滑稽な姿に由紀さんは、ワッハワッハ
笑い出した。

私は、そこをファスト・シーンに撮った。

「由紀さん、男の人の前に立って下さい」

由紀さんは羽織っていた浴衣を脱いで、両
手を胸の前で組んで乳房をかくすようなポー
ズで、本村氏の前に立ちはだかった。

みごとに成熟した女のヌードはポリューム
豊かに一点の非のうちどころのない美しいも

のだった。

すでに何人もの奴隷に、女王として君臨した経験のある由紀さんは、初めから本村氏をのんでかかっていた。

女王としての自信が、そのポーズの上に、にじみ出ている、貫録をつくっていた。

本村氏は、そのまぶしいような美にうたれたかの如く、由紀さんの前に平伏した。

由紀さんが風呂に入っている間に、今日の撮影のテーマを本村氏と相談して決めておいたのだ。由紀さんを女王として崇め、その奴隷として、かしずく。あとは女王の命令に対して忠実に勤める——大体、そういう進行で行こうと打ち合わせたのである。

従って、私がポーズをつけるまでもなく、本村氏は両手をついて由紀さんの前に、パンティをかぶった頭を足先へこすりつけるようにして平伏したのである。

由紀さんが足をあげてパンティをかぶった頭を踏む——

だが、一たんのせた足をスツとひっこめて「あすこのカーテンしめてくれない？」

と外を見た。

部屋の三方はふさがっているが、一方は外に面して大きな窓が二つ、開いているのだった。

た。

冷房のためにガラス戸はしめてあるが、外から丸見えなのである。

私は立って行ってカーテンをしめた。すると、かなり部屋が暗くなる。これではライトが必要となってくる。冷房があまりきいてないので、ライトをつけては、かなり暑いだろう。

「こりゃ、暗い。ちょっと、まずいですよ」

私は窓の外を見た。小高い丘の上に建てられた都ホテルの別館は、二階ではあったが眺望がすばらしく、眼の下を小田急線が通っているが、併立した建物はない。

「大丈夫ですよ。ヘリコプターでもなければ、覗かれる心配はありませんよ」

由紀さんも浴衣を羽織って、本村氏も窓のところへやってきて外を眺めた。

「これなら大丈夫らしいわね」

再び元の位置へ戻って、由紀さんが本村氏の頭を踏むと、本村氏は経文を唱えるような口調で、しゃべり出した。

「わたくし本村信雄は、性^{さが}いやしき奴隷めにございます。このたび、倉田由紀女王さまの有難き思召しにより、奴隷の一人にお加え下さったことは、わたくし本村信雄、いやし

き私めにとっては最上の名誉でございます。

貴く、お美しい由紀女王さまのためには一命をなげうっても忠誠を誓います。女王さまの如何なる御命令にも服従いたします。ここに女王さまの前にひれ伏して、謹しんで、奴隷の宣言をさせていただきます」

ふだんは太い低音の本村氏が、この時は高い音調で、節をつけて突然しゃべり出したのだから、ちょっとびっくりした。大体の筋書きを打合わせていた私でさえ驚いたのだから何の予備知識もない由紀さんは、もっとびっくりしたのだろう。足で踏みつけながらクスクス笑い出した。

「笑わないで下さい。奴隷は真剣なんですから。神聖な奴隷の宣誓をしてるんですよ」

「何卒このいやしく哀れな奴隷の願いをお聞き届け下さいますよう、女王さまの有難いお言葉を賜りとうございます」

「よし、お前のような肥った豚のような醜い奴は、まだ一人もないが、お前の忠誠心にめでて、奴隷の末席に加えてあげるわ」

由紀さんも笑いをこらえながら、それでも芝居がかりで、のってきた。

「ありがとうございます。では、貴く美しい女王さま。何なりと奴隷めに、お命じ下さい

ませ」

由紀さんは笑いながら私を見た。

「そうですねえ。最初は乗馬ぐらいがいいでしょう」

「馬になってごらん」

「ハイ、かしこまりました」

本村氏は、短い手足を突っ張って馬になった。

「奴隷は、あたしの身体の重味がどのくらいあるか知っておかなくてはならないのよ。妾の重量にどのくらい耐えられるか、テストしてあげるからね」

由紀さんは本村氏の胴中に跨がった。

「そら、走れ！」

本村氏は猛烈に走り出した。

肥った身体で四つん這いになって這いずり廻るのだが、とても年令相当には思えぬほどハッスルしていた。六〇キロ近い由紀さんを乗せて、部屋中を元気に這い廻った。

私の方もクルクル動きながら、シャッターチャンスをとらえるのに骨がおれるほどのスピードだった。

由紀さんがいたずら心をおこして、頭にかぶっていたパンティを引っぱって顔にすっぽりかぶせてしまった。

それでもこの老馬のスピードは衰えない。

ドタドタと重い音をさせて這い廻る。

由紀さんは、だんだん前の方へせせり出て首へ跨がってブレーキをかけた。首を締めつけられて、やっと暴走？ は停止した。

ハッハッと、さすがに荒い息使いの音が聞こえた。

「年の割りに元気だね。でも、めくらでよく走ったわね」

「パンティがうすいから見えますよ」

「なあんだ、じゃこんなもんとっちゃおう」
上からペリッとパンティをはがしてしまった。本村氏は汗をびっしょりかいていた。

冷房があまりきいていないから、あれだけ走っては大汗かくのも無理はない。

「汗でベタベタして、気持ちが悪いわ」

「申しわけありません。お拭きしましょう」

本村氏はタオルを持ってきて、由紀さんの足をていねいに拭いた。由紀さんは本村氏の前立って、交互に足をあげて拭かせた。本村氏は膝の上に乗せた足を抱きかかえるようにして、頬ずりしたくなるのを、やっとこらえて拭いていた。浴衣の裾をまくって、お尻の方まで拭かせる。

拭い終わったタオルで本村氏は自分の顔か

ら身体を拭いた。

今日の撮影はラクだった。黙って見ていれば次々とMの面白いポーズが生まれてくる。

「汗かきだね、お前！」

「申しわけありません」

下げた禿頭へ足をかけてグイと畳まで踏みつける。両手をついて平ぐものように這いつくばった本村氏の頭を足のうらでこすって、

「ツルツルだわ。ウフフフ」

由紀さんは禿頭が気に入ったらしい。

女王の圧服

「暑いから脱いでもいい？」

羽織っていた浴衣を、由紀さんは脱ごうとした。

「すみません。もう少し、羽織っていて下さい。アクセサリーが少しほしいのです」

「もう一つ、タオルを持っておいで。冷たく絞って」

「ハイ、かしこまりました」

本村氏は肥った身体をまめに動かして、別のタオルを浴室で絞って持ってきた。全く忠実なしもべである。

由紀さんは、自分で首から胸のあたり、上

半身を拭った。

「これは妾のタオル。お前のタオルと間違えては、だめよ」

「ハイ、大丈夫です。女王さまのタオルは、おそれおおくって使えません」

「どれ、それじゃまた、ひと汗かくか」

由紀さんの好きな圧服のシーンに入る。

これは女王さまも奴隷もカメラマンも、三者が望んでいたことだけに熱が入る。

だが由紀さんは、若い奴隷に対した時ほど強烈にはやらなかった。

「何だか年寄りだと、可哀想になっちゃうのよ。ヘタして心臓麻痺でもおこされたら大変だもん。フフフ」

本村氏の眉間から額にかけて、いなずまのように静脈がふくれ上っている。

昂奮の極に達したためのものとは思われるが、私も多少、不安を感じた。

だがジワジワと、時間はタツプリかけて責めた。

フィルムのきれたところで、ひとまず休憩に入った。

「疲れたでしょう」

私は本村氏の熱演をねぎらった。

「いえ、ちっとも疲れません。好きなことを

やってるんですから、夢中ですよ」

温顔に上品な微笑を浮かべた本村氏は、教養の深い紳士であった。

「あたしの方が疲れたわ。膝を突っ張ってるでしょう。膝が疲れちゃうのよ」

由紀さんはソファに腰をおろして、足を組んだ。

「どうして膝が疲れるんですか」

「加減しているからよ」

「大丈夫です」

「フフフ、どうかな。ほんとにやったら重いわよ。潰れちゃうから」

「潰されれば本望です」

「こっちへきて飲まない」

ヘネシーVXを手酌で飲んでる。

「いや、とてもそんな高いお酒。飲んだら口が曲ってしまいますよ」

「じゃ鬼山先生、飲まない？」

「私は仕事中は飲まない事にしてるんです」

「そんな堅いことおっしゃらずに、一ぱいお上んなさいよ。折角、持ってきてあげたんだから」

「では、お言葉に甘えまして、一ぱいだけ頂戴いたします」

本村氏は小さなグラスを両手で持って、う

やうやしく捧げた。

「これ一ぱいで何千円でするんでしょうね。生まれて始めて頂きます」

本村氏は、ほんとうに、ありがたそうに、一ぱいのブランディをチビリチビリと飲みほした。本村氏にとっては、ほんとうに有難いブランディだったろう。

佐次浩介と門田奈子から、ひどいめにあった本村氏としては、その直後だけに私と由紀さんを一応、信用したものの、どこかにまだ一抹の不安は残っていたに相違ない。どこかで私が急に居直って金を出せとでも言うのではないか、由紀さんが途中で鬼女のようになって、本村氏の意志に反いて手荒らな、危険な責めをするのではないか。小説ならその方が面白いが、現実はそのでは困るのである。それを、このブランディがすべて解消してくれるのだ。私が持ってくるよりも、由紀さんが持ってきてくれたことに、より効果があった。

もっとも私は、こんな高価な酒は貰ったことはないし、もちろん買ったこともない。

それから、またフィルム一本、撮った。

本村氏の献身振りは、まことに涙ぐましいものがあつた。

この日、私は五時から所用があったので、四時に、きりあげた。

「御苦労さまでした」

「一ぱい、あがりませんか？」

由紀さんは私にすすめてくれたが、酒に弱い私は、すぐ真っ赤になるので、赤い顔をして出られない席なので断わった。

「この次、御馳走になります。楽しみにしてますから御面倒でもまた持ってきて下さい」

本村氏も洋服を着たが、私を蔭に呼んで、「今日は大変、有難うございました。あのかたは何とも言えぬ素晴らしいお方です。ところで今日の勘定は、私に持たせて下さい」

「イヤ、それは私が払わせてもらいます。御心配なく」

「でも、あんな高価なお酒まで御馳走になって、それじゃ、わるいです」

「構いません。とにかく道楽でやっていることですから」

「そうですか、恐縮ですな。それと、もうひとつ、お願いがあるのですが……」

「何ですか」

「今日は私にとってほんとうにいい日です。

こんな機会は滅多にないと思います。このまま、あのすばらしい方とお別れするのが心残

りでならないんです。そこで、お世話になった上にこんなお願いをするのは、まことに厚かましいんですが……」

本村氏は禿げた額に汗を浮かべて、ちょっと口ごもった。

「何ですか」

「あの……もう少し、あの方と二人きりでいたいんですが……」

こりゃ、とんでもないことを言い出してきただもんだと思った。相手はレッキとした人妻で、初対面からホテルで二人きりにさせてくれというのである。

常識的には、とてもかなえられそうもない問題である。だが、すべては由紀さんの考えかた次第でまゐることだ。

由紀さんも変わっているから案外OKするかもしれない。

それに、いままでの態度を見たところ、二人きりになったからといって、本村氏が俄然「狼」に豹変するとは思えない。おそらく、いままでのプレーの延長を望むのではなからうか。とにかく私が案ずるより由紀さんに聞いてみることだ。

「サア、それはちょっとどうかと思いますが一応、由紀さんに聞いてみてあげましょう」

「お願いします」

由紀さんに話してみると、

「あれだけやってやったのにまだ足りないのかしら。フフフ、もう面倒くさくなったわ」

「じゃ、断わりましょうか」

「そうねえ……」

「とにかく、由紀さんにすっかり魅せられてしまったんですね。切実な気持で一生懸命、頼んでくるところは純情ですね」

「あんなのに惚れられたってしょうがないけど……でも、可愛いそうね」

「まさか、ヘンなことをする心配はないと思いますけどね」

常人がみたら、ずい分おかしい話だと思うだろう。男と女の当たり前のことをするのが「ヘンなこと」なのであって、常人の「ヘンなこと」をするのが、ここでは至極、当然のことなのだから。

「アハハハ。あの爺は、とてもそんな勇ましいわよ。そりゃ絶対大丈夫よ。いいわ、かわいそうだから、もう少しつきあってやるわ」

「由紀さんから、お許しが出ましたよ」

「エッ？　ほんとですか」

本村氏は喜んでいた。

私はホテルの勘定を払って、この日は私の

方が先に帰ってしまった。

仇名は「ぶた」

「昨日はどうも御馳走さまでした。どうでした？ あれから」

翌日、私は早速、由紀さんに電話をした。

「ウフフフ、あの爺、とても真剣なのよ。真

剣になればなるほど何だか芝居がかりになってきて、おかしいったらありやしない」

「どんなこと、やったんです」

「何のことはないのよ。アダ名をつけてくれるって言うのよ。ポチはどうでしょうって言うから、ポチってがらじゃないわよ、ブタだよって言ってやったら、じゃ、トン公と呼んで下さいって言うの。で、トン公と言ったらへ

ヘーッて、おじぎするのよ。ブタが返事するやつあるかって言ってやったわ」

由紀さんは、かなり委しく報告をしてくれた。家は母親と二人暮らしの気安さもあるし、暇を持て余しているのだろう。

「あたしね、あいつに奉仕させながら、ついウトウトと眠っちゃったのよ。アハハハ」と、如何にも楽しそうに笑った。

「どの位寝たかしらね、二十分ぐらいかしら気がついたら、あいつまだ忠実に奉仕を続けているのよ」

「のん気だなあ。ヘンな行動には出ませんでしたか」

「そんな気は全然、ないわ」

「でも一度だけ、まともな願いをかなえてくれ、ぐらいのことは言いませんでしたか」

「言うもんですか、そんなこと言ったら蹴とばしてやるわよ。ハハハ」

「何時頃まで、いたんです？」

「五時頃かしら。もう帰るって言ったら、もう一度、是非、会って下さい。できれば二人きりでお会いしたいって言うのよ」

「で、何と返事しました？」

「あんまり図に乗るなって言ってやったわ」「もうやめますか」



読者ギャラリー「悦虐前奏曲」 岡 たかし

「どっちでもいいわよ」

私はその夜、徹夜でDPEを仕上げた。

由紀さんには一応、見せることになってい
る。喫茶店で会って、キャビネから四つにま
で伸ばしたのを見せる。

「これは、よく撮れてるわね」

表情のきれいに撮れてるのが気に入るらし
いのだが、決してくれとは言わない。そんな
ものを家へ持って帰って、旦那さんにでも見
られたら大変なことになる。

「誰にも見せないでしようね」

「ええ。絶対に！」

私は由紀さんには感謝している。私を信用
してくれていればこそ、モデルになってくれ
るのである。その信義には、私も堅く守らね
ばならぬ義務がある。

「今度、こういうのはどうかしら？」

と、思いついたポーズを言ってくれること
がある。

「本村氏から写真を、是非分けてくれと言っ
てきているのですが、上げてもいいですか」
「いいでしょう。あの人なら大丈夫よ」

由紀さんのアイデアになるポーズを、もう
一度、本村氏と組んで撮ってみたい。また私
の方にも撮りたい場面があるので、早速、本

村氏に手紙で連絡した。

本村氏は、私の返事を待ちかねていたらし
く、すぐ次の日取りが決まった。

私は同じホテルは二度と使わない方針だっ
た。それは、バックの調度や部屋のムードに
バラエティをつけるためだったが、本村氏は
参宮橋ホテルを強く希望したので、今度は本
館の方へ行った。前は和室だったが、今度は
洋室を選んだ。

由紀さんは今日はジョニーの黒を持ってきた。それにアルゼンチンのチーズやキャピア
など、酒の肴を一ぱい仕込んできた。

「宿屋にはロクなものがないし、女中さんに入
ってこられるのがいやだから」

由紀さんは、女中にジロジロ見られるのが
一番いやらしい。

「だってさ、この女、この二人の男を同時に
相手にするのかって言うような目つきで見る
んだもの。フフフ」

「いつも結構なお酒を頂戴しまして、こんな
光栄なことはありません」

ふだん、学校では威ばりくさっているの
であらう本村氏が、由紀さんの前では忠実な奴
隷として、ペコペコ頭をさげる。その自分を
卑下する楽しさを味わっているらしい。

あくどい脅喝

ところで芸苑社の話の続きを書くのを忘れ
ていた。

本村氏は会費が安いので、半ば好奇心で入
会したら、門田奈子を紹介されて、紹介料だ
と五千円とられた。当時の五千円は、いまの
二万円ぐらいに当たる。本村氏は門田奈子と
のMシーンを写真に撮られている弱味がある
ので、仕方なく五千円を払った。それで懲り
ればよいのに、手紙をもらうとまたノコノコ
と出かけて行った。二度目になると佐次の態
度が変わって、門田奈子に会わせてやるから
一万円出せと言う。本村氏はそんなに持ち合
わせがないと言うと、じゃあ、五千円に負け
てやると言って、先に金を取られた。金を取
ってしまうと佐次も、もう一人の男も引き込
んでしまつて一時間近く待たされた。一人で
待っている間に何をされるのかと不安になっ
てきて、いっそ、このまま帰ろうかと思つて
いると、佐次と奈子ともう一人の男と三人で
ドカドカと入ってきた。奈子は酔っぱらって
いるようで「ほんとにケチな爺だね。今度来
る時は、もっとタツプリ金を持ってくるんだ

よ」と、のつけから罵りながらスカートを脱いだ。下には何もはいてなかった。「馬におなり」と言うので四つん這いになると、ドッカと跨がってスリッパで尻をピタピタ叩いて「走れ」と言う。佐次と、もう一人の男はニヤニヤ笑いながら傍で見ている。若い男が、またカメラを取り出して撮ろうとする。本村氏は「写真を撮るのだけはやめてくれ」と懇願した。「人並みに恥かしいのか」と奈子は本村氏を蹴倒して、顔の上に馬乗りに跨がった。本村氏は、「頼むから二人きりにしてくれ」と泣かんばかりに頼みこんだ。

奈子が本村氏をおさえつけているすぐ傍に男が二人、突っ立って、ジロジロ見られているのでは、とても気分がのらない。「もういからやめてくれ」と言う。「生意氣を言うな」と奈子に横っ面を殴られた。「今日は、お前を喜ばしてやろうと思った。いいもの飲ましてやろうと思ったのに、お前はほんとのマゾじゃないのか」と言う。「飲ましてくれるのは有難いが、こんなに皆の見ている前じゃ、いやだ」と言うと、佐次は、「勝手にしろ」と言って、もう一人の男と出て行った。「それで飲んだんですか」「イヤ、いきなり浴びせられただけですよ。」

それで今日は、おしまいだと言うんです」

本村氏は部厚い眼鏡の奥の目を細めた。

「佐次は、お前はまだほんとのマゾじゃないこれから教育してやるからと言うんですが、金をふっかけてきたり、脅迫がましい態度をとったり、それに門田奈子というひとが、何か佐次にそそのかされて無理にやってるようなところも見えるんで、それきり、もう行かなかったんですよ。あとで、また手紙が何度も来ましたがね」

「ああいう、商売にしてる奴には、うっかり乗らない方がいいですよ」

と、だけ言っておいた。それから間もなく例の検挙となったわけである。本村氏の場合は被害者だから、まさか新聞に名前がのるようなことはないだろうが、万一、本名がのったりしたら、教育者だけに進退に関する重大なピンチになるだろう。もしも私との交友がなかったら、或いはまた、行ったかもしれない。

さて、この日は、レスリングのシーンを撮った。

昔、といっても昭和二十四年頃かと思うが日劇ミュージックホールで、パン猪狩兄妹が

男女プロレスというのをやって上演禁止になったそうである。

私は力道山がプロレスをはじめた時、すぐ観に行ったが、その時、これを男対女でやったら、さぞ面白いだろうと、思ったことがある。その夢を実現してくれたのであるが、惜しくも上演禁止になった。私はそれを見落としたのが残念でならなかった。

その後、女子プロレスが誕生し、更に小人と女子プロのタッグマッチなどが興行されたが、期待に胸をはずませて観に行ったら小人と小人、女と女とがやって小人と女とはめったに組まないのがガッカリしたことがある。

そんなこんなで、プロレス欲求不満になっていたから、プロレスごっこを思いついたのである。

由紀さんには全裸になってもらった。本村氏は花村学の場合と違って、自分のもちものを異性の目の前にさらすのは好まない様子なので、申又一枚になった。

最初は立ち技で取り組むと、丁度、背丈は同じぐらい、少し由紀さんの方が高かった。

ウェイトは本村氏も、かなり肥っていたから本村氏の方が重いように見えた。すぐ由紀さんが本村氏の首を脇の下にはさんで腕で締め

つけるネックブリッカーから、「やしの実割り」で本村氏をダウン。尻餅をついた本村氏の禿頭へ由紀さんが跨がると、チョンまげをつけたような、何ともユーモラスなかつこうになって、思わず吹き出してしまった。

「何笑ってんのよ。もっとまじめにやって」「すみません。申しわけない、もうちょっと前へせり出してみして下さい」

あんまり前へせり出したので、本村氏の頭がうしろへ抜けそうになる。頭を水平にさげているので、それはとても人間の頭には見え、鳥の卵をはさんでいるみたいになった。

それから寝技に入り、ヘッドシーザーに入る。普通、プロレスのヘッドシーザーは、必ず首が前向きになっている。あれを後向きにはさんだら、どうだろうと言うのが私の夢だった。

欧州のナイトクラブでやる女子プロレスでは、時々レフェリーをすっ倒してヘッドシーザーをやって見せるそうで、その時、この後向きスタイルをやって、お客を笑わせるそうであるが、日本ではまだ見たことがない。

その夢も、かなえられた。

最後は、仰向けに倒れた本村氏の両肩を膝でおさえ、バンザイした両腕を上からおさえ

つけて、由紀さんがフォール勝ち。レスリングだと、ここでスリーカウントで終わりとなるところだが、この場合は、フォール勝ちしたあとのポーズが少しずつ違った角度で、丹念に撮った。

そのうち本村氏が苦しくなってギブアップしたので、やっと解放された。

「どうですか？ ほんとうに男性を征服したという実感がわいたでしょう」

「そうね、フフフ、実感というより体感という方がピッタリね」

「なるほど体感か。そりゃ、うまい言葉だよし、こんどその表現を大いに使わせてもらいます」

由紀さんはウイットに富んだ女性である。

本村氏も腕を逆にとられて捻じられたり、倒れた顔や禿頭を足で踏みつけられたりしたので、相当疲れたようなので、ジョニー黒を気つけ薬に、ひと休みした。

フィルムを入れ替えて、次は由紀さんのアイデアを生かして、由紀さんの命ずるままに本村氏にポーズをとらせた。

二時間ばかりで撮影を終わった。

本村氏も相当に疲れた様子なので、今日は三人で夕食でもして、別れようと思っていた

ら、例によって本村氏は「あとしばらく、由紀さんと二人だけにさせてくれ」と拝まんばかりに頼んできたのには、そのタフなおどろいた。

「またですか」

私は苦笑しながら由紀さんにお伺いを立てると

「あたしも汗かいたから、もうひと風呂、浴びてくるわ。あいつがいたければ背中でも流させてやるから置いて行ってもいいわよ」とお許しが出了。本村氏は子供のよう喜んでる。

で、私はカメラやその他を片づけて、ひと足お先に失礼した。

翌日、由紀さんに電話して、二人きりになってからの様子を聞いた。

「あれから？ ふふふ、あたし飲ましてやったわよ」

「エッ、ほんとですか。そりゃ惜しかった。

ぜひ、撮りたかったな」

「そう言うだろうと思った。アハハハ。だって、あいつが手を合わせて拝むんだもん」

「どういう風にやったんですか。ダイレクトにやったんですか」

「ダイレクトっていうのかな。間隔はあった

わよ。お風呂場だから気兼ねはいらないわよね。あいつ、ウウーッて吠えたわ。あんなにエキサイトするもんかしらね」

「惜しかったな。今度そこを是非、撮らせて下さい。それからどうしました」

「あと清めさせてくれて言うのよ。清めると言ったらって自分の方が汚れてるじゃないの。手桶で頭から何ばいも、お湯をぶっかけてやったわ。お風呂から上っても、またしつ

こくつきまとうのよ。まったく好きなおやじね。ふふふ」

「どうです。もう一回、やりませんか」

「そうねえ、もう飽きたわ。ほかにけりやしかたないけど……」

由紀さんは飽きっぽい。由紀さんへの奴隷志願者は後がつかえていたので、一応、本村氏とのプレーは、しばらく休むことにした。その後、本村氏は何回か、次回の撮影を希

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

望してきたが、そのままにしておいた。手紙の中には「今度は由紀さんと二人きりで会わせてくれ」というような希望が書いてあり、「もしも由紀さんがお金がほしいというならいくらでも出します」というようなことが書いてあったのがカチンときた。由紀さんがそういう身分の人でないことは百も承知しているはずだし、私としても、金の授受については厳に戒めていることは承知しているはずであるにも関わらず、こんな失礼なことを書いてくるのは、善意に解釈すれば、それだけ切実であり、強い希望の意志をあらわしたものと受け取れないこともないが、私としては私までが侮辱されたように思えて、返事も出さずにおいたのである。

そして連絡は途絶えた。

私としては彼の本名も、職業も、住所も知らないし、私の方もその後、中野を引き払ってしまったから、お互いに連絡の途が切れてしまったのである。

いまはもう七十を越しておられるだろうしもうプレイするファイトも、なくなったのではないかと思うが、過去にいろいろな経験をもっている人だけに、もう一度、会ってみたい気がする。

(この項おわり)

SM文学のニセモノとホンモノ

「ヤプー」問題に思う

新 宿 町 人

「家畜人ヤプー」騒動は果てしなく、まだ続いている。

同書の出版元が、お固いので定評のある朝日新聞の「著名出版社の良書案内」企画広告面に「家畜人ヤプー・改訂増補豪華限定版……」のPRをしている。「良書案内」とは印象的だ。

ついでに言うなら、同じくその広告のなかに、こんなことが書いてある。

「日本の小説の中で、たしかにこれだけのペダンティズムを堂々とひけらかした作品は稀有であるといえよう。その点では、既成の文壇的な価値概念をゆるがすものかも知れない——朝日ジャーナル4月17日号、なだ・いなだ氏評」

とある。

新聞といいジャーナルといい、失礼ながらお固いことで定評のある両紙が、こういう形

でとりあげるのは、まったく興味がもてる。

ところで、「オール読物」誌6月号P13

2では、作家野坂昭如氏が、

「わが内なるマゾ」。——世紀の対決——「家畜人」VSオナニスト——美女のお小水飲まれると聞く御仁の前で恐懼してさぐる被虐感覚の神髄——として、いかにも沼正三を引っ張りだしての談と思わせる記事を、九ページにわたって掲載している。

田島征三のイラストがユーモラスで、その中には、本文半ページを費して直接、口中落水のイラストを入れ、ハデな扱いだが、これは、まったく、くさい企画である。

文中に登場する「端正な風貌の沼氏。銀行家の如く重厚な召しもので当然だろうが威風あたりを払う」云々のくだりには、若干、裏面の情報をもつ筆者は思わず吹き出した。

当代の天才作家野坂氏を手玉にとり、さも

沼氏その人とサッカクさせるような演出を試みた代理人氏は、野坂氏を上回る大天才というべきだろうか。いくら、コプロのはなしでも、こんなに手ぎわよくやられたのでは、ハナをつまんで逃げだしたくなるのは、あに私一人のみならんやである。

由来、文芸春秋社は、この場合といい「週刊文春」での取材といい、この代理人氏を沼正三氏そのものにしたくてたまらないようにみうけられるのだが、どんなものだろうか。

本来、公正であるべきマスコミが、こんな先入観念をもって、このようなまぎらわしい問題と取組むのは、まちがっていると思うのだ。

わからなければ教えてあげる。

「家畜人ヤプー」公刊いらい、週刊誌をさわがせ、ときには、テレビにまで影響を与えた「沼正三の代理人」は、正しく代理人であって、絶対に沼正三氏本人でない、と、断言できるのである。

しかし、沼正三氏は、蒸発説などを打ち消すかのよう、「改訂増補」に手を染め、某人性誌には堂々と署名いり「夢想家の手帖」まで、のせはじめた。

こうなると、またワケがわからなくなってくるのだが、幸いなことに、私たちのグループには正当沼三氏の自筆の手紙を偶然保有している者もおるし、現在活躍中の「代理人」

氏が、ホンモノか、そうでない第三者かを見わけるのは、けっして、むづかしいことではないのである。

私は、「代理人」の活躍が、けっしていいないといっているのではなく、ただ、野坂氏の対談にもみられる通り、サッカクの盲点をつくような、すくなくとも後世に誤解を招くような言動は、厳につつしんでほしいと思うのである。

もっとも、なんとかいう新進評論月刊誌にその代理人とおぼしいA氏が「マゾヒスト」の肩がきつきで、釈明の一文をのせている。仔細にそれを読むと、たしかに代理人は代理人であって、本人ではない、と断わっているが、その声が小さいので、世間にはこれでは通らないのではなからうか。

スイ星のごとく今年上半年期の出版界に現われた「家畜人ヤプー」さわぎは、下半期にも持ち越されそうな状況だが、それについても代理人氏の自重をのぞみたいものだ。

「家畜人ヤプー」の成功に刺激されたのだから、このごろ、ちよくちよく大衆文学は、もちろん純文学にまでマゾ、フェチの作品が登場する。

『偽れる性の記録・レズ・SMの「新宿の女」・春美とユキ』

右は作家でありレポーターでもある千家紀彦氏が、「週刊大衆5月21月号」に発表した

レポだが、

女はしゃれたタンブラーに一杯の温かい液体を放出して、

「さあ、飲ましてやるよー」

男は平身低頭してタンブラーをおしいたき、のどを鳴らして飲み干す。

とか、さらに

春美（サディスチン）のオシッコを飲みほした男も三人や五人ではない。コップに受けて、化学調味料をふりかけて飲む男―ビールで割って飲む男―炊きあがったばかりの飯に大便をかけて食べる男―

と、登場人物はヴァリエティに富んでいるが、なにかもうひとつ足りない感じだ。

このていどの内容なら、十年前のKK誌には、しばしば登場し（当時は、グロテスクと言で片づけられたが、いまやこれがノーマルの人々のあいだでも、注目されているのはハプニング的なことというしかないし、もはや常識としてうけとめられている様である。一流どころでは、梶山季之氏も、好んで、このモチーフをあつかうが、問題は、それらの作家自身が、マゾヒストではなく、ただ第三者からの材料提供や、談話をもとにデッチあげられたように思われるのである。

これら作家の考えているていどのことは、本誌に作品を送りつづける新人ないしはアマチュア、無名作家または、将来とも、作家になろうなどとはユメにも思わない人々の書いたもののほうが、はるかにリアルだし、人の心をうつ。

プロの作家には、筆力あれども内容がなく本誌傘下の作家にあらざる作家陣は、内容あれども表現力なし、と、双方ともに、相足らざる歎きがあるように見うけられる。

ただ興味だけで読むのなら、いわゆる一流作家のものでもよいかもしれない。

しかし、眼が肥えてくると、これだけでは物たらなくなる。

ニセモノとホンモノとの区別が、ちゃんといってくるのである。

サド文学といい、マゾ文学といい、世間では、いまさらのようにさわぎ立てるが、我々のような、古くからのKK読者の目でこの現象をみると、おかしくて、吹きだしたくなってしまう。

なぜか。

十一年前、旋風のごとく、沼正三がデビューし、大怪作「家畜人ヤプー」を連載しはじめたとき、十年のちの、今日の大反響を、そも何人が予見しえただろうか。

センサクはセンサクを呼び、誰が任命したのかしらないが、代理人なる人物が、一流週刊誌にまで、わがもの顔で活躍するとはどこかで、沼さんは、あの皮肉たっぷりな、苦笑を洩らしているにちがいない。

家畜人ヤプーは、そんな代理人とかの手によって、おとなしく、イースの世界に、相手が白人にならないで知らず、同色人種にいじり廻されておとなしく引ッ込んでいるほどの意気地なしではない筈だ。

家畜人ヤプーは華やかに脚光を浴びている

のに廃刊のデマさえ飛ばされ、しかし堂々有在を主張するフェニックスのごとき、わがK誌の偉大な功績を云々する識者はいないとは何事であろうか。

私は、深く義憤を感じつつ、ここに今一度問題を提起しておきたい。

とともに、エセSM文学を排するためにも本誌を支える、うでのきいた「KK作家」のパンチのきいた奮起をも求めたいのである。これだけは高らかに誇らかにいおう。

「誰がなんといおうと、わが国におけるSM文学の主体者はKK誌である」

テレビクイズに出た「幻の奇書」

『家畜人ヤプー』雑観

麻 曾 比 須 人

「家畜人ヤプー」が単行本として、一冊にまとめられ発刊されたことは、M派小説を愛する私にとって、喜ばしいことである。

この小説が、奇クに連載された当時、一部の先見の明ある識者から、注目されていたというものの、一般の読書子からは、ほとんど顧みられなかったのが、実情ではないかと思う。それがどうだろう。単行本になるやいなや、爆発的人気呼び、新聞（有力地方紙）の読書欄には、先週（四月二十七日）から、週刊ベストセラーズに、顔をのぞかせ、五月

四日には、東京主要店調べによると、塩月弥栄子著の「冠婚葬祭入門」や、曾野綾子著の「誰のために愛するか」などと肩をならべ、五位に進出している。

これを産み出す母胎となった奇クとしてもまた、奇クを愛する我々としても、誠に痛快この上もない思いである。勿論、幻の作者沼正三氏にしても、これほど爆発的な人気を呼ぶとは、考えておられなかったのではあるまいか。

しかも、この本は、単行本として一冊千円

という、かなり高額なものにもかかわらず、これほど売れているということは、こうした異常な世界に興味を持つ人たちが意外に多いことを示すものなのだろうか。

最近では「家畜人ヤプー」という題名を知らなければ、クイズにも勝てないという話を一つ。

先日（四月下旬）のフジテレビ系で放映している「クイズ・グランプリ」という番組を見ていたところ、文学の問題の中で「幻の奇書として、いま話題の沼正三氏の著書の題名は？」という問題が出た。一般視聴者から抽選で選ばれた解答者五人のうち、一人もこの題名を知っている人がいなかったが、これくらいの問題は、現代人の常識として知らなければいけないというのだろうか。

来年あたり、どこかの大学での入試問題か会社の入社試験に作者と作品名を線でつなげというような問題で、「家畜人ヤプー」の名前が登場することも十分考えられることで、愉快なことである。

× × ×
「家畜人ヤプー」の名前が、週刊女性にも出ているのをみて驚いた。

五月二日号、一九五頁に、ショックレポート「銀座のバーでマゾ男性の異常パーティーが」という見出しを見た方もいると思うが、そのレポートによると、四月十一日の深夜、東京・銀座のクラブ「レッド・ミナーレ」(東亜相互ビル9階)の赤い絨氈の上では、あまりにもおぞましい異常な状況が展開していたという。これは勿論、マゾ小説「家畜人ヤプー」出版記念パーティーの特別ショー。会費千円で、約三百五十人が参集したという。招待客の中には、詩人・寺山修司、宇野亜喜良女優・左時枝らもいる。本文のまま一部を引用すると

『中央に置かれた浴槽に全裸の女性が入り、男たちが寄ってたかって、これを舌で愛撫する。女性の下腹部に顔を埋めて、激しく舌を使う男もいる』

女王たちは、バー、クラブのホステス、男たちはアングラ俳優という。もう一度本文を引用すると

『洗面器みたいなものが出され、牛乳が注がれる。それへ女がしゃがみ込んで放尿した。男たちが這い寄って、ペチャペチャと犬のようになめる。なんとミルクの小水割りを飲んだのだ』

このほか、足なめ、馬のり、鞭打ちの場面が続く、クライマックスは、女王の「オシッコ」という声に続いて、ヤプーの場面が再現される。発泡スチロールで作った洋式便器の仮面をかぶった「奴隷男」が床の上に仰向けに寝て、口のフタを開ける。女王がそこへ白いお尻を近づけ、奴隷男の開いた口へ流し込む。このほか固形物を食べる場面も予定されていたが観客多数のため中止されたということだ。

会費千円也で、こうしたパーティーに出席出来るとしたら、なんとか出席してみたかったと思うのは、私だけではないだろう。読者の中に、パーティーに出席した人がおられたら、ぜひ、その場面を詳しく報告してもらいたいものだ。

なお、このレポートには写真が二枚掲載され、男の首に縄をつけて、馬乗りになって引き廻す女と、ムチ打ち、足で踏みつける女の様子が見えるが、コントラストが強すぎ、馬乗りの女性は、白いパンティーとブラジャーの後ろ姿を見せているが、からだは真黒である。もう少し、軟調の写真でクライマックスの場面を見せてほしかった。

△追記▽……………

以上の雑観を、封筒に入れて、投函しようとしたところ、丁度、発売になった「週刊ポ

スト」の五月一日号のグラビア写真を見て、おどろいた。「ああ狂乱の東京猟奇地帯」と題して、三ページにわたって、ヤプー発刊記念パーティーの写真四枚を掲載していたのである。しかもこの写真は、フラッシュをたいているらしく、非常に明るくて鮮明だった。

ただおいしいことに人間便器が写っていたが使用中でなく、他の男の背中をテーブル代わりに、水呑み(ネクター)でも入っているのか? 香水入れみたいなのを並べている写真で、私の欲する場面でなかった。

二枚目の、M男の後ろ姿とそのM男を鞭で打っている「女王」の写真がリアルで、女王のやや口を開いた白痴的な、サディスティックな表情が真に迫っていた。しかし、その女王を腕をまわしてささえている背広姿の男性が何なのかわからず邪魔になる構図だった。その右隣の馬乗りの女性もポーズがよかった。

最初の写真は、女王三人と、その下にうごめく、ヤプーならぬM男、数人が黒いマスクを頭からすっぽりかぶっているが、もう一人いる左側の女性のブレた腕で鞭打ちの様子がわかり、真中の、痩せた女性の笑った表情もS的で、まあまあ、その夜のふん囲気を出しているようだった。

△終▽



(1)

△創作▽ アパートの檻 (前)

反 逆 の 畏

保 藤 久 人

アパートの階段をのぼるとき、尚子の足がもつれ、冴えた靴音が不規則にみだれた。

「大丈夫かい？ めずらしく酔ったねえ」

「大丈夫よ。さわらないでちょうだい！」

よろめくからだをささえようと、差しのべた晴雄の手をピシャッとたたき、

「そんなことを言って、本当は、わたしのからだにさわりたいのでしょう——」

尚子は、じろつと男を見た。その、なまめいた眼つきに思わずたじろぎながら、

「うん、そのとおりだ。本音をはけば、な」

「まあ、ずうずうしい！ エッチね。そのくせ、いざとなると意気地なし。あなたって、

相変わらず弱虫ねえ。ああ、疲れちゃった。エレベーターが無いなんて、不便だわ」

尚子は、肩で大きく息をしている。

「こんなところへ住まなくてよかった！」

かわいい舌をチロツとのぞかせ、尚子は、首をすくめてニヤツとした。

「おぶってやろうか。もうすぐだけど……」

「よしよ。ブルブルだわ。おしりを撫でまわされちゃかなわないもの。……でしょう」

男をからかい尚子はクスクス笑っている。

(チエツ。こんちく生！ いまにみてろよ)

胸のうちで歯ぎしりかんで、晴雄は黙って

さきに立った。三階、四階、もうすこしのが

まんだ。もしも今ここで大声をだされたら、

それこそせつかくの苦心も水の泡である。

「あ、ここだ。高いところまでご苦労さま」

フーンというような顔をして、尚子はドアに手を掛け、うす暗い中をのぞきこんだ。

さあ！ と晴雄がうながしても容易に動か

ず、さすがに男ひとりの住居のなかへはいるのを、ためらっているようすが見えた。

「どうしたんだい？ きみのほうこそ口では

えらそうなことを言って、内心、ぼくとふたりきりになるのがこわいのだろうが——」

「ふざけないでよ。なによ、あんたなんか」

晴雄の巧みな挑発を真にうけ、いたくプラ

イドをキズつけられた尚子は、反抗的に威勢

よくなった。つかつかとあがりこんで、

「暗いじゃないのッ」と声をとがらせた。

あかりをつけて、晴雄は後ろ手でドアをし

らだにさわりたいのでしょう——」

めた。気づかれないように用心鎖を掛け、とたんに緊迫感がほぐれ、やれやれと思う。

女をアパートの自分の部屋へ誘いこむという、最初の難関はまずまず突破したらしい。

「あら、わりといいお部屋じゃないの」

もの珍しく視線を走らせ、尚子は、勝手にとなりの四帖半をのぞきこんだりしている。

晴雄は思わずヒヤツとした。物好きな尚子のことだ。平気でそこらこらを調べないともかぎらない。万が一にも押入れをあけられたら一大事、元も子もなくなってしまう。

あわてて、大きな窓辺へ尚子をさそった。

「ほら、ここから見る夜景、ちょっとしたもんだろ。きみのマンションはあっちだな」

「うん、すてき！ すこし不便だけど住むのには環境も良さそうね。でも、こんなに車の音がそうぞうしくて、安眠できるのかしら」

「国道のそばだから仕方がないんだ。慣れれば騒音なんて案外気にならないもんだよ。さあ、お掛けよ。つつ立ってないで——」

あらためて室内を眺め、尚子は、ソファ兼用の簡易ベッドへふかぶかと腰をしずめた。

「何か飲む？ 軽いワインならいいだろ」

「コーラ、ない？ 喉がカラカラなの」

キッチンで冷蔵庫の中からコーラを取り出

し、晴雄は、そっと尚子のほうをうかがう。

「本当なら、いまごろわたし、あなたといっしょにこの部屋で暮らしていたのねえ」

いくらか、しみみりとした口調だった。

「そうだよ。それがぼくの夢だった——」

「なんだか悪いみたい！ このアパートへはいるのは、そうとう高くついたのでしょう」

「うん、まあね。でも、もういいんだ」

「そんなに軽く言ってあきらめられるの？」

「仕方がないだろ。きみの意思だから……」

適当に言葉をかわし、その間に、晴雄は、溶かしたハイミナールをかきまぜる。

「はい、お嬢さま。どうぞ！」

「ああ、ありがと——」

ためらわず、まっ白な喉を見せて、尚子はコップの中身をひと息に飲んでしまった。

「おいしい！」

肢態が、がくつとゆるんだ。

「おなか、すいてない？ 何かつくろうか？」

インスタントばかりだが、ホット・ケーキに

ハム・エッグ、それぐらいならできるよ」

「いいわ、いただく！ これがあなたとわたしの最後の晩餐^{ばんさん}になりそうなもの」

「そう言ってくれると、ぼくはうれしいな」

ガス・テーブルの前で袖まくりをした晴雄

は、ついでに腕時計の針を数えた。

（三十分、いや二十分でいいだろう。だいたい酔っているから薬が効くのも早いはずだ！）

とにかく、人に怪しまれず、女を自分の部屋へ連れ込んだだけでも大成功である。あと

は獲物を料理する時間をかせげばよいのだ。

ハイミナールで陶然としている女に、べつの睡眠剤を飲ますことができればいい。

正体もなく眠ってしまうにちがいない。

（薬を使うなんて最低だな。男らしくない）

ちょっとした自嘲的なほろにがさがある。

だがその微笑のかげに、抵抗を失い、はだかにむかれていく白い肢体がちらほらする。

（なに、かまうもんか！ 相手はおれを裏切った高慢な女だ。思いきりやっつたるぞッ）

ともすればひるむ心を妄想でねじふせ、晴雄は、ひとりあわただしく動きはじめた。

「ねえ、晴雄さん。わざわざわたしを呼んで渡したいものって、いったいなんなの？」

なんでもないような軽い口調だが、実際はそれが目的で、ある程度の危険を承知で、尚子は男のアパートへやってきたのだった。

「ああ、それなら、その机のいちばん下にはいつている。あけて調べてごらんよ」

「ここ？ あらいやだア。こんなものなの」

「ここ？ あらいやだア。こんなものなの」

「しかし、ぼくにとっては大切な宝ものだ」

「手紙も写真も、焼きすてればいいのに」

「燃やすなんて、ぼくにはそんな勇気がないから、きみの手で処分してほしいんだ。それで、きれいさっぱり忘れようと思っている」

「そんなことで、忘れられるの？」

「さあ、どうかな。だが後生大事に持っていて、もしもきみに迷惑がかかったら大変だ」

「オホホホ。いかにも晴雄らしいわねえ。けれど、そのお心づかい、感謝します」

意外にしおらしく、尚子は礼を言った。晴雄がのぞくと彼女は写真の中を捜している。

あった！ 何枚かのフोटを選び抜き、ネガと合わせてバッグのなかへしのばせた。それは彼女自身のヌード・フोटであった。

あとはそ知らぬふりをして、尚子は、かつて自分がしたためた手紙の束をそばへ置き、三つ四つ、中身をひろげて読みはじめた。

「このころのあなた、まるで夢中だわよ」

「いまだって、同じことだよ」

「同じって？ まだ未練があるってこと？」

「未練なら、たつぷりとあるな」

尚子のしのび笑う声が聞こえてくる。

ハム・エッグができた。手ぎわよくレタスをあしらひ、晴雄はつぎの準備にかかる。

「あなたにはお気の毒だけど、でもね……」

「いいんだ。言わなくてもわかってるよ」

「そう、どうもありがとう！ あらま、ほんとにおもしろいわ。読んでみましようか。わたしもずい分エッチなことを書いたのね」

だるそうに尚子は大きなあくびをした。とたんに上体がぐらりとゆれ、姿態が乱れて形の良い脚が畳をすべってまっすぐに伸びた。

「……男のひとに足をなめさせるなんて、道義を無視した不自然なことです。はじめはあなたの異常じみた偏好が気味悪く、私の心は冒瀆的な罪悪感にひどくキズつきました。不潔感も強く心の奥に作用し、その瞬間まで心理的な抵抗に悩まされたものです。わけもわからずにあなたのするがままになっていました。だが、私の心身は、空恐ろしい思いに打ちのめされ、ただ羞かしさに縮みあがっていました。ところが、ふしぎなことがあるものです。ねえ。あなたがお帰りになったあと、私は、自分の心が意外にもさわやかなことに気づいてびっくりしたのです……。ホッホッホ、この気持ちホントなのよ。このころのわたしってまだ純情だったもの、あなたの性向を知って度胆をぬかれちゃった。でもね、あなたのこと、愛していたのは確からしいわよ。ホラ

このつぎを読んでみればよくわかる——」

自分を含めた過去の妖しい情痴模様をあげくことで、尚子は興に乗っているらしい。あるいは男に対する新しい挑発ともとれた。

「……あの行為は、あなたの真心なのね。そのことがようやく私にもわかりかけてきました。もう平気です。すこしは変痴的であつてもそれは理性とはべつ。私はあなたの口づけをまことの愛情だと思ふことにします。こんどは決して拒んだりしません。だからもっと大胆に、卒直に、ご自分が望んでいらっしゃることを私に求めて下さい。私、あなたのご期待にそえるような女に生まれ変わるつもりでいますの……。これ、いつだったかな」

忘れもしない。二年と九カ月前だ——。

晴雄はその夜のことを明確に覚えてる。

まだたまにしか会うことのない女の家で、全身羞恥の冷や汗にまみれながら、尚子の前に跪ずき、愛の告白とともに、異様な自分の欲望を告げてしまった。尚子の脚に魅せられて思わず口から出た言葉だが、そのあとで彼は自分の軽はずみな言葉を悔み、にがにがい懊悩の日をかさねたものである。

尚子の手紙が届いたのはそんなある日だ。最初の行為では動転した彼女も、二度目は

自分から言ったとおり何事によらず大らかであつた。素足はおろか、下半身すべてを彼の唇にゆだねるほどの変わりようだった。

それから二年、デートの不足分をおぎなう濃密なふたりの文通がくり返された――。

ことしの春、尚子は故郷のN市を離れた。

彼女の上京が愛のゴールインにつながるものだとは彼は信じていた。事実、当初は尚子もそのつもりだった。それで、いつでも彼女を迎えられるようにと、彼はこの団地アパートへ申し込みして運よく入居できたのである。

そして半年――。お互いにからのすみずみまで見せ合った仲なのに、突然彼女の母親から、一方的な交際の中止を言い渡された。

話によると、尚子に有力な支援者があらわれ、某化粧品メーカーの専属モデルに推せんされたからという理由だが、実際は、母親の権力がものを言う彼女の家庭が、コマースリズムを利用した虚飾にあこがれ、資質的に虚栄心の強い尚子自身も、無気味な性癖をもつ男、晴雄とのかかわりをきらいはじめたというのがことの真相らしい。多分、将来を思い、スキャンダルの種を恐れたのだらう――

(2)

ホットケーキがうまく焼きあがつた。紅茶の中へ粉末の睡眠剤をかき混ぜた晴雄は尚子のそばへサイド・テーブルを出し、つぎつぎと運んだ皿をその上へ並べた。

「紅茶にウイスキーを入れようか？」

「うん、適当にね。なんだかホカホカしてとってもいい気分よ。ああ、いい気持ち！」

尚子は、まぶたが重そうだった。瞳がぬれぬれとうるみ、心なしかトロンとしている。

「ウッフフ。ここへすわりたいのでしょ」

ホットケーキをつまんだ手で、尚子は自分のすぐ前を指さした。その眼がいたずらっぽく、男の心をさそっている。

「あんたがその気なら今夜は特別よ。ねえ」

二つ折りにしたホットケーキを、行儀悪く口にくわえた。と見る間に手がすべり、ミニスタイルの裾をまくりあげ、ガーターをゆるめた。

まるで薄皮をむくように、淡い肌色の靴下がスツと太腿の半ばまでおりてきた。

「あとは自分でおやりなさいな」

無造作に投げだされた脚が直線に伸びる。

「そんなに物ほしそうな眼で食いついたって味もそっけもないでしょ。ごちそうはねえ、お口に入れて、舌で味わわなくっちゃ……」

こういうふうにと、ビチャクチャと無作法な音をたてて口を動かしながら、尚子の片脚は示威運動のようになまめかしくゆらぐ。

その動作には、自分の下半身に惑溺する哀れな男へのあわれみがただよい、女のプライドをあらわにして恥知らずに迫ってくる。

憑かれたような凝視のあと、ホッと吐息をもらし、晴雄は尚子のすぐ前へすわった。

「大切に扱ってくれなくちゃいやよ。以前、わたしの脚がぼくの宝だって褒めてくれたけど、いまではわたし自身のかけがえのない財産になったわ。近いうちにこの肢体がブラウン管にお目見得するはずだから――」

オホホと、尚子は明るく笑った。

自慢するだけあって尚子の肢体は美しい。だがその美麗の質を、だれよりも早くみとめたのは、このおれだ！ と晴雄の心が叫ぶ。

優美に形づくられた曲線にそうて、ストッキングを巻きおろした。やわやわしくはずむふくらはぎを手の平でささえ、胫から足首、くるぶしを愛撫した片手がかかとを受けた。

えぐったような土踏まずのくぼみに唇をおしつけ、足のうらをくまなくなめて、晴雄は足の指を一本ずつ口に含んで吸いつづけた。

物おじもせず、目を細めた尚子は、男の奇

怪な行動を眺めてうっとりとしている。

「なんだか物たりなそうね。いいわよ、今夜が最後なもの、たんのうさせてあげます」

アルコールの作用と、ハイミナールの効果とで、女は適当に戯れていた。ひと息に紅茶を飲んで自分からもう片方の靴下を脱いだ。

「これでいかが？ お好みどおり熱烈な奉仕を受けましょう。あ、その前に、あんたも、はつきりと自己表現をしなきゃダメよ！」

一瞬、晴雄の顔が醜くゆがんだ。はげしいためらいが恥知らずな行動を戒めるのだ。

「いやなの？ お別れに敬意を表したいと思ったのに——。それじゃわたし、帰るわ」

待って！ 言葉より早く晴雄はシャツに手を掛けた。ファスナーを一気に引きさげ、最後のブリーフが小さく足もとにつくった。

煙ったようなまなざしで男の実態をたしかめ、尚子は誇り豊かに笑ったようだ。

たちまち露出症に変質した男を足もとへうずくまらせて、おおかた、あのふしぎな優越感に浸りきっているのだろう。徐々に羞恥の衣を脱ぎすて、いきなり攻撃をかける足が躍り、指さきに力をこめた。踏みにじられ、晴雄はのけぞってうめいた。

怒りあらわに、奮然とした男の顔は、力強

く彼女の足ゆびに刃向かってくる。精気みなぎる反抗を快く受けとめ、満足そうな尚子は伸びやかな素足を誇示した。

「あ、ああー。美しい……」

「そう、ホント？ そんなにきれい——？」

「ああ、きれいだとも。いつ見ても……」

それは、男の本性から出る嘆声だった。

やがて、報復のイケニエにする相手だが、

一瞬の晴雄の心に、かけらほども、虚構はない。女の片脚をかかえ柔肌に唇を這わせる。

誇らしげな嬌声が男の機先を制するように降りかかる。

「そろそろお別れの時間だわ。あんたも、ケークを、いかが？ ホラね、こうして……」

声は微妙にもつれたが動作は軽妙だった。

カッコよく丸めた食べ物を器用な手つきで飾りつけ、そのさまを見せびらかして大声で笑い、とたんに尚子の肢体から力がぬけた。

「あーあ。なんだか眠くなったわ」

「そのごちそう、食べてもいいかい？」

「ああ、いいわよ。好きにしてちょうだい」

尊大な女も睡魔に冒され、いぎたなく足をひろげたまま、急にぐったりしてしまった。

「どうしたんだい？ しっかりしろよ」

「妙よ。眠いの。あら、なんだか変だわ」

はじめて、尚子の表情に不安の影がうつろい、立ちあがろうとして思わずよろめく。

「アーッ。晴雄さん。あんた、まさか……」

「そのマサカだ。きみはじきに寝るはずだ」

「卑怯よ。そんな、眠らせて、なんて……」

悲鳴に似た声をあげて、尚子は無意識に反抗しながら、足もとの頼りなさに平衡感覚を失い、ぐらっと横ざまにひっくり返った。

すかさず、女の口を押えて声を防ぎ、

「眠いだろ。寝るがよい。ゆっくりとおやすみ。きみは眠る。気持ちよく眠る。ほらね」

と、子どもをあやすように耳もとでささやく。ものうく、やわらかなリズムにのった男

の声は、催眠術者がかける暗示に似ていて、女のからだは、急速に力を失っていく。

口に当てたタオルをすてて、晴雄は尚子にのしかかった。膝がしらで手首を押え、顎をつかんで首をぐらぐらゆすってみた。

小さな声をだし、とろんとまぶたをひらいて、尚子はすでにまどろみはじめている。

間近に顔が迫ってきた。その表情を見て、

（鬼だわ。赤い鬼！ ああ、こわい……）

と、腹の底からおびえて身をふるわせた尚子は、（目ざめたとき、驚くなよ）という男の声を、はるか遠くでおぼろに聞いていた。

「馬鹿め！」とあざ笑ひ、晴雄は、しまりなくゆるんでいる尚子の唇をひんめくった。

ぬめぬめとした紅色が男の心を刺激する。

血走った目をきれいに艶光る齒にそそぎ、いきなり指をつっこんでこじあげた。

ぬらっとするやわらかさに爪をたて、苦心してつまんだ舌を思いきり引き伸ばした。

クーツと奇妙な声で泣き、一瞬、ぱっちり目をひらいた尚子は、つらそうに眉を寄せ、

いや、いや！と首をかすかに振ったが、抵抗はすぐに弱まり、舌の根に感じたおぞましい痛みを最後の知覚にして、数分をまたず、

心地よさそうに寝息をたてはじめた。

晴雄はゆうゆうと女の服をはぎ始める。

「馬鹿な女め！」

と、つぶやき、手はずどおり、女をかかえて浴室へと急いだ。

小さな浴槽に小さな籐椅子が浮いていた。

持ち重りがする生人形は、扱うのに骨がおれる。さんざんな苦勞をかさね、ともかく椅子にまたがらすことができた。そうして出来

上った姿態は、予想以上に効果的であった。

尚子は、湯面すれすれに肌を見せて、おうような態度でふんぞりかえっている。

彼はまず、先程女が誇らしげに飾りつけたケーキが気になり、平らげにかかったが、途中で彼はドキンとした。

熟睡しているはずの女が、ふいにはげしい身じろぎをしたのだ。そればかりか、あえかな声をもらしてからだをゆすった。とは言え

表情は和らぎ、女は穏やかに眠っている。ふしぎな女の反応に彼の全身はまっ赤に染まった。はげしい情火をしずめようもなく、女を

弄ぶことに熱中し始めた。

以前なら絶対に赦さない行為なのに、眠れる美女は、きわめて寛大であった。

一時間後、晴雄はもとの部屋へもどった。意思の無い人形はぐったりとして、ことさらな重量感がかかえた腕にすぐこたえる。

さすがに疲れ、ソファへ寝かせてホッとひと息、彼はぼんやり人形の姿を見つめた。

湯気がこもり、どこか幻想的なムードがただよう浴室と異なり、明るい光の中の人形の美は、一段とすがすがしくてうるわしい。

汗ばんだからだをていねいに拭う。すると十分にお湯でうるおった素肌は、見るまに暖かそうな明色に染まり、この世のものとは思

えぬほど、きれいな輝きを放ちはじめた。

見ていると疲れがうすれ、またぞろ先刻のシーンを再現したくてたまらなくなる。

横暴なひとり遊びにたんのうしてから、彼は、ふたたび、人形に服を着せはじめた。

(3)

「お嬢さん。いい加減に起きたらどうだい」床にすわり、ソファのはしに肘をついて、晴雄は、平然と女の顔をのぞきこむ。

尚子の熟睡をこれ幸いと、寸前まで、弄りものにしていたことなど知らぬ顔で、彼女の頬っぺをひたひたとたたいて、ニヤッとする。隠れてペロツと舌を出した。

「あ、あー。いやよ。うるさいわねえ」

まぶたが重い。涎のたれそうな声だった。

「どうするの？ 帰るんじゃないか？」

「ああ、そうだった。帰らなくちゃ——」

ようやくひらいた目がとろんとしている。

「わたしが泊っちゃ、つごうが悪いの？」

尚子は、すこし意識がもどったらしい。すぐに意地悪くあげ足とってからんでくる。

「いいや。きみが泊ってくれるなら、ぼくは最高の感激だ。どんなムリだってきくよ」

「そんなことを言って。……後悔するわよ」

「後悔どころか、ぼくはうれしいんだ。さっ

きだってきみがくれたごちそう、食べたよ」

「ごちそうって——？」

「ほら、ホットケーキだ。忘れたのかい？」

「ああ、あれ。たべちゃったの、あんた！」

「うん。たべた！ おいしかったよ」

「あきれた！ どうやって食べたの？」

「きまってるじゃないか」

「あら、いやだ」

「ダメなんだなあ、ぼくは——。きみのこと
ならって、すぐ、その気になっちゃうんだ」

「おかしなひと！」

小さな声が笑った。

「きみのドレイになりたいんだ、ぼくは！」

「いつかそんなことを言ったわねえ」

「変わらないんだなあ、ぼくの気持ちには」

「いま、どんなムリだってきく！ そう言っ
たわねえ。あのことば、本当なの？」

「本当だとも、それがぼくの本心だよ」

「ホント？ 何事にも服従するって誓う？」

「誓うよ！ その代わり、気が向いたときだ
けでもいいから、ときどき会ってほしい！

今夜のことは生涯忘れないつもりでいる」

「ホントかしら。いいわよ、それなら……」

「ぼくを見すてずに、会ってくれるのかい」

「それはね、あんたの心掛けしだいよ」

「どうすればいいんだ。言ってくれないか」

「そうね、なにをしていたかどうか……」

眠そうな声がかすかに笑い、だらしなく伸
びた手が男の耳をつまんで引き寄せた。

「……ねえ、わかる？」

「ええッ。なんだって——？」

一瞬、晴雄はボカンとした。まん丸く目を
むき、あきれかえって尚子を見た。

「わたし、眠いの……。いま、モヨオシてい
るのだけど、動くのが面倒くさい——」

いつとき、戦慄とも悪感ともつかぬ異様な
おののきに頬をひきつらせたが、しーんとし
た深い目色で、晴雄は尚子を凝視した。

いつの間にか、ソファのはしをつかんだ指
に力がいり、肩が、全身が、小刻みにふる
えている。あまりにも真剣な男の表情に気づ
き、さすがに気味悪くなった尚子は、

「いやだ。いまのは冗談よ。困ったひと」

オホホ、オホホ……と笑いだした。

「いいや。冗談でなくてもいい！ きみのも
のなら……。ぼくは、よろこんで……」

区切って力をこめたが、声はふるえた。

尚子は、ひたと晴雄を見た。ものうい顔も
そのときばかりは妖しい翳りがたたかった。

晴雄の心は憤然としていた。ま新しい憎悪

と、かつてなくはげしい嫌悪感と——。

しかし、彼自身の本質的な心底で、抵抗と
妥協と、理性的な思考とハレンチな欲望とが
入り乱れ、はげしい相克をくり返していた。

資質的な本性だと、言ってしまうばそれま
でだが、以前、彼は、いま尚子が言ったよう
に、彼女が排泄する液体を欲しいと思い、そ
んな自分の姿を何度もまぼろしに描き見たも
のだ。晴雄のお粗末な嗜癖を知りつくした尚
子が、そのことを口に出して、からかったの
も、当然かも知れない。

「嘘よ！ そんな下品なこと、わたしのほう
で願ひ下げだわ。あーあ、眠い！ このまま
もうしばらく、そっとしといてよ」

言うと同時に首がかたむき、尚子のからだ
から力がぬけた。その肩をゆすって、

「ねえきみ！ ぼくのことなら心配いらん。
そうすることでぼくの誠意がきみに通じるの
なら……。きみはぼくをためせばいいんだ」

「しつこいのね、あんた！ わたしは真ッ平
よ。そんな趣味はないの。おあいにくさま。
あ、それより、お水をちょうだいな！」

しばたいた目が、早く！ と怒った。

「うん。じゃ、持ってくるから……」

台所へ立って、晴雄はニュツと口もとをゆ

がめた。ほろにがい笑みがゆらめきたつ。

大急ぎでソーダ水をコップにそそぎ、粉末の睡眠薬をふりかけてかきまわす。

「ソーダにしたよ。そのほうがさっぱりするだろうと思って。いやなら取り替える」

「いいから早く——」

「はいはい、お嬢さま。はい、どうぞ！」

「あら、のませてくれないの？」

「——？」

晴雄は、ちよつととまどう。

尚子は、すぼめた口を彼のほうへつき出した。男の表情をうす目でうかがい、その目がいたずらっぽく笑っている。

「これは、光栄だ！ いいのかな」

「なによッ。うずうずしているくせに」

晴雄はコップの中身をいっぱい含み、おそろおそろ顔を寄せていった。尚子の唇からはいまなおアルコールと脂粉の香りが発散して、刺激的なおいがした。

睡眠剤入りのソーダをのみ、尚子は

「ああ、おいしい！ もっとちょうだい！」

男の心を手玉にとり、愉しんでいるのだ。

そんな尚子を、晴雄は心の中であざ笑う。

「晴雄さん。あんた、さっき、わたしを眠らせておいて、わるさをしたのでしょ」

「しないよ。ごちそうをいただいただけだ」

「嘘おっしゃい！ ごまかしたってダメよ」

「そんなに言うのなら、あらためてわるさをしてやろうか。きみは知らないだろうが、このところ、ぼくの好みは変わってきている」

「へーえ？ どう変わったの」

「いまにわかる、いまに——」

晴雄は尚子を相手にせず、そこらへんをきれいに片づけはじめた。

「おい。起きろッ。起きろよ、尚子！」

正体もなく、寝入ってしまった尚子の足をつかみ、晴雄はソファから引きずり落とす。

「あア、なにをすんのよ、なにを——」

チカチカ痛む目をこすって、尚子は憤然とした。だがまだ夢うつつで、からだはもとより、ことばももつれてだらけきっている。

「何をしようとおれの勝手だ。騒ぐなッ」

「そんなことを言っ、いいの。わたしをおこしたらもうこれきりよ。すぐ眠いのだから、このまま寝かせて……ねえ」

「そうだ。眠いはずだ。たてつけに薬をのんだのだからな。寝たらいいじゃないか！」

横ずわりの足をしどけなく伸ばし、畳に手をつき、ようやくからだをささえていた尚子

は、この声に一瞬ギクツとし、おぼろな目をあげて怨めしそうに男をにらんだ。が、その首も力なくたれ、こらえようもなく、ずるずると畳の上で長くなってしまった。

「いつまでもここにいとロクなことはないぞ。早く帰ったほうが身のためだが……」

言葉を区切り、尚子の髪の毛を鷲づかむ。

「ただ、帰ることができるなら、の話だ」

ア—とひと声、尚子は必死に起きあがろうとする。その肩へ晴雄は軽く足をかけた。それだけで尚子のからだはごろんところがる。

あお向いた顔が眉根をしわめて苦しうにゆがみ、しかし、早くも寝息をたてていた。

「起きるんだ、尚子！ あとでいくらでも寝かせてやる。だがその前によく目をひらいて新しい自分のすみかを見るんだ。そらッ」

晴雄はサツと押入の襖をひらいた。

「なによ。なにがあるの……」

寝ぼけまなこでうるさそうにつぶやく。

「見る。これがなんだかわかるだろうが」

「なに、これ？ 細い木が並んでいる——」

「この中はな、お前がはいる檻だッ」

「おり？ お、おりって——？」

「家畜小屋だ。つまり、メス犬の部屋だ」

「かちくごや——？ メスイヌ?! こ、ここ

へ、わたしを入れる……って、いうの……」

いくら意識はおぼろでも、その瞬間は尚子も晴雄の言う意味がわかったらしい。ヒィーと叫び、膝と手を交互に動かし、尚子は這って逃げた。四肢が頼りなくふるえている。

「心配するな。じょうずに飼ってやるから安心しろ。ぐっすりとやすんで、あとはあしたのおたのしみだ。さあ、寝ろ寝ろ！」

ふらふらの女を押えるのは造作がない。四肢をとらえて身動きさせず、有頂点の晴雄は間のびした声で子守唄を歌いはじめた。

彼がひらいた襖の中——。そこは細い角材を縦に並べた、巧妙な檻になっていた。

こんなものを尚子が見たら、即座に男の意図を知って逃げただろう。だが彼女は、以前と変わらぬ相手の変痴ぶりを安易に見つめ、妖しい愉悦をむさぼろうとしたのだ。

（ひと晩ぐらい泊まったって、いいわ。これきりだもの、ムードしだい！ ウフフフ）

哀れな男に情けをかけてやるような、尚子は、そんな軽い気持ちでいたのだろう。

器用にこしらえたぐり戸を開き、晴雄は尚子の足首をつかんだ。

ふたつに仕切った押入の下段は、当然のこ

とだが天井が低い。すわっても頭がつかえる窮屈さだった。大切な玩具をこわさない慎重さで、彼は女のからだを中へ運び入れた。

狭くても、それからあとの仕事は早い。

手ぎわよくまるはだかにむきあげ、まず両手を後ろ手に縛った。おおむけにころがし、足首にはべつべつに細引をからめる。そのはしを鉤に結びつけた。

白い喉に首輪をはめて同じようにつなぐ。

最後に口をこじあけて舌をつまみ出した。

人形は脚をひろげ、茶色の首輪が衰れをさそう。もっとも無残なのは口もどだった。

妙な金具をくわえている。水枕に使う止め金である。キズつかぬように舌をはさむ部分は細工がしてあるが、ちょうど水枕の耳を押えるように、だらりとはみ出したやわらかい舌を強引に締めつけ、両端につないだ皮の紐を首の後ろへまわして、しめてある。

予定の行動がすべて終わり、晴雄は、かさなるようにして、自分の細工を点検し、舌を吸い、なごり惜しそうに檻から出た。

(4)

居間の押入に秘密の座敷牢を造り、そこへ小森尚子を閉じこめてやろう。そして優美な

肢体をじっくりと鑑賞し、家畜同様に飼育して、羞恥と屈辱感で苦しめてやりたい！

日ごろ小心な成田晴雄が、こんな大胆なことをくわだてたのは三カ月前のことである。

中層耐火建築の団地アパート——。

それは、淡いクリーム色の壁に囲まれて孤立する一種の密室だ。近所づき合いはほとんどなく、自分だけの核を築き、社会に背を向けた断絶地帯を形成することもできる。独自の思いつきで、ただひとり殻の中に閉じこめることも自由だった。

彼が、尚子とふたりだけの愛の巣をいとなもうとしたこのアパートは、とくにその条件を兼ね備えていた。国道のそばだから車の騒音は避けられないが、アルミサッシの窓をしめると、その音もぼおんとうつろにひびく。すこしぐらい大きな声を出しても、絶対に外へもれる気づかいはなかった。

尚子の心交わりに憤激し、失意の日をかさねていた晴雄は、アパートの建築様式からその事実をつきとめたとき、急にあわただしい血潮のざわめきを覚えた。

現代を象徴する断絶化の現象を逆用してやろうとの思いが走り、高ぶって心が燃えた。やがて彼の脳裏では、綿密な計画のもとに不

敵なたくらみが渦を巻きはじめたのである。
(よし。おれの真心を踏みにじった憎い女、尚子のやつに思い知らせてやる！)

成るか成らぬか、それは論外。いっとき晴雄の想念はあらぬ方向へ遊飛し、ふしぎな情熱が妖しい欲望と闘争心をかきたてた。

アパートの入居費用が高くついて預金は減ったが、年末と夏期とのボーナスがある。それを資金に、彼は本格的な準備をすすめた。

室内の構造もつごうがよく、六帖間の押入の襖は幅の狭い変わり型の三枚だてだ。押入の向こうは物置とトイレ、小さな浴室がつづいている。側面には隣家との境の厚い壁がある。押入の中を座敷牢に改造するにはもってこいの条件がそろっていた。しかも相手は女だし、それほど頑丈な装備はいらない。

ラワンの角材と目の荒い丈夫な金網。メッキした金属パイプにさまざまな金具。それらの品物をひそかに購入した日から、さっそく彼の大工仕事が始まった。土曜日の午後や日曜日は、ひたすら新しい仕事に没頭した。檻を造ることはドッグ・ストアへ行ってヒントを得た。飼育用の鞭や首輪もそろえた。二カ月後、六帖間の押入の下半分は木の枠がはまり、見た目にも見事な檻に変貌した。

床は柔軟なマットを敷き、その上をカーペットで押えた。照明用の配線もしたし、四囲のささえ木には鉤^{フック}を埋め、強靱な細引を結びつけた。手かせや足かせも自分で考案した。あとは、当の相手、小森尚子をどのようにしてこの部屋へ誘い込むか？ それがいちばん困難な思案となった。

だが幸いなことに、以前、尚子の肢体を讚美して素足に熱中していたころ、彼は、彼女の自尊心や虚栄心を巧みに煽り、かなりどぎついヌード姿態の撮影に成功している。

尚子の変心を知ったとき、その写真を利用して脅迫してやろうと思ったものだが、その写真が最も効果的な誘惑の材料になった。

彼は久しぶりに尚子に電話をした。予想どおり、いったんは激しい口調ではねつけた尚子も、彼が「ヌード」を言葉にすると、しばらくしながら内密に会うことを承諾したのだ。

土曜日の夜、ひそかに尚子と会った彼は、念願どおり人目を避けて女を誘い、とうとう檻の中へ追い込むことに成功したのである。

異様なうめき声が晴雄を目ざめさせた。まだ全身にけだるさがよんでいる。寝不足した目がチカチカと痛んだが、静寂の中で

とらえた女のうめき声が、たちまち彼の精気をよみがえらせた。

あわてて起きあがり、意外に冷えびえした室内の空気に思わず身ぶるいをして、ガス・ストーブの火を大きくした。

気がつくとき、窓の外には、早くも明け方の光があった。きょうは日曜日。思いどおりに女をいたぶる遊びの時間は十分にある。

晴雄は勢いよく襖をひらいた。中をのぞき見、めくるめく幻想的なシーンを眼^まのあたりにして、彼はゴクンと生つばを飲んだ。

冴えた光を満身に浴び、顔を真っ赤にした女が爬虫類^はながらにうごめいている。それは、まさに珍しい生きものの生態であった。

「う、うむッ。これは、すごい！」

一瞬、珍獣の肢体が硬直した。が、すぐにひろがった足を縮めようと狂おしく動く。きびしく四方へ引き伸ばされているので、もがけばもがくほど四肢に痛みが加わる。そうと知りながら汗ばんだからだの自由を求め、女は、むなしいうねりをくり返している。

晴雄は笑いかみ殺して、あきもせず、上の穴から生きた人形の動きを見つめた。正面につっ立った彼の上半身は、檻の中の尚子の目には、すこしも見えないはずであった。

小森尚子は、意外に早く目ざめていた。

恐ろしい夢を見たのだ。大声で救いを求めて、自分の声におどろいてぼっかりと目をひらいた。瞬間、光彩に目がくらみ、眼球に突きささる鋭い痛覚にドキンとした。

しっかりとまぶたを閉じ、しかし夢うつつの思考はまだうつろであつた。遠い遠い意識の中で、苦痛ばかりがからだじゅうを責めつける。それは、寸前に受けた瞳への刺激だけでなく、脳髄をかきみだすような無気味な鈍痛とともに、あらゆる感覚が麻痺して、全身がバラバラになったような感じなのだ。

ああ、いやな夢！ と、気持ちを落ち着けようと呼吸をととのえ、ゆっくりとまぶたをひらき、とたんにがく然と目を見張った。

夢ではないのだ。あざやかな光を鈍く反射し、整然と並立する木柵を、彼女は見た。

(なぜ? どうして? どうしてなの……)

いらだたしく淡い記憶を懸命にまさぐる。

(ア、そうだ。お、おり! 檻の中——?)

ゆうべ、にわかに睡魔におそわれ、もうろうとした意識の中で、彼女は恐ろしい男の声を聞いた。おぼろな視野に檻を見て、たましいが凍りつくような恐怖を味わい、夜じゅう無気味な檻の幻覚に脅かされたが、それはあ

くまで夢魔の一端でなければならぬ。だがここは、まぎれもなく檻の中であつた。

容易には信じられない奇怪な現実に直面して、わが身を見定めようと首を起こした彼女は、ふいに喉奥をしぼって大声でわめいた。

舌が痛い。根もとから引き抜かれるようなはげしい痛みだ。しかも声が出なかった。

さきほどから、尚子は何度も大声で叫んだつもりなのだ。それが奇妙にも声にならず、むなしい喉のひびきに終わってしまう。それもそのはず、彼女は舌を引っぱり出されて、何か、得休の知れぬものではさまれていた。

光彩は意地悪く文字どおり昼をあざむき、まだ眼が痛い。頭の中がズキンズキンとひびき、下敷になった両腕には知覚がない。

からだだけはわずかに動いた。が、その自由にも限度があり、筋肉は過激な運動をした翌朝のように、疲れきった苦痛がある。

何よりも彼女に懊悩を強いるのは、大きくひろがった足の位置であろう。

檻の中で、しかもはだかで縛られて——。

(どうしてこんな…… どうして——?)

昨夜、いったい何が行なわれたのか、こんせき痕跡れき然としてわかりすぎるほどわかっているのに、悲しい自問をくり返しながら、尚子は

とぼしい記憶の断片をまさぐりつづける。

晴雄がもらした切れぎれの言葉をつなぎ合わせ、急に悪感が背筋をつらぬく。新たな恐怖でみぞおちのあたりがキュッとうずいた。

自然に涙があふれた。苦痛の涙だ。恐ろしくて、蓋ずかしくて、くやしくて、それでいて、そのいずれでもない。

強いて言うなら、自信たっぷりで制御したはずの気弱い男が、こんな不遜な反逆をくだてていたのを予知しなかった自分に対し、そのウカツさへのやり場のない^{ふんまん}忿懣かも知れない。さらにまた、痛ましく傷つけられたプライドに対する愛惜の涙でもあるのだろう。

舌をはさまれてもの言えぬ口。むき出しの豊かなふくらみ、閉じられぬ両方の脚——。

隠しようのないはだか姿に、尚子は齒がみしたい屈辱感を味わいながら、齒をかみ締めることもできず、哀れなわが身に涙する。

決して出すまいと心をいましめても、動物じみた奇妙なうなり声が自然にもれた。

そのとき、ふいにひらかれた外の襖——。

びくっと顔をねじ向けた尚子は、そこに反逆者の勝ち誇った猛々しきを見た。

尚子は、男の意図のすべてをそこに見せつけられて、身の毛のよだつ思いがした。

晴雄は、押入の上段に身をのりだし、こしらえてある穴から下をのぞきこんでいた。

いくら見ても見あきがしない。彼が夢想したとおり、濃艶な人形は今、狼狽のなかに羞恥と屈辱をない混ぜ、優美にくねり、絢爛たる絵巻物をくりひろげている。

「どうだい！ その住み心地は——」

白い筋肉に、けいれんが走った。

くやしさに皮膚をふるわせ、尚子は血相を変えて声のする天井をにらみ、大声で何か叫んだ。だが、懊惱をこめた憤りもなぜかむなし、その口もとがキラッと光る。ツーツと涎をたらし、ぬれた頬が美しくギラつく。

そのさまは、妖美といえよう。男の目にはまたとない華麗な見せ物であった。

快美的な異様な戦慄がつづけさまに背筋をつらぬき、興奮のあまり膝がしらが小刻みにふるえるのだが、それすらが、哀れなイケニエに、より深刻な恐怖を与え、威圧感をおしつける。

「思い知らせてやると言った、ぼくの言葉の意味がよくわかっただろうが——」

上から落ちてくる気味の悪い声の中には、なまぐさい情感がこもり、女のたましいをいやらしく責めつけてくる。尚子は叫んだ。

「わめいたってムダだ！ 第一、何を言っているのか、おれにはさっぱりわからんぞ」

男は襖を片方へ寄せた。すっかり中が見えるようにして、しげしげと眺めて嘲弄する。奇怪な猿ぐつわのため、尚子の声はまともな言葉にならない。細い笛の音に似た悲鳴が長く尾を引き、もの悲しくうつろにひびく。

「なんだァ？ もっとはっきり言えよ」

くぐり戸から這いこんだ晴雄は、のしかかって耳を傾け、尚子の感情をもてあそぶ。

「ああ、わかった！ おトイレだな——」

尚子のからださがサッと色づくのを見て、彼は、ゲラゲラといやしく笑った。

「よしよし。すぐにラクにしてやる！」

いったんいましめを解いてうつ伏せに縛り直し、足首の細引をつかんで檻の外へ出た。

「ちゃんと用意してあるから安心しろよ」

これだ！ というふう容器を見せた。

病人が使用する女性用のうつわを見て、尚子の顔色が白けた。ぼう然と声を失い、無意識のうちに首が左右にゆれ動く。

「いやかい。いやならそこで勝手にしろッ」

口もとをゆがめ彼は冷然と言ひ放った。

何かを訴え、しばたたく女の眼からどっと涙があふれた。深い悲しみの色が流れる。

「どうする！ おれの意味にさからうと、その美しい脚にみみず腫れができるぞ！」

単なる威嚇ではない。彼は強引に麻縄を引いた。そこだけ一列とばしてある柵のあいだから、美しい脚がによっきりと生えて出た。ゆうゆうとタバコを吸いつけ、太腿に近づける男を見て、尚子はひときわ高く叫んだ。

「なに！ 卑怯者だど？ なんとでも言え。

ぐずぐずしていると容赦はしない。このタバコの火は恐ろしいものだぞ！」

彼は、すぐ真上でポンと指さきをはじく。グワッとうめき、尚子の脚が戦慄する。痛

覚は一瞬だが、はらわたをえぐるほど鋭い。小さな火は獲物を求めて内側へ侵入した。

ジジジとかすかな音がして、気味の悪い異臭が鼻をつく。

「もっと焼いてやろうか。いやなら向こうをむけ。前かがみに尻を持ちあげるんだ！」

片脚を捕えられたまま狂ったように暴れ、

尚子の顔がみじめにゆがむ。切迫する下腹の痛みに耐えかね、がくつと力がぬけた。

涙の顔で、尚子は哀れなポーズをとった。

——次号完結——

×

×

×

×

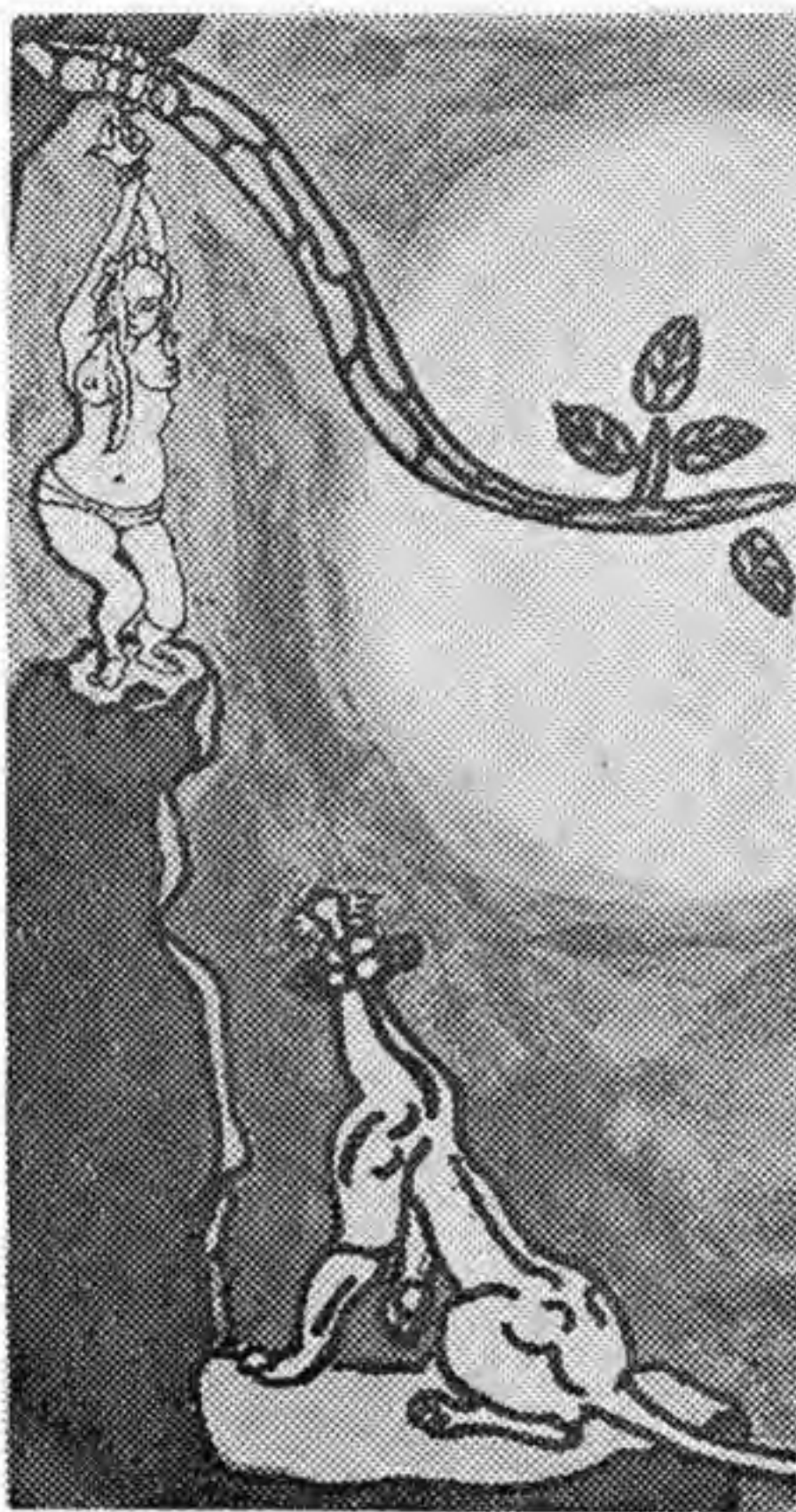
×

×

懸賞入選

翻訳ミステリーのSM紹介

スパイ・アクション



ショー・ラムワカ

(カットも)

イギリス情報部は行方不明となった「K」を捜索するため「ジェースン・ラブ」なる、アマチュア・スパイを現地におくりこむ。

さてテヘランにきたラブ氏、イランとクウェートに、今まさに起こらんとしているクーデター事件に引きずりこまれ、まごまごしながらも何とか事件を解決するのである。

サディストには、クーデターの実行主任をつとめる医師アンドレー・シミアス。

彼はスパイ生活のストレス解消のため、部下や女に鞭をふるうのである。

犠牲者には、イギリス情報部のローマ支局員でありながら、シミアスの情婦となり、逆スパイに利用されている女、シモーヌ。

サド場面は、「K」暗殺の報告をまつ、シミアスの邸にて起こる。

『シミアスは立ち上ると、身体に厚いタオルをまいて、観音開きの扉を押しあけて、天井

一九六〇年代を、ミスター・ボンドが、せっけんして以後、華と乱れ咲いた、スパイ・アクション。

それ等の、必要最低条件となったサド・マゾシーンは、鞭、檻、ヌーディスト・キャンプ、女闘美、エトセトラと多種多様である。

今回はそれ等の内の、

「忘却へのパスポート」

「秘密指令シリーズ」

「ナポレオン・ソロ・シリーズ」

「エイプリル・ダンサー・シリーズ」

「モデステイ・ブレイズ・シリーズ」

以上の作品群から若干をとりあげてみる。

○

『忘却へのパスポート』著者ジェイムス・

リーサー。向後英一訳

物語はイランの首都テヘランでイギリスの情報員「K」が暗殺されるところで始まる。

の高い広間にはいつていった。

そこでは厚いカーテンが光線をさえぎっていたので、まるで昼間が急に夜になったようであった。

彼は暫くの間、暗さに慣れさせるために目をぱちぱちさせていたが、やがて見慣れた装飾品であるバロック風の置時計や、大理石のテーブルのところに立っている娘や、そのテーブルの上においてある細いむちが見えてきた。

娘は小柄で、その木綿のワンピースの薄い生地の下には、いかにも娘らしい固い乳房がぴんと張っていた。

彼は柔かいじゅうたんの上を歩いて行って娘の前に立った。

彼女は、こわそうに彼を見上げてから、これから叱られるんだわと考えているようにうつ向いたが、その顔はかすかに紅潮していたし、その目は何かを期待しているように輝いていた。

彼女の顔を見ていた彼は、これが初めてではなかったけれども、苦痛を与える方と受ける方と、一体どっちがより多く楽しむのだろうか、と考えていた。……略……

やがて彼は彼女を押えて、その口で彼女の

口をふさいで舌をからませながら、細いむちをとった。そして、急にうしろにさがって彼女を見た——彼女は顔をそむけていた。

「お前はまた馬鹿なことをした」と、彼は、静かな、優しいといっているくらいの声でいった。

「だからお前は、その罪をつぐなうだけの仕置きをうけなければならぬのだよ」

むちを高く振り上げたと思うと、ぴしりと音がして、そしてまた高く振り上げた。……

略……シミアスは服を着かえて時計を見た。

……略……「ここで待ってなさい」と彼が少女にいった。

「ふたりのひとに会わなきゃならん。お前は会わん方がいい。二十分したらそとで会う」

(向後英一訳「忘却へのパスポート」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック。第九〇号、五九〜六二頁)

この後シミアスは二人の殺し屋から「K」を暗殺した旨、報告を受ける。

この「K」なる人物はイギリスのスパイであると共に実は先刻から鞭打たれていた少女シモーヌの父なのである。

『シミアスは酒をついで、髪をなでつけたがアルコールが廻っていくにつれて、別間で待っている女のことを思い出した——仕事には報償というものがあつた。』

彼は、底の厚い、しか皮のクツをはいた足で、音も立てずに広間を横切つて行って、黒塗りのドアをあけた。

彼が思っていた通りに、彼女はそこで彼を待っていた——

彼女の姿は、まるで彼がその部屋から一歩も出なかったようであつた。

彼女が彼を欲しがめる気持、彼に侮辱され傷つけられたい気持は、いつもと変わらず、強かつ深かつた。……略……

「なぜ笑うの？」と、すんだあとで彼女がその大きな黒目で彼を見上げながらきいた。

「笑ってなんかいないよ」と彼は嘘をいってひたひたにかかっている彼女の髪の毛をなで上げてやった。

しかし彼は笑っていたのだ。

自分が指揮をした殺人が一発でうまくいったという報告を受けたそのすぐあとでその殺された男の娘の身体を隅々まで味わうとは、なんとまた愉快なことだろうと、彼はそれとばかり考えていた。』(前記六九頁)

シモーヌは、自分の父がシミアスに殺された事にきづかず、クーデターが失敗しシミアスと共に死ぬまで、彼の情婦としてつくすのである。

サド場面は前述の部分があるだけだが、シモーヌがシミアスを尊敬までしながら愛し尽すので、この作品全体に、やりきれないような、モヤモヤしたムードがただよっている。この作者は、ディクソン・カーに似てムードづくりがうまい。

マルキ・ド・サドのかいた「悪徳の栄え」のなかに同じパターンのものがある。

これにも親を殺された娘ジュリエットが登場し、殺人者ノアルスイユの情婦になるのだが、この場合のジュリエットは、ノアルスイユの親殺しの告白をきいているのである。

だが、彼の生き方に共鳴してしまったジュリエットは、喜々として情報の役割をつとめる。

これではまるつきりサド・シーンにならない。ジュリエットに自由にふるまわせるノアルスイユには、かえって罪のつぐないをしている道学者の面影さえ感じられるのである。

むち
鞭がよし マゾが都の 女郎花

今日 九重に 勾ひぬるかな

——シモーヌ——

『秘密指令——叛逆』E・S・アールンズ作、井上一夫訳

この物語は、プロットやアクションは面白いが、サドシーンは、かわりばえしないのが一カ処でてくるだけである。よってここでは裸体キャンプの場面のみ紹介する。

『右手にキャンプ・ファイアーをかこんで裸体のグループがあつたが、その数はへつていた。』

照明灯に照らされたまっ黒な波打ちぎわやその向うの砂丘と、ゆがんだ棧橋のほうに散らばっているのだった。

風はあたたかく、たき火の輪の向うは月光で陸も海も銀色の光で蒼然と照らし出されている。

彼はカリィヌをさがしたが、カリィヌはいなかった。……略……

そつと彼女の名を呼んでみる。

どこからともなく、女らしい人影が防波堤の足もとのやわらかい砂地の影になったあたりにパツと現われた。

年は四十ぐらい、胸はペシャンコで腰のあ

たりも骨ばっている。その女は、はだかだった。細い緊張した顔は、こつてりと厚化粧している。

「あら、ちよいとあんな！」

女は、かん高い声で叫んだ。

「服を着たままで、いったい何してるの？」

規則違反よ！ 本当に目ざわりだわ」

「いまここにきたばかりなんですよ」

デュレルは静かにいった。

「だったら、早く仲間にはいりなさいよ！

早く！ ここではもったいぶったやり方は許

されないのよ！ とにかく、あたしたちはお

たがいには大人なんですものね」

かん高い笑い声をあげる。

月光を浴びたその目は、黒い穴みたいだった。

「早くいってらっしゃいな。あたしを呼んで

よ。名前はイサベルよ」

「わたしはカリィヌ・イバーラをさがしてる

んです」

デュレルはいった。彼女を見たくはなかつ

たが、ちよつとでも目をそらしたら、向うは

彼の嫌悪を感じて、また何かいいだすだろう

とわかっていた。

「カリィヌに会いませんでした？」

「メアリーといっしょだわ」

「ギブニー夫人ですか？」

やせた腕をふってひらひらやる。

「涙のなぎさのほうよ。メアリーが血相変えて、あの人を追いかけてったわ」

黒いうすい唇から笑い声。

「あんな見ものはじめてよ。ほんと！メ

アリー・ギブニーの、すっぱだかの姿よ！

ほんとに、あんなみっともない人もいないわ

！それにひどく酔っぱらってさ。ほんとよ

！それでもしなければ、あの人にはあんな

……略……」

「どこに行ったら見つかります？」

やせた腕をまたふった。

「……略……それに、あの人があのカリーヌ

なんて売女に思い知らせてやればいいのよ。

あんな。あんなも利口だったら、うーい、今

夜はカリーヌなんかには手を出さないでしょ

うよ。それに、そんな恰好で浜へ出てきちゃ

いけないよ。このうちの規則なんだから。服

なんてものは、たいていの人がもってる若い

ときのくせにすぎないのよ。とにかく、さっ

きもいったように、あたしたちはみんな大人

なんだから。だから、早く脱いでらっしゃい

よ。あたしのとこへくるのよ。イサベルよ」

「できたら、きますよ」

デュレルはいった。

やせた女はちょっとあとにさがった。その

顔がまえより醜くなる。……略……

「この人でなし。そうだ、あんなみないなや

つは、みんな殺しちまうこともできるんだか

ら」女は怒ったようにいった。

「せいぜい、楽しみなさい」

デュレルはいった。

彼は、女のわきをとおって浜におりていっ

た。キャンプ・ファイアの無気味な光のは

ずれに出る。……略……いちばん手前の棧橋

のところでは影にかくれてふりかえった。

はだかの女は両手を腰に当てる彼のほうを

にらんでいた。……略……

波のくだけて打ちよせる音に重なって、あ

たたかい潮風にふわりと乗ってきた押し殺さ

れるようなこもった悲鳴が聞えたのはそのと

きだった。やがて急にその声が聞える。

はっと立ち止ったまま、なぎさのほうに目

を向けた。いまの声には、首筋の肌が鳥肌に

なるようなひびきがあつた。……略……

波はあちこちに黒いよどみを残してい

た。そのよどみのひとつに、白いバシバシ

ヤという気配。……略……

また短いとぎれとぎれの悲鳴。

こんどは前よりよわっている。悲鳴は棧橋

のわきのいちばん波打際に近いよどみから聞

えてくるのだった。

デュレルはくるっと向きなおると、水に向

って走る。……略……

白い手足、黒っぽい赤毛がながれて、まっ

青な怯えきつた顔。カリーヌだ。

黒い水から半分起き上って、つまずきなが

ら何か叫んでいる。

巨大な白い肉のかたまりが、それを追って

いた。

逃げる女をつかまえたもう一人の女の態度

には、何かぶざまな冷酷なところがあった。

太い腕がパツと伸びて、ほっそりしたから

だをとらえて、ねじ向ける。カリーヌは水の

下に倒れてしまった。

青白い月光でデュレルはもうひとりの女を

はつきり見た。

スタイルを守る服を身につけていない本当

に太った女を見たのは、これがはじめてだっ

た。巨大な胸と尻のぶるぶるふるえる山や丘

の上に、素朴な怒りに血相を変えたような丸

い赤ん坊じみた顔がちらっと目にはいる。

恐ろしい重さがもがくカリーヌのからだの

上にのしかかり、ゆっくりとわざと彼女を水の下に押しつぶそうとしているのだった。

デュレルはどなった。……略……

太った女は顔をあげた。赤ん坊のような顔のぼかんとしたわけのわからないような目で見つめる。小さな繊細なその口が、こわばって開いている。やがて、白い球根型の怪物みたいに巨大な重みをもちあげた。

「そばによらないで」

女は叫んだ。

「彼女を離せ」

「死んだわよ」

「ギブニーの奥さん——」

太った女は、げらげら笑いだした。けいれんでもするみたいないなヒステリックな声とともに、からだがぶるぶるふるえ、ゆれる。

デュレルは彼女を押しつけて、長くのびて白く光るカーリーヌのぐったりしたからだの輪郭をさぐった。……略……腰をかかえて水からあげた。

顔が出ると、黒っぽい赤毛がばらりと垂れる。咳こんでげえげえいい、必死につかまるところを求める。

「あわてなくてもいい、カーリーヌ」

彼はいった。……略……

ミセズ・ギブニーは巨大なハムのような腕をふるった。打撃は斧のように彼の首筋に当たった。彼はよろめいて、カーリーヌを落した。

恐ろしい重さがうしろから体当たりしてきて彼を水中に押しこむ。彼は、女につかみかかり、つかまえて立ち上ろうと争った。

また、太い腕になぐりつけられる。太った女の深い大きな息づかいが聞えた。からだをひねってふりほどき、巨人のような打撃から逃れる。

磯波が背中当たり、向いあって彼のほうに進んでくる球根型の肉のかたまりのほうに押しやった。

ピンクの濡れた肉の……略……小山のなかには筋肉があるのだった。襲いかかってくる重みは巨大で、息苦しい恐怖が熱いナイフのように切り裂く。

次の磯波が彼の逃げ出すのに役に立った。

……略……

「ミセズ・ギブニー……」

太った女は、うず巻く潮の腿まである深さのところに立って、初めて彼の存在に気がついたように彼をじっと見つめていた。

狂ったようなヒステリックな怒りのいくらかがその顔から溶けて消えた。小さなピンク

の口がおずおずと開いた。

「行って。彼女をつれて行って。悪かったわ……悪かった。……」

デュレルは赤毛の女を涙まではこんでいった。そのうしろを、なぎさをどっしどっしと踏んで太った女がきた。……略……

大丈夫だと思ったとき、彼はカーリーヌのほっそりした白いからだを両腕で完全にかかえて、棧橋より上の高い草の生えた砂丘にはこびあげた。

下におろすと、彼にもたれかかり、彼女の心の状態を示してしまうような力をこめて彼の首にしがみついた。

からだはあたたくくしまっていて、ほっそりした脚と細い腰は森の精みたいだった。『(井上一夫訳「秘密指令―叛逆」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック。第八六一号一〇三―一〇九頁)』

このシーン、ギブニー夫人を「肝っ玉お母あ」の京塚昌子、カーリーヌを「恋の奴隷」の奥村ちよ、デュレルを「謙信」の石坂浩二にやらせてみたいと想ったのは、まことにふきんしんであった。

一応この物語のストーリーを説明しておく

と、愛国心をセメントと鉄骨で固めたようなテキサス州——日本ならばさしずめ九州——出身の超右翼を悪玉にしてアメリカ中央情報局のサム・デュレルがスパイ合戦をする物語である。

ここに副産物が一つあるので、紹介しておく。英米のスパイ・アクションの悪玉をみていると世界の情勢が、アメリカを中心に、どのように変わっていつているか、よくわかるのである。例を「〇〇七」でみると第一作から第五作までは、だいたい悪玉はロシア側スパイに統一している。この時期は、米ソ冷戦状態である。

ついで米ソは雪どけしたものの、中共とドゴール・フランスのたいとうがあると、今度は第六作ドクター・ノオにみられるように悪玉は支那人とフランス人の混血とされる。

また、ベトナム戦争が起り、自分達かならずしも善玉ならずと悟ると、今度は第七作ゴールド・フィンガー以降のように、悪玉達は国をバックとしない個人とか団体の資格で登場する。ゴールドフィンガーにおけるアメリカ国内のマフィア・ギャング。「珍魚ヒルデブランド」におけるドイツ系アメリカ人の金持。「サンダー・ボール作戦」のスペクター

団。そして、ローマ皇帝ネロと並んで歴史にのこるであろうヒットラーのナチス。等々と悪玉としてあらゆる国籍を有する人物達が登場するようになってくる。「〇〇七号二度死ぬ」に至っては、日本の黒竜会まででてくるのである。

この「秘密指令—叛逆」にしても、超右翼をあやつる影の人物に自国のCIAのK課の課長を配する。彼はナポレオンやヒットラーを御手本に、戦争による混乱こそは権力獲得への早道と、米ソ、ミサイル戦争激発の導火線ともならん陰謀をめぐらすのである。

ここいらになってくるとアメリカ自身のなやみが感じられる。

○

「アンクルから来た女」II 著者マイクル・アヴァロン。佐和誠訳。これはエイプリル・ダッサー・シリーズの第一作である。

物語は、エイプリル対犯罪組織スラッシュの科学者争奪戦である。

サド場面は、エイプリルの相棒マークが、敵方にとっつかまった処からはじまる。

サディストは、アーノルド・バン・アタ。という女スパイである。

彼女のプロフィールはというと、

大きく豊かな胸、燃えるような赤毛、長く白い脚、肉づきのよい頬、ぶあつい唇、官能的な顔、愛くるしいウェスト、女達がしゃくにさわるほどの美しさ。

時にはしくしくとしゃくりあげて、多感な女子学生の風情を思わせる。またある時は、クイーンのようにドレス・アップして、手に鞭をぶら下げる。

「彼女はいつもああいう服装をするのさ」……略……「何か、むごたらしいことをはじめるときは、かならずといっていいほど着飾るんだ。たいした女だよ」……略……「彼女は、残忍きわまるサディストなんだ。それもサドのやりかたをそのままそっくり真似する本格派だな。……略……」(佐和誠訳「アンクルから来た女」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック。第九八〇号、一〇〇頁)

と、いった女である。本番にはいる。

『カマキリは、すその長いグリーンのベルベット・ドレスを着ていた。マークは、ひすいのかちっかちっという音を耳にして、ものうげに目をしばたかせた……略……』

マークの目に、バン・アタの引きしまったグリーンズのヒップがうつった。彼の鼻先をかすめたベルベットのドレスがきらきらと光る。女の手のにぎられた残忍非常な物体、その皮で編んだしなやかな物体を彼の目はもちろん見のがさなかった。……略……

「やあ、カマキリさん」マークは夢みるような顔つきでつぶやいた。……略……

マークの頭のうえのほうから、バン・アタの透きとおるような声がひややかに聞こえてきた。

「カマキリですって、スレートさん？ どういう意味——あの、のこぎりのような鎌をもった気味のわるい虫のこと？」

「ご名答」彼はおだやかに、うなずいてみせた。「だが、オスを情容赦なく食い殺すメスという意味もある。あんたはそれがぴったりという人間だよ。ミス・バン・アタ」

低い勝ち誇ったような笑いがおこった。「あんたより私のほうがすぐれているということ、認めただけでも進歩だわ」

「そうはいってないぜ、おばちゃん。ナチもカマキリだった、ユダヤ人にたいしてね。そのナチがどんな末路をたどったかは、あんたもご存じのはずだ」

むちがはげしくテーブルをたたいた。スレートの顔すれすれのところだ。にぶい、引きさくような音がはねかえった。

「あんたが思ったとおりの人間で、私もホツとしたわ、スレートさん」……略……

「完璧な相手だわ、責めるにはね。あんたなら、体の最後の肉が引きさかれても音をあげそうにないわ」

部屋の空気がびっぴと裂ける。むちのしなり具合をためしているのだ……略……

「気の毒にな、おばちゃん」

「なにが気の毒なの？」

「ぼくのような、すばらしい肉体の持主の、本当のあつかいかたをご存じない、ということさ」

ながい沈黙がつづいた。彼女はひとことも口をきかない。スレートは身を固くした。

バン・アタは低い声で、さも愉快そうに笑った。これから彼女がこの部屋で満喫する黒い快楽、それが如実にわかるようなぶきみな笑いだった。

「ほんと、スレートさん？ほんとに私の心を迷わせることができて？」……略……

「すべてとして、柔らかいわ。あなたの肌は」バン・アタの声が妖しくひびく。

「いいわ、男の背中って。強くて、筋肉がこんもりしているし、うっとりさせられるわ。お気の毒ね、セックスで挑発しても私には通用しないのよ。ちがった方法で楽しむことにさせてもらうわ」

「つまり、ぼくにはもう情報提供者としての価値がなくなった。そういうことかな？」

……略……

「……略……ぼくだってわれとわが身が可愛いからな。……略……そんなに融通のきかないかたぶつじゃないぜ。テーブルからおろしてくれ。そうしたら、そっちの聞きたいことは何でもしゃべるから」

「ばかね」彼女は笑った。「機密は私のやりかたで聞いわ。まあ、むちでも受けながらのんびりしゃべる事ね。あんたの縄をとくなんて考えてみたこともないわ」……略……

スレートは乱暴にテーブルを揺らしはじめた。手首と足首をテーブルの四本の脚に固定されて……略……彼の体重は八十キロ、だがその八十キロのことごとくが、きたえにきたえぬかれた運動選手のそれだ。……略……

テーブルが片脚でたつように大きく左右にゆれはじめた。……略……

バン・アタが狂ったように叫んだ。乗馬用

むちのびゅっという音が、部屋のなかの空気を二つに引きさいた。

むちがスレートの背中に吸いつく。その肌に、焼けつくような苦痛の線が一本、さっと走った。

が、その瞬間、テーブルが横だおしになった。もちろん、スレートの体も一緒にだ。

奇跡がおこった。部屋のせまさが彼に味方したのだ。マークの体重をのせて倒れたテーブルが、あわててよけようとしたバン・アタの、左の足首にのしかかったのだった。

骨折の激痛が彼女をおそった。せまい部屋のなかに彼女の叫び声が、長く尾をひくようにひびきわたっていった。

狂乱の一時、まさに精神病院のそれだ。

……略……女は弱々しげな泣き声をあげながら、スレートにむかってむちをふりつづけていた。

病みを呪い、うらむようなその悲鳴は、まさしく気違い女のそれを思わせる。

「このお礼にあなたの命はもうわ」彼女はあえぐようにいった。

「きつと、あなたの——」その言葉は途中でとぎれ、ふたたび心臓をえぐるような泣き声にかわっていった。

だが彼女の動き、体をねじるような動きがスレートにつたわってくるではないか。

体をよじり、すこしでも彼の手に接近しようとするその動きが。

彼女はやはりスラッシュだ。それに間違いない。だが、苦痛にうめく一人の女であることもたしかだった。『(佐和誠訳「アンクルからきた女」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック 第九八〇号一〇七―一二頁)』

サド性とマゾ性の両方をそなえた女が、おもしろくえがかれている。

エイプリル自身はサド・シーンに出っくわしてはいない。テレビに登場した時のエイプリルは、結構サディスト達に追い回されていたのだが……。

尚テレビでは、ステファニー・パワーズがエイプリルの役を演っていた。

ステファニー・パワーズはウェスト・サイド物語に出ていたというが、あの物語での彼女を想い出せない。女の子は色々の顔をもっているから一度や二度見たってわからない。

子のたまわ おとこほつ とも やす
子曰く、男欲すれど共に寝ます

身の内に 愛しみあふれば

むち 鞭をふるう すなわれ 斯ち我サドに至る

—アーノルド・バン・アタ—

○

「燃える女」II 著者マイクル・アヴァロン。

川村哲郎訳。エイプリル・ダンサー・シリーズ第二作である。

舞台はアフリカのヨハネスブルグ。物語は鉱山の廃坑に巣くうナチの残党が、燃えるトーチを旗印に、第三帝国ならぬ第四帝国の夢を追う。悪玉には、ベルリンの地下壕で死んだだけ伝えられ屍体はついに発見されなかったヒットラーが、生きのびていたとして活躍させている。ここでは、ナチ的センスの見物席つき殺人設備を主に紹介する。風前の灯なる男女は、マーク・スレートとエイプリルの二人組である。

『彼女は革紐で身体をしばられていることに気づいた。何か平たいものの表面に、幅の広い革バンドでくりつけられていた。』

何かは、ちょっととはっきりしなかった。監禁されている場所は、ぐるりを壁に囲まれた天井の低い部屋で、家具や調度のたぐいは何もなかった。……略……

衣服はほとんど脱がされてしまっていた。

実際、身体を装うものといつては、ブラジャーと絹のパンティぐらいなものだった。

腰と踵には革帯がかけられていた。腰の革紐で両腕は脇腹にぴったり押しつけられ、まるで拘束衣でも着せられているようだった。

すべての感覚は鋭敏に働いた。心臓の鼓動だけが、激しくあばらを叩いていた。恐怖のもぐらぶかが胸の中で、しだいに土をより上げて山になろうとでもしているようだった。

彼もまた、彼女同様、半裸で紐をかけられて、テーブルに似た細長い台にしばりつけられていた。台は両側に際限もなく伸び、部屋の両端の通り口に消えていた。……略……

流れ作業のコンベヤー・ベルト・システムを想いおこすことができた。……略……

部屋はいやに湿っぽく、息詰まるような感じだ。煉瓦造りのかまどが何かに近い感じ。かまど——彼女はあやうく叫びかけて、かろうじて押えた。……略……

どこか見えない部分から、ゴロゴロ、ガタガタ、機械の音がかすかに聞こえてきた。

なんとなく、陰湿なひびきを帯びた音だ。モーターが動きだした低く唸るような音だった。……略……

掛かったり噛み合ったりしてギアの変わる

機械の音が、とつぜんエイプリルの耳に達した。彼女の横たわる幅広いベルトがわずかにけいれんしたかと思うと動きはじめた。

ゆっくりと、だが容赦なく、暗い壁にぽっかり開いた口に向かい……略……やがてその中に飲み込まれる。そこは隠されたかまどであるにちがいないのだ。……略……

部屋はゆうに百名以上の観客を収容するにたる広さをもっていた。隊長が演説する、あの円形広間に似たような造りの部屋である。ただ、ちがうのは、部屋を二分する奇妙な仕切りがあることだ。

その仕切りというのは、片側の壁から他の側の壁にかけて横たえられた、巨大なガラス箱だった。ガラスは透明で、箱の中央を二本のコンベヤー・ベルトが動いているのが見えた。ベルトが部屋の一端から他端へと屍体をはこぶのにはわずか十秒ほどしかかからず、その間、肉を焼きつくすのに必要な、途方もない高温に耐える材質としては、たしかに煉瓦は適当なものだ。

だが煉瓦では、眼の楽しみが奪われてしまうことになるだろう。そこで、かわりに、ガラスが用いられているわけだった。

箱は厚さ約五インチほどの特殊な構造をも

つガラス板で囲まれていて、内部から焙り立てる高熱の、すさまじい攻撃に耐えることができた。

隊長の荒廃した顔は口を固く閉ざしていたが、眼は期待の色に輝いていた。

幅広い二本のベルトが仮借なく巻かれていくのを、その眼はじっと見詰めていた。

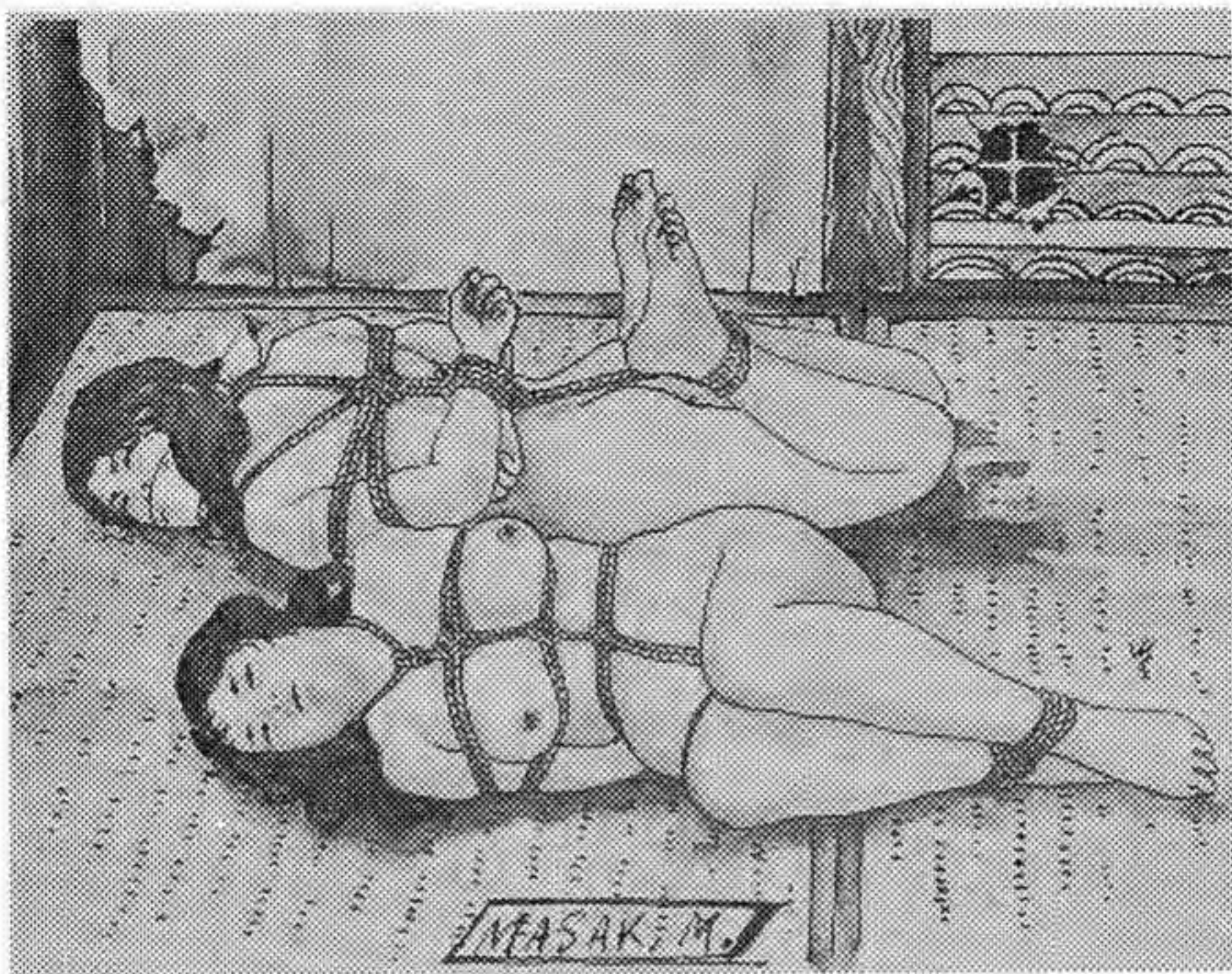
入念に犠牲の準備が行なわれた。監獄部屋から、ベルトはその入口へ通じていた。

隊長自身の顔と肉が火に歪められた恐ろしい夜、彼が心を事実上うしなってしまったあの夜のもののすごい記憶をよみがえらせ、かつての彼を復活させるのだ。

とつぜん驚きと畏れのざわめきが起こり、会衆のあいだに、たちまちひろがった。……略……

一個の身体が視界にはいつてきた。完全に知覚を失っている一個の身体。身体はまず足の先から、すさまじい熱気と焦熱の火の渦巻く中にはいつてきた。『(川村哲郎訳「燃える女」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック。第九八四号、一五三—一五九頁)』

暗い欲望の場としてけっこう効果はあるがいたって平凡な疑問がここで湧いてきた。



読者ギャラリー 「美しき入荷物」

宮城昌子

つまり、タバコの火でさえ五・六百度はあ
るといふのに、まして人間の身体を十秒間で
焼いてしまうというのなら、数千度の熱が必

要だろう。ナパーム弾級のモーレッツさであろ
う。そんな熱に耐えて透明度を保つガラスな
どあるのかね？ 俺は一ぺんでくもってしま

うと思う。又そんな熱
に耐えるコンベヤー・
ベルトはいったい何で
できているのか？

こういう機械設備を
えがくときは、少く
も我々の平均的科学知
識を満足させてくれる
ものでないと、かえっ
て効果を減少させてし
まう。この際、ガラス
とするより新物質とか
特殊合成樹脂とかいっ
てくれた方が、なっと
くできる。

ガラスで造った熔鋳
炉なんて、聞いた事も
ない……もしできれば
多くの利点をもつであ
ろうに……。

こういう場合のフレ
ミングに、俺はあまり

自然さを感じなかった。原作者はもうちっと
工夫してもらいたい。仮りにありえないこと
だとしても、もっともらしく、耳にこころよ
くひびく説明であれば、それでもなっとくす
るのである。そして、こういうささいな事が
サド場面の迫力に、大いに関係してくるので
ある。

○

『アンクルから来た男』 著者マイクル・ア
ヴァロン、訳者は伊東守男。

だいたい今までのスパイ・アクションは、
初めに本がでて、それから映画やテレビに移
る事が多かったが、このナポレオン・ソロ・
シリーズはテレビから小説へと逆のコースを
たどっている。

テレビや映画では、ロバート・ボーンとデ
ヴィット・マッカラムが主役の二人、ソロと
イリヤを演じていた。

善玉の一人に、ついにソ連代表イリヤが参
加。サディストにはスラッシュ団の怪人、ゴ
ルゴダ。

そのいけにえに供されんとするは、ソロと
ジェリーと称する女性特務員の二人。

サド場面は、二人の乗ったデボネア機がス
ラッシュの戦闘機に撃墜されて、捕われる処

からはじまる。

『彼はただ一種の強烈な恍惚状態にあった。ふわふわとして重さもなければ肉体もなく、空中にただよっているようで、すべてが奇妙にゆがんで見えるのだった。……略……』

彼女はまったく現実の、今まで彼が見てきた彼女とはちがっていた。彼女はまっぴりだった。……略……それは彼をあわてさせるなにか不吉なものがあつた。

彼の前に、丸くうずくまっているこの汗ばみふるえている肉体は、いったいどうしたのだろう。

彼女の長いしなやかな腕は皮の手錠のようなもので、きつくしぼりあげられていた。

そうしてその美しい顔は、すっかりひきつって、うつろな目で地面を見ていた。

その時、この全裸のジェリーのすぐ後になにか奇妙な格子のようなものが見えた。と、突然彼は愕然としながら自分の目の前にも格子のようなものがあるのに気づいた。

彼は霧をとおしてのようにぼんやりと、彼女が完全に直立しているわけでもなく、またいっこうに身動きもせずじっとたたひざまずいたままうずくまっているのを見つめていた。

これはまるで彼女がこんなみっともない、

へつらうような恰好のまま凍結されているみたいだった。……略……

肋骨がぎゅうっと緊張して、その下の筋肉のあたりが大きくへっこみ、二つのみごとな乳房は痛々しげにおしつぶされておき、長くこすられているために乳首が赤くぼちりと固くなっているのがわかった。

長い銅色の髪の毛は肩をよこぎってぶらぶらとぶら下っていた。

ぶつちりとくびれた腰や円錐型の腹やよくしまった太股のあたりは、だらだらと流れる汗のために光っていた。

そうして下腹部の一点だけが、どきりとさせられるぐらい銅色に光っており、彼はおもわず目をそむけたくなるほどだった。

そして短い激しい息遣いが、彼の耳にまでとどいてきた。

彼女は、鉄格子でできた檻のようなものの中に入れられているのだが、この格子というのが……略……たてよこからだけでなく、はすかいにもなっているのだ。』（伊東守男訳「アングルから来た男」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック。第九一九号、八五～八六頁）

以上のように監禁と拷問が同時に行なわれているのだが、どうもこのシーンが頭にピタリこない。

二人が別々の小さな鉄の檻に、ひざまずいた恰好で入れられていると説明しているが、しかしその檻は、次のような構造である。

1. 天井から吊り下げられている。
2. 鉄格子だけでできている。
3. 電気が通じていて鉄格子にふれると感電する。
4. 立てず坐れず横になれずの構造。
5. 彼ら自身ひざまずいた姿勢と同時に皮ひもで片手ずつ左右の鉄格子に皮ひもで結ばれてぶら下っていて鉄格子のどこにもふれていない。
6. しばられているのは手だけ。
7. 現在、彼らは感電しない状態（気絶している時も）
8. 絶縁体を使用しているとは書かれていない。

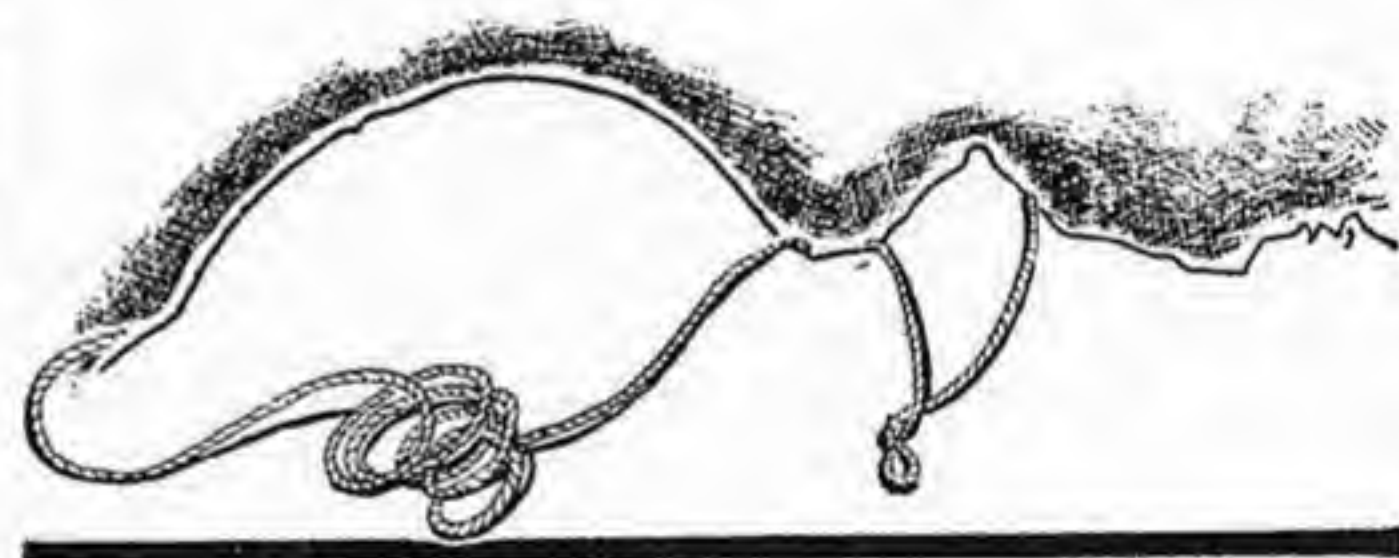
皆さんに問うが、この8項目の条件に合うようなイメージを浮かべることができたら、教えてもらいたい。私には矛盾だらけにしか思えないのだが。

（この項おわり）

最近の感想

逆さ妊婦

羽鳥水江



も、影響しているのかも知れません。

さて私は、一昨年十月号のハントで木戸悦さん（妊娠九カ月）、昨年五月号で飯田カオルさん（妊娠七カ月）、さらに八月号で金原奈加子さん（妊娠九カ月）と、わずか一年たらずの間に三人の妊婦をハントされ、金原さんについては、待望の逆吊りを実現されたことに、すっかり興奮してしまいました。カオルさんだけには分譲写真がありませんでしたが、悦子さんとカオルさんについては、私も感想をのべました。でも残った奈加子さんについては、まだ何も述べてありません。遅ればせながらフォートを入手して、そのうち妊婦の逆さ吊りのものについてだけ、少し書いてみたいと思うのです。

本誌三月号に、留根呉男という方が「私のイタ・セクスアリス」という長文の告白を書いておられ、思いがけないことに、非常に本格的な妊婦マニアの、少年の頃からの克明な告白記録であり、妊婦のヌード写真までカットにのっています。おそらく臨月、それも分娩間近と思われるマルマルと膨れ上った腹部です。久しぶりに惹きこまれるように読みました。それに刺激されて、何か書こうかと思っています。うち、四月号に金原さんの——辻村

昨年十一月号の「妊婦マニアの事件簿」を最後に、筆を絶っていましたが、久しぶりで思いつくことを書いてみたいと思います。

最近の奇クを見てますと、数多くの人の力作が次々と発表されていますが、やはり懐かしい辻村隆様の「SMカメラ・ハント」をめぐるいろいろなやりとりが、私には興味深く読まれます。そして私の一番の関心は、あいかわらす△妊婦▽と△浣腸▽です。

前者——妊婦について辻村様は、結婚されたお嬢様が目下妊娠中で、まもなくオジイちゃまになられるせいでしょうか。何となく控えておられるような感じがします。だからというわけでもないのでしょうか、四月号のハントで、金原奈加子さんに浣腸を試みられ、しかもいくらか、調子が狂っているみたいない気がします。その対象が、昨年妊婦の逆吊りを敢行なさった、同じ金原さんであったこと

さんの、と言わねばきでしょうが——「童女浣腸譜」、ひきつづいて五月号のやはり「ハント」で、例の秋山夫妻が登場され、秋山夫人のA感覚が、相当に開発され、非公開のプレイでは堂々と演じられるまでになっていることを知りました。その他いろいろ私の興味を惹かれた点は、中で触れることにして、ハ妊婦Vのことから書いてみます。

○

一、はらみ女を逆さに吊るす

——分譲写真ハさめVを見て——

昨年八月号の「童女受胎譜」を読んで、約半世紀前の伊藤晴雨老以来の快挙として、辻村さん自身が非常に力をこめて書いておられるのがわかりました。私の手許にある資料によると、晴雨老は例の月岡芳年の「奥州安達力原一つ家の図」がもとになっていること、それが行なわれたのが大正十年であったことは明白です。

ところで辻村さんは、必ずしも同じ構想ではないようですが、腹の大きい妊婦の全裸での逆さ吊りを、前から狙っておられたことは確実でしょう。それは二号前の昨年六月号にやはり「カメラ・ハント」で、ハ左近真理子の巻Vの中で、妊婦ではありませんが、左近

真理子さんを使って、後手に縛られた全裸の女体の逆さ吊りを試みていらっしゃるからです。間に一号入っているとはいえ、そのときには既に、近く金原さんの妊婦カメラ・ハントの予定が決まっていたのではないかと思います。時日も極めて接近していますし、いわば辻村さんは、金原さんの妊婦逆さ吊りのチャンスに備えて、左近さんを利用してリハールをなさったのだと思います。事実、両者はよく似ているではありませんか。

しかし逆さ吊りとしては、左近さんの方がずっと立派に宙吊りになっているようで、天井と床とがずっと離れていて、うんと高く吊られているように見えます。見事に逆さに垂れ下がっています。それに比べると金原さんの妊婦逆さ吊りの方は、少し物足りないように思います。もちろん対象が妊娠中で普通の体でないということ、それと——左近さんの場合もこの点は同じですが——辻村さん一人だけで吊り上げなければならなかったことがその理由でしょう。

印画紙に鮮明に焼き付けられている写真を見ると、次のようなことに気が付きます。

第一は、中に子を持って大きく膨れ上がった腹部の膨らみの部分が、大きくその位置を移

動させて、はっきり胸の方に下っていることです。妊娠九カ月にもなって、すっかり大きく成長した胎児が、ぶ厚い子宮の筋肉の袋に包まれたまま、その重量のために腹の中で下に下ったのです。膨らんだ部分がぐーんと下の方に行ってしまったため、下腹が大きな三角形となって平坦に凹んでいます。マルマルと盛り上がった部分が移動してしまつて、下腹の内部に何もなくなつてしまつたわけです。

体の中で、巨大な子宮が胸の方に下降していることは、お臍の位置からも明瞭です。直立したときには、必ず腹部の中央にある臍窩が、下からおよそ三分の一位のところに動いています。これは実験してみなければわかりません。これは実験してみなければわかりません。孕んだ女を天井から真逆様に吊るせば、これだけ腹子の位置が変わるのです。分譲写真でこそ、この点が極めてはっきりと見てとれます。頭を下に、脚を上吊り下げられた妊婦は、まったく重力に無抵抗に、肉屋の店頭肉片のように、ぶら下がっています。実写でなければ見られない迫力があります。

反対に上腹の胸に近い方は、全体にぶくぶく太く膨らんで、胸部の内臓の上に、重力を加えているのでしょう。苦しそうですが、抵

抗するすべもなく、受動的に吊り下りっぱなしです。勿論、乳房とか肩とか、後ろ手に縛られた腕とかが、全部下の方に重力で下ってこれもおいかにも無抵抗な感じです。そして最後に、頭髮がパラッと逆さに乱れて、顔はすっかりノドを見せてのけぞっています。逆さに吊るすところなのでしょうか。左近さんの場合も金原さんの場合も、アゴが完全にのけ反って、顔の形相もかなり変わっています。

妊婦を逆さ吊りにすると、こういう感じになるということ、これは一見に値することだろうと思います。他の責めなどでは見られない、ひどくマゾヒスティック——サディスティック——な感じです。このことだけでも価値がありました。

ただ、さらに注文を言わせていただくならば、次の点です。

辻村さんが今後妊婦の逆さ吊りの写真をとられる機会がありましたら、今度は是非何人かのアシスタントを連れて、高く見事に吊り上げて下さい。その場合、妊婦に万一の危険がないためにも、足首だけを括って、手や胸は縛らないで、自由にしておいたらどうでしょうか。重力の方向が逆になるので、自由な手がとまどって、どんな風に動くことでしょう。

うか。手が自由であれば、ものにつかまったり、床に付くことも出来るので、逆さに吊るすこともかなり容易だと思います。

遅れてしまいましたが、やっと感想を述べる事が出来ました。

○

付——ある週刊誌から

旧聞になりますが、「漫画OK」3月26日号、青刷りの八夜の快楽事典／＼ナイトスポット／＼という欄に東大路公仲という人の次のような記事が出ていました。

『外国映画でお産のシーンがでてきたのがあって、大変な話題になったが、これはお産のシーンといっても正面のズバリは映写されていなかった。ところがお産のシーンの正面撮影は勿論のこと、秘部までアップにとった写真が出てきて、いま一部の間で評判になっている。——(略)——セットは十枚一組になっている。——(略)——最初の三枚は初交？ より数カ月間のSEX状況、そして七枚が、妊娠初期から臨月までの妊婦の腹ボテ状況から、性器の変化写真というわけであるから、前代未開のコツた写真ともいえる。——(略)——見方によっては学術？ 写真ということができるかもしれないが、腹ボテ女性がSEXしている写真や

出産間近とおもわれる女性の性器の拡大写真はなんともグロテスクであるし、出産時の写真などは正視できるしろものではなかった。

——(略)——モデルはどんな女性かしらないがよくもこんな写真の撮影に協力したものとフシギでならないし、出産という神聖な事柄を金儲けの道具に利用する制作者の態度も、モデル本人も狂っているというより他はない気がする。しかし、普通のエロ写真にあきた連中にとっては、珍品写真というわけか……。その写真を買いたいためにネオン街を日夜ウロつき、販売人にぶつかると願っているご仁が相当いるという。——(以下略)——

以上ですが、奇クなどでは、もう何年も前から妊婦のヌード写真——妊婦の縛り写真——など分譲しているのです、秘密販売品ではないという点を除けば、妊婦写真はそう珍しくないと思いますがどうでしょうか。

○

二、A感覚から蛙腹まで

——浣腸への飼育をめぐる——
最近の奇クを見ると、ずいぶん浣腸の記事が多いように思います。これは近頃の世間一般の週刊誌や月刊誌、さらには単行本にまでこの種のセックス？ プレイが取り上げられ

ていることの再反映ではないかと思っています。私の場合のように、大量の液体ないし気体の直腸への注入、または送入というのは、必ずしも多くないようですが、それでも、昨年六月号の幸崎健治氏の、「我がSMプレイの実態」、同九月号藤岡江根真氏「私達の流腸プレイ」、同十月号木崎進「SMプレイに関する告白」などは、いずれも一リットルないしそれ以上の分量ということで、私などに近い方だと思っています。

最近の六月号に、大昌弘氏が「流腸」は最後の宴?という、短文を書いておられます。四月号の辻村さんの「童女流腸譜」で、辻村さんが、いやがる金原奈加子さんに流腸——排泄責めを強制され(決して大量とは言えませんが)、大いに彼女の気分を害して、おそらく最後のプレイになるだろうと覚悟された点にふれて、

「……いくら女性が本質的にマゾの持主だとしても、『流腸責め』の場合、マニアでもなければ、充分飼育されていない女性に、最初から試みるのは困難だと思います」

と述べられ、ご自分の経験でも、流腸が最後になった、と告白しておられます。

辻村さんの場合、どうせ金銭づくでしたい

ようにさせる奈加子のことだから、無理にでもやってしまえば、それで構わないだろうとまるで蛙でもいたぶるような気持ちで、意馬心猿というのでしょうか、衝動にかられて強行してしまわれたのでしょうか。いつもの辻村さんにふさわしくない態度だと思います。苦言を呈するみたいですが、もう少し順序を追って飼育してみようという気になれなかったのは、残念だと思います。

さて、その飼育ですが、まず最初に、女性の立場から言えば、観賞されることから始まるのではないのでしょうか。

「キミの可愛いのを見せてくれないか」

「可愛い……って？」

「つまり後ろの方だよ」

「あら、いやだ。恥ずかしい！」

何回もそのように繰り返すのが普通だろうと思います。

私の場合、蛙腹になるまで、三リットル位の流腸には、充分耐えられるようになりました。これも小さいときから、何回も何回も繰り返してプレイするうち、だんだん大量の注入に慣れてここまで来たものと思います。

四月号「まぞひすむす・てらぶていくす」

(正しくは八てらぶていくす)だと、思い

ますが)の中で泉一郎さんが、二リットル以上は危険だと警告しておられますが、私の場合は何ともないようです。ご指摘のように、大腸から小腸へ逆流を止める弁が、高圧で押し開かれて、小腸に汚物が入り、バイキンなどで炎症を起こしているのかも知れないとも思います。ハッキリは分かりません。病院などで実験して、レントゲン写真を撮ってみたら分かるのでしょうか、まさかそんなこと

——蛙腹実験——を頼む勇氣はともありません。バリウムを三千CCぐらい入れてみたら透視できるわけです。

もう一つ、流腸代りにビールを注入して酔っぱら実験を試みたことがあります。これについては、またあらためて書きたいと思っていますが、うまく行くと、イルリガートルで、六三三CCのビール一本分を全部注入して完全に吸収し、一滴の液体も残りません。数時間後、ビール(液体)がすっかり二酸化炭素(気体)に置換(おきかえ)されて、ポコと大腸が一杯に膨らみます。しかしこれは成功するときとしないときとあります。酔いは非常に急速で、ここちよく廻ります。

最後に、五月号カメラ・ハントの「深夜の舞踏会」での、秋山夫人のA感について触れ

ておきましょう。この文章に添えられた多くのフォートのうち、私は、二二二ページのフォート（「まるで奇形人間のような妖しいポーズが椅子の中に出来上った」とあります）と、二二四ページのフォート（「A感覚にはうってつけのポーズ」とあります）に、特に強く惹かれました。このうち、前者を見て思ったのですが、掩うものがなければ、いわば一〇〇パーセント・オープンというところでしょう。辻村さんのハントには毎回、必ずオープン可能な場面が出て来ますが、これ位完全なのは珍しいと言えましょう。勿論、写真ではカットですが。

ところでこの写真、「この時も黒髪の長き末梢が、双臀に尾を曳いて流れ、あからさまな羞恥を巧みに隠蔽していった」とある通り「モリモリと盛上った、豊かな臀部」の真ん中を長い毛髪の束が蔽い、隠すべきところを

『切手代用』送金についてのお知らせ
○七月号広告でお断りとしておりましたが、当方の整理も一応つきましましたので、御注文の際の『切手代用を再開』して受け付けます。但し『一割増』は従前通りです。で、よろしく願います。
尚出来るだけ、『現金書留』『小為替』『振替』等の方法にてご送金下さることをお願い申し上げます。

隠しています。

そこで思うのですが、この毛髪の末端で何か小さく丸い固いものをくるんで、蔽うこと兼用で埋めるようにしてみたらどうでしょうか。掩う黒髪の先を責め具にするわけです。それでもやはりフォートとしては公開出来ないかも知れませんが……。

○

付——ふたたび週刊誌などから

最近の週刊誌を見ると、奇クなどにくらべて、はるかに露骨な表現が、大っぴらに通用しています。奇クでは、たとえば、昨年十月号の西条夏氏の「レダの血は薔薇」で八緑のとびらVと表現しているように、控え目に遠慮していますのに、一部の週刊誌ではほとんど大っぴらに、Aセックスだとかアナルだとか書かれて、まかり通っています。アナル専門の娼婦などもいるとか。ダブル・ウェイなんてのもあるとか。

多くの例がある中で、次の二つだけを、少し古い資料ですが、あげておきます。注釈はつけません。

「週刊平凡パンチ」昨年八月十八日特大号八
おんな雑学Vという欄

『ボクたちが日夜頭に描き、あくなく求める

ワギナ、そこから二センチの、距離にアヌス（ヒップホール）がある。そこは直腸の最先端部であり、強力な括約筋で締めつけられ、ワギナにくらべ、いちじるしく冷遇されているのが実状。——（略）

——ワギナも括約筋によっているが、アヌスの強さは、その数倍もだ。ホモ、おかま経験のオトコは、何をいまさらとセセラ笑う。ワギナぎらいなボーイフレンドをつなぎとめるために、女のコたちは、今やケツで愛そうとケツ心しだした。女は二つワギナを持ったアニマルだと認識すべし。——（略）——

もう一つは、「アダム&ばちえらあ」同じく十月号、八奇妙な泣き所を持った女たちの特集！Vその三として「うしろの穴でなければ興奮しないホステス嬢」という見出しで、「女の泣きどころの一つに『肛門』がある。——（略）——

そこでもう一つの方、つまり肛門の方に照準を合わせてみたところ——（略）——

女体の穴はすべて性感帯——『耳、ヘソ、アソコ、口』といった場所と同じく『肛門』も奇妙な泣きどころの一つに、入りゃしまいか。——（略）——

——（おわり）——

例によって、春太郎がその豊満で柔らかい夫人の乳房……し、夏次郎は夫人の前に腰を沈めるのだ。

夫人は、自分の方からそれに巻きこまれていこうとして努力しているように見える。

「——ねえ、もっと、優しくして下さらなきゃ嫌」

と、夏次郎へすねて悶えるような素振りを見せて、甘い吐息をつきながら、なよなよ双臀を揺さぶったりする静子夫人なのである。

夫人の感覚が酔い痺れてきたと見てとった二人のシスターボーイは、素早く銀の鎖を通して始め、二つの鈴をしっか……ませて、力一杯、鎖を引き絞っていく。

夫人は、心持ち朱に染まった繊細な頬を横へ伏せるようにするだけで、それを拒否する仕草を示さないばかりか、その的が外れて充分ではない事まで責め手へすねるようにして訴えるのである。

「ねえ、これじゃ駄目。も一度、やり直して頂戴」

何度もやり直させ、やっとそれを……れた静子夫人は、その心地良さに浸るかのよう、うっとり眼を閉じ合わせ、キリキリと下半身に鎖を縛りつけられていく。

臍を中心に菱型に鎖をまきつけ、完全な股間縛りに夫人を仕上げた二人のシスターボーイは、ほっと息をつき合って、卓の前に坐っている千代と井沢の方を見た。

「如何が、井沢先生。以前と違って、この奥様、随分と進歩なさったでしょう」

千代は、啞然とした表情で静子夫人の方へ眼を向ける井沢に対し、楽しそうに語りかけるのだ。

「さ、奥様、どんな風にして自分の肉体を鍛えているか、お客様に教えてあげなきゃ駄目じゃないの。早く始めて頂戴」

半ば、うつつの心地で、名状の出来ないほどの美しい、切なげな表情を横に見せていた静子夫人は、千代に命じられるまま、ゆっくりと双臀をくねらせ始めるのだ。

伊沢は、フラフラと引き寄せられるようにそんな身振りを始め出した静子夫人の傍へ近づいて行く。

「こんな、こんな事をして、静子は自分の体を鍛えていますのよ、伊沢先生」

静子夫人は、痴呆のような顔つきになってすぐ前までやって来た伊沢に対して、哀しいような媚めかしいような笑くぼを繊細な頬へ作りながら云うのであった。

「そんなにジロジロ御覧になっちゃあ嫌ですわ。こんな事をお見せしなきゃならない私、本当は死ぬほどの羞かしさですよ」

静子夫人は、次第に磨ぎ澄まされた、凄艶な表情になり、ぞっとするほど美しい情感に濡れた瞳を眼前にかがみこむ伊沢に向けながら、双臀の身振りに一段と調子をつけ始めるのであった。

窓より入ってくる明るい日射しを艶々とはね返すような滑らかで優美な太腿は、ぴったりと閉じ合わされたまま、前へ押し出されたり、後へ引いたり、その度に銀色の一本の鎖を縦に走らせた乳色の柔らかそうな腹部が大きく息づくのである。

銀色の細い鎖は、身をかがませた伊沢の貪るような視線の前にピンと伸びたり縮んだり、金の鈴の躍動まではっきり晒し出しているのだ。

夫人は、熱っぽく上気した頬を慄かせながら薄く眼を閉じ合わせ、むせび泣くようなかすれた声で

「もっと、もっと羞かしい姿を、これからお眼にかけますのよ。お笑いにならないで、お笑いになっちゃ嫌ですわ、先生」

静子夫人は、わなわな唇を動かしながら、

うめくように云うのであった。
「もう充分なようね。それじゃ始めようか。
お夏」

春太郎は夏次郎をうながし、全身に脂汗を
浮かばせている静子夫人につめ寄った。

夫人の腰に巻きつかせていた銀の鎖は、二
人のシスターボーイの手で素早く取り外され
ていく。

「フフフ、もうこんなになっちゃって。いや
な奥様」

春太郎はクスクス笑い出し、夫人の背後に
回って、たくましく盛り上った官能味のある
双臀を掌で撫で始めるのだ。

静子夫人は、優婉なうなじをくつきりと浮
き立たせ、さも切なげに眼を閉じ合わせる。
白い豊かな肉は、春太郎の手が触れると、
夫人は思わず、ブルツと身体を痙攣させ、モ
ジモジ双臀を揺さぶるのだった。

「おとなしくしなきゃ駄目じゃないの」
春太郎は舌打ちして、夫人の双臀をぴしゃ
りと手でぶった。

「だって、だって」
夫人は、春太郎の手が触れると、再び、優
美な腰の曲線をよじらせる。

「ホホホ、伊沢先生が御覧になっっているから

って、何もそんなに羞かしがる事はないじゃ
ないの」

千代は、うまそうに煙草の煙を吐きながら
そう云い、次にキツとした表情になって

「足を開かせて縛っておしまいよ。春太郎」
と云った。

夏次郎が廊下へ出て、長い青竹を持って入
って来る。

夫人の足元に身をかがめた夏次郎と春太郎
は、「さ、私達の仕事がいよいよに大き
く足を開いて頂戴、奥様」と薄笑いを浮かべ
て青竹で夫人の艶やかに輝くむっちりした太
腿をたたくのだった。

「ぐずぐずしないでよ。どんな調教を奥様が
受け、どのように柔順になってきたか、それ
をここにいらっしゃる伊沢先生のお眼にかけ
るのが私の目的なのよ。さ、早く、この道の
スターとしての貫録を示して頂戴」

千代にそう浴びせられた静子夫人は含羞み
に染まった美しい顔を横に伏せながら、小さ
くうなずいて見せるのだ。そして、静かに顔
を正面にもどし、濡れ光る美しい瞳を、すぐ
前に身をかがめ、夫人を凝視している伊沢に
向ける。

「もっととはっきり御覧に入れますわ、先生」

夫人は、誘いかけるような微笑を口元に浮
かべ、大胆なポーズをとり始めた。

ぴったり密着していた艶めかしい官能味豊
かな二つの太腿は、伊沢の眼の前でゆっくり
動き始める。

伊沢は、ごくりと唾を呑みこみ、眼を血走
らせた。

夫人は、ただそうした痴態を演じるだけで
はなく媚態も示し始めるのである。

濡れ光る情動的な瞳を伊沢に注ぎかけなが
ら、さも切なげに身をよじりつつ挑発的に大
きく喘いでみせ、

「もっと、もっとよく御覧になって。ねえ、
先生」

と、鼻にかかったような甘い声を出す静子
夫人であった。

「まだまだ不足よ、奥様」

春太郎と夏次郎は、青竹と麻縄を持って夫
人の足下に坐りこみながら、楽しそうに声を
かける。

「それでも、それでも、まだ駄目？」

静子夫人は、潤んだ美しい瞳を気弱にしば
たたかせながら、しかし、とり乱した様子は
見せず、更に大胆な姿態を示して見せた。

痾高い声で笑い出した千代は、魂をもぎ取

られたような表情で、うっとりと思惚れている伊沢の肩に手をかける。

「どう、先生。驚いたでしょう。遠山財閥のかつての令夫人は、今では、こんな浅ましい恰好だって平気でなさるようになったのですからね」

春太郎と夏次郎は、あられない姿態となった夫人の足首に青竹を当てがって、キリキリ麻縄で固定し始める。

「今日は、卵が産めるようになるまで、徹底的な仕上げにかかるわ。奥様もそのつもりでがんばってくださいなきや駄目よ」

春太郎が、夫人の端正な美しい頬に軽く口づけしてそう云うと、

「それから、伊沢先生にもこの調教を手伝って頂きますからね」

と、千代は意地の悪い微笑を口元に浮かべあられない開股縛りにされた静子夫人にため寄った。

「いいわね。わかってるわね。奥様がむしろ伊沢先生をリードしてあげなきや駄目よ」

千代は、さも楽しげに春太郎達と一緒に夫人に要領を教えにかかる。

夫人は翳の深い瞳の中にも静かな憂愁の色を湛えながら、悪魔や魔女の説明を小さく

うなずいて聞くのであった。

「じゃ、先生、ここへいらっして。静子夫人が、全財産を没収され、先生のおかげで、さっぱりした気分になった事のお礼などおっしゃりたいそうよ」

千代にうながされて伊沢は再び夫人の前にぺたりとあぐらを組んで坐るのだ。伊沢の濁った好色そうな視線は相変わらず夫人の一点に注がれている。

「さ、奥様、先生にお礼をおっしゃいな」

千代に横から乳房を突かれた静子夫人は、わずかに伏せていた顔を悪びれず正面に戻したのだが、それは、人間的思念の一切を断ち切ったとでもいうような、ほのぼのとした美しい色を湛えていた。

「先生のおかげで、静子は、身も心も裸になる事が出来ました。これより静子は、性の奴隷として森田組に一生この身を捧げる事を決心したのでございます」

そう口に出して云った静子夫人の美しい切長の眼は、次第に妖艶で、情感的な潤みを持ち始める。

「先生に調教して頂きたいわ。ねえ、うしろへお回りになって」

伊沢は、夫人に甘い誘惑を受けたように、

ふわふわした気分になって這うようにして背後へ回る。

眼に沁みるように白い量感のある夫人の臀部を前に腰をかがめた伊沢は、矢も楯もたまらなくなった気分で、それに遮二無二熱い接吻を注ぎかけ、両手をかけ始めるのだ。

さっと困惑と羞恥の戦慄が夫人の表情をよぎったが、それも一瞬の事で、顔面を朱に染めながらも強いて平静さを取戻そうとし、唇を噛みしめる静子夫人であった。

「春太郎さん達にとっても素敵な調教を受けましたのよ。うん。黙って御覧になるばかりでは嫌。何とかおっしゃって」

静子夫人は、濡れ光った眼をぼんやり前方に向けながら、伊沢の手で抱えられた双臀をさもじれたそうになよなよ揺さぶって見せるのだ。

伊沢は、胸を切ないばかりにうずかせながら、悪どく調教されたとは信じられない夫人の奥に秘めた、可憐なばかりに愛くるしい、ぴっしり緊まった後……を凝視している。そして、何年か前、ふとどこかのパーティで出会った時の、静子夫人の美しい容姿を伊沢は思い起こすのだった。

何人かの外国人の名士に取囲まれて、ワイ

ングラスを片手に流暢なフランス語で談笑していた静子夫人の何というあでやかさ。黒のドレスがよく似合い、胸の線のふくらみの悩ましさ、大胆に緊まった腰部から肢にかけての優美な曲線など、それに高貴で、しっとりした翳のあるふるいつきたいばかりの美貌、

始めて静子夫人を見た日以来、伊沢は夢にまで恋い焦れて仕事も何も手につかなくなったのだが、それが何という事か。あの日見た大富豪の美しい令夫人は、今はやくざ一家の性の奴隷、しかも俺の眼前にこのようなものでむき出しにさせられ、いや、それだけではなく、性のスターとして、強制されたきこちない媚態まで演じなければならぬのだ。

「ホホホ、奥様。そろそろ先生に調教をおねだりしちゃどうなの」

千代は、静子夫人の白蛾のような優雅な頬を指ではじいた。

天性の美貌を持つ静子夫人を、貴婦人の座から売春婦以下の女に転落させてやったという快心の微笑が、たえず千代の口元に浮かんでいる。

「ねえ、先生、お願い——」

伊沢は、夫人の言葉を受けると、興奮の色をまざまざ顔に浮かべて手を走らせる。

同時にむせび泣くような、何とも云えぬ悩ましい夫人のうめきが伊沢の耳に聞こえてくるのだ。

「ねえ、ねえ、お待ちになって！」

夫人は、青竹につながれて開いた太腿を悶えさせた。

「どうしたんだよ。奥さん」

伊沢は、血走った表情になって、怒ったように云った。

「ワセリンを使って下さらなきゃ嫌」

静子夫人は、すねるような、もどかしい身悶えを見せて甘えるように云うのである。

春太郎が含み笑いで渡すワセリンを伊沢は慄える指先ですくい取った。

「——ち、ちがうわ。もっと、もっと激しく

しなくちゃ、駄目ですわ」

伊沢のマッサージの手ぬるさに静子夫人は不平をとねえ、ますます伊沢の官能を高ぶらすのである。と同時に伊沢は、己の技巧の拙劣さを女に指摘されたようなあせりを感じ出すのだ。

「そ、そんな事では駄目。じれったいわ」

静子夫人は、さも口惜しげに顔をそむけ、綺麗に揃った睫毛をフルフル慄わせながらすすり泣くのである。

春太郎と夏次郎が笑いながら近づき、伊沢の背を軽くたたいて

「そこんところは一寸むつかしいんですよ。交替しましょ、先生」

伊沢は、二人のシスターボーイに持場を奪われ、自尊心を傷つけられたとでもいうようなベソをかくような表情になった。

しかし、静子夫人は、それでむしろ救われたとでもいうようなほっとした顔つきになり微妙な微笑を口元に浮かべて、横に呆然と突っ立つ伊沢を妖艶な流し眼で見るのである。

「女の身体というのは複雑ですよ。先生。この方達がする事をよく御覧になって下さいましね」

春太郎と夏次郎は、夫人の前と後に腰をかめるのである。

春太郎が菊………巧妙な手で攻撃し始めると同時に、夏次郎もそれに同調して柔らかい責めを加え始める。時々、責め手を控えて熱い接吻を注ぎかけ、また調子を合わせての柔らかい攻撃をくり返すのだ。たしかにその責めは巧妙を極めていた。夫人が耐えかねて来

た事は、その次第に露あらわになつて来た身によじり方と激しい啼泣とで充分に察しられる。

春太郎と夏次郎は、ただそうして、黙々と夫人を責め続けるのではなく、夫人の被虐感が高まつて行くムードを壊さぬよう、いや、一層、夫人が溺れこんで行く事を計算に入れた、からかいや、含み笑いなど折り混せて低い声でしゃべりつづけるのだ。

夏次郎は、夫人が責めに敗れ始めた反応を示し出すと、

「フッフ、美しい顔に似合わずエッチな奥様だこと。これが元、遠山財閥の若奥様だつて何だか信じられないわ。でも、さすがね。おしとやかで、美しい小川のせせらぎのよう、ね、お春、聞こえるでしょう」

と、からかえば、背後に回っている春太郎も根気よくマッサージをつづけながら、

「ねえ、美しい若奥様。いくらどうでもよくなったからといっても、おならなんかしないでね」

と云つて笑いこける。

そういう言葉のいたぶりに、高まつて来た被虐感がまた熱っぽく揺さぶられ巻きこまれていく静子夫人である。

夫人のギラギラする濡れた瞳は、やがて、

したたり落ちるばかりに潤み出し、妖しく何かに酔い痴れたようになる。

「フッフ、どう、伊沢先生」

春太郎は、伊沢の眼にそのマッサージの効果を示して驚かせ

「こうなりやもうこっちのもの。これから先は最後の仕上げよ」

再び、ワセリンをたっぷりとするく上げた

春太郎は、次にバイブレーターを取上げた。それに調子を合わせて夏次郎も別のバイブレーターを取上げる。

あつと声を上げる間もなく夫人は、二つのバイブレーターの電動音と共に、縛られた身をブルブル慄わせ、夫人は舌たらずの悲鳴を上げた。

「——そ、そんな、嫌っ、嫌です！」

クラクラと赤いものが眼前に浮かび、夫人は眩暈を起こして、すさまじいこの責めの前に失神した。

——何分かがたつて、ふと、夫人は眼を開いた。相変わらず立位にされて縛られたままだつたが、青竹の足枷だけは外されている。

眼の前では千代に二人のシスターボーイ、それに伊沢の四人が、何時の間にかウイスキーを持込んで夫人の方を向きながら笑い合っ

ているのだ。

夫人は開いている両肢を反射的に閉じ合わせようとしたが、臀部を責めつけられているような異物感に顔をしかめた。

「ホホホ、気を失っている間に奥様は、ピンポン玉を卒業して、うで卵に進級するまでに進歩してしまったのよ」

千代はそう云つて笑いこけるのだ。

夫人は一瞬、強張った顔になって、さっと眼を伏せたが、「嘘だと思ふなら、見せてあげようか」と、春太郎達がグラスを置いて背後へ回り始めると、象牙色に冷たく澄んだ夫人の美貌に赤味がさし始める。

「何してんのよ。わかってるでしょ」

春太郎と夏次郎は、まるで牛か馬を叱咤するようにな夫人のたくましい見事な双臀をパチパチ左右から平手打ちし始めた。

すべてを悟った夫人は、美しい富士額にべつとり脂汗を滲ませながら、息をつめ、優美な腰をうねらせ始める。

「そーら、しっかりしっかり」

二人のシスターボーイは手を打って、はしやぎ出し、それに伊沢も加わって、一個の卵を凝視するのだ。

噴きこぼれるように落下したそれを掌で受

けとめた春太郎は、「さ、奥様、も一度」と再び、元へ戻し始めるのだ。

「まるで奇術だわね」

と千代にからかわれながら、二度三度と静子夫人は強制され、たくましい双臀をうねらせせつつ、夫人は、じっと泌み入るような情感的な眼差しを、前で酒を飲む千代に色っぽく注ぎかけるのだ。

「とうとう、こんな事まで出来るように静子はなってしまったのね、千代さん」

静子夫人の情感を湛えた妖しいばかりに美しい瞳から恍惚とした涙があふれ出てくる。

「さ、もう大丈夫、次は伊沢先生の番よ」

完全なまでに効果をあげたことに氣をよくした春太郎は、伊沢に交替させる。

逃れ得ないと覚悟したためか、待ち受けていたようにこつてりと肉の乗った夫人の白い臀部は大きなうねりを見せ始め、伊沢に眼を瞠らせた。

「そんなに、そんなにお笑いになっちゃ嫌」

伊沢が、何か恍惚となっていく自分に照れて笑い声を立て始めると、夫人は、すねたような妙に艶めかしい鼻息を立てながら、双臀を悶えさせるのだ。

それがすっかり姿を消すと、夫人は、優雅

で端正な頬に口惜しさとも悦びともつかぬ涙をしたたり流しながら、静かに瞼を閉じ合わせるのだ。それは、まぶしい位に甘美で魅力的な夫人の表情であった。

千代は急に悪戯っぽい微笑を口元に浮かべると、別の一個を手にして夫人に寄り添って膝を折った。

千代が何をしようとするかは、夫人もわかつてる。拒否しても無駄であることもわかつてる夫人は、悩ましいばかりに官能的な肉づきのいい太腿から力を抜き、したい放題にさせるのであった。

「そら、今度は二つ一緒よ、奥さん」

千代は、キラキラ光る魔女的な眼つきで、ねっとりとした脂汗に輝く静子夫人の乳色の肌を見ながら声をかけるのだ。

皆の視線を受けてそこに立つ静子夫人は、そんな言語に絶する、いたぶりを受けながらも、やはり磨き抜かれたような高貴な気品と優雅な美貌を、その心持ち横に伏せた頬に滲ませている。

「鶏の鳴き真似もするのよ。さ、始めて」

千代は、笠にかかって夫人をいたぶる。

田代と森田が、腕時計を気にしながら部屋へ入って来る。

「あまり大スターを一人占めにしてくれちゃ困るね。夕方までどうしてもフィルム五本を制作しなきゃならないんだ」

森田が苦笑してそう云うと、

「今、最後の仕上げにかかっているとところなのよ。また新しい芸を一つ、奥様は覚えて下さったの。次のショーにぜひこのプログラムを加えて頂きたいわ」

千代は、森田にそう云ってから、眼を再び夫人の方へ向ける。

「ぐずぐずしちゃ駄目じゃない。奥様は売れっ娘だから忙しい身なんですよ。さ、早く鶏の真似をして頂戴」

そう千代に浴びせられ、静子夫人は、なよやかな肢態をうねらせつつ頬をひきつらせ、熱っぽい鼻息と共に

「こんな、こんな身体になってしまった静子が恐ろしい。ああ、恐ろしいわ」

と、うめくように云い、次に真っ赤に顔を染めながら

「コケッコ、ココ、コケッコ」

夫人が鶏の鳴き真似を始めると、田代も森田も声をあげて笑い合った。

しかし、それがただ鳴き真似だけでないことを知ると、田代と森田は啞然として眼を瞠

った。

「卵を一度に二つも産める鶏なんて見た事はねえ。こりゃ、素ばらしい芸当を覚えてくれたもんだぜ」

森田が顔に喜色を浮かべて田代に云った。

一つは千代の掌の上へ、一つは春太郎の掌の上にあったが、夫人は夢のような知覚の中へ身をゆだねてしまったように、ねっとり潤む美しい眼をとろんとさせて、前方を見るともなしに見つめている。

田代が、気がついたように急に拍手し始めたので、森田も千代もそれにならって哄笑しながら手をたたき始めた。

「元、遠山財閥の令夫人にこういう芸を教え

こんだのは、ここにいる春太郎さんと夏次郎さんなのよ。ね、社長。この二人に社長からもお礼を云ってあげてほしいわ」

千代は、楽しそうに田代の顔を見上げて云うのである。

「よくやったぞ。今月から手当ても倍にふやしてやろう」

田代が、えびす顔になってそう云うと、春太郎と夏次郎は抱き合うようにして喜び出すのだ。

「ね、社長。これでこの美しい奥様は、二刀流の器用な女になられたわけよ。一度、捨太郎さんに試させてごらんになれば」

千代は夫人の双脛をピタピタ手でたたきな

がら田代に告げる。

「そいつを映画に撮りゃ一段と迫力が出ますぜ、社長」

と森田は乗気になり、早速、夫人をカメラの前へ連れ出そうとして、夫人の梁に吊るされたロープを解こうとする。

「ねえ、待って」

夫人は、甘ったるい声を出して、身をよじらせた。

「すぐに次のお仕事をさせるなんて、ひどいわ。このままでもいいから、少し休ませて下さいまし。ね、いいでしょ」

夫人はショーのスターとしての媚態を完全に自分のものにしたようである。

媚を含んだ柔らかな微笑を線の綺麗な頬に浮かばせ、睫毛をそよがせながら相手を吸いこむような色っぽい眼をじっと森田に注ぐのだった。

「それはいかねえ。手間のかからねえ内に、捨太郎に試させなきゃあな」

森田は、夫人の甘えるような色っぽい眼差しに溶りけるような気分になりながらも、わざと無難作に云ってのける。

「じゃ、せめて、おトイレぐらい——ね、いいでしょう。静子はまだ朝から一度も」

伝言板

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

静子夫人は匂うような羞恥の微笑を口元に作り柔軟な腰のあたりをもじもじさせてみせるのだ。

夫人が自分の口からそうした欲求をするのは珍しい事で、田代も森田もふと夫人に頼もしさを感じながら、春太郎に命じて夫人の便器を持って来させる。

バラの花が描かれた幼児用の可愛い、おまゐるが持ちこまれ、よし、俺達が手伝ってやろうと、田代と森田がニヤニヤする。

「さ、早いとこすましてスタジオの方へ行こうぜ、奥さん。捨太郎達がしびれを切らして待っているんだからな」

森田は、夫人の夢幻的な感じさえするふくらはぎを軽く手でたたきながら、催促するのだったが、夫人は、艶っぽくて美しい顔を見せながら、さも切なげに肩を揺さぶるのだった。

「あのお今日は、ね、お願い、吊ったままは勘忍して」

と、夫人が美しい眉をしかめるので、千代が顔をしかめた。

「せっかく社長がこうして手伝って下さるというのに、どうしてまた我俣を云うの奥様」すると夫人は、熱っぽく潤んだ瞳を千代の

方へ哀切的に向け

「千代さん、耳を貸して」

と羞かしげに口を開くのだった。

何なの、と夫人の口元に耳を近づけた千代は吹き出して

「ま、奥様ったら、大きい方ですって」と、云い、男達の顔を見廻すのだった。

静子夫人は男達の洪笑を浴びて、頬を染めながら、

「ですから、ほんの少しの間でかまいませんわ。この縄を解いて、ね、お願い——」

と、ねっとり白い脂肪に輝いた美しい裸身をよじらせつつ、必死になって鼻にかかった声を上げるのだった。

「全く手数のかかる奥様なこと。でも、そいつばかりは仕様がなないものね」

春太郎と夏次郎はくすくす笑いながら、今度は何処からか洗面器を一つ持出して来た。

「ああ。やっぱり、このままでなきゃいけませんの」

二人のシスターボーイが背後へ廻るのを見た静子夫人は、溜息のようなものと一緒に哀しげな声を出す。

「さっきの要領ですまればいいのよ。わかったわね。奥様」

そう云って笑う春太郎の手から伊沢が洗面器を取上げ、胸をときめかせながら夫人の柔らかなくましい双臀の下へ当てつける。

その冷やりとした感触に夫人は思わず身ぶるいしたが、さあ早くすましな、と森田も、それに調子を合わせるように、構えるのだった。

進退極まった感の静子夫人は、すねるように二三度、嫌、嫌、と優美な腰をよじったが「時間が惜しいわよ。早くすまして頂戴」

という千代の手きびしい言葉を受けると、睫毛の綺麗な切長の眼をそっと閉じ合わせ、この屈辱を快感に切りかえるための心の努力をするかに見えた。

「こんな事までして下さる田代社長と伊沢先生に充分感謝して、大家の若奥様らしくお行儀よく流さなきゃ駄目よ」

千代は、痛快極まりない顔つきでウイスキーをゆっくり喉へ流しこむ。

伊沢は、まるで夫人の性の妖気にむせたように、美しく盛り上った夫人の双臀へ何度となくねばっこい接吻をくり返し、

「僕は奥様をどのように恋していたか、その気持は今でも少しも変わっちゃいない。ほんとだよ、奥様」

伊沢は、もう見栄も体裁もないといった風に双臀から大腿にかけての悩ましいばかりに優美な線へ熱い接吻を注ぎつつけるのだ。

静子夫人は、千代達に再び叱咤されて、そつと眼を開く。

夫人は、とろりと潤んだ妖艶な瞳を上へ向けながら、うわ言のように云うのだ。

「伊沢先生、ほんとに静子、このままですてもかまわないのね」

「ああ、奥様のような絶世の美女には、汚いものなんて何もありやしないさ。少しも気になりませんよ。さ」

「でも、ほんとに後悔なさっても、静子、存じませんことよ」

静子夫人は、媚を含んだ小さな微笑を口に浮かべ、官能味豊かな太腿をわずかにずらし始めるのだった。

「こちらの方も遠慮はいらねえからな」

森田と田代も、一段と身を乗り出した。

前後の男にそうせかされて、余計に夫人は柔らかい睫毛を動かし、鼻声になって、さも羞ずかしげにモジモジ身をうねらせるだけなのである。

「嫌ですわ。そんなにじろじろごらんになつては」

その時、襖が開いて隣の間で待機していた撮影のスタッフ達がぞろぞろ入って来る。

時間を気にして、静子夫人の身柄を受取りに来たのだ。

「社長、夕方には業者に品物を渡さなきゃならねえ。早く撮影の仕事にかかりたいのがね」

撮影の責任者になっている森田組の井上が夫人の身柄を早く渡してくれるよう田代に要求するのだ。

「さ、奥様、こうして皆様がお待ち兼ねよ。ぐすぐずしないで早くおすましっ」

千代は、激しい口調になって、再び夫人をせかせるのだ。

夫人は頬の色を急に硬くし、形のいい唇を歯で噛みしめると、ぐっと削いだように顔をねじった。

自分を落花微塵に打碎くべく夫人は悪魔達の掘った穴へすべり落ちていく。

どっとわき立つ悪魔達の嘲笑や洪笑も、もう夫人の耳には聞こえない。

伊沢は、左右に身をかがめて来た春太郎と夏次郎の顔を見、クスクス笑い合い、再び好奇の眼を輝かすのだった。

「さすがに元、貴婦人だけあってお行儀がい

いわね。どう、このおしとやかさは」

春太郎はおかしさをこらえるように口を押さえながら、夏次郎の肩を突くのだった。

「いいのよ、奥様遠慮なさらなくとも。もつとのびのびした気分で続けて頂戴」

夏次郎は、夫人の双臀を軽くつねったりして笑い出す。

静子夫人は、臍たけた美しい顔をゆらゆら動かしながら、すすり泣くのだった。

「まあ、健康的な色だこと」

「相手が美人だとこんなものまで綺麗に見えるのだから不思議だわ」

二人のシスターボーイは、半分、酔ったような声でしゃべり合うのだ。

「ホホホ、こんな姿を一度遠山に見せてやりたい位だわ」

千代はひきつったような頬をして小気味良げに笑い出す。

「もういいの、奥様」

春太郎が、もの足りないという顔付でいうのだった。

「まだ、まだですわ」

夫人は、何とも云えぬ初々しい含羞みの色を綺麗な頬一杯に浮かべて、首を柔らかく振って見せたのだ。

自分の口からはっきりと、残った便意を告げた静子夫人は、そんな自分を羞かしく意識してか、溶けるような羞恥の身悶えをくり返しつつ、甘くうめくように

「ああ、ごめんなさい。許してー」

夫人のやるせない吐息がふと止まった。途端に春太郎達は、悲鳴に似た笑声をわざと大仰に立てるのだ。

「まあ、凄いわあ。嫌な奥様」

「これがフランスの社交界にまで名を売った貴婦人だなんて、一寸、信じられないわ」

そんな嘲笑の中で、夫人は身体中の力を出し切ってしまったのか、こと切れたように、がっくり首を垂れてしまった。

スタジオへ夫人を運び出すべくやって来たやぐざ連中も、こうしたすさまじい光景に度胆を抜かれたのか、そのあたりに棒立ちになっっている。

森田と伊沢がチリ紙やむしタオルを使って後始末にかかり出す。

ふっと正気に戻ったようにぼんやりと美しい眼を開いた静子夫人は、こみあげていたものを残らず放出した快さにうっとり浸るかのよう、その表情は見ている者の心を揺さぶるばかりに、甘美で妖艶であった。

執拗なくらいに丹念にむしタオルを使っている背後の伊沢に対して、夫人は微妙な笑くぼを頬に作りながら、甘く囁くように声をかけるのだ。

「静子の醜いものを御覧になって、御気分が悪くなったのじゃございません」

夫人のそんな言葉が伊沢の胸をうずかせて「とんでもない。憧れていた美しい貴婦人の神秘のベールを一切剥ぎとったといった気分で、僕は実に幸せですよ」

そして、伊沢は、光沢を持つ夫人の双臀に改めて接吻して云うのだ。

「今夜を楽しみにしていますよ。これだけ僕も奥様のお手伝いしたのですから、この努力に報いて下さるでしょうね」

「わかっていますわ。これから静子がしなければならぬ仕事が終われば、必ず、先生のお部屋へ参ります」

瞼の深い、しっとりした眼の中で柔らかく笑って見せた静子夫人は、香水をふりまき始めた眼下の千代に対して

「ねえ、千代さん。こんなあとですからお願い、お尻の方にもお香水が欲しいわ」

と、甘い声でひっそり云うのだった。

「そうね。捨太郎旦那に嫌われないようにし

なくちゃ」

千代や春太郎達の手で、すっかり手入れをほどこされた静子夫人は、歩み寄って来たやぐざ達の手で天井の梁に結ばれていたロープを切り落とされる。

フラフラとその場に膝をつきそうになった夫人は、よろめく足を踏みしめるようにして緊縛されたままの美しい裸身を立て直すのだった。

「さ、随分と時間を喰っちゃったんだ。急いで仕事にかかろうぜ」

井上は、夫人の縄尻をとって、仲間の者に声をかけた。

「しっかり仕事をするのよ、奥様。何しろ、奥様の映画は業者の間では凄い評判なんですからね。お腹に赤ちゃんが出来る前に、稼ぐだけ稼いでおいてもらいたいよ」

千代は、やぐざ達に引き立てられようとする静子夫人に向かって、楽しそうに口を開くのだ。

「さ、行こうぜ」

静子夫人は、数人のやぐざ達に取囲まれるようにして静かに歩き始める。

何かを思いつめたように濡れ光った静子夫人の綺麗な瞳は前に向き、その比類のない程

美しい夫人の頬には、ふと自嘲的な悲しげな微笑が、ほんのりと冷ややかに浮かび上っている。

優雅な奴隷

津村義雄の寝室であった二階の一室で、徹底したいふりを受けた珠江夫人は、二本のロープに支えられて、立鏡の前に立たされている。

一昨日までの大理石のように硬い美しい容貌も、がっくり髪は乱れ、半開きになった口からは熱い吐息が洩れ、白磁の艶やかな肌には、ねっとり脂汗が浮かんで、如何にも微塵に打砕かれた感であった。

つい先程まで珠江夫人が大の字に縛りつけられていた大きなベッドの上では、川田と吉沢が花札遊びをしているのだ。

ふと、立位で縛られている珠江夫人の方を見た吉沢は、ふと不快な表情になってベッドから飛び降りた。

「よ、どうして前の鏡から眼をそらすんだ。云われた通り、しっかり鏡を見てなきゃ駄目じゃねえか」

吉沢は、珠江夫人の頸に手をかけて、ぐい

と顔を持ち上げた。

珠江夫人は、おどろに乱れた黒髪を頬の半分にもつらせたまま、妖艶さの滲んだ表情で前の鏡にねっとりした瞳を向けるのだ。

もう反抗する気力も喪失した珠江夫人であったが、それをいい事に吉沢は、うしろからぴったり体を押しつけ、珠江夫人と頬を合わせて一緒に鏡の方へ眼を向けるのだ。

「昨夜は随分と乱れてたじゃないか。覚えてるかい」

珠江夫人は肉体がどろどろに溶け潰れたその余韻の中で未だ意識が元へもどらぬようなうっとりした表情を鏡の中へ向けている。

「明け方までに七度も泣いたぜ。いやはや奥さんも嫌いな方じゃないようだな」

吉沢に頬を突かれて、羞かしげに身をよじった珠江夫人は、顔を伏せてシクシクすすり上げるのだ。

「鏡から眼を離すなと云ったろう。こちらがよしというまで、自分のみじめな姿を何時までも眺めているんだ」

今度は川田がベッドから降りて来て、もじもじする珠江夫人を叱咤した。

「まだ、まだ、私に、これ以上、生恥をかかせるおつもりですの」

珠江夫人は、白々と冴えた繊細な顔を鏡へ戻しながら、滴るように美しい、滲んだ黒眼をしばたかせて云った。

ふっくらした胸の隆起にきびしく巻きついて麻縄以外、何も身につける事を許されず、その鏡にうつる、生まれたままの姿を見ねばならぬ屈辱は、耐えられないものだったが、それよりも、この男達はまだ自分に対するいたぶりを続ける気なのかという恐怖で、珠江夫人の心臓は高鳴りつづけているのだ。

「何を云ってやがる。生恥をほんとにかいて頂くのはこれからなんだぜ、奥さん」

川田は象牙色に輝く珠江夫人の緊縛された美肌を舌なめずりでもするような顔つきで眺めて云った。

品位を帯びた妬ましいばかりに白色で繊細な珠江夫人の下肢は、川田が近づくとぴたりと閉じ合わされ、かすかな慄えを見せる。

固く緊まった珠江夫人の程よく脂肪を乗せた悩ましい太腿の脛に染みるような色艶をニヤニヤ眺めていた川田は

「間もなく奥さんは、大塚女史に長年千原流生花を後援した事の詫びを入れ、それから剃り落とされる事になっているんだ。覚悟は出

来ているだろうな」

川田のその言葉に珠江夫人の端正な頬は見る見る紅潮する。

「こうして鏡の前に立たせたのは奥さんにお名残を惜しませてやるためだからだぜ」

川田がそう云って笑うと、珠江夫人は、耐えられなくなったよう、さっと赤らんだ顔を横に伏せ、優美な肩を慄わせて嗚咽し始めるのだった。

そこへドアが開いて、大塚順子が直江と友子を連れて入って来る。

珠江夫人は泣き濡れた顔を上げ、大塚順子に呪うような眼を向ける。

「まあ、こわい顔。昨夜、あれだけ女らしく泣きつづけたんだから、きっと今朝は、もっと女っぽくなっていると、期待していただいたのよ。フッフ」

順子は手にしていたカメラを珠江夫人の方へ向けるのだ。

珠江夫人は、狼狽してカメラより必死に顔をそらせた。

「あら、駄目じゃない、そんなに顔をそむけたりしちゃ」

順子は舌打ちして、ずいっと珠江夫人の正面に回りこむ。

「——こんな姿をカメラにおさめて、一体どうなさるおつもりなの。大塚さん」

珠江夫人は白い頬に幾筋もの涙を流しながら必死な口調になり、緊縛された麗わしい裸身をよじってカメラの眼から逃れようとするのだ。

「千原流後援会の全会員に折原夫人のヌード写真を送るのよ。後援会長のヌードを見て会員達はどんなにうろたえるか。想像するだけでも楽しくなるわ」

それを聞くと珠江夫人は慄然とし、大きく眼を見開いた。

「な、なんという恐ろしい事を。大塚さん、貴女は気が狂っていますわ」

珠江夫人は、胸が張り裂けるような思いになってヒステリックな声をはり上げた。

「つべこべ云うねえ。昨夜の事を思い出してみろ。もうお前さんは、まともに連中の前へ顔を出せねえ筈だぜ」

吉沢が哄笑し、珠江夫人の耳をひっぱる。

「どうしても写真を撮られるのが嫌だというなら、千原美沙江に奥様の代役を頼んでもいいのよ。その方が効果的かも知れないわね」

順子の言葉に、珠江夫人はハツとして首を上げた。

「家元の御令嬢の写真バラまく方が、面白いじゃないませんか」

吉沢はそう云って、ざまを見ると云わんばかりに珠江夫人のひきつった表情を見る。

「それだけは、ああ、それだけは——」

珠江夫人は、さめざめと涙を流しながら、美沙江をかばい、遂に悪魔達の軍門に下ったのである。

「気のすむまで、私をなぶりものにして下さい。そのかわり、お嬢様には手出しなさらないで。お願いです、大塚さん」

珠江夫人はそう哀願すると、涙を潤ませた瞳を静かに閉じ合わせ、覚悟した事を示すのだった。

「もうあまり手数をかけさせないでね、折原の奥様。今日から貴女は森田組の商品となったのですからね。もう二度と世間へ出られない身となった事をお忘れなく」

順子は楽しそうにそう云いながら、縛られて立たされている珠江夫人の周囲をグルグル廻り色々な角度から写真を撮り始めた。

「さて、次は御主人に送る写真を撮りましょうね」

新しいフィルムと取りかえた順子は、再び珠江夫人の正面に回った。

夫にまで写真を送ろうという大塚順子の鬼畜的な着想に珠江夫人の表情はまた強張ったが、今はもう悪魔達に引きずられてずるずる谷間へ落ちこむより仕方のない自分を悟ったように、がっくり首を落としてしまふ珠江夫人であった。

「ちよっと、顔を隠したらあかんじゃないの」

元は、千原家の女中であった友子と直江が珠江夫人の顎をとって正面へすえた。

「そんな口惜しそうな顔しちゃ駄目。これは今日で永遠のお別れとなる御主人様に送る、奥様の記念品なのよ」

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

順子は、珠江夫人の憎悪を含んだ美しい濡れた瞳を楽しそうに見つめながら

「ね、最後の記念品なんだから、もっと大胆なポーズをとってみない、奥様」

と云い、片頬を意地悪そうに歪めると、

「両肢を大きく開いて頂戴。どうせ写真を撮るなら、御主人の、うんと喜びそうなのを撮りましょうよ」

珠江夫人はあまりの屈辱に気が遠くなりかけ、血の出る程、固く唇を噛みしめる。優雅で華奢な珠江夫人の下肢は反射的にびったりと閉じ合わされたが、重ねた白磁の冷たそう

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

な太腿までが、憤辱にブルブル慄えているように見えるのだった。

「おい、云われた通りにしねえと、俺達は美沙江をお前さんのいる前で玩具にするぜ」

吉沢が調子に乗って凄んで見せる。

両足首に縄をかけ、左右に引っ張って、そんな恰好をとらせる事は簡単だったが、珠江夫人に自分の意志でやらせる方が面白いと順子は直接行動にかかろうとする男達を制しているのだ。川田と吉沢は、珠江夫人の左右に立って縄に締め上げられた珠江夫人の乳房を突いたり臍を押ししたりして脅迫するのだ。

「川田さん。お嬢さんを連れて来てよ」

順子に頼まれた川田が部屋を出ようとする

と珠江夫人は、けたたましい声を上げた。

「待って、おっしゃる通りにするわ」

珠江夫人は川田を呼び止めると、順子の方へ恨みとも口惜しさともつかぬ凄惨な色を含めた視線を向けた。

「——気がすむまで写真をお撮りになればいいわ。こうすればいいのね」

刺すような冷ややかな口調でそう云った珠江夫人は、さっと顔を横へそらし、艶々した幻想的なくらいに色白の太腿を徐々に割り始めたのである。

伊 藤 晴 雨 絵 卷 考

秘 卷

地 獄 の 女

齋 藤 夜 居

伊藤晴雨の絵巻のうち世に知られた（と云っても、一部の好事家間に過ぎぬけれども）

『美人十二支』と『沢村田之助』がある。共に線描（墨）を石版画でかき、需めに応じて手彩色した怪奇画譜で、美人十二支には私家潜行版と戦後の昭和二十八年九月に粹古堂伊藤竹酔が頒布の二種がある。沢村田之助絵巻は田之助が半陰陽^{ふたなり}だったという男女両色を兼ねたグロテスクなもの。昭和六年から八、九年までの風俗史時代には、自宅に石版印刷機が置いてあったので、こうした悪戯をやって同好者をだいぶよろこばしていたらしい。筆力精力共にあぶらの乗りきっていた頃で、晴雨画筆の最高潮を示している。絵巻物のよう

な、長尺の構図描彩におけるエネルギーを要する仕事は、いかなる画家の生涯でも、幾度も興趣がおとずれることではなからう。密度の濃い風俗絵巻は戦後になってからも描いているが、気魄のおとろえを円熟した筆致で補ってはいけるけれど、悪く云ってしまったえば田舎芝居の絵看板の如き作品も多かったし、昭和初期のオリジナル物を、知っている人の眼には、ポーズのむしかえしと筆の枯れが気になるものだった。

責マニヤや蒐集狂のなかには直接晴雨を訪ねて、画を依頼する人も多い。その場合に構図の注文もずいぶんあって、旦那の望み通りとまでは行かぬ迄も、ある程度の無理も聞い

た。が、戦後になってからは、責絵も大分普及されてきたので、仲々頼まれたからと云って、おいそれと注文に応じきれなくなった。

それでも、未知の若い客であっても、行けば好々爺然として話相手をしていた。絵と人物がどう考えたって結びつかない、と晴雨を評した人もあったが、それ程いわゆる芸術家肌というのに縁の遠かった人柄だったらしい。

一枚刷で完成する構図とか、長尺物の絵巻などというのは、挿絵式の画家には実に難儀な仕事であるから、画品のうちに、画家と依頼主の呼吸がピッタリ合わなければ、完成までもって行くのは先ず至難であろう。まして晴雨の如き稀代の変物においておや、だ。こ

れから語る「秘巻地獄の女」は、沢村田之助同様に、ストーリーのある絵巻物として、首尾一貫しているのと、この種の巻物にありがちな秘画ではない、完全な責絵巻という点を珍重すべきである。

晴雨が移動小劇団「俠国劇」を結成したが、昭和十年頃だと思う。寄席廻り専門のごく小さな劇団だったが、山谷亭を根城に興行していた頃は、若き日の内海突破も所属してたが多くの浮草生活の無名の旅役者の集りだった。俠国劇は勿論新国劇をもじった名称。

この頃、晴雨の生活は精神的にも肉体的にもデカダンスというよりも、最悪条件のそろった荒廃期とも云うべく、最も柔順でうつくしかった第三の妻の狂死後で、

「辛うじて葬式を出してから、私は何をするのも嫌やになって、毎日酒ばかり飲んで暮らしていた。小劇団を作って女の責場の芝居を試みよう、と考え付いた。それは妻を失った淋しさと、女の責場の対象物を失った事と、正直に云えば肉体的の寂寥とに堪え兼ねて」と自記しているが、ソドミットを広言して憚らなかつた晴雨のことであつたから、その方面でも趣味を満喫したかつたし、女形責めの研究もしたりして、奇妙な交錯した変態的

欲望（晴雨の男色は女装が絶対条件だった）に耽溺していたが、約一年で終止した。元来が、画筆で依食して来たのであるから、芝居道の人ではなかつたからだ。そして、この時期に、

「私はこの劇団と別れて独り淋しく孤独の家に帰った。私はこの間の舞台スケッチを土台にして、地獄図絵の製作に取りかかったが、此の時、私の経済事情は全く行詰って二進も三進も行かなくなつてしまつたが、窮すれば通ずの諺の通り責場の女の絵を描いて貰いたいという人が現れた」（『責のこれくしょん』82頁）。

この依頼者が、「地獄図絵」こと『地獄の女』の所有者となつた、埼玉県忍の行田の足袋の大問屋の主人公石島郁太郎で、新兵衛地蔵の傍に住むその土地では旧家だった。狂気に近い責マニヤで、北は函館から西は九州博多まで、責物コレクションの蒐集のため、全国を飛び廻つたという奇人。四十七歳の壮年で歿したというが、責と酒で身代をすっかり潰してしまつた。晴雨のよき相棒だつたということは、「逆さ吊り」（小著『伝奇伊藤晴雨』）を見られたい。

石島郁太郎歿後この絵巻は、小石川（現文

京区）の増田家にわたり、その後、目黒に住む書狂相合谷家が如何なる事情でかこれ入手。のち、同家の蔵書整理の際に筆者の所有に帰したものの。絵巻の完成時期は不明だが、その起筆を以上によって昭和十一年と推定できる。

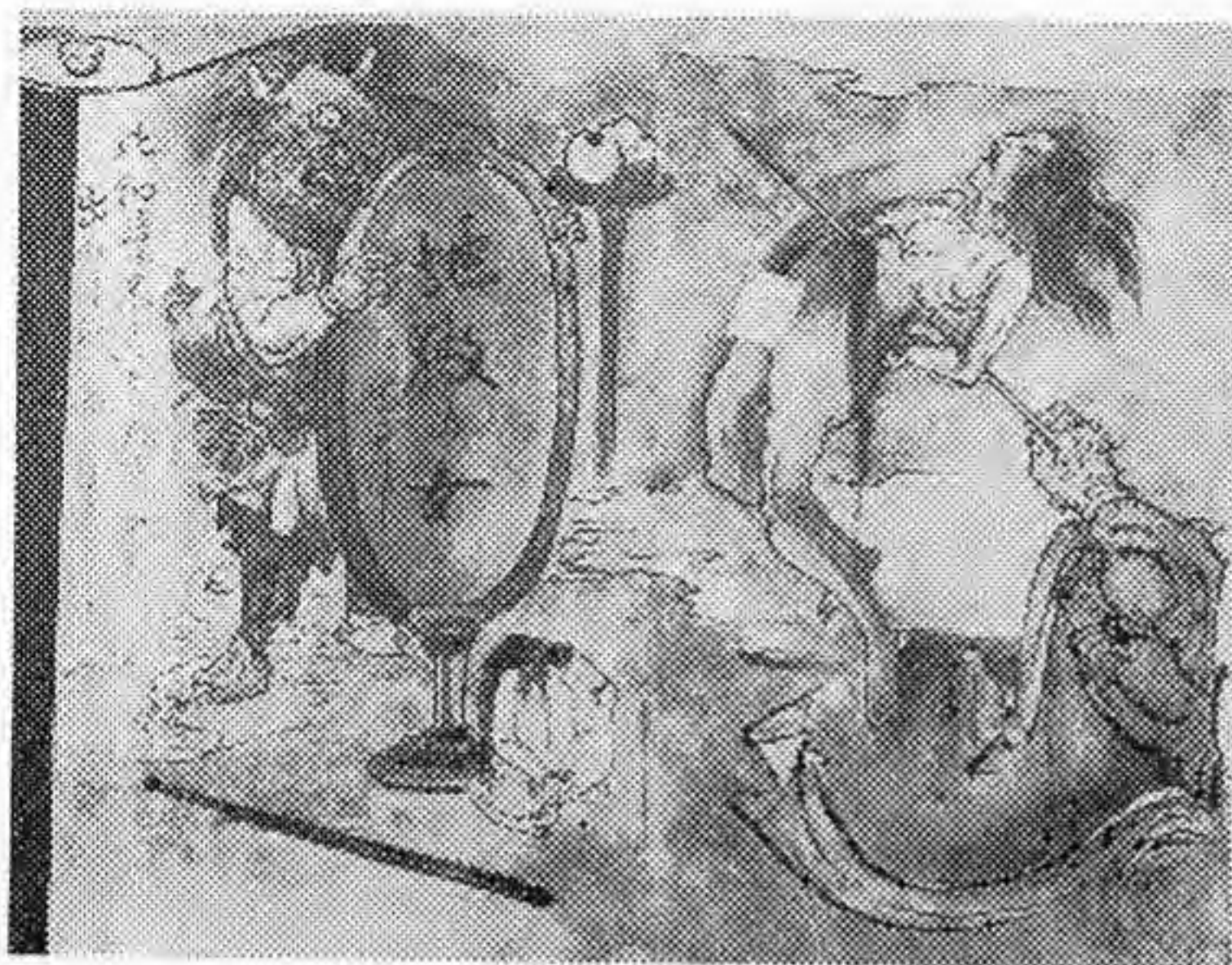
絵巻『地獄の女』の概略を説明すると、河岸に漂着した若い女の死体から一通の手紙が発見された。それに拠ると世にも怯ろしい、責地獄の様相が綴記されている——。幻想と怪奇の絵物語であつて、

幅（タテ）22センチ8ミリ、長さ（ヨコ）13メートル25センチ 未表装（裏打スミ）

極彩色。図柄は四四面、言葉書きは巻紙の手紙となつており、ヒラヒラと蝶が舞うように、常に殆どの画面の、背景につかわれていて、実に効果的で、心憎いくらい達者な筆である。寂然として荒れ果てた孤独の一室で、ひたむきに画想を練り、冷酒をあおりながら彩筆をはこび、気味のわるい妖異な笑みをうかべ、案を打っては筆を走らせ、一酌を口にふくんでニヤリ、全編に漂う妖気はいまもこの絵巻を繰りひろげている私の机辺に、生命あるもののように迫ってくる。画品をいうのではなくて、その鬼気魔魂を語らんとする

ならば、伊藤晴雨の芸術における最良の佳作たること、正に疑いないと信じる。

「地獄の女」晴雨作、と閻魔王庁の浄玻璃の鏡に卷名がクッキリ浮かび出ている。これは亡者生前の善悪業を写し出して、いつわりを許さない鏡だ。三つ目の鬼のおそろしい貌、引き据えられている、後ろ手縛りの裸女ふた



り、全巻の内容を暗示する装飾画としての意味を持つ。右端の串刺しにされている女亡者のからだは、無気味な青で彩色されており、流血と唇のみが赤い。うす墨色のぼかし……開巻の言葉が綴り出される。

「此物語は哀れな女の死体の中から

出た手紙に始まるのである」

と。巻軸の紺で区切りを付け、がんじがらめに荒縄で縛りつけられた、若い女の水死体と、女の手紙を読んでいる巡査の姿。遠景にヤジ馬のむれ。ちからを込めて描いた密画である。場所は駒形河岸、川の流れは隅田川とまるで芝居の舞台の書割にそっくり。馬頭観世音を祀った浅草の観音様とも由縁の深い駒形堂（俗に、こまん堂）を右に、したがって左の橋は両国橋だが、これが鉄橋になったのは明治三十七年だから、画面ではまだ木造になっているから、時代を明治三十年代の始めとも見ることができよう。河岸に水防の乱杭がならんでいるのは、本所の百本杭からの連想であろうが、当時は隅田川の流れも清く澄んでいて、たまたま女の溺死体などが丈なす黒髪を乱杭にからませ、あられもない浅間しい姿で打ち寄せられてくる、そういう処を晴雨は実際に見ていたのかも知れない。無気味

で心胆を寒からしめる画面である。

「花子さんを助けて下さい。火責水責で殺されかけて居ます」とあり、逆さ吊しの水責の女の背面が描かれ、重みのかかった女体のうねっている線がよく出ている。火責の女は爪先から脚にかけ、火ダコになって、ほてっている彩色が加えられ、むざんな迫真力は食い込んだ縄目にも胸乳の向きにも、腰から脚へかけての引きつった姿態にも現われている。

「田舎から出た妾は女中奉公を頼む為に恐ろしい口入屋の暖簾をくぐりました。そこは地獄の入口でありました」放り投げすてられた洋傘と信玄袋、乱棒狼籍きわまる落花の舞いを演じる口入屋の男衆二人。それから、「手も足も括られて妾は納屋の様な所へ投げ込まれました。暫らくの間妾は猿轡の中で泣いて居ましたが、真の暗闇の納屋の中に、もう一人の女の人が、泣いて居るのに気が付きました」

「泣きつかれた二人はそれから何時間経ったか判りませんでした（音無しくしているんだよ）」と云う男の声と一緒に戸が開いて、又哀れな女性が投げ込まれたのに気が付きました。是はまだ十七、八の女学生でした」

「泣き疲れた三人の女に長い時間と暗が続き

ました。そして恐ろしい夜が来ました。二人の処女の前で、無残な浅間しい夜の饗宴が行われました」

このような言葉書によって、物語が進行して行くのだが、悪虐にさいなまれる女の髪や裾のみだれが、くせの多い筆致で描かれている。柱に縛りつけられた女の姿など宛然浮世絵そのまま、がっくりくびをおとした風情など、習練を重ねた実地スケッチからの持味がよく出ていて、人体描法としても無理のない構図である。又、男衆二人のあぶらぎった悪党面もよく描けている。

「矢庭に三人の女は手足を海老の様に縛り直され、無理矢理に樽詰にされました。三つの樽は人力車の様なものに夜の街を何処かへ運ばれました。妾は其内気が遠くなってしまうました」

「一人幾何と沢山な男の前で女の躰が羅^せられて行く恐ろしい女市の羅^{せりだい}台の前に妾達は立たされました。妾達の運命を待つて居ました。やがて妾達の番が来ました。衣類は剥ぎ取られ、最後の物迄、荒々敷剥がれて行くのでした」

「妾しとまた女学生の花子さんはこうして恐ろしい男の手に買わされました」

「妾しと花子さんの買われて来た店は江東の淫売窟の中にある鬼清という、七、八人の女を抱えた此界限では大店の方でした。併し名の通り鬼の住家の様な恐ろしい店でした。妾達は鬼の主人の為に地獄へ落ちた宣告を受けました。恥かしい身体改めがすんで、最初の責苦でした」

図柄を追って言葉書を読めばお分りのように、まったく非現実的な荒唐無稽の物語であって、実事実話式のものではない。責められる女のねじられたり、曲折したからだの線をたのしむ絵空事として鑑賞すべきであろう。尚、おなじ文句の言葉書は省いた。

「妾しは此処の主人が如何に残忍な男かという事を聞かされました。此主人は抱えの女をむしろ変態客にせめぬかせるのが楽しみである様でした。それが又此店の特色で、外の店で出来ない様な浅間しい勤めを女にさせる事によって、繁昌しているのです。此変態的な性質は昔し、彼の妻が姦通をして、情夫の子を宿した時からでした。臨月の彼の妻を逆さに吊して、女が悶え死ぬのを見乍ら其最後迄酒を呑み乍ら其苦しみを見ていたという事です。此時から彼の女に対する残虐性が生れて来たのです」

「最近も病氣上りで身勤めの出来ぬ女を裸体にして雪責にした其女はそれがもとで死にました」

残虐爺の回想的場面で、柱に逆さ吊りした朶^だみ女を肴に冷酒をあおっている描き慣れた図と、雪責の場面だが、墨絵風に、胡粉ちらしの構図筆力ともに圧巻の出来栄である。此処でちょっと気付いたことだが、物語りの起承転結法がいかに芝居・活動写真のテクニクがそのままに、眼前彷彿式になっていることである。

「又妾達と同じ様に誘拐されて来た或女は、勤めを承知させる為に、全身に酒をぬられて藪蚊の沢山居る竹やぶの中に一晚置かれて翌朝まで、彼女のうめく声がしていました、行つて見ると全身はれ上つて、全く息が絶えていたそうです」

雪責のつぎは、場面をがらりと変えて「蚊責」、雪白から緑へ。女の髪にすみれ色のリボン結びつけたあたりは、絵そらごととしてのおかしみ味をねらったのであろう。竹と縄のつかい方がリアルで生々しい。股倉にいくいこんだ縄目からはみ出した、陰毛の描き方が、髪にくらべると実にお粗末で、別人の筆のようにお座なりで、どうも気になる。晴雨

責絵の一つの特色をいうならば、局部の描き方が粗雑なきらいがあり、そこに余り重きを置いていないようだ。

「如何に鬼畜の主人が変態的であるかといえ、こんな例も有ります。清廉な身を尊ぶ若い美しい尼さんをかどわかつて来て、浅間しい勤めを強いました。若い尼は浅間しい蠟燭責に遇って、肉が焼けるまで辛抱して居ましたら、遂に四っ手に吊して大きな犬におもちやにさせるといふ浅間しい事に堪えかねて、遂に夜の女にされました」

「此店には勤めを怠ったり、逃げた女に罰を与える為、責め場というものが出来て居ました。そこには色々な女を責める恐しい道具が揃えてありました。お前達云う事を聞かないと此処で責められるのだよ」妾し達は責め場の受け持ちの婆アさんと店の若い衆の二人に、責め道具の前に連れて行かれました」

「この鞭も決して酔興じゃないんだから一つ覚えておくといい。御話通り新玉の手を吊して、前をめぐっておくれ、そんな恐がる事はないよ、今日のは只見本だから、しかし若し御主人のいう事をそむいたり、逃げようとしたら、今すぐだって本当にやるからな……」

「そして二人は次の夜、浅間しい此の店のつ

とめというものを、実際に見せられました。これが明日からの、妾達二人のつとめかと思ふと、一と思いに死んだ方がよいと思ひました。併しまた逃亡のおそれのある妾達は、食事と用便の外には手を括られたままでしたから、どうする事も出来ませんでした」

これら手紙の言葉書きに伴う場面の変化、その怪奇趣味たるや仲々手がこんでいて、尼僧の蠟燭責とか、海賊船の内部を思わせる責め道具を陳列した部屋、悪婆の尻打ち、ブラコン責めという極端な秘戯と、その画面をクローズアップさせた後ろ手縛りの女が、はつきりと大きく絵巻からはみ出すように描かれているが、これなどはまったく映画式画面構成で、そう思つて見ればウメキ声まで聞えてくるようだ。注意すべき点は、物語が進んで次の場のフェラチオを強い、クリンニングスを行っている催情を目的とした、見せしめの縛りだが、絵はまるで、人形を重ねたみたいで、春画式のものとしては、実にうまくない——が、益々行為が病的に進行する様子が、まるで手にとるようによく窺える。この秘巻の性質としては、此処らは一種の山場をむかえた所であろう。

「見学を終えた妾達は、其の主人の部屋に連

れて行かれて、お毒見といつて主人に処女を奪われる事になりました。強姦によって女にされるのでした。年上の妾が先に犯されました。花子さんのあの時の悶え方は無残とも形容の出来ない可哀想な姿でありました」

「店の方から見るお客には見えぬかも知れませんが、客引きをさせられた花子さんも、長襦袢の下に裸身を極悪人の様に此処に縛られて居たのです。縄の間にくびられた乳房が成人した女の様な盛り上りを見せて居ました」

「此附近のお祭の日でした。歓楽街は特に沢山の人が出でました。此日主人の発案により、恐しい責め苦が妾達に試みられました。それはだるま責めというもので、手と足を前に一束に括られて、ダルマの様なになった裸体の妾の体を、一刻の休みもなく、次より次へとお客に転がして行くのです。一部屋に五人も六人も居る部屋に投げ込まれて、矢つぎ早に犯される。若い衆が二人で天秤棒で妾しを吊し、担いで御祝儀のダルマが来ました」と云つて、担いで次の部屋に投げ込むのです。妾は最初の七人位迄は覚えて居りましたが、後は何人にどう犯されたか、気が遠くなって覚えて居りません」

残虐式色情としては最高潮を示しているの

だが、時代背景がたちまち明治末期から、玉の井魔窟時代（昭和初年ごろ）にと一足飛びしてしまい、名物の「覗き窓」が登場してくる。このあたりは晴雨独特の天衣無縫ぶりを発揮、というより画想を練るのに疲れて、心に慣れたあそびにしたがって筆が走っていると見るべきだろう。

「一カ月の間に妾はそこより淫売婦の修業を了えました。併し此の店には他と違ったお客が来るので、妾はまた新しい事を経験しなければなりませんでした。何とか芳宗という変わった画師のモデルに引き出されたのです。それはとても一層苦しい事です。其画かきさんは女の拷問物の画を専門にかいて居られるとかで、主人承知の上で恐ろしいモデルにならねばなりません。昔の極悪人が会ったという海老責、ソロバン責が、何の罪もない妾に加えられ、又ある時には花子さんと二人ではりつけに会わされたりしました。併し買われた女のどうとも出来ない運命でした」

何とか芳宗というのは、「新井芳宗」で大蘇芳年門下、明治の新聞挿絵画家である。どうして此処で突然芳宗が出てきたか？ 芳宗実は晴雨の劇中劇の場で、いたずら半分に自己を登場させたようだが、実はこれには意味

がある。晴雨は若い頃、芳宗から次の事実譚をきいている。

浮世絵師豊原国周（天保六年—明治三十三年）も縛り好きで、妻を換ゆる事四十度、居を移すこと八十三カ所、という奇行の多い人物だったが、ある時両国の百本杭の藤堂様の前に縛られた女の土左エ門が漂着したのを見て、ムラムラと製作意欲が湧き、一緒にそばで見物していた八百屋の矢立を借りてスケッチした——。この話が秘巻地獄の女の発端となっているのだから、芳宗が出てきても別に不思議はないわけである。詳しくは「国周えがく女の責め場」（『風俗草紙』昭和28・12）参照。

「責めに堪えかねて、気を失った花子さんを見た妾は、此處では彼女は殺されるのではないかと思いました。どうせ殺されるならと思つて、妾はある夜の事助け出して、命がけで二階から逃がしてやりました。手を合わせて拝み乍ら、花子さんは二階から妾の帯にすがつて、夜明けの近い町に姿を消して行きました」

絵としては仲々美しい場面である。夜明けの三日月、煙突（風呂屋であろうか）、その下に商店の看板があり、黄色でうすく「ぬけ

られます」と書いてある。まったく、はっきりとした時代の出鱈目さを描いたことによつて、絵空事とうそぶく所に、これを見る者には幾分か心の救いを感じるし、晴雨のユーモアを感じる。

「併し、何という哀れな事でしよう、其日のおひる頃、彼女は此町の外側を守っている用人棒の車やにつかまって、哀れな姿を再び此の店の主人の前にさらして居りました。一と思いに殺して……、彼女の悲鳴が妾達の部屋に迄聞えて来ました」

「逃げた女に対する仕置の前祝いが始まりました。今は死を覚悟して居る、花子さんの姿が、一しお哀れに、男達の残酷心をあおるのでした。誰の手曳で逃げたのかと、彼女は責められました」

「逃げた女が再び逃げぬ様に、一生消えぬ極印をおす為に、二人のからだに入墨が施されました」

「併し、若い花子さんにはそれ以上のくるしい御勤めが強いられています。それは花電車という浅間しい曲芸です。どんなに責められても、それ丈は出来ぬと強情をはった花子さんの姿を、或日責め場で見つけて、妾は自分が苦しめられる以上に感じました」

「此處では花子さんが責め殺される事は受け合いです。妾は、花子さんを逃がしたのは妾です、花子さんを許して上げて下さい。と責場に飛び込みました。『太い阿魔だ』覚悟はしたものの妾は逆さに吊され、烟の中でもがき苦しみに堪えませんでした。妾の前で、姉さん妾が悪かった許して、と、もがく逆さの花子さんのからだだがボンヤリと目が霞んで見えなくなりました」

「強情な女だ、普通の責めでは白状すまい、彼女は恐ろしい水責に遇わされました。氣を失っては生かされ、生かされては殺され、既に死を決して、彼女は水責苦の前に殉教者の様に強い決心を以って一言も口を利きません」

「一度、逃亡を企てた女は仕置が一通りすんでも、店の最下位の女として淫売婦と女中を兼ねた苦しい仕事に毎日追い使われます。お客がとれなかった時は、床にのって寝る事を許されません。寒い冬の夜では素裸体でクサリで括られて、便所の中に転がされて、一晩中おかれます。しかも毎夜のつとめは、特別に割の悪いお客とか、女扱いのひどいお客をあてがわれて、一晩中ガンジガラメに縛られて、氣味の悪い玩具にされる日がつづきまし

た」

ありとあらゆる手段を構じた責め苦の連続であって、これでもか、これでもかと執拗に繰り返えられる惨苦の有様には、これを見る者の眼を掩わしめるばかりだが、恐らくこの一連の場面にこそ、画者と依頼者とに於ける有無相通ずる処の絶対的境地を、現実には望み得ない淫虐の理想郷を、まるで絵具皿に鮮血をしたたらせたかのように筆をはこんでいる。併し、その筆もしだいにうみ疲れ果てて言葉書きは終局へと急いでいる。

「しかし、七日程後にもっと悲しい運命が妾の上に訪れました。(一層の事、上海あたりへ売り飛ばした方がよい金になる)という主人の言葉を聞いて妾は、どんな事でもするから店に置いて下さい。日本に居らして下さいと頼んだのですが、数日の後に支那人のゼゲンの前に引き出されました。而して妾が買われました」

「哀れな女の手紙はこれで終っている。これは後に判った事であるが、この女は此手紙を書いて数日後に、芝浦を出て上海行の貨物船につまれたらしく、貨物船の船艙で恐ろしい凄辱が加えられたであろう。しかし、彼女は最後の安息は天国に行く機会を得て、ジャッ

クナイフを船員の腰から奪って、アツと云う間に己が喉に突き通して、血の海に倒れた。その顔には苦痛は無く、安住の地に行ける様な喜びがあふれていた。やがて彼女の死骸はグルグル巻きにされ、錘りを附けて夜の海に投げ込まれた。『花子さんを助けて下さい』という書き出しに始った彼女の手紙は、襟の中に縫い込まれてあった。女の一念は件の錘りを切って河岸に打ち上げさせた」

思案に余ったものか、船中輪姦強淫の悪虐図は構図がまとまっていなかった。画家としてまったく不本意なことであつたろうし、それでも此のまま画卷を持ち去った依頼主の完成を待ちきれない、これにかけた執念の名残りを認めるべきだと思う。当初の意気込みに反して起筆より欄筆までの期間が、思いのほか長びいたとみるべきではないか。

「女の手紙によってすぐ探索の手がのびた。江東の鬼清の店にすぐ刑事の一行は搜索に向い、而して彼女の拷問の部屋の奥の部屋に二人の女が発見された。その一人は、連日の責め苦で病みつかれた花子であつた。花子の体は後一、二日発見がおくれたら、恐らく死んで居たろうと思われる。危機一髪の処であつた」

「彼女の口述によって芳宗画伯も参考人として警察に呼ばれた。芳宗画伯のスケッチの画き上った絵の数枚は彼の恐ろしい経験を記録して居た」

「花子が救けられて二ヶ月程たった。或る日



スッカリ体も回復した彼女は、悲惨な最期をとげた此の手紙の主の墓に心から冥福を祈るために、未だ新しい墓標の前に立った。彼女は二ヶ月前が未だ昨日の様に恐ろしい記憶が呼び戻るのであった。そして、彼女は全女性の為に、この地獄の世界が消えて無くなることを墓に向って祈るのであった」

これで此の長尺の秘巻を、閉じるわけであるが、伏しおがむ花子の前の墓標のうしろ影こそ、縛られた△手紙の女▽の幽霊になった姿。うららかに、のどかな葉の花日和の青空の下に、満開の桜が咲いて、この桜花の色の美しさは実に美事で、陰惨な物語をあかるく華やかに彩り、話を結んでいる。

手向けの水を上げるあか桶の紋所が、これなん、佐々木の四ツ目屋（江戸の娼業商）のトレード・マークとなっており、おう其処まで気が付いたか！ ホイしまった、と云う伊藤晴雨の哄笑が今もなお聞えてくるようだ。

参考資料として――。

この絵巻は「地獄の女」ではなくて、本来は「女の地獄」と題すべきと思われるが、いま暫くこのままに置いて、私はこれを見終ってサディストの画魂の背後に、しのび寄る妄

想・幻覚のみなもとを尋ねてみた。

巻名に△地獄▽とどういう言葉を配した、真意を知りたかった。思うに、晴雨は実によく「男の地獄」を知りもし、見もして来たのである。それでなければ、こうまで迫真の女地獄が描けるものではない。

地獄極楽の思想は因果広報の理であって、物に二面あれば表と裏であろう。晴雨をしてその画業の一端を、だれが極悪人の芸術であるときめつけることができようぞ。真実は心の裏側から、思いがけない時にヒョッコリ顔を出す。おどろいても、たじろいでも、まして白ばっくれちゃいけない。たとえ地獄の獄卒になっても、復讐したいと思う女は、私たちしがない人生のうちにも、幾人かは、いた筈である。むかし女は魔物だとさえ云われた位、いまの世でも△魔女▽が幅を利かしているではないか……。

仏教經典において最もその地獄の叙述に詳細を極めた正法念処經（七十卷）のうち、性的悪業に関連するところを抄出して、淫慾と地獄相について触れてみたい。

大量受苦惱処。なすべからざる淫慾を行なったものが行く。炎熱の鋒を以て身体を縦横上下に刺し貫かれ、或いは焼かれ、煮られ、

或いは熱鉄の金鉢で罽丸をひき抜かれ、鉄の鶯が罽丸を引き抜いて食らう。来世は宦官となるようなのは、この余残の業報である。

割割処。これは婦女の口中において淫をなしたものの行く処で、このような男には鉄鉢に銅汁を盛って口中に注ぎ込む。銅汁は噴煙を迸らせて臓腑を焼きつくし、糞門から流れ出る。のちたとえ人間に生れても余残の業報のために口中常に臭気を放つ、とある。

悪見処。ここは他人の娘を捕えて、力にまかせて強姦をなしたものが行く。そこでは今度は自分の娘が捕えられて、鉄の鉾をもって陰部を刺し貫かれて、苦しんでいるのが見える。可哀そうにと思う心の苦痛が身を切られるようにつらい。余残の業報としては、人間に生れてもインポテンツとなる。

団処。獸姦を行なったものの行く処。罪人牛馬を見て慾心さかんに起こり、その陰門に入ると、腹中には火炎甚だしく燃えて身を焼き爛らせ、黑暗の中に声も立て得ず苦しむ。のちに人間に生れても野蠻人となり、己が妻を他人にとられても何とも思わぬ様になる。

多苦惱処。男子に対して淫を行なったものの行く処。その行なった処の男子が自分に抱き付き、その熱きこと焰で燃え立ち、堅きこ

と金剛の如くである。抱かれれば身体は粉微塵となり、恐ろしくて逃げ廻ってけわしい崖の下に落ち込むと鳥や獣が喰い裂く。又釜の中に煮られる。来世に生れても妻に縁薄く、姦通されるのはこの余残の業報である。

忍苦処。戦争の時に婦女を奪って強姦したものの行く処。罪人は足を上に、顔を下ににして樹に懸けられ、下には大火炎が燃え起こって焼かれる。のちに人間に生れても、美人のその妻は戦争のために奪い去られる。

一切根滅処。多慾のために婦女の口中糞門において淫を行じたものの行く処。火を口に満たし、或いは赤銅汁を入れ、鉄蟻に眼を食われ、白熱の膿汁を耳に入れ、或いは鋭どい刀で鼻を切られるなど、一切の諸根は甚だしい苦痛を受ける。のち人間に生れても妻は不貞にして、姦夫と謀って自分は殺されるのはこの余残の業報である。

この他、朱誅処（羊やロバを犯したものの）何々奚処（姉妹に淫行したものの）、涙火出処（これは尼さんの淫行）、鉄火末処（僧でありながら、婦女の歌舞音曲に淫をかんじて不浄を漏らしたものの）等々が行く地獄があり、その責め苦たるや、多くの恐ろしい言葉ばかりで綴られている——。まったく、つくづく

と地獄も現世も変りはないと思う。

また、晩年になって発表した晴雨の責め小説『黒縄記』などにも示されているが、あざなえる女の黒髪を八黒縄と云っているけれど、おそらくは無自覚ではあるうが「黒縄地獄」を云ったもので、婆羅門教におけるマルカンデーヤ、プラーナの七地獄のうち、截断地獄のことである。

正法念処經にも三処を挙げてある。

閻魔王の指図で罪人は黒い縄をもって、身体を縦横に縛られ、その縄の通りに截断されてしまう。頭から足まで、先ず真つ二つにされ、それから身体を百分にも切り刻まれ、そうされても生命は終らず、又もや結び合わされて、それから又截断される。

これが黒縄地獄の無限の苦しみであるが、如何にも晴雨における八責への思念のくりかえしを象徴している。しからば晴雨を地獄の獄卒や、淫売屋の主人鬼清に例うべきか、これはチョット難問であって、急に結論を出すべき問題ではなく、その生涯を一貫した八責への執着は一体なんの為であったかを究めて、其処に始めて美の亡者ともいうべき、晴雨が探求した地獄の種々相が顕現するのである。

（伊藤晴雨絵巻考のうち）

愚者の焰

——緊縛マニアの思い——

早木夢二

外出する時、私は大抵、縛りのフोटを持って、

奇クから、気に入ったのを切りとったもので、しばらくすると擦れてしまうが、その時は次の新しいフोटがくるという具合で、いつも絶えることがない。私のことから、勿論菱縄縛りのものは必ず、とってあるが、残念なことには菱縄縛りのフोटは割合、少ないので、やむを得ず？ 他のスタイルのものも混じっている。

家においておけばよいのに、わざわざ持ち歩いて御苦労なことだと、我ながら思っているが、そうしないと何となく気が落ちつかないのだ。いつも身につけていて、しかも時々ポケットから取り出しては、素知らぬ風に眺めて、ニタツとしたりするのだから、始末が悪い。他人が見たら、いったい何と思うだろ

う。

時々、いつかも書いたことがあるが、裸身に菱縄的な縛りを施して、その上から衣服をつけて外出する。そういう時には余計、他人は、そんなことは露知るまいと思うと、ザマ見ろ、というような気がして、こうしてわが生涯の知友である縄と一緒にいることが、堪まらなく嬉しくなってくる。

そんな時、ひょっとして交通事故か何かでひっくり返ってしまったら、どんなことになるだろうかと、いつも考える。

フोटは、まあまあとしても、縄を纏っていたんでは、下手をすると新聞種にもなりかねないし、友人たちの間にも絶好の話題を提供することになる。

へえー、あいつにそんな趣味があったのかい、という友人の声が聞こえるようだし、そ

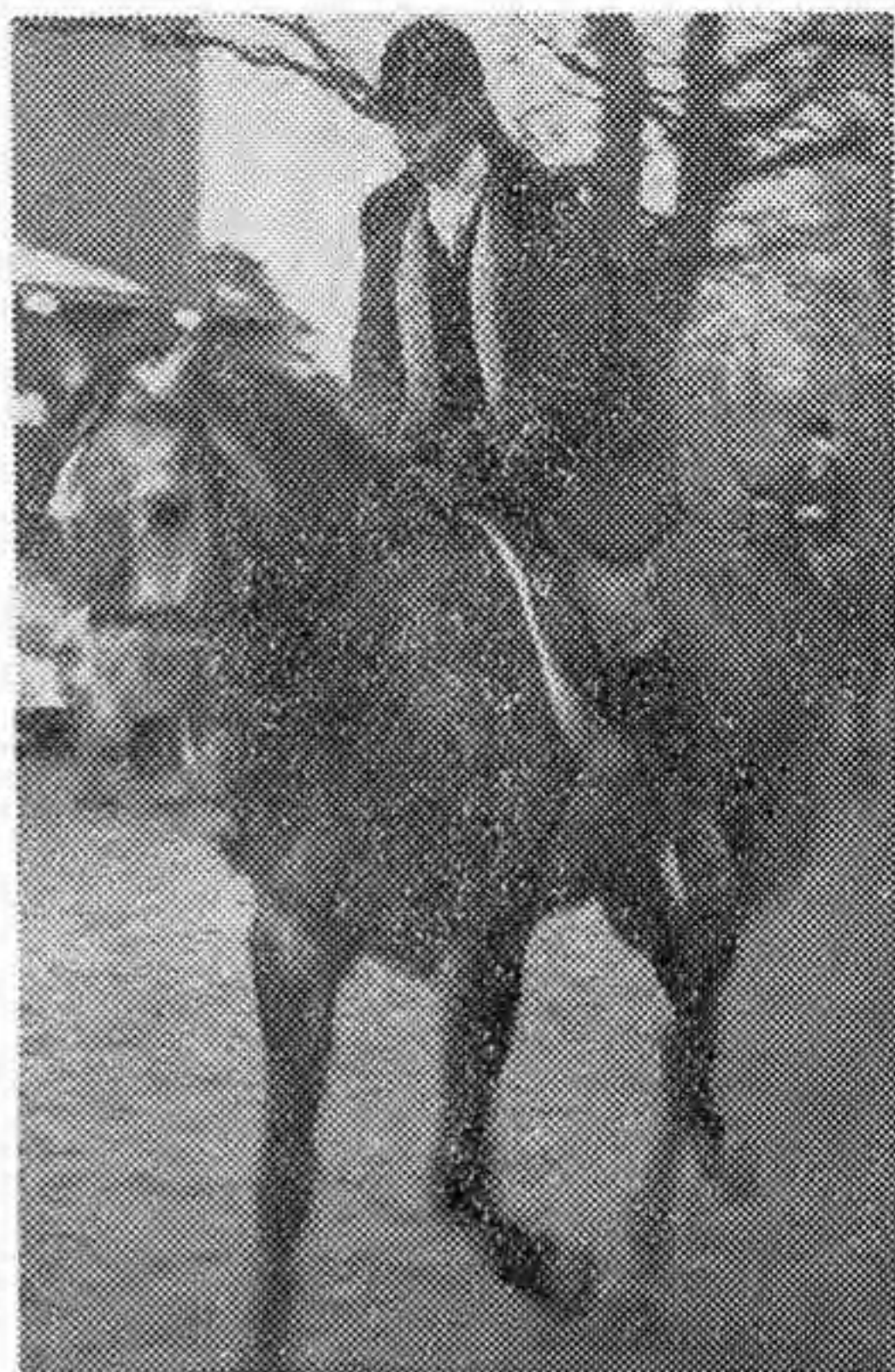
ういえば縛りを見る時のあいつの目付きは違っていたな。なんていう知己？ 出てくるかも知れない。

この秘密は、どこまでもそっとしておきたいが、そうになったら、これも仕方あるまい。考えようによれば、一生を緊縛マニアとして過ごしたものの栄光ある最後といえるかもしれないから。

それにしても、私は「文芸春秋」六月号の「隠者の焰」（小説、狩野享吉）を読んで、夏日漱石の尊敬する友人であり、有名な教育者、学者であった主人公が、世の中からかくれて年老いた姉と二人で暮らしながら、せつせと春画を描くことに打込んでいた凄じい姿に、人の裏の裏に、しかも世間的に見れば、こんな浅ましい裏面に、今更ながら人間の抜きがたい業を感じてしまったのである。

あんな著名な人ですら然り。ましてや匹夫の我に於いておや。と路上に菱縄を纏って転がっている自分の姿を思い描きながら「隠者の焰」には及びもつかないが、せめては「愚者の焰」としてでも、緊縛マニアとして、悔いのなかった生涯として振り返ってみたいと思うのである。

(了)



女性乗馬考

異端と偽証

佐野 寿

西洋の格言に昔から「盲目の導き手により先導された盲人ほど、あわれな者はいない。彼等は、共に危機の深淵に陥るであろう」という峻厳な句があります。

これは正に、今日の混乱した無責任な文筆業者等に対する、痛烈な皮肉のような響きをもって迫るものがあります。殊にSMBームに乗って、興味本位にして中途半端な知ったかぶりの、あまたの大衆作家による作品の氾濫する今日では尚更でしょう。

そこで「婦人の乗馬」に傾倒する私としても、いわゆる「異端」とは何か、について再検討する必要があるようですが、ここで私がおことわりしなくてはならないことは、何も「異端が良いものだ」といつているわけでは

ありません。

いうまでもなく「異端」とは、語義的には正統（オースドックス）に対する言葉であり発生を時期的に眺めれば、正統より後に出現するものですが、その初期においては、意外に、その異端の中に、ある種の迫真力とか真実性があり、正統に比べて新鮮味を維持出来る限りにおいて、異端の意義をみとめることができるのです。

そのことは、あらゆる文化遺産の形態に、それを認める事が出来「マゾヒズム」と「フエチズム」についても、いえることでしょう。キリスト教でさえ、二千年前の原始キリスト教の時代は、その母体であり正統であったユダヤ教から見れば、正に異端そのもので

あったのです。しかも真実性は、その異端の内にかえって豊富に存在したのですから、物は奇妙なものといわざるを得ません。

なにも、ザッヘル・マゾッホがいたから、マゾヒズムがこの世に出現したわけではありません。それは西洋文明の母体のギリシャ神話の中に、特に「マゾヒズム」の観念は明示されておられ、ヒンドウイズムにも見られ（印度にはアマゾン物語が意外に多い）ますが東洋では残念ながら発見が遅れて了った様です。ついでに言及しなくてはならない事は、マゾヒズムなるものに我々日本人が接してから日が浅いので、その実体は往々にして誤解されま

が直ちに不潔であるとか罪惡的であるということにはなりません。

極端なものでは、マゾヒズム即セックスそのものの描写であるという曲解さえありますし、その不潔感、むしろ半わりのSM通大衆作家の取る態度（ポーズ）こそ、それを引き起こすものとなるようです。彼等は、せいぜいマゾヒズムを肉欲を昂進させるオナニの道具とし、且、本来、正しい意味での文献性を無視し、様々な偽証さえ立て、いわゆる大衆という盲人の群を穴に落とし込み、自らも穴に落下する、にせの教師であり「盲目の導き手」なのだといえます。

西欧では、興味本位のために偽証を立てる事を真の罪惡だとされていますが、我国の現在の低俗なある種の出版物には、偽証も屁のカッパと云わんばかりのものが市場に氾濫しています。私は、そのような作家こそ、文献性を破壊し、文献性を、せいぜい興味的な色眼鏡を通した実話ものとか夫婦生活ものの類と混同しているのではないかと疑いたくなるものです。いうまでもないことですが、たとえ性的なものであれ、文献と呼ぶからには多少の科学的な根拠の裏付けがなくてはなりません。

先刻、偽証が我国の出版物に多いといいましたが、例えば「私はサド・マゾ・パーティーの女王だった」とか「マゾヒスト・クラブ

への潜入記」とか、更には「真紅の乗馬靴に黄金の拍車」とか、全く白々しい嘘がよくまあ平気で、ぬけぬけと書けると思われるものが少なくありません。小見出しのタイトル名がけばけばしく下品なのは、往々にして偽証的作品に多いことは寒心に耐えません。

また、デビュー早々の、特に女流作家が有名にならんとするための手段として、やたらに「〇〇のマゾヒスト論」を展開するやり方は、不潔であり、危険なことこの上もないと思うのです。本来、清潔であるべき文学、芸界の品格を下げる、無責任で破廉恥な行為であるといってもよいでしょう。

更に先刻、文献の科学的合理性に触れたものは、例えば女流騎手^{ホースウーマン}に対して、むやみにサジスチンだとか、馬を虐めるように男をいじめるだろうという憶測によって、評価すべきでないということ。確かに私も、ホース・ウーマンについてのリアルな記事を、フオート入りで駄文を弄し、中には自分ながら反省しなくてはならぬと思う個所もありますけれども、私は一度も彼女等の名誉毀損になる本名を書いたことはありませんし、いわんや私が本気で「ホース・ウーマンが直ちにサジスチンである」等々とは、誓って思っておりません。（フィルムも西洋のアマゾン物は私の知人の独逸人から解説付のものを譲渡してもらったものですし、それらのフオートはSM

とは関係なくレポーターとして撮られたに過ぎないので）

ただ、權威ある馬術の教本が示してくれるように、乗馬のテクニクの進歩は、女性でも男性でも、一律に練習年月によるのではなく、鞍数（一鞍は一時間のこともあり、45分のこともある）により、しかも個人々々で変わり得るものであり、自由に男女が馬を御すためには、平均数百鞍はかかるものなので、第三者が想像する程、容易なものでは決してありません。

リンドロート女史の乗馬教本にも、乗る時の姿勢がくわしく書いてありますし、一番大切なのは、初期ではそう派手に拍車を使ってはいけないとも書いてありますし、馬に一旦なめられたら、最後まで手に負えなくなるから、何でもよいから馬腹を決断力をもって蹴とばすように、とも出ていますので、ちょっとサジスチクのような印象を受けるのですが、別にSMを書いているのではないことは明らかです。詳しくリンドロート女史の教本を読みますと、騎手の足の使用を最初におぼえるためになるべく必要以上に答で打つことを禁じ、むしろ馬に忍耐強く接しなくてはならず、短気やあせりは特に初歩者には禁物である……と述べています。ただし、懲戒は馬が不従順な動作をした直後に、厳しくしなれば効果はないとしています。（おわり）

青春の陥穽 (8)

S 的 な 開 眼

芳 野 眉 美



カット・春川ナミオ

A

大崎夫婦のSMプレイを見物しているうちに、急に勇のことが心配になったのは、葉子の本心ではない。

天井から吊るされて流腸責めにされた絵里子夫人の前で、絵里子の夫の大崎と寝てしまいたいほどの、激しい衝動もあったのだが、勇を思い出したとたんに妙に白けて、その気になれなくなってしまうたから、不思議だった。

新婚夫婦の甘いSMプレイに、結婚生活を一度失敗したことがある葉子は、古い傷にさわられたようなショックを受けたのかもしれない。

女は誰でも結婚生活を夢みているものだろう。葉子も例外ではなかった。

貸衣装だったが、葉子も華やかな花嫁衣装を着たことがあるのである。

文金高島田の葉子は、清楚で美しかった。結婚の破綻は、夫の給料の安さにあった。結婚する前から、そんなことはわかっている

はずなのである。

新婚生活の甘い夜が珍しいうちは、経済的な不満はかくされている。

が、自然の条理に従って、飽きがくれば、金の問題は当然、夫婦仲を険悪にした。

夫に勧められて、その気になった葉子は働くようになった。

金が多く稼げる、ということで小料理屋の酌女になったのである。

葉子の夫は、妻が酔客の相手をすることをいやがる前に、妻が小料理屋で得る報酬のほ

うを選んだのである。

安月給で、毎日同じことを繰り返す葉子の夫は、妻から小遣いをふんだくるようになる、女とギャンブルに、人生の意義を見出したようであった。

金さえあれば、機械の一部分になった自分の人間らしさを、どうにか、とりもどせるわけであろう。

女とギャンブルと金に支配される人間が、金を、まるで紙くず同然にあつかうことのできるのは、女とギャンブルしかない。

どの男でも、やっていることである。

ギャンブルにこるなら、女はまだがまんできるらしい。たまには大穴をあてて、着物ぐらいは（安物でも）買ってくれるのが亭主だからである。

だが、ほかに女をつくられると、理由なしに怒りだす。

葉子も、あたりまえの女であった。夫に、ほかの女の匂いを感じると、酔いもさめて怒りだすのである。

「この甲斐性なし。自分の妻に水商売をさせておいて、女をつくるなんて、そんな馬鹿な話があるものか」

「いいじゃないか。お前だって、好きな客と

寝ていくくせに」

ただ客に酌をしているだけでは、そんなに金になるわけではない。そんなことは、わかりきった話である。

「どこのどいつだよ、あの小料理屋に働きに行けといったのは」

くやしくて葉子は泣けてくる。

結婚したのだから、給料は安くとも夫を嫌いではなかった。金の問題で、いさかいをするのがいやで、夫のいうままに小料理屋の女になった。

金を得るためには、たまには、客と寝なければならなかった。

夫を裏切る気持より前に、誰もがやっていることを、葉子は素直に受け入れたのにすぎない。

客と寝て、夫に小遣いを多くあげたほうが夫は喜ぶからであった。

夫に利用されたなどとは、少しも思っていなかった。

葉子は、それが夫婦というものだと思っていたのである。

すべてが自然であった。葉子は、だいたい水商売にむいていたのだらう。

口争いはしても、しばらくの間は、葉子は

夫に対して、従順で貞淑な（葉子の夫にいわせれば）妻であった。

そのうちに、破綻の原因を葉子の夫がつくった。

自分の安月給の数倍も金をかせぐ妻を持つて、葉子の夫は、妻に内緒で会社をやめてしまったのである。

実直に働いているうちなら、自分の月給を全部使おうと、女狂いをしようと、ギャンブルに通おうと、まあまあ、がまんができたのであった。

葉子は完全にヒモになりさがった夫に失望した。顔を見るのも、いやになった。

その点、母性愛型の女ではないようであった。ヒモにまわりつかれて、黙っているほど、気の弱い女ではなかったのである。

葉子は、突然、夫の前から蒸発した。

従って、現在の夫（と呼べるのかどうかは知らないが）の三田とは、正式に（ということとは、役所にとどけていないという意味のことだが）結婚はしていない。

民法第七七〇条の離婚原因その三に、

『夫婦の一方は、左の場合に限り、離婚の訴を提起することができる』

とあって、

『三、配偶者の生死が三年以上、明かでないとき』

とあるから、三年さえたてば、夫は行方不明の妻を当然離婚するだろうと、葉子は勝手に決めているのである。もっとも、これは、三田から葉子が聞いた話で、そんなつもりで夫の前から、姿を消したわけではない。

離婚したがるのは男のほうで、女は絶対に妻の座を守るものらしい。

老いは男を強くし、女を弱くする。その逆もある。

従って、父娘のように見られる三田と葉子は、葉子はその気になれば、正式な結婚が出来る可能性もあるわけであった。

B

夫の前から蒸発した葉子の働く場所といったら、やはり小料理屋の女しかなかった。

同じ水商売とひと言にいつても、ハダ合いの違う無経験なところには、なかなか飛び込めないものらしいのである。

トルコ族はトルコ族だし、キャバレー人種はキャバレー人種、バーはバーで、それぞれつとめる女の層も違うのである。女的生活環境や、性格によるものなのだろう。

葉子は、どうしても小料理屋の女で、バーやキャバレーの女ではなかった。

住み込み女中となった葉子は、ここで彼女のS的な面を、先輩の女から引きだされる恰好になった。

ただ普通に客と寝るだけだった葉子は、いろいろなテクニックを、店の中年女から教えられる、はめになったのである。

というのは、滝子（その中年女の名だが）が適当に客をあしらうのを、いやでも葉子は見ていなければならなかったからである。

小さな部屋が並ぶ小料理屋や、唐紙で囲まれた酒席は、一種の密室であった。

酒と女と密室と、何か面白いことが起こらなければ、バツカスとアフロディテに申し訳ないみたいである。

滝子の常連が来ると、葉子は呆気にとられることが多かった。

部屋に客を通すなり、滝子はその客と接吻し、客に抱きつきながら、すでに何やらを握っているという強烈さなのである。

客のほうも、滝子の着物をはだけて、中年女らしい大きな乳房をすぐに狙うし、座は始めから乱れてしまうのである。

その中を、葉子は酒と肴の用意をする。

たいした小料理屋ではないから、酒の肴はだいたい、いつも決まっている。

刺身は、かならずでる。

「お滝さん、パイパンだ」

と客が、いった。

「なにを、失礼しちゃうわね」

いうなり、滝子は立て膝ついて、着物の裾を、ぱっとまくった。

「ほれ、よく見ろ」

いきなり客の首根っ子をつかんで、ぐいと引き寄せる。

調子良くポンポンといったものだから、首をつかまれた客は、畳に転がると同時に、滝子のひろげた着物の裾に首を突っ込んでしまった。

「くせえ」

「くせえだど。この野郎」

裾をさらにまくって滝子は、どかっと客の顔に坐ってしまい、ぐいぐいと押し潰している。

「お滝さんったら」

驚いて葉子は叫んだ。

「そんなひどいことをして……」

客が怒ったら大変だと、葉子は心配したのである。

「大丈夫よ、この野郎は、お滝さんにこうされるのが好きなのさ」

腰を浮かし、

「な、そうだろう」

と男の顔を見下ろし、男が新入りの葉子の手前、苦笑いすると、

「はっきりしろ、このスケベジジイ」

と滝子はふたたび、でかい尻でぎゅうぎゅうと男の顔を押し潰し始めるのである。

「助けてくれ、お滝さん」

「お滝さまだろう」

「そうだ。もういい、かんべんしてくれ、お滝さま」

「よしよし、葉ちゃんの前だから、恥ずかしんだろう」

ようやく許された男は、怒り出しもせずにテレたように笑い、

「お滝さんには、かなわねえ」

と葉子にいった。

「俺は、イカ（パイパン）をくれていったんだぜ」

「おや、そうかい。あたしやまた、侮辱されたと思ってね」

と滝子はトボける。

葉子はイカの一切れを箸でつまんで、客の

口にもっていった。

「はい、アーンして」

「馬鹿だねえ」

と滝子が葉子にいった。

「だめだめ、葉ちゃん。そのスケベジジイはお滝さん特製のむらさきをつけないと、たべないんだよ」

「特製のむらさき……」

「見ておいで」

滝子はまた着物の裾をまくり、立て膝ついた。不思議そうにしている葉子の手からイカを奪い取り奇妙なことを始めたのであった。

「あらッ、お滝さんったら……」

おどろく葉子をしり目に、滝子はニヤニヤとして、

「ほれ、たべな」

と指でつまんだイカを、客の顔の前でぶらぶらさせた。たしかにそのイカの艶は変わっているようであった。

「葉ちゃんも、しておやりよ」

客の口に特製のイカをほうりこみ、滝子はトロをつまんで、あっけにとられている葉子にいった。

「いいかい、葉ちゃんは赤貝なんだからね。」

三拝九拝するんだよ」

「赤貝って……」

「生娘のことだよ。それも知らないのかい。」

葉ちゃんは、ウブだねえ」

すっかり生娘にされ、葉子はなんだか、こそばゆい思いだった。

おずおずと滝子の真似をし始めた葉子に、じっと見詰めていた男は、一瞬ぼうつとなつてしまったらしいのである。

「綺麗だねえ」

と滝子まで感嘆し、

「舐めさせてもらいなよ」

と客の背中を押したのである。

葉子の特製第一号のトロは、またたくうちに客を有頂天にさせるだけの、価値あるものに変化したことを立証した。

「フーン」

と葉子は、この奇妙な現象に眼を瞠った。

ただ単に客と寝るだけではない未知の世界が、葉子の前に開かれたようであった。

C

酔ったから、スケベになるというような理屈は、滝子には無用であった。

酔っていなくても、いや、昼に客があつても滝子の接客態度は少しも変わらなかった。

水商売に関係している女の、昼の顔は見られたものではない。のっぺらぼうが複雑な化粧をしている。人造人間のような現代にあつては、夜の顔と昼の顔が別人であるのは、むしろ不思議ではないのである。

その点、時代に反して、化粧などあまりしない滝子は、夜も昼も、顔はまったく同じであつた。ただ違ふのは、着物でなく、簡単にワンピースでいるということだけである。

それも、着物と違って、紐や帯がいらず、下穿きなど穿いたことのない滝子のことだから、むしろ、ある意味では、昼のほうが夜よりも彼女流の商売はしやすかつたのかもしれない。なかつた。

滝子の客であつても、葉子はかならず滝子に呼ばれて、酒席についた。

一対一の個室より、男の客一人に、女二人のほうが、よりセクシーなムードがあつていいと滝子は、いうのである。

「葉ちゃんが見ていると、客だって余計にノボせるし、お滝さん（自分でそう呼ぶのが彼女の癖なのだ）だって、そのほうが面白いんだから、気にしなくたっていいんだよ」

一対一の男と女の関係が、ここでは全く無視されている。よく考えてみれば、葉子は滝

子と常連の男の、ていのいい刺激剤にされているわけであつた。

「ワンピースのおばさんじゃあ、気分がでねえなあ」

と悪口をいいながら、昼だけ、通ってくる客がいるのである。

「夜は、出たことがない」

だから、家でも、近所でも、遊びもしない謹厳実直な男と思われているらしい。

滝子と客が部屋に入り、葉子が女主人に呼ばれて、酒と肴をとどけに唐紙を開けると、滝子はワンピースをくるりとまわつて、大きなお尻を男の顔の前に突き出していた。

「失礼します」

だいぶ慣れていたが、やはり、どきまぎする。わざと知らん顔をして、畳に酒と肴を置いて去ろうとしたが、

「えんりよしなくていいんだよ、葉ちゃん。お入り」

と滝子にいわれては、もどるわけにもいかなくなる。

滝子の客は金になるし、それに、滝子の客あしらいの指導が、葉子には面白くて仕方がなくなつてしまつたのである。

「やはり、葉ちゃんに見られるのが恥ずかし

いのかい」

と滝子は客をからかっている。客は苦笑したが、姿勢を変えようとはしない。

「舐めたいんだらう。いつもの通りすればいいのに」

滝子は葉子に酒をつがせて、へっぴり腰のまま、ちびりちびりと飲み始めた。

妙な客ばかりだと葉子は、ただただ呆氣にとられるばかりなのである。

「お滝さん」

と、くぐもつたような男の声がした。

「なんだ」

と滝子は乱暴な返事をする。

「行つて来たばかりじゃないのかい」

「そうだよ」

「ちえっ」

「なんだよ、うれしいくせに」

「拭いてないぞ」

「あたりまえだよ。途中でやめて、出て来たんだから」

「えっ」

「便所に入っていたら、お前さんの声がしたんでね、うれしくて、半分だけで出て来てしまつた」

滝子は葉子を見てニヤリとした。

「きたねえなあ」

「そのきたねえのが好きなのは、どここのどいつなのさ」

滝子は背中を伸ばすとコップをとり上げ、ワンピースの裾をたくしあげた。

「葉ちゃん、よく見ておいで」

西洋の女が壺を手に持って、片足をあげて小便しているところの絵を、客に見せられたことはあるが、滝子が、客の前でそんな真似をするとは思ってもいなかった。

「むずかしいなあ」

ぼやきながら滝子は、覗きこもうとする男の頭を、足でこづいたりした。

「まあ、このへんでいいだろう」

からだったコップは半分ほど満たされていたが、

「ほら」

と滝子は客にわたしたのである。

「お茶ばかり飲んでいたから、薄いかな」

葉子がびっくりしたのは、男は滝子からコップを受け取ると、嬉しそうに匂いを嗅ぎ、それから少しずつ飲み始めたことであつた。

「どうだ、うまいだろう」

男は、うなずいた。うなずきながら、のどが鳴っていた。

「もっとほしいかい」

「ほしいな」

「あとの半分、どうだい」

「——」

「たべるかい」

「お滝ねえさんったら」

と葉子は、あわてて叫んだ。

「そんなもの、たべられっこないわよ」

「そう思うでしょう」

と、滝子はにやにやしながら、テレたようにしている男の顔を見た。

「それが、このヘンタイ野郎は、ちがうんだな。欲しがるとさ」

「えっ」

「うそか、本当か、葉ちゃんに見せてあげるよ」

コップの中味を飲み干して、顔を赤くしている客に滝子はいった。

「貰うお目当てで、今日は来たんだろう」

「そのつもりだが……」

「葉ちゃんがいたっていいじゃないか」

「——」

「わざわざ半分でとめてやったんだ。こんなチャンスは、またとないよ。少し祝儀はハズンでもらうけど、いやなら無理にとはいわな

いよ」

滝子は盛んに客をけしかけた。

「いいだろう」

と客がいった。

「葉ちゃん、お膳の端に坐ってくれないか」

と滝子がいった。

葉子が坐ったお膳の反対側の端に、滝子は悠然とのぼり、ワンピースの裾に手をかけて男にいった。

「早くしなよ」

意を決したかのように、客の男は、大きなお膳の下に仰向けに、もぐりこんだ。

男の顔だけが、お膳から外に出ていた。

お膳の上に立った滝子は、男の顔を見下ろしながら、そろそろと端から尻を突きだすようにしゃがみこんだ。

滝子に見せられた雑誌に、こんな相談記事があつたのを、葉子は思い出していた。

『夫はヘンタイなのでしうか』

という見出しで、

「毎朝、夫はわたしのお小水を飲み、日曜日は、わたしの大きいほうまでたべるので御座居ます。」

不思議と健康には害はなく、夫が病氣一つ

しないのが、せめてものわたしのなぐさめで御座居ます。

場所は、その日によって違います。

わたしが起きだして、トイレに行くのを先まわりし、トイレの中でうずくまっていることも御座居ますし、お布団の中でのことも御座居ます。

また台所で、洗面器にしたのを、犬のように、舌でぺちゃぺちゃと舐めることも御座居ますし、コーヒーカップにしたものを、朝のお茶がわりに飲むことも御座居ます。

夫が申しますには、わたしは無臭で、よく消化され、ねっとりとしていて、それはそれは美味なのだそうで御座居ます。

「信じるかい」

と滝子はその時、葉子にいった。

その記事が、でたらめなヨタ記事であるにせよ、現実には、滝子に見せられては、葉子は信じるより仕方がなかった。

客からふんだくった祝儀を、男が帰った後で分けてくれながら、滝子は、

「男と女の仲は、いろいろあるさ」

と闊達な性格を見せて、

「ヘンタイだなんて、こだわってちゃいけないよ」

と葉子にいうのである。

D

滝子の接客態度は、明朗闊達で、なんら、もやもやじめじめした空気はない。

男と寝るのが好きだから、求められたら誰とでも寝るだけのことで、いちいち淫乱だとか、不見転だとか、侮辱的というほうがどうかしている、と本気で思っているし、下穿きをいちいち脱ぐのが面倒だから穿いていないだけで、この点も、滝子は合理的であると主張しているのだった。

うじうじしたヒモ的存在になり下がった夫から脱出した葉子は、滝子の感化を知らず知らず受け、また消化していったのである。

ビール瓶を膝にはさみ、着物の裾をばだけたままで、客の口にビールを注いだり、

「若布酒だ」

と称して、酒を素肌に溜めて、客の好みを満たしてやったり、

「ヘソ酒だ」

といわれれば、さっさと帯を解き、お膳の上に長々と寝て、可愛いおなかのくぼみに酒をたらしたりした。

小料理屋の小さな密室の中であれば、遊びはある程度、限定される。その限定された範囲内で、滝子と葉子は、おしかける客を右から左にこなしたわけであった。

気に入った客があれば、自分からサッサと着物の裾をはしよってしまふ滝子を見習っている内に、葉子は、一人の客に口移しに酒を飲ませ、もう一人の客には乳房を預けるといふサービスを、こともなげに出来るようになったのである。

葉子が三田と初めて会ったのも、滝子の座敷であった。

滝子の常連の客が、三田を連れて遊びに来たのである。

「三田がお滝さんの噂をきいていて、ぜひ連れて行ってくれというものだから」

「噂って、なにかしら」

「とぼけるなよ」

二人は、もつれあって畳に倒れた。

「まあ、お早いこと」

笑いながら葉子は三田にビールを勧めた。

「葉ちゃん、そいつは、そんなお上品なことをしても無駄なんだよ」

と畳を這いながら、滝子の客がいった。

「あら、どうして」

「ビールを飲むより、葉ちゃんの足の裏でも舐めさせてもらうほうがいいんだ。なあ、そうだろう、三田」

三田が何かいったらしかったが、ぼそぼそして何をつたかかわらなかった。

こいつもそのクチか、と察した葉子はお膳に腰かけると、だまって三田の顔先に足を突き出した。

足袋など穿いてはいない。

黒く汚れた葉子の足の裏が、三田の顔の前で静止していた。

三田は、びくともしなかった。一瞬、戸惑ったらしかった。

「どうかしたの」

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

と葉子は爪先で三田の頬をこづいてやり、唇を「ちよっ、ちよっ」と、つついてやった。

草履をはくように、唇をひねってみた。

「どうした、三田」

常連の客は三田にいった。

「お舐めよ」

葉子はぺたっと、まっ黒な足の裏を三田の口におしつけた。

三田が両手で葉子の足首をつかんだ。

着物の裾がはだけて、意外に華奢で繊細な脚が、三田の眼前に露出された。

「べろっ」

と三田の舌が葉子の足の裏を舐めた。

「くすぐったい」

葉子は電流のようなものが全身を駆けめぐするような衝動におそわれ、鳥肌が立った。

つづいて、まるで犬か豚に足の裏を舐められていような悪感がして、葉子の顔が自然にこわばった。

「ああ、気持ち悪い」

常連の客がはっとしたほど、葉子の言葉にはトゲがあった。

「葉ちゃんは、旗日なのよ」と滝子がいった。

いつも着物の下に何も穿いていないのが、今日は脱脂綿とゴムのメンスバンドが、まるで貞操帯のように腰に巻きついていていた。

「足の裏は、もういいでしょ」

と葉子は三田にいった。

「ちよっと、オトイレ」

立ち上り、座敷を出た。

そのあとから、三田がついてきた。

手をつけていないおしぼりを持って、三田はトイレまで葉子のあとを追ってくるのだ。

「どうするつもりなのよ、あんた」

葉子は蓮々葉な声でいった。

「気持ち悪いでしょうから、蒸しタオルで拭いたらと思って……」

おずおずと三田は、いった。

「あんた、拭きたいの」

「かまいませんか」

便所のドアを開けたまま入った葉子は、三田を呼んだ。

座敷にもどった三田を見て、滝子と常連の客の二人は、腹をかかえて笑ったのである。

三田の顔が葉子の生理バンドで、すっぱりと包まれていたからであった。

×

×

×

×

×

×

カット・神戸狂四郎



地球を鞭打つ

(後)

創作

宇光仙

第三景 腐敗

しかし時は既に遅く、その駆け過ぎた後には、雪の日に踏みつけた靴跡のように、点々とした苦しみの名残りが散らされていたのです。

そっとトイレの中をのぞきますと、叔母は腹の底から声を張り上げて泣いていました。そのことで私は調子づきました。そしてさらに意地悪を強いることをやめはしなかったのです。

私たちは急いで二階に戻って衣服を身につけました。私は女中に簡単な手順を飲み込ま

せました。彼女はその手順に従い、まず玄関のチャイムをいやという程音高く響かせておいてから、トイレでどうしようもなく身動きできずにいる叔母に、客の訪問を告げたのです。しかも、既に来客は応接間に通してあると申し添えたのです。

叔母が顔を青ざめさせるのは、まずはくだらない社会的名声を失うことを恐れてのゆえです。当然のこととして、人間でありま

いらっしゃるらしい。

——ならば見ていらっしゃい——

女中を使って、そこまですべておいてから彼女を呼び戻し、さらに五分程たってからもっと度を深めることにしました。女中をふたたび叔母のところに行かせ、

「記者の方が、奥様の粗相の跡をご覧になって、大変ご興味と取材欲をかきたてられたとのこと、是非とも膝を交えたいと希望されますので、こちらにご案内申し上げます」

と不敵な口調で伝えさせたのです。そして私は、色づけをするために、まずトイレのドアをノックし、声色を使って、

「大変な感激です。今度から身の上相談以外に、大々的に身の下相談を企画いたしたいと思います。それにしてもこの臭気は私を震い立たせずにはおきません」

「といって、叔母の背を『ポン、ポン』と叩いてやったのです。」

叔母はてっきり芝居ではなく、本当に記者と対していると信じ込んでいるらしく、顔を臥せたまま、またまた泣き崩れの、うわ塗りをしました。

「是非とも、お顔をお見せ下さい」

と私は、無理やり叔母を仰向きにさせました。しかし叔母は目を閉ざし、そのことに命をかけた風情でした。私はそれでもその右目をこじあけるべく行動しました。

でも叔母は、

「お願い、一人にして下さい」

とあらがいが続けます。

そこで私は、一つ大きく溜め息をついてから手を休め、

「それでは応接間でお待ちしています。大変あつかましく、おじゃまいたしましたして、失礼いたしました」

と、一旦その場を辞してから、女中に用意させた、湯水を一杯満たしたバケツを持って

忍び込み、その全身めがけて一気に浴びせかけてやりました。叔母は非常なるショックを受けたらしく、思わず立ち上がりながら目を開きました。そしてまず、私たち二人を見とどけたのです。そこで私は、

「粗相をなさったくせに、いつまでめめめそなさっているの。お客様がカメラに収めているじゃないの。早く、始末をつけてよ。私たちこそ迷惑じゃない。世間の笑い者にされるのよ」

と叔母に唾を吐きかけんばかりのすごい権幕でまくしたてておいて、髪の手をつかんでぐいぐい引きながら、トイレの外に引きずり出して、叔母の残した点々と続く粗相の放列を見せつけながら、

「どうなさるのよ。臭くてたまらないじゃないの」

と、とどめを刺してやりました。

私が髪をさらに下へ押しつけるように引きますと、叔母はへなへなと足下に崩れ落ちてしまいました。

叔母は声をこらし、唇を噛んで、肩を震わし始めました。なるほど、その放列は収拾のつかない程に続いています。しかし、だからといって投げ出すことはないのです。何より

も放列は、叔母の『女らしさ』という隠れみのと訣別して、人間としての大切な時間を取り戻した証拠を刻み込んでいましたし、それ自体が記念すべきものであります。

叔母はそれらのことに自力で気づかなければいけませんし、むしろ喜ぶべきことなのです。なぜなら、わずかこれっぽちの軌跡を飛行しただけで、自惚れも、見栄もこれから二度と必要とせずに、素朴でつましやかさを装って、一人歩き出来る自分になったのでありますから。

粗相の長い軌跡は、いうなれば齒切れよく過去との訣別をなしうる奇跡の時にも通じているともいえるかも知れません。

四方の白壁は黒く塗りつぶされ、照明は天井からの裸電球一つのみであります。私は部屋の中央にすえられた木の台の上の、花びらが山と積まれたその中に身体を埋めるように横たえたまま、天井に張りめぐらされた蜘蛛の巣が銀色に近い輝きを持つことを眺めているのみです。時のたつのが遅いとは思いませんでした。私には恋人がこのことに味をしめてエスカレーターした行為に走るのではないかという心配が、ひっきりなしにこみ上げて

くるのであります。

私たちはかなり、世の道とかけ離れたことをあえて行なってきました。が、今度ばかりは俗にいう「度が過ぎたこと」のように思うのです。それは私の杞憂にすぎないでしょうか。

ギリシャに、およそ次のような物語があったはずであります。

一人の青年が海岸を散歩している時に、若く美しい女性の死体が波にたどって岸に打ちあげられているのを発見します。青年はその女性に激しい恋情を芽生えさせ、ついには彼女に「愛」を実行するのです。ところが、日がかさんだ時に彼女は青年の「愛」を受け入れることが、できなくなってしまったのです。その時に青年は彼女を埋葬し、自らも自殺したのです。

そのようなことは現実にはありえず、あくまでも物語の域を出ないと思うのであります。が、それでも私は、何かしら心に響くものを覚えるのです。大仰にいうなら「感動的である」とさえいうことができます。そこには人種や言語や風俗・習慣を超越した、人類に共通する原始的な魂の一部を占めるにふさわしいものがあると思うからです。

しかしひるがえってみますに、恋人の場合は柳の下の泥鰌式に考える正当な理由立てがどこにもありません。私たちはその生き方から、多くの社会人とはうまく行くはずがありませんし、また人間的にも接近し合うことはできません。だが同じ志の者が肩を寄せ合っていますし、死者のみが自分を受け入れてくれる唯一の友であったり、恋人などという一人よがりな飛躍は許されないといわなければなりません。

私が今あるような芝居を持ち込まれ、私自身がそのヒロインに抜擢される不運にまわれ、それしたのは、そもそも叔母がすべてを取り計らった関係上、詳しい事情は良く理解できないことでありました。

叔母のいうことには、

「事情をとんと理解できない方が、役柄をうまくこなせるわ」

となるのでありますが、近頃口が八丁になり出したことなどから、出鱈目に決まっています。

「とにかく」

と、叔母は上気嫌で芝居の進行について説明を始め、

「幸ちゃん、恋人にふられ、この世に生き

る希望を見失って心臓をナイフで一突きして死んだヒロインであって、幕は『ヒロインが死んでから数日経過したある夜のこと』云々という設定で上げられるのよ」

というにおよんでは、いやに調子良く口が廻り出しました。こうなりますと私は相手が氣にくわなくなります。自分が「ダシ」にされるのが耐えられないからです。私は叔母に耳をかさず、ですから芝居の進行について全く知識を持たないままに、今夜にのぞんでしまったような状態なのです。

私はこの部屋に入る前に叔母と女中によって、血ノリを付けられたり、ニセのアザを作るための化粧をさせられ、その上に死人にふさわしく、身体中くまなく白粉をベタベタ塗りつけられてしまったのです。さらには今あるように身体を横たえて、しばらく花の香りと肌ざわりを楽しんでいますと、

「あら、ヒロインは死んでしまっているのに気持ちよさそうに微笑するのかしら」

と叔母に眉をひそめられ、

「さあ、苦しみのたうち廻ったという風に、顔を横に向け、口を半ば開き、目はトロンと焦点なく見開くのです。右手に力なく握られたナイフには、まだ血が濡れ光り、心臓から

はついさっきまで血があふれていたのではな
いかと思えるように、血が溜ってよどみを作
っている」

と、あちこちに勝手に身体に触れるに至っ
たのです。

三十分程たった時でしょうか、

『ギギギ』

と部屋の扉が開かれました。この芝居のた
めにわざとサビつかせた扉と交換されたらし
いのです。実に細やかな気のくばりようであ
ると感心せずにいられません。

「おお、やはりこんなところに」

という恋人の、打ち震えた悲しげな声が響
きました。

恋人はすぐに私の側に近づき、私をじっと
見つめ出しました。その時、正直なところ、
私は吹き出しそうになりました。しかしあま
りに恋人が真剣そのもので、言葉だけではな
く声と表情と動作も役に打ち溶けていること
を見てとりました私は、

——とにかく、やれる所までやってみよう。
と思ったのでした。

私は焦点のない目と、身動き一つしてはな
らないという制約のため、恋人の一挙一動を
見とどけることはできなかったものの、恋人

はこの芝居に非常なる精魂を注ぎ込んでい
ることはすぐにわかりました。

「おれの太陽は死んだ」

と恋人は、私の身体に食いつき揺すりなが
ら絶句するようにいます。

「みな、おれのせいだ。格式と世俗に流され
たおれのせいなのだ。いや、おれが殺したの
も同様だ」

と、恋人はいいながら私から離れ、台の周
囲を廻り出しました。

それは私が息を殺すことが苦しくなり、ま
さに生きている証拠のすべてとはいわないま
でも、ごく一部ではありますがさらけ出して
しまいそうな瞬間でもありました。その点か
ら恋人自身も、私を本当の死人だと思い信じ
込むために気使って手順を踏んでいると読む
ことができたわけです。

「おれが流されて得たものは何だったという
のだ。おれは富を得た。おれは名声を得た。
しかし誰のなせるわざか知るよしもないが、
おれの眼前はにわかになつた。『黄金の
輝きを明りにできないことはない』とたかを
くくったが、その輝きは所詮において暖かさ
を持たない冷たい光にすぎない。そうだ。に
わかになつた時刻は……」

とまでいうと、恋人はふいに私の顔に頬を
つけて、おめおめと涙を流し出し、一分程も
するとまたふいに立ち上ります。

そして無言で部屋のあちこちを歩き廻るの
です。しかしすぐにまた私に抱きつき、今度は
私の右手からナイフを取り上げ、それを暗
い明りにかざしながら、低く小さな、呟くよ
うな声で、

「太陽が、このナイフを握る細い手に力を込
め、一気に事を運んだ時だった！」

と結び、次にはこの上ない力み声を張り上
げるのです。

「待て！ よく見よ。目を大きく見開いて冷
静になれ。ナイフが血に濡れているではない
か。奇跡だ。ああ……何んと心打つ美しい色
であろう。これほどまでにすんだ血の色が、
この世に二つとあろうか。花にも宝石にもな
い。あろうはずがない。ナイフはおれに何か
をいつている。耳をすまそう。……確かに聴
こえる。……聴きとった！ おれは聴きとつ
た。『お前が本当に改悛しているのなら、太
陽の後を追え』といった」

恋人の手からナイフがすり落ちたらしく、
床に鈍い響きを作って突き刺さる音が響きま
した。そしてすぐ後に、恋人はよろけるよう

に私に近づきざま、「ガバツ」としがみついできました。でも三十秒としない内に、氣を取り直したように離れて、今度は胸の血のよどみを利用して、私の身体中を血で塗り出しました。そしてかすかに息をする私に気づかないわけがないのに、

「なんて氣高く清らかな肉体だろう」

「指先に感じる肌には死後数日経た者とは思えない暖かさがある」

「豊かな胸よ、おれの罪を許し、つぐないの口づけを受けておくれ」

「おれの太陽、よみがえるのだ」

と口走りながら、台の上に体を乗り上げ、果てには私の上に仁王立ちになったのです。

「もう何もいうまい。おれの太陽は死に絶えたのだ。おれは今、この上なく鼻をくすぐるのは朽ち行く太陽の匂いであることを認めなくてはいけないのだ。腐敗しているのだ。地団駄踏んでも遅いのだ。しかしそれでも、おれは今一度確かめたいことがある。今にも死虫が飛び出てきそうな太陽であっても、おれは「愛」を確かめずにいられない」

突唐に私の唇に恋人の「真心」が押しつけられてきました。感動にむせび、この上なく悲しみを表わした「真心」は私の咽元深く立

ち入り、その心するところを丁度伝えるやいなや、身をひるがえし、胸元を滑り落ちて行きました。

恋人の「愛」の確認のために私は手をかすことはしませんが、極めて機械的にふるまい首尾よく区切りをつけることができました。

でも恋人は、

「おれは不運だ」

と突然、部屋の中を歩き廻り出し、いらだたしいげにいうのです。さらには、

「おれがもし、もう数日早かったら、畜生が心臓を突き刺す様を見ることができたのに」

と、私を身震いさせるようなことをいい出すのです。

「おれはその様を垣間見るだけで、最も素晴らしい気分にあつたことができたはずだ」

と堰を切ったように仮面を剥がし始めました。恋人はナイフをひろい上げてかざしていました。

「畜生は死ぬ気などなかったのだ。死ぬまねをしている内に誰かが来て思いとどめてくれるものと見込んでいたのだ。ところがいつになっても説得者は現われず収拾がつかなくなつた。それでも畜生は心を鬼にして待った。その退屈しのぎでナイフをかざし胸に押しつ

けて見たのだ。そんなことをしているある時に、どうしたことかナイフが心臓をえぐってしまったただけなのさ。でもこんなあさましい畜生は、死ぬに限る。その方が実にすっきりするのだ……それにしても残念である。畜生め、おれに死ぬまでたてをつきやがった。たとえ手のはずみにせよ、ナイフが畜生の心臓をえぐる様を見とどけたかった」

といいながら部屋を出かかったのです。

でも出口の所にたたずみ、扉をヒステリックに「バタン、バタン」と叩き、いよいよ形相を狂わし出したようでありました。

「やい。誰かおらんのか！ 誰か、ここに死に絶えやがっている畜生の、死ぬ間際に立ちあつた者はいないか。やい、返事位したらどうだ！」

恋人は何という口のきき方をするのでしょか。しかも恋人は自身に心をどぎまぎさせて、自慰的に饒舌になり出しています。それらのことはすべて承知していたことでありますのに、あまりの執拗さのために私はいらだちを覚えました。無意味です。私にはもはや「じつ」としていなければならない理由などどこにもないのです。

「はい。遅くなって申し訳ございません」

と叔母の声が下で響き、次に階段を上がってくるらしく、声はしだいに明らかになり出しました。

「わたしはその一部始終をひそかに部屋の隅でうかがっておりますので、あなたのご満足のいただけるお答えができるはずです」

芝居の筋は全くの作り事を明らかにしてきました。しかしここで注目しなければいけないことは、役者たちが実に、

——これは大真面目なことである。

とでもいわんばかりに身ぶり手ぶりよろしく、もっとも、不自由な私がそのようなことのわからうはずがなく、単に想像することですが、きめ細かな配慮をしつつ、演じているということであります。

それは素人の役者がぎこちないながらも、「良くやっている」時のようにほほえんで見られる芝居でも、玄人の役者が舌を巻く程あざやかに「なりきっている」時のように、感心しながら見られる芝居でもありません。単的に表現いたしますなら、私自身も役者たちと打ち合わせを充分につんで芝居に溶け込んでいるような、またそうせずにいられないような一体感を覚えるのです。

「それは嬉しい知らせである。是非、話して

欲しい」

と恋人は声を輝かせんばかりでした。

「は、はい」

叔母は力んで答えました。

「この畜生は非常にいやらしい女でございました。まず『庭に咲いている花をひし折りつんでまいれ』と命じました。そして花びらをこのように台の上一面に飾りたてさせておいて、やれ『花びらに傷をつけた』などと事実を反することとわたしをいじめるのです。畜生はそれでも内心は上気嫌のようでした。なぜなら畜生はこの花布団の上に横になった時に実にうっとりとした顔を見せたからです。

それは田舎者がそんな自分をひた隠しにして都会人ぶくている様にも似てこっけいでしたが、わたしは笑いをこらえました。なぜなら畜生は時々発作的に狂暴になる習慣があったからでございます。それから畜生はわたしに『下れ』と命じました。わたしは命じられた通りに従いましたが、畜生めがどんなことをなすかということが気になり、そっとしのび込んで見たのでございます。そしたらどうでしょう。口にしているものはばかる位いやらしいことをしていたのです。えい、あんた様は知性と教養のお高い方と、知っていますの

で、何もかもお話し申し上げます。畜生はナイフを繰って額ぶちのないう「絵」を切り開いていたのでございます。『絵』から血がはたはたと流れていました。純白の花布団をわずかずながら赤く染め出していました。畜生はそのことのとりこはなったようでした。でも何を思ったのか、ナイフを胸の上、いいえ心臓の上に押しあてたのでした。わたしの思うに、畜生は正気を失い、心臓の上のナイフを「絵」の中にあると思ひ込んだらしいのです。いずれにせよ、心臓はいとも簡単に突き破れ、その血潮は天井にまで舞い上がりました」

その時、突然に恋人は昂揚した口調で口をはさみました。

「待て！ 一つ尋ねさせてくれ。あの天井の赤黒いシミは畜生から吹き上げた血潮によるものか」

と叔母はお世辞屋のように答えました。

「みなみな、畜生めのものでございます」

「ああ……」

と恋人は大きな声を張り上げました。

「おれの目にありありと想い浮かべることができるぞ。畜生の血潮は噴水のように吹き上がった。でも、低い天井にまともにぶち当り

すぐに霧のように細やかな粒子に分解しながら、畜生の上に降る。そうだ。畜生の血は畜生に帰したのだ。畜生はそこで見絶えた。実際に畜生にふさわしい。調子よくなってきた。匂う。畜生めの腐敗した肉が臭っているせいだ」

私の顔面に「すっ」とナイフが近づき、私は思わず恋人の顔を見てしまいました。しかし恋人は、私の視線に気づいたにもかかわらず、そ知らないふりを続けるのです。ですから私は、また死人の続きをすることにしました。そのことによって、私は依然として芝居の進行の足を引かないことになったのです。

「話を続けさせていただきます」

と叔母は一分程してからいいました。

「そう……静かに……おれの内なるあつい魂にいらだちを与えないように、続けてくれ」

と恋人は小さな囁くような口調でとぎれとぎれにいいました。

「畜生は」

と叔母は注意深く話し始めました。

「ナイフを胸に突き刺し血の雨を降らせながら、両手で両乳房を下からもみあげるようにしてもだえ出しました。苦痛が強まり、死の足音が真近になればなる程そのことは手の施

しようもなくなりました。それからしばらくすると、畜生の両手は豊かな山の斜面を下るスキー・プレーヤーのように下り出し、そして畜生にふさわしい場所にとどまったのでございませう。飢くことなく欲望と快楽を貪り、狼の声にも似た叫び声をあげました。畜生はナイフを引き抜きかざしていました。しかし震えが生じ、腕は力を失い、ついに萎えてしまいました。それが畜生の最後であったのでございませう。わたしは恐ろしさのあまりにこの部屋から這うようにして逃げ出してしまいました。わたしはつい先程、それでも気になり、また好奇心にかられ、この部屋をのぞいた時、ご覧のように畜生は腐敗し、死臭が漂っていました」

と一気にしゃべってから、叔母は少し間を置きましたが、

「以上がわたしがあなたにお話しする、すべてでございます」

と結びあげたのでした。

「ありがたいお話であった。ここでおれはお前にその感謝の意を表わすために、何か骨折りたい。おれに望むことを伝えて欲しい」

と恋人は、叔母に静かな口ぶりで尋ねました。

「わたしは畜生の顔に、わたし式の復讐をしたい。そのことがかなえられますから、この上ない喜びです」

と叔母は、外向き用の美徳家の化面を無限の遠くに追いやり、つい一月前の私が彼女に排便の粗相を強いた仕返しを、今こそせんばかりにいったのです。するとどうでしょう。

「それはいたって、お安いご用だ」

と恋人は言下に快諾したのです。

私の眼前に、復讐の化身のように叔母が立ちふさがり、私は叔母の奇怪な様に、まず責められ始めました。

たちまち黒雲に覆われた空からは土砂降りの雨が、大きなヒョウを伴って落ち注ぎかかりました。

「わたしの心はこれまでにない位、晴れがましくなりました」

と叔母は嬉しげに叫びます。

恋人は私の顔を見つめていました。鼻をピクピクさせ、つまみました。

「腐肉の臭いはいいよ、けたたましくなりました」

ともぐもぐといいました。

「わたしは畜生の腐敗を早めてやった。このわたしの労をねぎらっていたきたい」

と叔母は、すかさずに私の恋人に、私を傍にして誘いを投げました。それに応えて

「これは巨大な息づく生き物だ」

と私の恋人も感嘆したのです。

間もなく、私がわずかに不自由な体勢からうかがい、垣間見た情景は、恋人が叔母の労をさらにぎねらおうとしている瞬間でありました。しかしながら、私はそのようなドロ沼芝居の終幕を見せつけられたことに、少しとして悲しみを覚えませんでした。それは恋人の横顔が寂しげであったことによります。私は恋人の心はここにはなく、一種の幻覚状態にあり、したがって依然として私は恋人であるという自信を、確かめたからなのです。私にはただ幕の降りてくれることのみが待ち遠しく、その外に気づかうことは何もありませんでした。

第四景 再起

混乱と困惑と自信喪失を象徴的に証す戯曲を、私の恋人は世に送り出そうとしました。

その構成はエロチック・コントのアンソロジイ風ですが、でもいかに芸術作品であるとはいえ、まだ心身の発育が確立されていない少年少女には不向きといわざるをえま

せん。恋人は上演を一週間後にして連日劇団入りをし、私は稽古場の隅で恋人を見守るという具合でありました。

演技者たちは男女の別なく、大方の裸であり、裸はどんなに好意的に見つめても裸以外の何物でもありません。たとえ人間の裸体が美しくはあっても、恋人の力では、その美しさをさらに高尚ないぶきとすることには至らず、不成功のようであります。

たとえば、戯曲の中に後ろ手に縛られ、猿ぐつわをかまされて、鉄格子に大の字に磔られた女優と、身体にびったりしたタイトの衣装に膝までのブーツと肘までの長手ぶくろ、それに、マントをはおり鞭を手にする女優との闘争場面があります。

磔られた女優の腹部には、螢光塗料で『自由』という文字が書かれ、鞭を手にする女優のマントには同じような手法で『不自由』という文字が書かれている。闘争は照明の技術に助けられて『自由』の女優が『不自由』の女優と、立場を入れ換える。自由を獲得した『自由』の女優は、自由を失った『不自由』の女優を気絶寸前まで鞭打ち、最後はかなり長いおしゃべりをします。

「アタシは八頭身美人の上に、この美しいア

タシの悶えを、是非ご覧遊ばせという具合に誇りを持って呈示してきた。それなのに、この女は……」

云々という意味のことを、あけすけな単語を用いて飾り立てるのでありますが、美しいという感情の力は弱く、それを卑らししさに似た感情が圧するというのが本音です。

どのような理由から、そのような感情を覚えるかを冷静に胸に手をあてて考えてみますと、第一に手法がきわめて非独創的であるということが挙げられます。どこにもあり、また多くの者が使い古した手あかのついたコントゆえに、鑑賞者に眠気を催さすに近いものにすぎません。

ところが恋人に首ったけの女流前衛戯曲家は手放してほめ上げます。彼女は特に幕あきを印象的であると、賞讃をいいます。

「貧しい者から搾取した富なる夜会服で身を装い、化粧師がみがきあげた婦人は、世にはびこる権力を象徴しています。その権力は、裸体で武器一つ身につけない、人民の星なる若者によって、いとも簡装を引き裂かれ、肌をドロを塗りつけられ、ねじ臥せられてしまします。このことは、さらに幾つかの他面的要素を持っています。その一つは、欲情とい

う人間の根源的な衝動を解放し、欲望を終焉に導くための、輝かしい第一歩であるということだ

「へえーい！」

という悲鳴がふいに私の耳を痛めます。

「目を開け、売女！」

と、頭を丸め体格のごつく巨大な男優が、両手吊りの女優に向かい、ふたたび鞭がわりのベルトをふり上げたのです。この場面は、最後から三つめのコントによるものでした。

「許して下さい、後生ですから」

という意味のことを、女優は悲鳴のあい間に漏らします。時々女優は目を開きはしますが、その瞳に歪み、にびっています。

「どうした売女。おれの要求は少しも無茶ではない。それなのに、お前は答えようとしな

い。どうしたことなのだ」

と男優は女優に要求を続けます。その要求がどのような事であるか、最初の内は明らかではありません。

でも男優は言葉も荒々しく直接的に、

「神酒はまだか」

と問いつめます。

二人の周囲に集った五、六人の男女が薄汚い笑いを浮かべるのです。

「もう少しです。お待ち下さいまし」

と女優は、二度と会わす顔がない風情で、消え入りそうに答えます。すると、男優はとたんに、

「それでいいのだ。すべてがうまく行く」

とこれまでのとげとげしい調子を急に交えて、上気嫌に答えます。

しばらくすると、

「どうぞ、ご用意を」

と、女優はもじもじ身体をくねってから男優をうながします。すかさず、

「これはありがたい」

と男優は、女優の両脚をつかみます。

女優の脂汗にまみれた身体は客席に「これを見よ」がしに晒され、そこで客は、神酒があふれる様子を詳細に観察出来る手筈になっているのです。

私はこれまでに、考えられるあらゆる特異風俗になじんできていますので、こんな田舎芝居はどうということもありません。ところが芝居の稽古は、旗上げの前日に突然中止されてしまいました。その理由が法的な規制によるものか、劇団の意向によるものか、あるいは作者なる恋人の意志によるものか、一切明らかではありません。

恋人はそのことが決定された日から、ベッドに埋もれたまま連日を過ごしました。

世には多くの生まれ方と、生きる境遇の異なった人々がいるし、そのことを無視してふるまうなら摩擦が生じ出すのは当然のことです。たとえ美德という名の仮面の腹立たしさ

にいらだち、無理やりに鞭を打ちつけましても、果してどこまで効果があるのか、疑問であります。

「とにかく陽気にやろうや」

という言葉すら忘れ、恋人はただただ沈みみきり、その理由から私も沈みこまなければなりませんでした。

空しい日常生活の積み重ねの向こうに横たわる死の恐怖は、目を堅く閉ざそうとも逃れようもないのです。しかしそのようなことで挫けましては、生きることとはできない相談であると思さなければなりません。むしろ、人間が生きていることにおいて頭打ちになっていけばこそ喜怒哀楽もあり、また人生において生きるということが意義深い厳粛な事象となるのではないのでしょうか。

恋人が『欲びの育つ館』という言葉の口にしましたのは、寝込んで十日程もたち、ようやくのこと、その表情に色つやを増した時

でありました。恋人はその館なるものの性格と構成を単々と私に話し、すでにその手筈が整えられていることを告げるのです。しかも恋人は私に対し、

「お前はおれの片腕となり、助手の肩書きを持つことになる」

と押しつけてまいりました。

私はその館に好奇心を覚え、胸の時めくものを感じないわけではありませんが、だからといって思わず万才でもしたくなるような喜びであることはありません。

「とにかく陽気にやろうや」という言葉と、『欲びの育つ館』という現実の、目に見えない壁につんのめり、挫折しかかった恋人が、満を期して組み込んだ行為とのかみ合いが、どれ程うまく行くか、大いに疑問でありました。

見も知らぬ人間を、突如として「馬」並みに取り扱い、全くの「調教師」きどりでいばって見たところで、どうということはないはずであります。私は確かにそのようなことに身体を震わす程の快感を感じる型の女性であるにしても、内には母が口をすっぱくして叩き込もうともくるんだ、いわゆる美徳道徳を捨てきれずにいるのかも知れません。

思うに「調教師」の立場にあることや「馬」の立場にあることは、案外において、悪徳の美徳との対決という、闘争状況においてのみ、その効果を高めることのような気がいたします。したがって、所詮私は悪徳家の仮面をつけているにすぎなく、その仮面を取り去るなら、美徳家の仮面を取り去った美徳家と共通の考え方を持っているような気がするのです。

ところが不思議なことに、そのようにつきつめた考え方をしていると、頭の中がムカムカし出すのです。身体が火照り、うずくめます。美徳と悪徳との対立に加えまして、死と快楽との対立が迫り出したようなのであります。

混乱は、解決と落着きを強情にも拒絶し、波高くして決着のつくことを望んでいます。すべてが夢心地の内にかたづけられることを希望します。

そのことにおいて、私と恋人はこの上なく一致していました。とすれば、恋人は私に対して、飽くことない責め苦を加え、私はその責め苦を、外ならぬ恋人のなしているがゆえに喜んで受けるという仕組によって、「めでたし」となるわけであります。

私が恋人に抱きかかえられながら『欲びの育つ館』なる代物に一步を踏み込んだのは、夏も終りの季節でありました。

館は、緑の多い街の郊外に静かにたたずまいを誇っていました。某氏個人の持ち物であって、その個人の心するところから、十幾つかの部屋の多くが、特異な造りと装飾を施されていました。恋人はその館の最高責任者であり、私はその次に位置する地位をかち得、『調教』のための小間使いとして、十名の女性を頭を揃えて控えました。

考えてみますに、北欧の一部の国々、たとえばデンマーク国においては、性的表現の規制がかなりゆるく、この様を軟派週刊誌風に申すなら、

『デンマークは「おとぎの国」といわれているが、中でもコペンハーゲンにはきわめて清潔で美しい町である。ホテルのバスでひと汗を流してからすぐにその町を心ゆくまで探索させてもらった。なるほどすごい。本屋のウィンドーの雑誌はその表紙を全面介入に突入はおろか、女性の顔に火炎砲を浴びせているに至るまでをカラー写真で飾っている。国家権力の粋な計らいに目を見張ると同時に、「おとぎの国」といわれるゆえんがハタと理解で

きた』

となるのであります。

が、そのようなポノグラフィを紹介するカタログすべてを手に見てみますと、異常性愛あるいは倒錯の世界に通ずる紹介が極めて少数であることが特徴的にいえます。中で倒錯に映るものがあるとするなら、男性の同性愛程度であり、女性のそれは、カメラを前にしての演技的仕草にすぎません。つまるところ『欲びの育つ館』でとり行なうようなフェティシズム、獣愛、死体愛、サディズム、マゾヒズム等々のことがらは、性的表現の規制のゆるい国々でさえ、特異であるといえるわけであります。

そのことを簡単に論評いたしますなら、この地球上の多くの人たちは、いわゆる美徳家の息吹きの内に育てられているということになるかと思えます。このことは、厳粛な気持ちでよく噛みしめる必要があります。そして多くの人たちの魂のつましさに、頭をかしげ、私たちは自身の魂の貪欲さに震え上がるのです。

恋人は、明日初めての『畜生』が留学してくるという前日の夜、直径二メートルはあるうかという、地球儀を取り寄せました。そし

て、ろうそくの明り一つの部屋に、それを握え、全身を黒い衣装で包み、鞭を手にし、足をふんばりました。

「地球を鞭打つ」

というのです。

以前なら、私を鞭の餌にして、歯切れ良い口調で、

「地球を鞭打つほどに、とにかく陽気にやろうや」

と叫んでいますものを、もはや私では役不足らしく、実際に、地球を縮図する地球儀を餌にせずにいられない心境にかられたようであります。

「こいつは、しぶとい」

と、恋人は鞭を握り直しながら、額の汗をぬぐいました。

いかに鞭打ちましても、地球儀が悲鳴をあげるわけなどありません。いつぞや、私を死体に見たてて高揚感を震わしたことがありましたが、どのような理由から地球を鞭打たずにいられないのか私には理解できません。

「えい、強情な奴め」

と恋人は憎々しげにわめきながら、打ちつけているのか振り上げているのか区別がつかないまでに、素早く鞭を操りました。

「そちがそのように我を張ったとしても、おれの鞭はひるみはしない。ますます勢いを得よう。最後には必ずそちを、怒濤の中に飲み込むことになるのだ」

私には地球儀がどのような材質で構成されているのかわかりませんでしたが、恋人の鞭打つ回数が三十分程続いた時に、明らかな亀裂が生じました。その点では安っぽい作りであるかも知れません。

「そろそろ、咽元まで言葉が突き上がってくる時だ。それをこらえろ！」

と恋人は亀裂を狙い定めたように狂い打ちをします。

「ムーン。ムーン」

突然どこからともなく女性のうごめくような声が聞こえ出しました。

私は不思議に思い、そっと周囲を見回しましたが、側に控えている者たちも私の方を見ている始末です。耳をすますなら、どうも声は、地球儀の亀裂から生じているらしいのです。ですから恋人がいうように、地球儀が弱音を吐いていることにもなります。しかしそのようなことは実際問題としてありえないことなのです。非現実的なことです。ですから部屋のどこかにテープ・レコーダーが仕組ま

れていて恋人の鞭の熱っぽさに合わせて操作されているらしいと考えられたわけです。でも、おかしいことに、間違いなく、声は地球儀の中から生じているのです。

「ムーン。ムーン」

うごめく声はいよいよ確かに地球儀の中から響きます。疑いの余地は全くありません。私は息をつめました。誰かが地球儀の中に閉じ込められているらしいのです。

亀裂は奇快に走り、もはや一叩きでもすれば地球儀はその装いを変え、全く原形をとどめないであろうと予想されるまでに、痛めつけられるに至りました。

「これは実におしい一叩きになる」

と、恋人は鞭を休めていいました。

恋人は肩で息をしながら、全身にしばらくつく衣装の気分悪さを、快楽にすり変えようとしていました。

「おれはこの一叩きを誰かにわけ与えよう。そのことによって、おれはこの一叩きを生涯悔み、同時に記憶するのだ」

恋人は目を細めるようにして私たちの方を振り返ったのです。ろうそくの明りを背に浴び、その姿は神々しく私の眼に映りました。

「愛する者よ、ここまで歩め」

と恋人は、私を指名した。

私はあつくなる思いで、胸が「キュツ」と締めつけられ、目頭がうるみます。

「愛する者よ、ためらうな」

と、恋人は私のみに注目し、私を手招きします。世界が闇夜から明け出します。「欲びの育つ館」でその恩恵に浴した最初の者は、幸運にも私なのです。

私は恋人の前に跪いて感激の「挨拶」を行いました。恋人の凶器は、完璧なまでにより足場を確保しつつ、

「この鞭で一叩きするのだ。愛する者よ、そのことによってお前は、天か駆ける幸運を勝ち得るはずである」

と恋人は、鞭を私に手渡してきました。

私は鞭を手の内で弄んでから、表面の亀裂の最も弱っているところを狙いました。地球儀はそのことを知ってか知らずか、左右に揺れ出しました。

私は左手を曲げて胸の上でこぶしを作り、右手は後方に伸ばし狙いをさらに確かめました。鞭にはずみをつけるために上体をやや反り気味にし、左足を軽く浮かしました。鞭は空を切りました。鋭い響きを後へ後へと追いや、飛行を続け、まともに的の上にヒット

したのです。すると細かな破片となって砕け散り、すぐ後にメリメリと地球儀が左右に割れたのであります。

その中には一人の女性がいました。猿ぐつわをかまされ、後ろ手に縛られてうずくまっていた。その女性『畜生』の第一号であったのです。

背後の恋人の手が、私の胸元をわしづかみにしました。『畜生』は、恋人の手によって責められているとも思えるであろう私への祝福ぶり、さらには苦悶していると見られるであろう私の喜びぶりを、どう受けとってか、生々とした目で見上げていました。

こうして、『欲びの育つ館』のセレモニーは、いわば私が地球を鞭打つ時に始まったのであります。誰一人として姿勢を崩すことをいたしませんでした。

そのことは集う者がすべてセレモニーに参加するにふさわしく、人格と気品の高さを持ち合わせていることを示す、単的な証であったのでございます。

——(完)——

× × × × × × × ×



二人は、或る女子大の二年生であったが、愛し合うようになったのは、一年の終りの頃であった。和子が、「接吻って、どんな風にするのかしら」と言い、京子と試してみたのがきっかけとなった。

それまでは、いわば学友というところで、いっしょにアパートを借りたという関係だったのであるが、唇を合わせてみただけの好奇心は、少しずつエスカレートしていき、それはいつか、すべてをかなぐり捨てて抱き合うようになっていたのだった。

相撲に憑かれた娘

和子と京子の場合

海野三津男

(カットも)

その夏、二人で九州に出かけ、K県のキャンプ場にテントを張った時のことであった。

そこは、東京に暮らす二人にとっては、まるで別天地であった。真白な砂浜が何キロも続き、東支那海の波が白く砕けていた。特に西の海に沈む夕陽は例えようもなく、乙女心を魅了した。

澄んだ夜空にきらめく星を、頬すり寄せて眺めていた時、急に、キャンプ場の外れのあたりが騒がしくなった。

二人は、何ごとかと顔を見合せた。

平日であったためかも知れなかったが、そ

こは、それまでに行ったことのある関東周辺のどこよりも静かで、都会に近いキャンプ場などでは当たり前になっている騒がしいグループや妙な連中などは、その影さえ見なかったようであるのに……。

耳をすますと、その騒ぎはどうやら喧嘩ではなかった。ワーツという嘆声と、何やら怒鳴るような、やじるような声とが交錯しては少しの間、静かになるのである。

二人は、その方向に土俵があったことを思い出していた。しかもその日の昼、三、四人の土地の青年が新しい俵を持って来てそれを

直していたのである。

ホッとして顔を見合わせると、どちらからともなく立ち上っていた。

果してそれは、土地の青年達の相撲の稽古であった。七、八人の青年がマワシ姿で土俵のまわりにドッカとアグラをかき、そのうちの二人がちょうど、土俵に上っていくところで、女の子を含む二十人ほどの子供達と、十人ほどの大人が囲んで、盛んな声援を送っていた。

二人はその後ろに坐った。

改めて眺める青年たちは、中には色白の者もいたが、九州の、しかも浜育ちのためだろうが、色が黒く、そしてたくましかった。

「立派な身体しているわねえ」

和子が感嘆した。

京子も、大きく頷いて土俵を見つめた。

身体だけではなく、相撲そのものも立派ではげしかった。マワシ一本の相撲というものを真近に見たことのない二人にとっては、とりわけそれははげしく、凛々しいものに見えた。

バチッと、音を立ててぶつかった肉体から汗がとびちり、投げを打ち合う勢いで飛ばされた砂が二人の顔にまで振りかかり、寄り合

い吊り合う肉体に、もりもりと筋肉が見えかくれた。

二人は、息を飲んで見つめていた。

○

その夜二人は、二人の間の習慣を忘れていた。いや忘れていたというより、その気持が起こらなかったのだった。テントに戻ったものの、ゴザの上に仰向けに寝ころんだままでポカンとしていたのだ。

和子がやがて、ポツリと言った。

「興奮しちゃったわ私……」

「ほんと、男の人を見直したなア」

と京子も溜息まじりに答えた。

二人の周囲に見る男達は、その村の青年達に比べると、まるでヨナヨナと弱々しく見えてくるのだった。

和子は東京から二時時ほど北の関東の町に京子は西に三時間ほどの東海の町に育ち、どちらもいわば田舎といえるところで育ったのであったが、そんな町も都合化が進んでいるのであろう、また、二人にそうした機会がなかったこともある、その日の青年達のような凛々しい男らしい姿に出会ったことはなかったのである。

京子はしばらく黙っていたが、

「私達、同性愛だったのかしら」

と、ポツンと言った。

和子もそれを考えているところだった。

「そうね。そう言えばそうかも知れない」

「私が思ったのはね、あの人達のお相撲見ただけで、こんな気分になっちゃうなんて、同性愛かしらっていうことなのよ」

「なるほどね、男らしい男の人達を見たからって、いつものような気になれないなんてね……。そう言えば私達、体格も性質もあんまり変わってないみたい。普通の同性意ならばサ、もっと違ってていい筈よね」

和子は言った。

和子の方が色が黒く、眉も濃くて、京子の方は色白でフックラとしてはいた。

しかし、肌の色の違いもそれほどではなく身長も和子が一六一センチ、京子が一五七センチ、体重は五三キロと五五キロで、体格の差はほとんどなかった。

性格も、考えてみれば大差なく、和子の方がやや気短かであったが、どちらも割に積極的で勝気であり、意見が違った時などはどちらも譲らぬことが多かった。

二人は、最も男性的な男性の姿を見ることによって、自分達の仲が、もともとのレズで

はなかったことを自覚したのである。

「もう寐ようか」

和子は毛布を腹の上にかぶせたが、閉じた瞼に逞しい青年達がぶつかり合う姿がちらつくのである。

「思い切り、あばれたなくなっちゃった」

そうつぶやいたのは京子の方であった。

「そう言えば、私も、じっとしていられないという気持だわ」

しかし、二人はその夜はそのまま、いつか眠ってしまった。

○

二人が、浜へ飛び出して組み合ったのは、それから三日目の夜であった。

青年達は、毎晩八時頃から稽古をした。

九月初めにその町で開かれる郡の相撲大会のためだと、見物の子供が教えてくれた。

次の夜も、二人は奇妙に昂奮していた。

それがなぜかは二人には分からなかったし割合と単純で行動型の二人はそれを余り考えようとしなかった。

「私達もやってみようよ」

京子が言い出したのは、三日目の夜、相撲見物からテントに戻った時であった。

和子は一瞬驚いて、

「え？」

と、京子を見返していた。

しかし、和子には、女がそれをやってはならないという理由が見出せなかった。また、京子がそれを言い出したことに驚くと同時になぜか『先を越された』という気持が働くのを覚えていた。

青年の稽古を見て以来、二人の間には、どうしてか、お互いに反撥し合うような気持も生まれていたのである。

京子は続けた。

「何だか私、昼間、砂浜で追っかけっこしたり、海の中で沈め合ったりするぐらいじゃ満足できなくなったのよ」

和子も同じ気持であった。『もっと、何かが欲しかったのである。』

「ようし！ いっちょやるか、京子なんかに負けないぞ」

二人は、水着に着かえて浜へ飛び出した。

○

浜には、まだ数人の者が涼んでいた。

二人は長く続く浜を北へ走った。南の方には漁師町があり、夜遅くにも人影が見えることがあった。北の方は、昼間でもほとんど人影はなかった。二人は動悸の静まるのを待つ

て、「サア！」と向き合い、両の拳をぎゅっと握ると砂におろして仕切った。

「それっ！」

二人は同時に立上り、武者ぶりつくようにして組んだ。

それは、何か押えつけられていたものが、一拳に爆発した時のような感じであった。

ほんの数日前までは、求め合いひきつけ合っていた二つの女体は、今やはげしく反撥し合って、相手を打ち負かすことしか考えていなかった。無我夢中と言った方が良かったかも知れない。

どんな調子で、どうなったのか、とにかく一回目は、京子が和子を投げていた。

二回目は、気がつくと和子が勝っていた。三回目、二人は仕切りもせずぶつかった。

最初は押し合った。土俵のない砂の上を、それでは勝負はつくはずのないことも忘れて押し合った。

自分がじりじりと押し負かされていることに気付いた和子は、いきなり手を引いたが、京子はよろめいただけで、しがみつくようにしての揉み合いになっていた。

一瞬、二人は組みついたまま倒れていた。足が、からみ合っていたようであった。しか

し斗いをやめなかった。何としても相手を組め伏せ打ち負かさなくてはすまぬという気持だけが働いて、組んだまま砂の上を幾度か回転した。

我に還ったのは、渚にまで転がっていった海水の水に浸ってしまった時であった。

「ごめんね」

京子が言うのに答えて和子は笑った。

「どっちも悪いんだから、いいのよ。でも、まるで喧嘩だったわね」

「うん、とにかく、絶対負かしちゃおうっていう気持だけだった。でも、さすがは友達だな、ほんとの喧嘩にはならなかったもんね」

京子は、続けた。

「やっぱり、お相撲でいこうよ。プロレスなんかにならないようにね」

「そう、お相撲がやっぱりいいわね」

○

その夜、二人が話し合ったように、「あばれるとスカーッとする」要素が、そして「相手を負かすと気持がいい」という要素が女にもあることははっきりしていた。

しかし、単に、あばれたいのなら、そして打ち負かすことだけならば、他のスポーツで良かった筈である。

二人が、相撲を選び、それでなければいけないとなったのは、男というものをそれによって始めて見直し、それを自分達も行なうことで、男というものを感じ、求めようとしてのことだったのであるが、そう気づいたのは後になってからだった。

二人は再び向き合っていた。

今度は、カッとなって取組み合うようなことにはならなかった。投げ合い、押し合い、足をかけ合って斗うことに満足し、そして熱中した。

○

三日も経つと、二人は土俵なしの、そして掴むところのない相撲に満足しなくなっていた。なるほど、土俵があって始めて押し合いや寄り合いは成り立った。また、マワシがあって始めて、いろいろな投げ技もでき、吊ることもできた。その二つがなくて相撲は確かに成り立たなかった。

しかし、青年達のはげしい押し合いや寄り合い、そして土俵際の死力を尽しての攻防が、彼女達をして手に汗を握らせたのは、それが相撲であるからだけではないこと、またマワシというものが、自分達に男を意識させるものであったことに気付かなかった。

ぶつかり合い揉み合うことに満足を覚えていたつもりのその時の二人には、できるだけ完全に相撲に近づこうとする気持以外にはなく、土俵か、掴むものか、どちらか一方が欲しくなっていた。

二人は最初、夜中に、キャンプ場の傍らの青年達がいつも使っている土俵の上でやってみようかと話し合った。

しかし、そこはいつ誰が通るか分からなかったし、夢中になって声でも立てようものなら、キャンプ客を、起こすことになりかねない。かと言って、どこかにそれを作ることもできない。

二人はせめてと、マワシがわりに帯のようなものを締めることにした。が、ヒッチハイク同然の彼女らはあいにく帯の持ち合せはなかった。仕方なく、見るからに田舎じみた古い型のデューゼルに乗ってK市にまで行き白のさらし木綿を買って来た。

白のさらしを買ったのは、安いからであった。その時には、まさか帯として締めることになるとは毛頭考えていなかった。だから長さも二人で一丈しか買って来なかった。

それを半分の五尺に切り、水着の上から巾広く幾重かに帯のように締めた二人は、テン

トの中で四つに組んでみた。

「これでお相撲らしいのができるわね」

と和子が嬉しそうに言った。

その夜二人は喜々として組んだ。

そして「上手投げはこうするんだね」「下手投げはその逆よ」「外掛けって、こうかしら」などと言いながら、毎日の青年達のそれを見、見物の子供達から聞いた投げ技や足技をひとしきり試みていた。

「待って、私たち左四つになってるけど、どっちがどうなのかしら」

京子の言葉に、和子も、二人がずっと左四つのままで技を試していることに気付いた。

「そうね、ほんとだ。逆にしてみようか」

二人は右四つになってみたが、どうも工合が悪かった。

「何だ、相四つね私達」

素晴らしい発見でもした気分だった。

○

最初の二番は、相撲らしいことができるようになった嬉しさの方が残っていて、帯を掴み腰を引いて相撲気分を味わったりしていたが、三回目、まだその気分の抜けない和子を京子が上手投げで大きく投げてから雰囲気は一変していた。

四回目、和子は組むなり京子を右に左に揺さぶった。もちろん京子も負けてはいなかった。今度も京子が上手投げで勝っていた。

和子は口惜しかった。

和子は作戦を変えた。そして、組むなりぐいと京子を引きつけて、アッという間に外掛けに倒していた。

二人は肌が砂まみれになっていることにも気づかず、クタクタになるまで斗った。

水着も汗でぐっしょり濡れていた。

「やっぱり土俵が欲しいね」

と言い出したのは和子であった。

組んで帯を掴んでの相撲では、どちらかと言うと京子の方が強かったからであった。

力も体重もほとんど差がないのだが、腰がしっかりしているというのか、重いというのか、四つに組んで腰を落とされると、どうも和子は歩が悪いのである。

性格的な差は余り大きくないということを感じてはいたけれども、やはり和子の方が気が短く、京子は粘り強いという傾向も、あらためてお互いに確かめていた。

和子は勝負を急ぐ方であった。しかし、敏捷に動き、機を見ることは得意であった。

だから和子は、立ち上りざま突き倒したり

逆に引き落としたりする技をできるだけ使い組んだ時も最初そうして勝ったように、上背が少しあることも利して足技で勝負をつけるようにした。だが、それは必ずしも、うまくいかなかった。土俵があれば、例え組んだとしても一気に寄り出す手もあると和子は思ったのである。

「要するに、ここまでだって、足で分かるようなものがあればいいのよね」

と、二人は土俵にかわるものを考えることにした。それを考えつくまでには意外と時間がかからなかった。俵に当る部分の砂を少し深く掘っておけばいいと気づいたのだ。

○

さっそく浜の砂を丸く掘った。土俵の中に当たる砂はなるべく平らにし俵に当たる部分にはできるだけ高く砂を盛って、二人は始めて押し出しや寄り倒しなどの技を使うことができた。魅力を感じていた土俵際の攻防も、それらしきことができるようになった。当然、それまでの相撲と違って変化も出て来ていた。

和子の星数もふえていった。

しかし、新しい問題が出てきていた。

二人がそれをやれるのは夜おそくであり、しかも月がこうこうと浜を照らしている間は

遠方からも見えるだろうという心配があり、暗ければ、土俵が見えないのだ。

砂を高く盛り上げさえすれば、なるほど押されたり寄られたりした時、そこが土俵際であることは足触りで分かった。が、その時にはすでに遅いという場合が多かった。攻めていく方も見当がつかないのであった。

もうひとつ問題があった。

土俵なしの時も感じないではなかったが、星明かりで影は見えても相手が良く見えないという所から、立合いもうまくいかず、突っ張り合いなども効果的にできず、また危なくもあるということであった。

二人は、何とか明るいうちにできる所はないものかと、長く続く松林をあちこち歩き廻って北の方へ二キロ程歩いた所に、恰好な場所を見つけたのだった。

松林はそこで途絶えていた。その向こうにうっそうと茂った藪に覆われた小さな丘があった。その頂き近くに平らな砂地があったのである。そしてその砂地に、足あとは全くなかった。それもその筈で、その丘の藪は、全く良く密生していた。

○

二人は、水着と帯を風呂敷にくるんで再び

藪をかき分けた。そして、砂地に円を大きく画き、そこを掘った。

太陽はまだ高かった。風通しは良くないの、じっとしているだけで汗が噴き出た。しかし二人の頭には相撲しかなかった。

誰憚ることなく水着に着替え、帯を締めた二人は、土俵に入り、見よう見真似で土俵上の挨拶を交し、四股を踏んだ。

「いよいよ、ね」

京子がいかにも嬉しそうに云った。

「うん。こうしてお互いが良く見えると、相撲気分が出るわね」

「始終見てる訳だけど、こうして見るとあんたいい身体してるわね。引き締まっててサ、それにここへ来て、色が黒くなったし……」
「京子もよ。胸なんか盛り上っちゃって、腿なんか私より太いしサ。でも、ずいぶん灼けたわね。最初赤かったのが、だんだん小麦色になってきたみたいよ」

二人は、あらためて正面から見るとお互いを評価し合っていた。

「そうだ、もっと、足をひろげていいんじゃないかな。誰も見てないんだし、これじゃ相撲の気分も出ないみたいし」

そう言えば和子の言う通り、二人とも膝を

少し開いたぐらいで、相撲の蹲踞とは言えなかった。

「ほんと、ただしゃがんでるっていう感じねこれじゃ」

二人は、ぐいと足を開き、胸を張った。

「うん、なかなか堂々としたわよ」

なにか力が湧いてくる感じだった。

「サテと、どっちが強いかな、土俵もあるし、よく見えるし、いっちゃおういかうか」

腰を落とし、片手をちよっと砂につけて二人は立った。始めて帯を締めて組んだ時と同じように、喜々として取り組んだ。

「汗びっしょりね」

「まだ四時半頃だもの」

差し込んだ腕に、相手の腋の下の汗を感じた時、和子はなぜか相撲を知る以前の京子の感触を思い出していた。

和子はそれを振り払うように、

「いくわよ！」

と言って、相手をぐいと引きつけ、寄りに出た。一瞬、力の入れ方がおそかった京子は思わず退がっていたが、

「ようしっ！」

と言うと、ぐっとその寄りをこらえた。

どちらも相手を吊り気味に寄ろうとして争

ったが、どちらも譲らず、投げの打ち合いに変わった。

京子の上手投げを危うくこらえた和子は、ぐっと腰を落として一気に寄って出た。

京子は土俵際で弓なりになってこらえたがだめであった。帯の前の方を握り直して押し上げるようにされた京子は、どっとばかり倒されていた。

二回目、組みつこうとする京子を、和子は両手で突き放し、その肩を二、三度続けざまに突いていた。京子も負けてはいなかった。始めての、突っ張り合いであった。

だが、勝負は次の瞬間決まっていた。

機敏な筈の和子が、京子にサッと体をかわされて砂に手をついてしまったのである。

三回目も、和子は突いて出た。しかし京子は、今度も良く見ていた。

京子はちょっと泳いだが、和子を横抱きにするような恰好で組みついていて、低く組まれた形になった和子はあわてて京子の帯を取ろうとしたが間に合わず、そのまま寄り出されていった。

和子は、その次も負けた。

突いてだめなら組んで、と考えたのが悪かった。逆に京子に突っ張られ、また低く組ま

れてしまったのである。しかし和子は良くこらえた。そしていったんは寄り返した。だが寄り返すことだけを考えていたために、京子に体をかわされると同時に強く上手投げを打たれた和子は大きな弧を画いて倒れてしまっていた。

和子の唇は歪んでいた。

それは痛みのためではなかった。

それまで和子は、負けても、「ようし、今度こそやるぞ」などと言って立っていたが、その時、彼女はベツトリとついた砂も払わず無言で立上っていた。そして、キッと京子を睨んだ。

三度続けて勝ち、心にゆとりを持っていた京子は冗談じみて「サア、今度もやつつけてやるぞ」と言ったが、見たこともない和子の表情に、思わず緊張していた。

果たして和子は、猛烈に突いて出た。

京子は突き返そうとしたが間に合わず、どしんと尻餅をついていた。

和子の表情は、しかし弛まなかった。

和子は立上るなり京子の頬を張った。

京子も夢中になっていた。

お互いに頬を張る音だけを覚えていた。気がつくと、土俵の外に、二人は組合った

まま倒れていた。しかし、最初の夜のように二人は取っ組み合ったまま砂の上を転げ廻るようなことはしなかった。

和子は京子を引き起こして、

「ごめん、夢中になっちゃって」

と、謝まった。

「いや、いいのよ私達、斗ってるんだもの。

お相撲取ってるんだから……張り手ぐらいで怒ったって仕方ないじゃない」

京子は言った。そして、

「私達にも、あんなにはげしく取組むことができるのよね」

と、付け加えた。

「ほんと、できるのよね、女だって」

と、和子も感慨深げに言った。

我に還ると、二人は無性に喉の乾きを覚えていた。そして、全身砂まみれ、汗まみれになっていることに、あらためて気付いていた。

○

適当な場所を見つけた二人の相撲は、更にエスカレートしていた。

京子はやはり、組んで強かった。だが、どうしても上腹部に締めざるを得ない帯では、吊ろうにも力が入れにくく、直ぐに攔めてしまつて、それを取るか取れぬかという相撲の

う美味も味わうことができなかった。

京子はしかし、なぜかそれを言い出すことができないでいた。自分達、女がそれを締めた姿を思うと、羞じらいと同時に、熱っぽさを感じるからであった。

だが京子は、夏休みもあと三日で終り、キャンプ場も閉鎖されると言う日に、思い切つて言い出していた。

和子は始め、京子の、「あと三日しかないし、思い切つて男の人みたいに、締めてやってみようよ」という提案を、「いくらなんでも、女の私達が……」と否定した。

和子は、そんなことを考えてもいなかったのである。だが、和子はそう言っている間に、確かに身体が熱くなるのを覚えていた。それは、説明のできない気持であった。言われてみれば自分達の相撲が、何か物足りないのは、そのためでもあったと思った。

京子は最初、それがあれば自分には有利なのという角度からそれを求め、和子は、言われて始めてではあったが、それを、説明のできない熱っぽい気持から求めたのである。二人には、順序は違っていたが、二つの、同じ要素が働いていた。

和子は呟くように言っていた。

「そうね。今だって男の人しかしないことをやっているんだから……いいわね、男の人と同んなじにしても……」

○

二人は再び区市に行き、白いさらしを二丈買って来た。六尺の倍の長さを、なぜか口にするのができなかったからであった。

二人は、そのあたりの少年達を見て、締め方を想像することができたが、始めはなかなかうまくいかなかった。

ああだこうだと大騒動の末、どうにかそれを水着の上から締めた二人は、恥ずかしいよ、うな、そのくせ、晴れがましいような気持と同時に、想像もしなかった、何かが衝き上げてくるような感じを味わっていた。

だが、あの方の感情は、どちらも口に出さなかった。

「これで、本当のお相撲ね」

「そう、身が引き締まるみたい」

二人はそれだけ言うと、あとは無言で向き合い、がっぷりと取組んだ。

二、三度取組んでいるうち、お互いにいい出しかねていた感情は消えて、頭の中には相撲だけしかなくなっていた。

なるほど、京子はそれを掴むと強かった。

和子は、寄り倒され、吊り出されて黒星を重ねたが、立ち合いのかけ引きや、それを取らせないコツも少しずつ体得していった。

二人の星数は再び並んできた。

何番かずつ取組んでは休み、その日は陽が落ちるまで、二人は斗った。

○

次の日は、雨であった。

二人は、残念がった。そして、最後の日の天候が良くなることを願った。

最後の日、二人は朝早くからその場所に出かけ、あがったばかりの雨に濡れた砂の上で幾度も取組み、太陽が濡れた砂を乾かし始めた頃には、二人は疲れはてて、砂地に身を投げようとして横たえていた。

ふらつくような足どりで、テントに戻った二人は、朝食もそこそこにぐっすり眠り込んだが、夕刻、とは言ってもまだ陽の高い四時過ぎ、再びその場所へ行った。

二人は道々、「来年もまた来ようよ、ここへ」「そうね、ぜひそうしよう。私達、完全にお相撲好きになっちゃったんだもの、これでおしまいなんて淋しい」「ほんと、お相撲の味、ほかの女の人に教えてやりたいくらいだわ」などと話し合った。

若い体は完全に疲れを忘れていた。

「サア、行こう！」

二人は立上り、腰を落として仕切り、そして少なくとも一年は、別れなければならない相撲をいとおしむように、手を差し伸べ合って左四つに組み、禪を許し合った。

二人は、しばらくそうして、じっとしていた。しかし、それまでの相撲で、覚えている限りの星数が五対四ほどで京子より少なかった和子が、先に攻勢に出ていた。はげしい斗いが再開された。これが最後だと、一回一回全力を尽して取組んだ。

四対二と負け越した京子が、「もう一度」と挑んだ時、突き合いから、双差しに有利に組んだ京子は、一気に和子を吊り出そうとした。だが、それだけの力は京子に残っていなかった。和子は、吊りに出た京子を外掛けに倒そうとしたが、和子にもそれを決めるだけの力はなかった。

二人は、腰を引いて、じっと機を窺った。お互いのはげしい息使いが、力の限界がきていることを示すと同時に、逆に、氣力をふるい立たせていた。

「くそっ！」

と声を発して、最後の力を京子は振りしぼ

った。土俵際、和子は打っちゃろうとしたが遅く、ドッと倒れた。しかし、京子の身体も横に飛んでいた。

二人は、仰向けに倒れたまま、しばらくは声も出なかった。しかし氣持は、何かをやり遂げた人間が感じる充ち足りた氣持にひたっていた。

まだ高かった太陽が落ちようとしていた。

「私達、やったのね」

和子がフトつぶやいた。

「うん、やった」

京子はそう言い乍ら、禪をほどいた。

「これとも、しばらくお別れね」

和子も、そう言って、それを解いた。

○

後ろ髪を引かれる思いでキャンプ場を後にした二人は、いったん、それぞれの故郷に帰った。別れた始めのうち、二人はじっとしてることがたまらなかった。キャンプ場での特にあの小さい丘の、砂地の土俵での相撲の一番一番をたまらない氣持でなつかしんでいたのだ。

だが、なぜか、自分達のその思い出に、青年達のたくましい肉体のぶつかり合いがだぶって目に浮かぶのであった。

しかし二人とも、そのことを何の不思議とも思わなかった。単に、青年達の相撲に刺戟されて自分達もそうするようになったのであるとだけ考えていた。

そして、早く二学期が始まって、アパートの部屋でいい、押し合いや寄り合いだけで良い、相撲が取れるようになりさえすればと思っていた。

○

二人の相撲が大きく変わった、というより全く別の角度からそれを求めるようになったのは、再会した二人が、せきを切ったように取組んでから数日後のことであった。

二人は、約束し合っていたように水着と、六尺のさらしを持って来ていた。そして、それを締めるか締めないうちに、がっすり組み合っていた。

しかし、相撲を取ると言っても、六畳と三畳のアパートでは、投げ合うこともできなかった。二人は、相手を壁に押しつけた方が勝ちというルールで、思い切り押し合い、相手を壁にぐいぐいと、押しつけては勝ちを誇った。

だが、二人は三日もすると、そうした相撲には満足できなくなっていた。

○

二人のそれは、別の方向にエスカレートしていた。土俵もなく、思い切ってあばれることができない不満を、姿、形の面で満たそうとしたのである。

「男の人みたいに、裸になってやってみようよ」

と言いつ出したのは京子の方であった。

「そうね、そうしたら、こんな狭い所でもお相撲気分が出るかもね」

和子も、直ぐに賛成した。

その時は二人には何の邪念もなかった。

その夜から、二人の、相撲に求めるものは大きく変わっていったが素肌に襦を締める時も二人は何も感じなかった。始めて、それを締めようとなった時に感じた、羞じらいとそして熱っぽい感情も、またいよいよそれを水着の上から締めた時の独特な感じも不思議になく、あったのは、相撲気分を味わおうとする気持だけであった。

「裸に締めると、いよいよお相撲っていう感じね」

「ほんと、これでほんとの襦一本だ」

「マワシだともっと感じが出るかもね」

「うん、そのうち作ってみるか」

二人はそんなことを話しながら、お互いの

身体を前から後ろから眺めつすかしつした。

改めてそうして見てみると、随分とお互い遅くなったように見えるのだった。

「京子の身体、ずいぶん締まって来たわね、おっぱいは相かわらず大きいけど」

「うん、自分でもだいたい締まって来たって思うわ。あんたは前から筋肉質だったけどやっぱり締まってきてるわ。それに肩の所なんか少し盛り上って、水泳選手みたいに遅くなってるわ」

「たった三週間やっただけで、こんなに違うのかなあ。気のせいっていうこともあるんじゃない」

「そう、それも少しはあるけど、やっぱり前とは違うわよ」

「そうね、三週間って言うっても、毎日やったもんね」

「私ね、お相撲取ると肥るんじゃないかっていう心配してたんだけど、その逆みたいで安心したのよ、ほんととは」

「あの青年達だって、あんなに毎日やって肥らないんだから、私は心配なんかしてなかった。お相撲さんは特別よ、物凄く食べてるんだから。それにサ、私達、毎日泳いだでしょ

う、あれも良かったんじゃないかな」

「筋肉隆々になっちゃうのもいやだけど、ダランとしてるよりはいいわよね」

「少しくらいなら筋肉がもりもりしてたっていいわよ。だってバレリーナなんか見てごらんさい、筋肉、遅しいわよ。余計な脂肪がついてなくて、腹がきゅっと締まってるからきれいなものよ」

二人は、やはり女であった。

食べ過ぎないようにして、毎晩、力いっぱい押し合ったり吊り合ったりしたら恰好も良くなるかも知れないなどと話し合いながら、向き合って蹲踞してからも、

「アラ、まだ水着のあとが残ってる、良く灼けたもんねえ」

「私は大分薄くなってるけど、和子はまだ水着、着てるみたいよ」

などと、笑い合っていた。

○

最初の一番は、低く当たった和子が、一気に京子を東側の壁に押しつけていた。

二回目、四つに組んだ二人は、互いに相手を吊り気味に寄ろうとして襦を強く引いた。水着の上からでなく、直接に締めたためか、少し痛かった。しかし、それはがまんできな

い性質のものではなかった。

むしろ、ぐいぐいそれが腰に食い込む程力を入れて相撲を取っているのだという気分を二人は味わっていた。

今度は、京子の勝ちであった。

京子が、いままでとは異質のものを感じたのは、その次の取組みの時であった。

京子は、低く当たり過ぎて、和子におおいかぶさるように組まれていた。京子の頭は和子の左の腋に抱えられるような恰好になり、そのままでは、ひねり倒されるか、畳の上に押しつぶされそうであった。これでは敗けると、両手を下から和子の胸に当て、ぐいとその上体を起こしてそのまま押し切ろうとした時であった。

両足を大きく踏張っている和子の禪を目にした京子は、何かは分らない、ハツとするような感じを受けたのである。同時に京子は初めて禪を締めた時に感じた得体の知れないものを、より強烈に感じていた。

京子は、思わず力を抜いていた。

和子が、力を抜いた京子をひねり倒さなかったら、京子は、自分の不思議な気持をいつまでも味わおうとしていただろう。それ程、その感じは強く、熱っぽいものであった。

京子は、それを振り払うように、

「ようし、今度は勝つぞ」

と言ってみたが、いざ向き合うと、躊躇する和子の禪に目がいつてしまうのだった。

和子は、京子のそうした変化に全く気付かず、ただ、相手を打ち負かすために争い、揉み合う相撲気分だけを味わおうとしていた。

京子は連続して負けた。

○

その夜、京子は夢を見た。

青年達は、次々に土俵に上り、ぶつかり合っていた。青年の一人が、京子にサア来いと手をひろげていた。京子はその胸に飛び込んでいた。

京子の締めているのは青年達と同じマワシであった。青年は京子のマワシを取ると遠慮会釈なく吊り上げていた。

ハツと目醒めた時、京子は、全身を冷汗に濡らしていた。

○

九月も末であったが、その夜は妙に蒸し暑かった。

取組む前から、二人は汗ばんでいた。

その日の京子は強かった。

自分の感じた気持を、そして夢に見たことを、

を、京子は否定し忘れようと努めていた。

京子はその日、相手に禪を取らず、できるだけ組まずに、そして、相手を負かすことだけを考えた。また、相手の禪にできるだけ目を向けないようにしようとした。

京子は、和子の目だけを見つめて仕切り、離れて勝負をつけようと、ただひたすら押していた。和子は、京子の猛烈とも言える勢いに、三回立て続けに負けていた。

それまでは、どちらかと言うと、四つに組み、引きつけ、吊るようにして寄ることの多かった京子が、その日に限ってそういう相撲を取ることを、和子には不思議に思い、二、三日前から、京子の態度が変化していることにも、その時思い当たっていた。向き合っても言葉は少なく、取組んで「エイッ」とか「くそっ」とかの声を出さなくなっていたのも大きな変化だった。和子は、妙な気持になっていた。

四回目も、京子は押してきた。

その強い力に、和子は、妙な気持を一瞬忘れた。そして、京子の手をはね上げるようにして外すと、ぐいと左を入れていた。

京子の中には、身体を離そうとする気持とその逆の気持が葛藤していた。彼女の右手は

和子の禪を握りしめてその身体を引きつけようとし、逆に左手はそれを押し離そうとしていた。しかし、それはほんの僅かの間で、和子の右手がその禪を取ろうとする前に、和子のハズに深く差し込まれていた。

だが、京子は、自分の気持がこわかった。彼女は、ぐっと腰を落とすと、一気に吊って出ようとした。しかし和子が吊りに出たのも同時であった。

京子の恐れていたものが、急激に湧き上った。彼女は、それを打消そうと一層力を入れた。和子はじりじりと壁際に寄られていた。

和子が相撲以外のものを感じたのは汗まみれになって押し合っている胸の辺りからだ。そしてそれは、爪先立ちになって相手の攻撃を受けている太腿に、電波のように伝わっていった。

言いようのない異和感であった。それは、衝撃的な反応であるといえた。

和子は、やはり自分は同性愛の要素があるのかと思った。

和子は、尚も押して出ようとする京子に、強引に組みついていった。

和子は、そのうちに、不思議なことを発見していた。

ただ、組み合っているのでは、その反応は全くないか、非常に弱いのである。その反応は、相手が必死で寄り、揉み合う時にしか感じないのである。また、それは汗まみれになっている場合、更に強く感じるのである。

京子は、いつか、押しだけで勝負をつけようとしなくなっていった。また、押して出ても和子が組む意志を表わすと、直ぐに自分も腕を差すようになっていた。

そして二人は、四つに組んだままじっとしていることが多くなっていた。

○

京子の相撲が眼にみえて変化したのは、自分の求めるものが、打ち消そうにも打ち消すことができない程になっていったこと。そしてそれは、どうやら異性を求める気持かららしいことに気付いていたからであった。

夢が、そのことを教えてくれたのである。

京子はその後も、度々夢を見た。そして、

青年達が締め込んだマワシが、いつも鮮かに映るのだった。それは、必ずしも正面だけでなく、きゅっと結ばれた、後ろの部分も、しばしば浮かぶのだった。そして必ず、最初に夢見た青年、背の高いきりっとした顔立ちの青年の胸に飛び込んでいくところで終わった。

京子は自分にとって禪は、異性を意味するものであり、自分を悩ます得体の知れない感じも、恐らく同じ要素からくるものであると思うようになっていった。

京子は、いつか、自分と取組む相手が男であれば、そして、できたらあの青年であればとまで思うようになっていたが、そんなことは望むべくもなかった。

二人は、四つに組んで、互いに相手の禪を引き合った。

京子の場合には、そのミツをできるだけ強く引いてもらうためであり、和子の場合には、寄るぞという意志をそれによって表わし、相手が本気になって寄ってくるのを誘い出すためであった。

だが、本気になると、京子はいつかそれを忘れていった。しかし、和子には逆効果をもたらした。だから、思わず力を抜いてしまう和子が負けることが多くなった。

○

和子の夢は、京子のそれとは、少し違っていた。

キャンプ場の例の二人だけの土俵で、和子は京子と取組んでいた。土俵際で二人は必死に争っていたが、汗まみれの乳房に、そして

太腿に集中される攻撃が、かつてなく強烈であることに気付いた和子は、ハッとした。

相手が京子ではなくなっていたのである。

反撃をかけた、相手の胸は固く、遅しかった。そしてガッシリした足が、外からからだと思っただ瞬間、和子はドッと倒れていた。

相手は、和子の手を取って優しく起こしてくれた。和子は、その身体に武者振りつくようにしてもたれなかった。

目を覚ました和子の臉に、逞しい青年の胸と、ぐいと締め込まれたマワシが、強く灼きついていった。その青年は、キャンプ場で見えた青年たちの中で、一番強い青年であった。

和子は、自分の汗ばんだ胸に、いとしいも

のに触れるような気持で手を当てて、なぜ、そんな夢を見たのかを考えていた。

○

和子の、マワシを作ろうという提案を京子は異議なく受入れた。むしろ、それを待っていたのである。

二人は、相撲の本を買って来た。

締め方は、図解を見て何とか分かったが生地が問題であった。本式の、繻子のそれは何十万円もする。二人の到底、手の出せるものではなかった。

二人は、考えた挙句、黒のデニムの生地を買い、縦に半分に截ち、縫い合わせて長さが六米程になったのを四つ折りにしてアイロン

をかけた。

いよいよそれを締めようとなった時、和子は感慨深げに言った。

「とうとう、ここまで来たのね」

京子はただ、

「うん」

とだけ答えていた。

二人は、お互いが、なぜ相撲を取るようになったのか、なぜ、そうしてマワシまで締めるようになったのかを、その時、分かり過ぎる程、分かっていたのである。

だが二人は、それを口にしなかった。

(おわり)

S M 受 感

柴 利 好

.....「S O S ド キ ド キ ク イ ズ」.....

この春から、東京フジTV土曜夜七時に、「S O S ド キ ド キ ク イ ズ」という新番組が登場したのを、ご覧の方も多いと思うが、SMムードの番組だとはいえないだろうか？

このクイズは男女各々五人宛で演じられるが、その特徴は、回答者としての上段の男性と組になった下段の女性が、相棒の男性の回答ミスによって、その男に代わって罰を受け

るという仕組にある。

質問の方法は一つの問題に対して三種の答が示され、回答は正解と思われる番号に点灯すれば良いのだから、男性の役割は至極簡単である。ところが、女性側は左様にはいかな

い。女性達は、男性陣の前面の床に置かれた大きな風船の夫々に、一人宛乗っていて、ペーの男性の回答ミスがある度に、その風船に五秒間ずつ空気が注入される。従って、回答ミスが度重なるほど風船は大きく膨らまされ



る。それに乗っている女性自身の体重圧も加わって、遂には風船が破裂して女性は下方に墜落せざるを得ないというのだから、全く罪な話なのである。

その女性たちの乗る大風船は、畳半畳ほどの広さと高さに組まれた小指くらいの太さの鉄棒の枠に、はじめは密着する程度に脹らして容れてある。

この鉄棒の枠を正面から見ると、上下、左右（つまり縦横に）四本宛の丸棒が組まれているが、両側面と背面のものを合せると縦の棒は十二くらい立てられているらしい。この棒が男性席の下段に五箇、横に密接して並べたあつて、その中に大風船が容れてあり、更にその上に五人の女達が並んで乗っているとこの図である。

空気が充満するにつれて風船は当然、上方の自由な空間に向かって膨張する。と同時に

遮ぎられた枠の間からも、大きく脹れてはみ出して来る。この有様にスリルがあつて、結構楽しめるところが、局側の狙いだらう。

出演女性達は、こうした動作に相応しい軽装で、ペツタリ尻を落としたり胡座をかいたりして、風船の上に坐っているのだが、罰が加えられて、自分の乗っている風船が次第に膨張の度を加え、今にも破裂しそうになるに従つて、「イヤ！ イヤ！ もう止めて！ キャッキヤッキ、ワァーワァー」とあられもなく騒ぎ立てる。その怖ろしさを大仰に表わす所作の面白さが、一つの見せ場になっている。

罰が、実際にミスを犯した男にではなく、罪のない女の側に科せられることが製作者の新企画の狙いなのであるが、小生は、こうした一方的に罪を負わされる、全く引き合わない役割に選ばれて出演する女性タレントの心底にあるものは、果たして単なる人気稼業故の職業意識のみであらうか？ と、つい勘ぐりたくなつてしまった。

その身振り、絶叫、口吻の大仰さなどから推測すれば、それが仮にこの番組の効果を引き立てるための演技の一部ではあつても、そこには女性の本性としてのマゾヒスティックな

被虐心理が潜んでいるように思われてならないのである。或は人によっては一種の人身御供の心境に浸っている女もいるのではなからうか。そう思いながら見ると、風船が破裂して、鉄棒の中に墜落して、ネットに引っ掛つた女性の姿が、まるで檻に入れられた罪人のように思われて来るのも妙なものだ。

今一つの面白さは、先にも一言したが従横八本の枠からはみ出した風船の形状である。それは宛かも、女性の弾力に充ちた柔かい肌、縄か鎖で締め上げられ、縛り目の間からプクプクとはみ出している姿に実によく似ているように思えてならない。

枠に区切られた一つ一つの突起部のゴムの表面が艶やかに光沢を帯びて、枠のためにくびれた凹部と対照的な明暗を示す光景は、その上に乗って狂態をさらす女達の半裸の姿より以上にエロチックでもあり、サディスティックでさえある連想を与えてくれる。

因みに出演者は男女共、今までの処若手の芸能人に限られていて素人はいない。鉄棒の両側には支えのための棒があつて、女性達はそれをしっかり把握している限り不自然な恰好で転落することはないし、風船の上には別にネットが張られているから墜落による負傷の心配はまずなさそうである。いつまで続く番組か知らないが、女性上位時代としては珍らしいと思う。

(完)



私は、籍を置いているというだけでまだ見習いみたいな形なのですが、一応はファッションクラブに所属しています。

このクラブには十五人ばかりの、正式なモデルさんがいるのですが、表面上のなかやかさや、華やかに憧れて入れてもらった私には、びっくりするようないろいろなことがいっぱいです。

とくに、考えていた以上に激しい競争心を皆さんが持っていていらっしゃるのには驚かされますし、恐ろしく思い始めているところで、とても私などにはついてゆけないような気がしてなりません。

お灸フイクション

嫉妬の火

香里多魔樹

ちょっと大掛りなファッションショウや、いろいろな催しものに出演しようとする仲間内の競争や、いわゆる「売れっこ」さんに対する嫉妬や中傷など、女ばかりの職場につきもののイヤラシイ面が、一層、露骨にむきだされるようなのです。

○

このクラブに、まゆみさんというモデルさんが居ました。

どこか他のクラブから移ってきてまだ半年も経っていないようですが、今年十九才というから私と同年です。

年は同じですが、見習いで、まだ一度もお仕事らしいことをさせてもらったことのない私などとは大違いで、まゆみさんは正式のモ

デルさんというばかりでなく、クラブきっての「売れっこ」さんなのです。

もちろん、私が見ても可愛いヒトだと思いますが、チャームिंगな顔立ちとスラリとしたプロポーションが、スポンサー筋にとでもうけているそうです。

ファッションショーは当然ですが、雑誌関係のモデルや、パーティのホステス役のお仕事までも声がかかるそうで、クラブに顔を出したかと思うと、すぐに出てゆくのです。

「まったくコキ使うわネエ、すり切れちゃうわよ。もうちっとなんとかしてよ」

なんて、クラブの主任さんにおどけてみせながら、いそいそと出掛けてゆく後姿は、自分で半ばモデルになることを諦めているよう

な私ですら、内心おだやかならぬ気持、という感じがするくらいですから、正式のモデルさんで、あまりお声のかからない人たちは、ずいぶん頭にくるだろうと思います。

それを一番ハッキリと表面に出すのが、幸ちゃんというヒトです。このヒトは、もうだいぶ長らくこのクラブに居るそうですが、どういうわけか、あまり大きなショーなどには呼ばれないらしいのです。

「早くすり切れちまえばいいじゃない」

と、まゆみさんの出て行った扉に向かって小声ですがどくついて、イイツと唇をつき出しました。

「ひとりだけのご活躍で、さぞお疲れのことでしょうネ」

「あたいらは、オネンネの時間よ」

幸ちゃんにつられて、その時そこにいた他の三人のモデルさんたちが、やりきれなさそうにいい出しました。

見習いの私は、皆さんにお茶を持っていたてあげました。すると幸ちゃんが、他の三人のヒトと何か話していましたが、冗談のように「じゃま者は消せ」って言って手を振りあげ、おどけた恰好をしていましたが、私に向かって「ちょっとあなたも、ここへお坐りな

さいナ」と席をつくってくれました。

いろいろ面白い話でウップンを晴らしていたようでしたが、そのうちに笑いながら云いだした『まゆみを蹴落とせ』という言葉が、だんだん真剣味を帯びてしまい、本当の相談になってしまったのでした。

皆が本気になって、あれこれと意見を出し始めたのですが、なかなか妙案は浮かんできません。スターになることはとてもむづかしいことですが、スターを、その座から引き降そうとすることもなかなかむづかしいものと私はその時、思ったものです。

「やっぱり、実力のないものはダメかな」

と、一人のヒトがいい出した時、幸ちゃんが手を打って皆を見廻しました。

「いいテがあったわ。ヨシ、まかしといて。」

連絡したら皆協力してくれるわね」

何か思いついたらしいのです。

○

そろそろ水着ショーが本格的に始まろうとしていた春先のことでした。

幸ちゃんがああ時の、私も入れて四人に今夜、自分のアパートにくるように耳打ちをしてまわりました。私は、半分忘れていたので、ドキドキしてしまいました。

半分以上は好奇心だけで行ってみると他の三人のモデルさんはもう集まっていました。

「今夜は、わたしの誕生パーティー……ってことになってるのよ、まゆみさんには」

幸ちゃんは笑いながらいます。なるほど少しはそれらしく食卓が飾られてはありましたが、ほんの申しわけみたいでした。

悪企みの嘘とは知らないのでしょう、まゆみさんは真赤なセーターに若さを発散させながら、可愛い笑顔を花束からのぞかせて部屋に入ってきました。

形だけのパーティが開かれましたが、急に幸ちゃんが、まゆみさんにいい出しました。

「これから皆、とても忙しくなりそうね。スターのあなたなんか特にそうよ。モデルなんて体がモトだから重労働だわよネ。そうだった、あなたよく胃が重いか痛いとかいってたねえ。用心しなきゃ駄目よ。そうそう、ちようどいいわ。ちよつと手当してあげましょう。わたしとてもいいことを知ってるの」

まゆみさんは「あら、いいわよ、そんなこと」とか「たいしたことはないのよ」とかいいていましたが、私たち四人も調子を合わせて強くすすめるものだから、仕方なさそうに幸ちゃんの言うとおり、坐布団の上に腹這い

になりました。

約束どおり、幸ちゃんに協力したものの、私たちは何が始まるのか見当もつきません。

「みなさん、ちょっと治療を始めるんだからまゆみさんの手と足を押えてよ」

私たちは幸ちゃんに従います。

「ぐっと押えて。はなしちゃ駄目よ」

その口調は、まるで命令です。

「どうするのよ」

まゆみさんが不安そうに、畳にホッペタをつけたまま諷くのに、幸ちゃんはニッコリと笑って突出してみせたもの。それはなんと、モグサと線香だったのです。

「イヤッ！ そんな……」

まゆみさんは驚いたことでしょうが、右手を押えていた私も驚きました。

「さあ、しっかり押えていてちょうだいよ。」

まゆみさん、とってもよく効くんだから、少しは辛抱するのよ」

といいながら、もがくまゆみさんの真赤なセーターを一气にまくり上げた幸ちゃんは、ブラジャーの留紐に区切られているだけの、フックラとした背中の肩寄りのところに、右膝をかけて敷いてしまったのです。

シミ一つないキレイな背肌。まゆみさんの

背中には本当に色白の艶々した、若さそのもので「売れっこ」になるわけだと思いました。

「よ、よしてヨッ！ ね、やめて……」

さかんに腕き出したまゆみさんですが、私たち五人の力には勝てるわけはありません。しかも、幸ちゃんは、半分、ウマ乗りみたいになっっているのですから。

小さく慄えるキレイな背中に、幸ちゃんの指が這って、それでもどうやらお灸を据えるカ所、つまり灸点というのでしょうか、背骨を中心に計っているらしいのでした。そして小豆ぐらいの大きさのモグサが据えられ、線香の火が移されました。

モグサは次々と四カ所で煙を立てはじめたのです。

私は、祖母がお灸を据えているので見たこととはありますが、こんなキレイな肌から立ち昇りだした煙には、思わず息をのむ、別な気持が働くのを知りました。

「アッ、アッ。ツーツ！」

まゆみさんの引き込まれるような悲鳴。見ると、モグサの周りの肌がホンノリと赤味を帯び、燃えつきたのでしょうか、立ちのぼっていた煙がフツと途切れたところでした。

そんな状態は、次々と四つのモグサに起こ

ってゆき、まゆみさんの背中が、強く押えられているのにも拘らず、グーッとうねりをみせます。

「クッククック」

という、まゆみさんの何ともいえない切なそうな悲鳴。さぞ熱いことでしょう、私はゾクリとするものを覚えました。でも、自分でも今だに分からないのですが、押えこんでいた両手の力をさらに強くし、しかも、そのまゆみさんの手首から少し上ったところを、いつのまにか膝で押えつけていたのでした。

「アッ、あつい！ よ、よしてッ！」

まゆみさんは、むちゃくちゃに暴れようとします。すごい力です。反射的に私も力を入れてしまうのでした。

幸ちゃんは、燃えつきたモグサを指先で払いました。だがどうでしょう、その後にすぐまた、丸めたモグサを据えつけようとするではありませんか、しかも、今度のはピーナツぐらいもある大きさなのです。

「や、やめてよッ」

まゆみさんは、涙声です。

「辛抱するの！ 胃の悪いのを治すんだから少々のはあたりまえよ」

幸ちゃんの言葉は冷酷にひびきます。

「イヤ、もうイ……ツツウ！」

まゆみさんの声が途中で悲鳴に変わりました。ピーナッツ大のモグサが、次々と燃えつき始めたらしいのでした。

「クッ、クッ……」

悲鳴は却って少し低くなり、その代わり暴れ方がモーレツさを強くしました。背中に乗りかかっている幸ちゃんは、もう少しでひっくり返るところでした。

全部のモグサが燃えきったのでしよう、まゆみさんの悲鳴が、荒い息遣いだけになり、ぐったりとノビたように力が抜けました。

でも、幸ちゃんは、さらに新しいモグサを並べ始めましたのでした。

「も、もう、カンベンしてよ」

まゆみさんは、泣き声で哀願の調子です。

「駄目、少なくとも三火ずつは据えないと効かないのよ」

幸ちゃんは、本当に胃の治療をしているつもりなのかしら？ と私は思ったものです。

「なおらなくてもいい」

涙声は、くぐもって、ハッキリしません。

「アーラ、人間は健康になるのが一種の義務なのよ。ましてスターは……」

幸ちゃんはヌケヌケとそんなことをいいな

がら、三度目のモグサの煙を立てさせ始めるのでした。

ついに、死にもの狂いともいうようなまゆみさんのモーレツな暴れ方が始まり、足を押えていたモデルさんの一人が蹴りとばされてしまいました。

グッタリと伏せたままノビてしまったまゆみさんを、私たちはとり囲んで見詰めています。

艶々していた背肌は汗を浮かべてギラギラ光っています。白いキメ細かさと対照的に、ホンノリと赤味を帯びた中に、無残な灸跡が黒い小さな玉でも貼りつけたように、四コが並んでいるのです。

私は、とんでもないことに加担してしまったものだ、と胸がしめつけられる思いになりました。この美しい犠牲者はただ、肌を大切にする女……というだけではありません。素肌を一種の資本とする、モデルスターなのです。

しかも、現在、第一線でひっぱりだこのファッションショーの花形なのです。

私はドキドキする気持で、そのフクヨカな背中をただ見詰めていました。するとどうしたことでしよう、無残とも、残酷とも、痛々

しいとも云いようのない白肌の灸跡が、なんだかとても魅力的なものに見えてきたのでした。私の異常な興奮がそんな錯覚を呼び起こしたのでしょうか……。

とつぜん、幸ちゃんが、びっくりするような笑い声を立て始めました。何かひきつたような、ヒステリックな笑い方でした。そしていきなり、まゆみさんの両腕に埋めるようにしている顔を、乱暴にも髪をつかんで引き上げて覗きこみ、冷ややかに云ったのです。

「お灸と一緒に、カンチョウすれば余計に効果があるのよ。したげようネ」

私はハッとになりました。これ以上いじめるなんて。……だが、どうしたことでしょう。驚いたことに、まゆみさんは拒否しようとしなかったのです。

○

それからほどなく、まゆみさんはクラブを辞めてゆきました。

私は今でも、あのお灸にもだえ、トイレに走り込んだまゆみさんの姿を思い出し、胸の痛みと、奇妙なトキメキをどうすることも出来ません。

——(終)——

創作

お

ん

な

人

柱

風流極道軒

(カット・野江三郎)



査定官赤井蔵次の皮肉たっぷり
の言葉に、架橋委員長の大橋
宗悦は、ハツとなって刈田出納
長と顔を見合わせた。白哲の四
辻県知事の顔にも動揺の色がな
がれる。

住民の宿願という事で巨大な
橋を架ける——この政治的計画をめぐっての
莫大な工費。その成否を左右する視察団に、
彼らは最後の望みをつないでいた。

(なにがなんでも、口説きおとしてみせる。
そうしなければ住民へ顔向けもできないし、
第一、明年に迫った選挙で敗北しなければなら

らぬ……)

四辻県知事を始め、彼に組する者たちは、
必死の思いでここ五日ほど、視察団を下へも
おかず接待してきたのである。それが、この
土壇場になって……

「お、お気に召しませぬか……」

刈田出納長が、蒼くなつて赤井の顔色をう
かがう。

「お気に召すものにもこの女、君たちが散々
あそんだ末のオフル、セコハン、お手付きず
み……ほんとうのおんなというものは、もっ
と初心な、羞恥心のあるものだ」

赤井の言葉をうけたのは、この地方のボス

「こないな、なにかにおくには、もったいねえく
らいの女だけど……やはり、ねえ、素人^{しろおと}で
なくっちゃあ」

的存在である中陣信頼であった。

「赤井さん、よくお判りですなあ。いや、おそれ入りました。さすが赤坂界限で、S、H、の、ア、ア、さんと言われているだけのことはありますな」

と、とりなすようにいい、中陣は、ジロリと刈田を睨んで

「刈田君、御希望をかなえてさしあげることじゃ、ほんとうのオナゴを。……ここ三日のうちにな」

視察団の日程はあますところ、あと三日あった。

「はい。そのように、きつとそのように取りはかれます。こ、こよいは、これにて、この当地、随一の芸者で、ご勘弁を」

刈田は、額の冷汗をふいた。

十二畳ほどの広間であった。

正面に舞台があり、中央に、赤井の指摘した玄人の女、美智がいた。

年の頃、二十七、八才。額の広い、鼻筋のよくとおった、眼のパッチリ大きい、なかなかの美女である。

勿論、裸であった。しかも、きびしく縛りあげられている。

二の腕に三巻きした黒い縄が、ふかぶかと

喰い込んで、左右の手首は背後に回り、白い丘のようにおおきな両乳房が、これまた黒い細紐で付根をくびられて、針さきでちょっとつづけば、乳液がほとばしり出るかと思われるほど張りきっている。

さらに無惨にも、両足首には、一尺四方の頑丈な木材の足枷、両膝に縄をまいて床から六、七寸の所で、天井から吊られていた。

「美智！ さあ、旦那衆に謝って、すなおに白状申し上げるんだな！ このうえまだ強情をはりやがると、もっともっと、みじめな目に合うぜ！」

青竹を持って美智を責めているのは、県の財界政界を牛耳る大政興業会社の社長大政有造が会長となっている政明会の乾分、長縄と岡引である。

二人にとっては、この土地きつての売れっ子姐さんのハダカ姿を拝めるだけで胸も躍ることなのである。その上、会長の命令で気随気尽にもてあそび、拷問する光榮をあたえられたのである。

（願ってもねえチャンスだぜ）

（やくざ冥加につきらあ、なあ、岡引）

二人は、こういう機会でもなければ、遠くから指を啜えて眺めているに過ぎなかった美

智姐さんを、さきほどから、もてあそびつけていたのである。

（これも、お金のせいだわ……一晩十万と云われれば、妾でなくったって女ならイヤとはいきれない……それに、相手は知事さんや大政さんたち、女にとって不足な相手じゃない……）

美智は、見ず知らずの町の兄ちゃんに、身体中をなで廻される気味悪さを耐えながら、観念していた。

「黒い花びら……」

赤井が、よろよるとたち上ると舞台にあらりこむ。

「ハッハッハッハ……始まりましたな、赤井さん」

と哄笑したのは、視察団の代表、企画部長青田文臣である。

赤井につづいて舞台に上ると長縄の手から青竹をとりその一端に、お手拭きを三枚重ねてその上をハンケチでしぼり、

「ほれさ」

と赤井に手渡した。ニタツと笑った赤井はその青竹を右手に持つと、

「姐さん、ボチボチ呻いてもらおうか。すこし我慢しなよ」

といい、

「おっとっと、肝腎なものを……」

と、料理皿から胡椒瓶をとり、蓋をとって美智の乳房の深い谷間にふりかけ、おおきなぐみのような乳首になすりつけ、甘ったるい女肌を賞でるかのように、掌に受けた胡椒の粉を全身にふりかけて行く。

ヒリヒリする痛みが、耐えられなくなり、美智子が唇を開いて喘ぐ。

「な、なにをなさいます！」

今まで、緊縛されたこと、拷問を受ける女のモデルになったことなど、いろいろと経験は豊富な美智姐さんであったが、こんなことは始めてであった。

次第に耐えられない疼痛がおそってくる。自分でも気付かぬうちに腰をゆすり、腹をくねらせ、乳房をふるわせている。

「さあて……と、いよいよ」

赤井は、青竹のさきをゆっくりと倒し、美智の慄える白肌をいたぶり始めた。

財政部長財部、建設部長岸尾を始め、四辻知事までが、息をのんで身をのり出し、美しく身悶えを始め、喘ぎ、呻きを洩らす、美智姐さんの責められ姿を、陶然とした表情で見つめている。

ただ、刈田と大橋だけは、まるで砂糖にた

かる蟻のように舞台にあがり込んでしまった男たちから離れて、何かひそひそと話し込んでいた。

「素人……難かしいなあ。美人でなくちゃあなるまいし」

「場所は、大政社長の別宅がいい。あそこなら、女を責める道具にはことかかぬ」

「要は、犠牲になる女……財政部に菊川とかいう係長がいる。女房は美人……」

「年は……」

「さあ、二十五、六ってとこだろう。こどもはない……」

「じゃあ菊川に当たりをつけてみるとして、どうだ、こうなったら、二人さし出して見ては。赤井と、青田……二人に一人ずつってことにせねば、不公平……」

舞台では、美智がもう、こらえようもなくなったように、すすりなき、甘ったるい鳴咽を洩らしつづけていた。

二

その翌日のことである。

初夏の太陽が、カアッと白堊の建物に照り

つけている。

財部部長の前で、菊川係長は呆然と佇んでいた。

女房を一晚、この計画のためにさし出せとズバリきり出されたのである。ワンマンとして辣腕らつわんのきこえ高い部長であった。極秘にしよう、このことを知っているのは知事始め高幹部五、六名だけ――。

「承知してくれよナア。恩にきるぜ。来年はきっと課長に抜擢しよう」

というのである。

それに、橋がかかれば住民の幸福に貢献することになる。一晚でいいから眼をつぶってくれと懇願する。

「人柱ですか」

という問いに、ムツとしながら、

「人柱か……あまりいい文句じゃないが、たしかにな。しかし君、生命には別条はない。

その上、相手は、お偉方。こんなことでお偉方とつながりができりゃあ、君の将来も洋々となろうというもの……」

なお、躊躇する菊川に、

「俺にそむくと、どんな事になるかわかっていような、君。まあ、奥さんとゆっくり相談してみるからだ。明日まで、待とう。明日の

午後二時まで……いいな」

財部は、荒々しい口調で云った。この部長に背いて、片田舎に転勤させられた例は、十指にあまっていた。

菊川は、うなだれながら部長室をよろけるようにして出た。同じ頃——。秘書部でも、部長の入舟修身が、部下の桜田に、同じことを要求していた。

「お断りいたします」

桜田は、断乎として答えた。

「とんでもないことです。たとえ、どのようなことがあろうとも、妻をさし出すわけには参りません。もし、どうしても仰言れば、辞めさせて頂きます」

蒼白い顔に朱を注いだ入舟は、

「君、当地住民の幸福をかえりみないというのかね。たかが一晩のことじゃあないか、公務員はね、私を捨てて公につくす心掛けがなぐっちゃあ……」

「じゃあ、部長。部長の奥さんをさし出されては」

桜田は、思わず叫ぶと、

「ともかく私はおことわりします」

といい捨てて部屋を出た。

後姿を見送った入舟は、ニヤリッと笑うと

受話器を取った。

「刈田さん、桜田はダメですよ。しかし女房の梨花子というのは絶品らしいですな。これ以外ないでしょう、なあに、あとのことは大政さんにまかせて、ひとつ、力づくで掠ってこさせましょうや。万一のときは、岡引か長縄が梨花子をかねて狙っていて、襲ったあげく売りどばした、たまたま、そのショーを我々が見たってことにすりゃあよいでしょう。そうきめますよ、刈田さん」

刈田の含み笑いが受話器から聞えてくる。

「大橋さんもここにいらっしゃるんだが、梨花子って女はたしかに赤井さんごのみの女らしいよ。赤井さんてのは相当なHらしいぜ。梨花子の写真がいま手元にあるんだが……よかろう。この女、掠らせろ。後始末はこちらがやる。なあに、こっちには中陣もついてるんだ、心配いらんよ、君」

満足そうに受話器をおろした入舟は、ポケットからメモをとり出すと、大政興業会社社長大政有造を電話口によび出し、至急、逢いたい旨を知らせた。

郊外の住宅街。五層六層のアパートが建ち並んでいる一角。3DKの一室で、菊川は妻の喜久子と額を寄せ合っていた。

寝静まった夜の空に半月がかかっている。もうよほど、菊川は酔っていた。

三流の私立大学出身の彼が課長になるには順調にいつても、あと十年はかかると思われる。しかし、おそらくは万年課長で停年を迎えることになる。月給も、他人には知られたくないほどの少額であった。

「あなた……やはり、おことわりして」

夫からきり出されたとき、信じられぬような顔付きだった喜久子は、やがて、それが現実のことだと知って仰天した。が……夫が酔った上では云え、百パーセント拒否していい、四分六分で迷っている、否、出世の好機と心のなかで思っているのではないかという気がしてきて、心が乱れる。

結婚して四年、こどももないせいもあってなにか、もの足りないものを、日々の生活に感じていた喜久子でもあった。

(ひとつ、アバンチュールでもしてみようかしら。フッフッフ……夫が、どんな顔をするか、みものだわ)

と、つい、二、三日前にも、人妻の浮気を

テーマにしたテレビをみながら、思ったこともあった。

「やはり、いやだわ。あなた以外の男の方の前で、裸になるなんて……」

裸という言葉を始め口にして、喜久子は胸がじーんとしてくる。

「裸にされるなんて、人身御供なんて、ぜったいイヤよ、妾！」

喜久子は、夫の膝にとりすがり、甘えるような眸で訴える。

「あなた……抱いて、抱いてよ！」

菊川がたまらなくなつて肩を引きよせる。

二人の激しい抱擁を、蒼白い月だけが眺めていた。

抱擁は、激しいものであったが、短かった。もそもそと妻を離れた菊川は再び、酒をあと始める。

「ねえ、ねえったら。……どうしましょう！あなた！」

とびかかるように、夫の胸に身を投げた喜久子が叫ぶ。菊川は、我知らず叫んでいた。

「た、たのむ。行ってくれ！たいしたことないじゃあないか。それにたった一晚、一日のことだ。生涯、一度の冒険、一夜限りの夢と思って！」

「そうよね、そうだわ、たった一日だけよねえ！妾、あなたのために犠牲になる、なるわよ。行くわ」

菊川は、喜久子をかき抱いた。

「上流社会じゃあ、夫婦交換を日常茶飯事のようにやってるといふ……喜久子、県のため住民のため、行ってくれ！」

菊川は財部部長が、自分に云った言葉を、今度は、自分が、妻に言っていることに気づいてはいなかった。

本当は、すべてが意気地のない自分の保身のためなのだ。ところがそれでは肩の荷が重くなる。罪の意識に苛まれる。そこで、すがりつき、ふりかざす大義名分が必要となる。県のため、住民のため……。

（まてよ。ひょっとすると……この妻も……今度の冒険を、公然の浮気のもりで楽しもうとしているのでは？）

菊川のどすぐろい酔いの底を、一抹の不安と無責任感が走った。

（ええい、どうとでもなりやがれ。僕は、課長になってみせらあ。管理手当が三万円もつかあ。それに業者との、つきあい。リベート……ちつとは、ましな暮しができらあ）

三たび、菊川は妻を抱いた。

財部に指示された時刻——。M駅の待合室で、菊川夫妻は、建設部長の岸尾に迎えられて車にのり込んだ。岸尾と中陣の間で、小さくなっている妻の姿が、バックミラーにうつっている。

菊川は、妻が、朝、風呂に入り、いつもより、念入りに化粧し、香水をふりかけていた姿を臉にうかべた。

（あなたはいらっしゃらない方が……妾、ひとりがいよ）

という妻を口説きおとして、同伴することにした菊川であった。妻が、数人の男たちに罵られているとき、ひとり居残っている苦痛よりも一緒にその場にいて監視していよう。

（いざというときのボディガードさ）と云ったものの、いざというときはどんな時なのか……。

（妾、丁度よい日なのよ）と妻が云った、丁度よい日とは？……。

すると、（いざという時……）とはどんなときなのだろう。

（妻は、そんなことまで考えている……）

菊川は、二日酔いの上に、さらに飲んだ酒の酔いに、身も心もまかせきっていた。

四

菊川は、ひとり、ぽつねんと坐っていた。

妻は、岸尾と中陣、それに落合部長と、二人の若い見知らぬ男にかこまれて、

「あなた……あなた！」

はじめは低く、次は高く叫ぶと、奥へと連れ去られて行った。

妻の愛用しているジャスミンの残り香を感じながら、菊川は小卓の上の徳利に手を伸ばす。

ここは、M駅から車で三十分、大政有造の別宅である。

まだ、陽は高く、午後三時前である。

菊川は、自棄^{やけ}っぱちになった気持で、やたらと盃を干していった。

一方――

妻の喜久子は、奥まった四畳半で、赤井の秘書愛川と青田の秘書鮎田の二人に、今からの行動を細かに聞かされていた。東京からやってきたこの若い二人の秘書は、この田舎町の見知らぬ人妻である喜久子に、自分から人身御供としてとび込んできた美しい女に、異常な興味を示しているらしい。

「とまあ、こういうことなんですが、……ほんとによいのですね、奥様」

と、鮎田が再び念を押した。

（もうここまでできた以上、いまさら逃げることもできないのだわ）

喜久子は、鮎田が、こともなげにさし出した極彩色の縛り画や、徳川時代の拷問を刻明に表現したデッサンを眺めながら、のこのこやってきたことへの後悔とも、未知のものへの期待ともつかぬ押えがたい興奮にわなないていた。胸のときめきが、鶏卵黄のお召の上の竜文名古屋帯にまで伝わってくる。

「震えていらっしやいますね、奥様」

愛川がからかうようにいいながら、喜久子の前にかがみ込み、

「じゃあ、始めますよ」

と呼鈴を押した。

「ま、待って！」

喜久子は叫んだが、何を待ってくれと頼むのか、自分にもわからなかった。

襖が、ひらいて、五十才前後の恰幅のいい男が二人、それに、刈田と大政の四人が、待ちかねたように入ってくると、鮎田が、

「御紹介します、これが、菊川典良氏の妻喜久子さん、当年二十六才」

つづけて、愛川が、

「喜久子さん。こちらが、赤井蔵次先生、こちらが青田文臣先生。さあ、御挨拶申し上げなさい」

六人の男にかこまれた喜久子は、鮎田から命令された言葉を忘れて、

「よ、よろしくお願いいたします」

と、辛うじて云った。

「駄目、駄目ですよ、奥さま。こまりますなあ、あれほど私たちがご説明したでしょう。やり直し！」

愛川の叱責に、喜久子は、震えながら、

「喜久子と申します。今宵一夜、赤井、青田両先生にお仕え申し上げます……」

（どのような……）

鮎田が、喜久子の耳元で、次に続けるべき言葉を囁く。

「どのような……ことでも、先生方のお気に召すことであれば、女に、……私にできますことならば、つとめさせて頂きます」

「ほほう、これは、嬉しいことを云ってくれ。じゃあ、奥さん、まず、着替えをしてもらいましょ。儂はね、いや、儂の祖先は、江戸町奉行の与力じゃったそうで、その血というわけでもあるまいが、女囚、女の罪人を責

めるのがたいそう好きでしてな。ほれ、これを……愛川、奥さまの着替えを手伝ってあげなさい……」

ぽいと手にした囚衣をほうり出すと、どっかとはかりに畳の上に坐り込む。あとの三人もこれに続いた。

酒と男の匂いに包まれて、喜久子はこの時始めて「しまった、くるのではなかった」と思った。

二人の秘書が、ほつれをとっている真新しい木綿縄、垢ずんだ囚衣。好色な眼をぎらぎらさせている男たちのなかで、喜久子は、もの足りないが、優しい夫の典良の顔を想いうかべた。

（一生で最大の失敗でした。妾、まちがったのよ、あなた！ 女の冒険など、夢みるだけで十分だったのよ。きては、やはりいけなかったのよ、妾……）

「あなた！ あなた……」

喜久子の唇から、思いがけない言葉がとび出したので、あわてたのは、愛川たち、

「奥さま。後悔なさっても、もう遅い！ おひとりで着替えなさらないのなら私達が」

二人が左右の腕をとらえる。顔をあげた喜久子の眸と、刈田の目が合った。そしてその

目は（ここまできてじたばた騒いでも何の役にたたないばかりか、御主人の将来も滅茶苦茶になりますぞ）と、威圧するように語っている。

「は、はい！」

思わず腰を浮かせた喜久子は、長い睫毛を伏せて瞳をとざし、二人の秘書に、力を抜いた身を任せた。

シュッ！ シュッ！ と、帯揚げが、帯が高麗打ちの帯締めが音を立てて解かれ、愛川の手で、鶯黄の単衣が、背後から、双肌脱ぎに腰のあたりまでひきさげられる。

「さあ、あとはおひとりで、なさるでしょうな。それとも私達が？」

愛川が喜久子の耳元でささやく。

「長襦袢をどうするのかい、奥さん」

青田の声がする。その青田も、そして赤井も、どうやら、喜久子の美しさに満足しているらしい。——刈田は、ほうっと安堵の胸をなでおろす。

「どうなさる！ 奥さま！」

鮎田の強い声とともに、喜久子が、しずかにたち上った。単衣お召は、畳に残った。その黄色い大輪の花弁のなかで、田之助襟の長襦袢いちまいで喜久子は立つ。真紅の腰紐が

純白の綸子と、くっきりした対照を見せて、人妻の成熟した女の香りが、ほんのりと漂い始める。

「早くしなさい！」

鮎田が、囚衣を持って背後に近寄る。

「はい！」

喜久子は、いよいよ、その時が、近づいたことを知ると、ひっそりと両手の指を腰紐の結び目にあてた。

誰かが、ゴクンと唾をのみ込む。

紐が、ハラリと、喜久子の足元におちてトグロをまき、愛川が優しい手付きで、前から喜久子の長襦袢を後へと、卵の皮を剥ぐようにむきとっていった。

豊かなし、みひとつない乳房であった。

「アッ！」

と、胸乳をかかえてかがみ込む。フワッと鮎田が、その白い肩に囚衣をかぶせる。愛川と二人で、立て膝して蹲る喜久子の前後から

囚衣をきせ、前を合わせ、紐を結び、さらに木綿縄で、手際よく高手小手に縛り上げていった。

吐息が、二つ、三つ、起こる。

「お立ちなさい！」

愛川の言葉で、うなだれたまま、部屋の外

へ出る。あとに従う男たち。と、うす暗い廊下の曲り角、大きな鏡の前で、縄尻をひいた愛川は、

「奥さん、よく自分の姿を眺めておくことですな、今度、ここを通るときは、おそらくは、まともにみる力も残っちゃあいないでしょう」

喜久子は、美しい瞳を思わず開いた。浅ましくも女囚姿となり、縛りあげられている自分の姿に息をのんだ。が……自分の肩越しに冷たく淫らな笑いをうかべている赤井と鏡をとおして視線が合うと、思わず、

「いいのです。見なくっても……さあ、お仕置場につれていって御存分に賜ってくださいな。もう二十六のおばあちゃまでですけど」

と、微笑みをうかべて見たのだった。

五

大政有造の別邸には、宏壮な庭がある。その一隅に、十米はあろう高い塀にかこまれた一劃があり、その周囲を、さらに木立ちが、かこんでいた。

「こいつはすごい！ 立派、立派！」

赤井は、大声をあげて喜んでいる。

「お気に召してなによりです。私の曾祖父とこののが変わりものでして、こんなものを建ててよりましてな……」

「今も使っているのかい」

「はあ、ちよいちよい」

「女は、すると、あの女だな」

「あの女とは？ ああ、あの美智ですか。あの女も、たしか二、三度」

（しまった！）とあわてて口を押える大政をからかうように、赤井が、

「ものよい、あの美智とかいう女が、君たちのつかい古したものであったことは、もうよい。こいつが、この素人の人妻が、ここで責められる。おい、刈田君、よい趣向じゃ、気に入ったぜ」

赤井の賞讃する建物は、江戸時代の町奉行のお白洲と牢と、拷問部屋を、そっくりと再現したものであった。

「三度ばかり、映画のロケにはるばるやってこられたこともありますよ」

大政は、満更でもないらしい。

お白洲を廻り、隣接する牢に足を踏み入れた赤井は、再び、喜びの声をあげた。

うすぐらい牢のひとつに、真白く輝く女体を発見したのである。

百奴蠟燭が十本……そのなかで、X字型に組み合わされた青竹に、両手両足を磔けられているのは、美智であった。

大政から渡された鍵で、錠を外して中に入った赤井は、

「コンニチワ、美智……ご気分どう」

軽口をたたきながら、肌をなでる。人並み外れて大きなその乳房が、ぶるんぶるんと赤井の掌の上でゆれる。

「フッフッフッフ」

赤井のたまりかねた含み笑い。

「素人はうぶの味……玄人にはまたそれなりの捨てがたい味……」

赤井は、次の大いなる楽しみを待ちながら小手調べのように、美智を呻かす。

「先生。準備がととのいました」

入ってきたのは愛川である。

「よし、よし」

赤井は、美智のあごをすくい上げ、

「あとでな、あとで責めて責めて、責めろしてやるからな。女をこゝろすのは楽しさ」と、胸元に、ガブツと噛みつき、齒型をのこすと牢外へ出て、

「牢番は、あなたの役目、傷つけない限りこの女、どのようにでもするといひ」

赤井は、大政に付き添っていた若い男に云い捨てると、うす暗い廊下を、お白洲へと足を運ぶ。

方十間のお白洲——。

そこには、喜久子がいた。

囚衣に、高手小手……。縄尻をとっているのは鮎田である。

映画やテレビでよく見る光景であった。

違っているのは、奉行である赤井が、

「この女囚、素っ裸にせい！」

と言ったことである。女囚が、裸にされる例は、よほどのことでない限り、あり得ないことである。

「早くせい！」

赤井は、いらだたしげに叫んだ。

「ハッ！」

愛川が、鮎田と目を合わせて、喜久子を縛りあげた縄をいったん解いていく。

「立ちませい！」

愛川の口調も、時代めいてくる。

縄の痛みをなでるかのように、両腕を交錯させながら喜久子がたち上る。

(スッパダカにされます——と申し上げなさい)——鮎田に、耳もとで囁かれた喜久子の顔に、ポオーッと朱がさす。

「でも……妾……」

「でももくそもねえな。どうせ、奥さん、裸にされるのは覚悟の上だろ」

そういいながら鮎田が、前から、囚衣の荒縄をとく。とられまいとあらがう喜久子の姿が、初夏の午後の日をあびてきらめく。

愛川が加わり、青田と大橋が、たち上る。

四人の男のまんなかで、喜久子は再び蹲まったが、そのときにはもう囚衣はなかった。

紅梅色の湯文字が、白い砂利石にあやしく映え、すっかりかためられた両腋が慄える。

「多情だな、この女」

青田が、背後から腋腹をなでる。

「キャアッ！ な、なにをなさいます！」

思わずうしろにはねた右肘を愛川ががっちりと捉えると、大橋といっしょになって、右手首に、赤い縄を二巻き、

「アッ……アッ！ アレッ！」

激しい息づかいのなかで、鮎田が、左手首をねじ曲げると、喜久子の悲鳴を無視して背後に回し、

「おっとっと……暴れるだけ痛い目に遭いますよ、奥さん」

と、両手首を重ねて、ギリッ、ギリッと三巻きして、ギュッと締めあげる。

その瞬間——。

喜久子の胸に、諦めの想いが閃く。

(本当に、もう、妾、どうにもならないのだわ……)

愛川の手がグウッと喜久子の左肩を押えると、さらけ出された匂うように豊かな乳房の上に、ザラザラした縄が走り、喜久子の目には見るこのできない背後で結び合わされ、三度び四度び、同じ動作が繰り返された。

「フッフッフ……」

青田が、縛りあげられた喜久子の縄目に、指を、強く、さし込みながら含み笑う。

「こりゃあ、何とも云えぬ役得……フッフッフ財部さん。よい女を世話してくれました、感謝しますぜ。どうです、御一しょに」

この一言を待ちかねていたように、お白洲の隅で女囚の親族のように居並んでいた、いわゆるお偉方たちが、喜久子のまわりをとりかこむ。

建設部長の岸尾にしても人事部長の落合にしても共済部長の花山にしても、このチャンスをもむざむざ見逃す男たちではなかった。単なる女ではないのだ、同じ庁舎につとめる下役の女房、かねて酒席で、美人と噂されていた菊川の手生けの花——その女が、今、目の

前、一米のところで悶えている。

「岸尾です、菊川の奥さん」

岸尾は、数度、面識のあるのを幸いに、喜久子のまん前にしゃがみ込むと、ゴクンと唾をのみこむ。

「岸、岸尾さ、ん……妾、妾、こんなことになっちまって、……は、はずかしい！ 見、見ないで、頂戴」

「いやあ、噂どおりの美しさ」

あとは、もう、無性に、喜久子の肩から胸をなで廻す。

「やめい！」

町奉行よろしく赤井が叫んだ。

「素っ裸と云ったはずだぜ！ 愛川！ まだいちまい、残っておろう！」

「は、はい！」

鮎田に目配せした愛川は、縄尻をひく。男たちが退る。

「申し上げるのだ、早く。先刻教えたとおりに、早く！ 奥さん」

愛川の言葉を背にうけた喜久子は、数人の男たちのなかで、ただひとりの女なのかわ、しかも、みなが妾を見ている——と、何か、ほこらし気な、始めて舞台にたった女優のような気持で、教えられた言葉を述べた。

「妾は、喜久子、菊川喜久子でございます。」

菊川典良の妻、二十六歳。もうこのように惨めな姿を、皆さま方のお目にかけました以上は、どのようなお仕置でも謹しんでお受けいたします。どうか随分に、賜り、拷問なさって楽しんで下さいませ」

「湯文字もとるか？」

正面の赤井が問う。

「ハイ。……どうぞ、妾のお湯文字をどなたさまでもお取りになって下さいませ。妾は生まれたままの裸、スッパダカになって皆さま方に、責めてもらいたいと存じます」

「奥さん、ほんとうにいいのだね。ここからは念のために、後日の証拠として録音テープにとらせてもらうよ。私たちが今からどんなことをしても、すべては奥さんと合意の上。決して強制したものでないということを、奥さんの口からはっきりさせて貰うよ」

赤井の言葉尻をとって、財部が、

「菊川の奥さん、いいんだね……」

「ハイ」

喜久子は、はっきりと答えた。そして、愛川の廻し始めたテープレコーダーに、
「後日の証拠のために、はっきりと申し上げます。妾は、強制されてはおりません。妾か

ら、すすんで、妾の希望で、皆さま方にすべてを、お任せするのでございます。どうか、ご存分になさって下さいませ」

と吹き込んだのであった。

「いいか、愛川、奥さまのお言葉は、しっかりと吹きこんでおくのだ」

赤井は、そういうながらお白洲におりてくると、

「奥さま。そのお湯文字は誰にとって貰いなさる」

手は、早くも、紅梅色の湯文字の紐に触れていた。

「赤、赤井さまに……」

もろに見つめられながら喜久子は云う。

「よかろう……じゃあ、約束のキス」

赤井の唇が、激しく喜久子の口をおおうとキスがつけられる。

「ウ……ウウウ」

喜久子の身体にまだ経験したことのない疼きが走る。

赤井は、それを見すかしたように、

「ハッハッハ……愛川、縄をおとき申し上げる。もう、この奥さま、ひとりで脱ぎになるさ。自分で湯文字を脱ぐってさ」

愛川と鮎田が、すばやい動作で、命令を守

る。縄目のあとをクッキリとのこした左の腕を軽く撫でた喜久子の右手は、自ら、湯文字の結び目にかかっていた。テープレコーダーが廻り始める。

「妾は、ひとりで、自分の意志で湯文字を、と、とります……決して、とられるのではありません」

信じがたい女の豹変と云うべきかも知れない。しかし、女は、自分の肉体を誇示したいという本能を誰しも持っているものであり、このような立場に立てば、誰しも、喜久子と同じことを始めるのではないだろうか。

つまり、喜久子は、再び、ふらふらと寄りたかってきた六人の男たちにかこまれて、自ら、湯文字の結び目を解き、紅梅色の浜ちりめんが、豊かな腰から太ももへとずりおちるにまかせたのであった。

「縛りあげい！ スッパダカで縛りあげい！ 菱縄じゃ、菱縄縛りじゃ！」

赤井は、うずくまって身をふるわせている喜久子に、息を吐きかけながら叫んだ。

「ワッハッハッ……。人妻が、しろ、うとの人妻が、素っ裸で縛りあげられる……。ワッハッハ」

愛川と鮎田は、お白洲の白い砂利の上に行

立する喜久子を、前後からはさみながら、ひしひしと菱縄をかけていく。

「歩きませえ！ 拷問部屋へ！」

愛川が縄尻で、白く輝く、喜久子の尻を打って命令した。身をかがめることも許されぬ緊縛の身で、喜久子はよろよろと歩く。

前に回った財部が、

「奥さん、お顔からは想像もできない、すばらしい肉体美ですなあ」

財部が撫でる。落合が撫でる。伏せていた眼が、二度、三度、自宅に訪れたことのある岸尾の目とぶつかった喜久子は、

「岸……尾さん。……夫は、夫の典良は、どこで、なにをしています？」

答えは、赤井から返ってきた。

「ご主人は、拷問部屋で最愛の奥さまのくるのお待ちかね。……ワッハハハ」

「すると、やはり、やはり！ 夫の前で？」

「おイヤかね！」

「イヤ！ イヤです！」

といいながら、喜久子は、六人の男たちに前後左右をとりかこまれて、責め場へと歩いていく。

その後姿を、夕陽が、あかあかと照らし出していた。

六

喜久子が、お白洲から夫の目のまえで責められるべく拷問部屋へと向かっていた頃、秘書部に勤務する桜田節雄の新妻梨花子は生花のお稽古の帰り途、息せききって駆けよってきた若い二人の男に、

「ご主人が、あなたのご主人が交通事故におあいになって」

と告げられ、疑う余地もなく車に乗った。

「フッフッフッ、奥さん。女をかつ掠うてのは、簡単なことですな」

バックミラー越しに運転席で笑ったのは、長縄であった。

「どうせ、今夜は、十数人の男たちにいたぶられる女よ。少しくらい触らせて貰ったってバチは当たるめいて」

岡引が、呆然とする梨花子の薄お召の膝を割ろうとする。

梨花子の悲鳴も、疾走する車の外まではとどかず、朱珍の帯もゆるむほど、からかわれつづけて、着いた所は、大政有造の別邸であった。

縦しぼ薄絹の自分の腰紐で、しなやかな手

首をうしろで縛られ、うす汚れた手拭いで猿ぐつわをかまされ、目かくしまでされて、二人にかつがれるように梨花子は、高い塀の木戸を潜って、お白洲をよこぎり、じめじめした廊下を抜けて、四寸角の格子もおぞましい牢の内に投げ入れられた。

なにも見えず声もだせず、全感覚を集中させている耳に、いくつかの足音がきこえ、
「絶品じゃ、この土地には、儂好みの女がゴマンといるらしいな……」

「お気に召してよろしうございました。では私どもは御遠慮申します。御存分に……いいな、長縄、たつぷりとおのぞみを果たしてさしあげな。それに、お写真を。奥さまのお身体のみずみまで刻明に、おとり申し上げること……」

猿ぐつわだけを取って、二、三人の足音が消えていき、牢内に入ってくる男の臭い。

「な、なにをなさいます。妾は、決してこのようなめに合う女では……アレッ！ な、なにをなさいますっ！」

男の手が、江戸紫の薄お召の襟を、ガバツと、長襦袢もろとも脱ぎとってしまふ。

全く思いがけぬ襲撃であった。

「キャアッ！ だれか、だれか、助けて！」

全身で抵抗するのを楽しむように数本の手がまたたく間に、梨花子を湯文字いちまいに剥ぎあげてしまった。お召と長襦袢が、彼女の背後で縛られた両手に支えられて、妖しいいろどりをそえている。

息をはずませた若い男の声が、
「女をムクのは、簡単なものよ」

別の声が、

「いよお。さすが、社長たちが眼づけしただけあってよう、この肌、この匂い……たまらねえや。さあて、先生方、次は、どう料理しやしょう」

「ここに縛りつけるんだ！」

これまた上ずった声で、赤井が叫んだ。

小さな一尺くらいの脚立つがひとつ。どう縛りつけるのだろうと長縄たちが迷っている
と、愛川が、

「この女は、最初から色責め」

「やっちまうんですけえ！」

「ヨッカマルという奴さ」

「へえ、よくあつしらの言葉をご存知で」

「無駄な遊びはしてねえよ。さあ、両手をつかり、暴れやがるから注意しな」

赤井と愛川が、右足を、青田と鮎田が左足を押え、脚立の上に、仰向けに腰をおろさせ

ると、両手両足首に四本の麻縄をまきつけ、牢の四方の隅に固定する。無惨な「大」の字型であった。夫以外に、いや夫にさえ見られることが恥かしくてたまらぬのに……。

「や、やめてくださいよう！」

梨花子は、絶叫する。

「なんで、このようなことを！ や、やめてください！ 帰して、家に帰して！」

「あばれるだけ疲れますよ、奥さま。それにしても、無法を働く男の顔が見えなくちゃあお可哀そうですな」

青田が、目かくしを取る。

「キャア！ あ、あなた方はいったい、ど、どこのおかた！」

「どこのお方もくそもあるけえ。俺たちやお前さんにぞっこんだったってわけよ。さあ先生方、おさきにどうぞ。あつし等はそれとで」

「ハッハッハ……儂等は抱かねえよ。お前さんたちがどんなにするか、とつくり見物させて頂くよ」

「ほ、ほんとですかい！」

とびあがった岡引は、恐怖におののいている梨花子の傍へにじり寄る。

「さあ、やりな。カメラは、儂等にまかせ

ろってこと」

赤井は、梨花子の肌をなですりながら、ニヤニヤしていう。

長縄が眼を血走らせて、ゴクンと唾をのみくだす音をさせた。

壁ひとつへだてた

政たちにいたぶられ

いた。夕陽をう

けて、ここに連行された喜久子は先ず、磔柱に架けられたのである。男囚用の柱に荒縄で縛りつけられた裸身にカメラのシャッターが幾十回となくきられ、眩いばかりのフラッシュが交錯した。

そして、そこへ、夫が、つれ込まれてきたのである。

夫の見ているまえで、赤井たちは、喜久子を責めた。

午後の六時になって梨花子が連れ込まれると、赤井たちは姿を消し、いま、あぐら縛りにされている喜久子のまわりをとり囲んでいるのは、刈田、大橋、財部を始め夫の上役たちであった。

夫の典良もそこにいた。壁の鉄輪に両手を吊られて、猿ぐつわをかまされた顔の血走った目だけがギラギラと燃えている。

「納得すくだったね、喜久ちゃん」

財部たちは、奥さまとは、もう呼ばなかった。なかには、よび捨てにする者もいた。

「赤井先生たちは、あちらでお楽しみ。私たちは、私なりに、楽しみをつづけさせて頂うぜ」

財部と落合は、視察団への響応という本来の目的を逸脱してもう、この下役の妻を、責めることに熱中していた。

何をしても犯罪にはならないのだ。納得すみなのである。

牢のまん中には、支那料理の回転テーブルが持ち込まれていた。その料理皿をのせる場所に、二人は、喜久子をかつきあげると、男たちが周囲に坐る。酒と肴が用意されているほか、揚げものの料理に使うながい箸が、男たちに配られる。

「こいつは面白えや……」

大政は、中陣と盃をあげながら、その箸で喜久子を、鯉のカラ揚げでもつつき合う時のように、好き勝手にいたぶり始める。

「先生方、こっちにも廻して下さいよ」

岸尾が、くるりつと、円卓を半回転させると、喜久子の真正面をとらえ、交差された足首の縄目をまさぐり、足の裏を鷲鳥の羽で、

なではじめる。

「こいつもふりかけましょうや、赤井先生の直伝でしょう」

蒼白い顔で入舟秘書部長がいうと、胡椒の小瓶をとりあげ、蓋をとり、ぽんぽんと、左手の指先にうけて、ニタリと下品な笑いかたをする。さすが、覚悟していたとは云え、喜久子は、たまったものではなかった。

「ひ、ひどい。……ひどいことを、なさいます……わ、ねえ」

ひとことひとこと区切りながら、耐えきれぬように熱い息といっしょに叫ぶ。

「奥さん、さっき言ったことを、赤井先生たちにお約束したことを、もう一度、私たちに言っでござらん。ねえ、喜久ちゃん」

入舟が、ごくんと唾をのみ込む。

「イヤ！ イヤですわ。妾、人柱のつもりなの。妾の身体で、橋がかかるなら………自分を犠牲にしてやってきたのです。……ところが、これでは。……皆さま方にこのような目に合わされる理由は、ございませんわ」

「赤井先生たちなら、いいというのかね」

「そう、………そうですわ。この人達の幸福のために」

「ハッハッハ、奥さん。それは、うそでしょ

う。好きでやってきた。こうされるのが楽しみでやってきた。ほんとはそうなんでしょう
 どうだね、菊川君」

吊られている菊川は、もう、ぐったりとなり、猿ぐつわのなかの眼だけが、あかく血走っていた。

「さあ、奥さん。旦那さまもご同席の上は誰に遠慮することもないでしょう。仰言いよ。云うのだ、喜久子！」

財部が、白い二の腕に深く喰い入っている縄目の間の、肉感的な小さな肌の山にライターをちかづけながら、命じる。

「火をつけますよ、奥さん。……玉の肌がだいなしですよ」

財部は、カチッとライターに焰をともし、恐怖の色を一瞬、うかべた喜久子は、

「ひ、ひどい！」

「ひどいことはないですよ。もう、奥さんはこのままではすまされなくなっている。さあどうして欲しいのか、はっきりと云うのです！」

「お、おゆるし……を」

喜久子は悲鳴をあげたが、その声には、なまめいた誘うような風情があり、

「アッ、アウ……ア、お、やめになって」

細々と、訴えたのち、

「云、云います！ 云いますってば！ キヤア、ウッ……クックッ……ウウウ……」

咽喉もとからこみ上げてくる熱い息を吐き出し、

「わ、妾は、これからずうっと、いつまでも皆さまの女囚として、ここで、このように賜られとうございます。今夜のこのうれしさはいままで味わったことのない悦楽でございます。どうか、いついつまでも妾をお見捨てなく弄んでくださいますように……。これを機会に、妾は、みなさま方に、この身を捧げさせて頂きます。どうか、存分に……」

ためらうことなく、教えられたとおりの言葉、朱唇から吐き出した喜久子は、顔をふり乱して呻きつづける。

汗が、額から頬にかけて、滲みでる。

「よおし、よし。可愛い奥さんだ。じゃあ、ご希望どおりにしてあげような、御主人の見える前で」

中陣は、刈田に掬がされると、地方ボスの貫録を見せながらたち上り、

「横に、そう、仰向けになって頂きなさい、奥さまにな」

まわりから伸びた八本の手が絶え間なく動

いて、縄をとかれた喜久子は乳房をおおいかくすひまもなく、卓の上に押し倒される。支那料理の円卓の一段高い円の上に腰を押しあてられて、右手を大橋、左手を財部、右足を入舟、左足を落合に押えられ、仰向けに据えられる。

「暴れると身体が持ちませんぜ、奥さん」
 白い齒をかみ合わせ小刻みにふるえている喜久子の耳元で、財部が囁く。

「眼をあけて、瞳をひらいて、よく見るのです、こちらを！」

喜久子が目を開くのと同時に、中陣の手が胸の小山を襲った。乳房に喰いこむ指。

「ウッ！ ウウ！ ウッ！」

呻きを洩らす喜久子に、猶も、財部が、

「よおく目を開いて！ 開けというのに！」
 喜久子が、やっこの思いであけた目が、夫の典良と、もろにぶつかる。

「アレッ！ あ、あなたあ！」

羞恥の極みに達した喜久子が、暴れまわるのを四人の男が、必死で、押え込む。

「奥さま！」

中陣と入舟と、岸尾と、三人の男のあからんだ顔が、喜久子の顔のすぐ上にあった。酒ともタバコとも老醜とも云えぬ臭いが、喜久

子の鼻をつく。

「接吻といこうぜ」

喜久子の喘ぎつづけている唇を見下ろして財部がいう。

「噛まれやあしないか！」

と、大橋。

「噛みゃあしねえな、喜久子！」

喜久子が、パツチリと瞳をあける。それは肯定をあきらかに示していた。

「よっしゃ！ じゃあ、お言葉に甘えて」

大橋の酒臭い息が喜久子の息を止める。

盃をあげながら大政が刈田に話しかける。

「それにしてもいい女だ、こいつは近年稀れにみる女よ。大柄な身体、ブリブリした肉付き、この被虐性ってえやつ。……こりゃあ今夜ひと晩じゃあ、惜しいようなもんだぜ」

「それにしても、御主人さまのお気持ちはいったいどんなものだろう。いかがかな、菊川係長！」

二人は、もう虚脱したように、最愛の妻を見おろしている菊川典良を、からかうように云った。

「まあ、来年は課長、二年後には部長さ。我慢するんだな。美人の女房を持ったのが不運

だと思って……」

「不運かな、幸運とも云えるぜ、君」

中陣の言葉に、まっ赤になってうなだれる典良。

梨花子を責めている赤井たちは、まだ、この牢に帰ってはこなかった。

七

喜久子、梨花子それに美智の三人が、顔を合わせて、江戸の伝馬町の牢屋のいわゆる外鞘——牢と牢との間の広間にひきすえられたときには、もう夜も十一時を過ぎていた。

お好みのタイプである梨花子をもてあそびつくした赤井は、満ち足りた風情で、床几によつて、町奉行よろしく全裸の三人の女囚を酒盃を傾けながら眺めていた。

「先生、今度は？」

愛川の問いに、

「女同志の格闘をやらせてみるさ」

「ハイッ！ わかりました、鮎田君」

愛川は、もうくたくたになって縛られたまま、うつぶしている喜久子を抱き起こす。

「誰……なの……まあ、愛川さん。妾、もうだめよ」

「なにを仰言る。奥さんのお強さは、皆さんにきかせて頂いた。これにこちらの桜田夫人もなかなかのもの」

唇をかみしめ恨みのこもった眼差しで睨みつける梨花子を、長縄たちに手伝わせて二人の足をがっちと組み合わせる。顔を見合わせる喜久子と梨花子、面識はなかった。ましてどのような職業の女なのか、美智も含めて互いに知らない。

「さあさあ、梨花子、喜久子、相撲だぜ」

大政以下刈田・財部たちS県の関係者は、喜久子はともかく納得してくだが、誘拐してきた梨花子の目をはばかり、思い思いの覆面や仮面をつけ、酒をのみながら眺めている。両手を背後に縛られたままの二人のうしろから愛川と鮎田が、背中を押し、腰を押す。

もうされるがままの二人に、ネチネチと責め言葉がとぶ。

「虫も殺さぬ可愛い面をしてよう、他人に縛られて喜ぶなんてよ、いってえ、なんでえ。亭主もちのくせしやがってよ」

喜久子は、齒を喰いしばりながら雑言をきいていた。

「けだものめ！ 雌！ 牝犬め！」

長縄の嘲笑に、遂に喜久子は我慢しきれず

にか、どうか……敢然と挑戦する。

「妾が、めすなら、あ、あなたたちは何よ。

けだもの以下のげすじゃあないの」

しかも、ペエッと、唾を長縄の顔に吐きつけたのである。

「や、やりやがったな！ この阿魔！ 取組みは、あと廻しだ！」

長縄は岡引きと二人で、喜久子をひき立てると、片隅からひきだしてきた三角木馬の上に抱きあげる。

「キヤアッ！」

いままでより以上のけたたましい悲鳴が喜久子の唇からほとばしる。

「なにが、キヤアッ！ だ。男の顔に唾を吐きやがった報いよ。俺は、紳士じゃあねえ、誘拐、殺人、なんでもやるうってえお兄哥さんよ。色責めってわけにゃいかねえぜ」

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

長縄は、二回、三回、喜久子の両足を下からひっぱる。

「や、やめてッ。……イ、イタイ！」

「あたりめえよッ。俺は紳士じゃねえといったはずだぜ」

「そ、そんな……クックウッ！」

なおも責めあげようとする長縄を制して

「もうやめなよ」

と云ったのは熊の仮面をかぶっている大政有造であった。

「傷つけちゃあもってえねえ。手荒なことはするんじゃあない。東京のお客人の前だぜ」

「へえ！」

と、長縄は返事をして首をすくめた。

女たちが、それぞれの家へ、おくり返されたのは、翌日の正午すぎであった。

十万円もらった美智は、その夜のことを勿論、誰にも洩らさなかった。

桜田節雄は、結婚以来始めて家を無断であけた妻から二日後、事情をうちあけられ、激怒し、警察署に恥をしので訴えてだが、長縄と岡引はすでに姿をくらましており、赤井たち視察団を疑ってみても、何ひとつ証拠がなく、第一、連れ込まれた所がどこであるか

判然としないだけでなく、男達の多くが仮面をつけていたのではどうしようもなかった。

それでも追求をつづけようとした桜田であったが、その手続きの面倒さと、たんに誘拐され、身体にさわられただけで貞操は守りとおしたという梨花子の言葉を信じて取り止めてしまった。

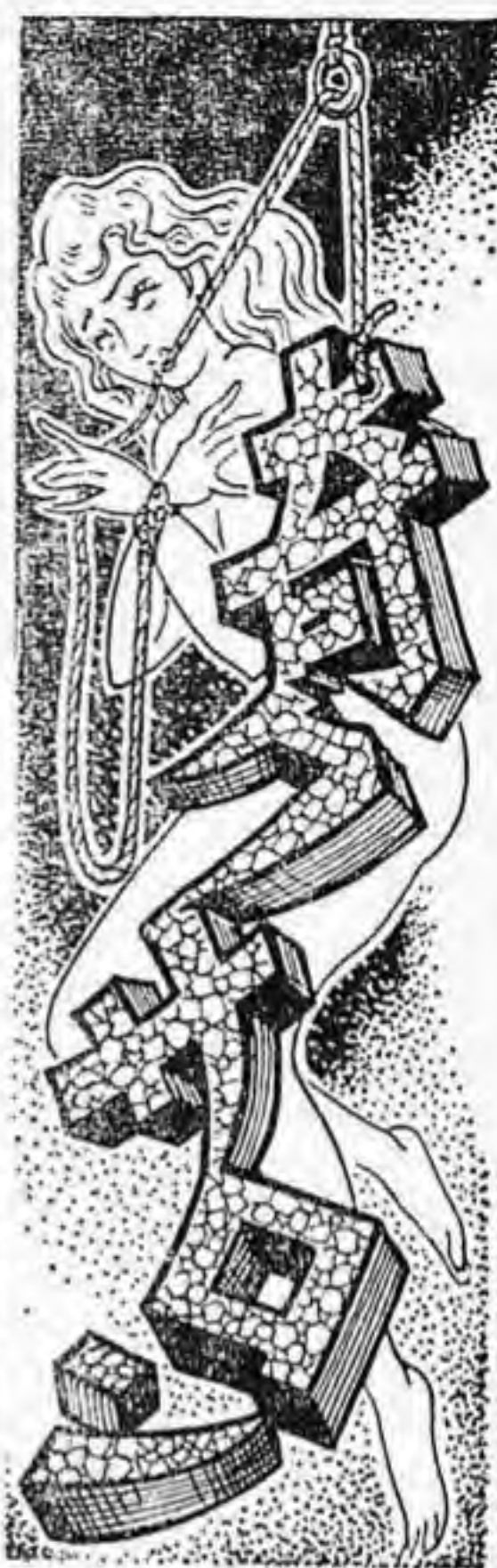
一方、菊川夫婦は、二日間、一步も外へ出ずに抱き合っていたが、三日目の朝、喜久子夫人は、夫に許しを請い、

「でも、あなた。……妾、たのしかったような気もするの……」

と、微妙なことをいい、夫を挑発するのであった。

喜久子たちのおんな人柱のききめがあったのであろうか、架橋の件は必要事としてとり扱われ、近日、実験工事が施工されることとなり、大政有造の会社が真先きに活躍を始めている。

そして喜久子夫人は、今夜も大政を筆頭に刈田、財部、大橋たちに招かれて、美しい被縛体を衆目にさらし、他人に眺められるという女として最高の快樂に、のたうっているのではないだろうか。



アブの追体験

若松一郎

私は結婚後三年になる三十三才のサラリーマンです。

私が最も関心を抱くのは縛りと性具です。幸いなことに妻も縛りに多少の理解を示しています。もともと縛りも性具も私自身のためというより妻を喜ばすために使っているのだと思います。私が最も昂まるのは、妻が痴態を示し悦びの声を挙げるのを見ることです。『視姦』といってよいでしょう。妻の狂態を見るために次々といろいろな刺戟を工夫しています。鏡の前で縛りあげてパイプを使ったり、乳液やとろ汁、時には『花と蛇』のように果物を使ったりします。恥かしい言葉を無理に言わせ、身も世もあらぬ痴態にのたうち回らせてこそ、私も又頂上に達するのです。

幸か不幸か、妻もこうした汚辱を好み、あられもない痴態をさらして見せることが大きな刺戟となってきたようです。私は専ら大鏡を用いています。鏡を写真に置きかえると、そのまま辻村隆氏のカメラハントに似ています。カメラハントの熱烈な愛読者がハント流の愛の形をとっているのかもしれない。

私の用いる性具といっても市販のパイプレーター以外は殆ど自作して用いています。材料としてはカンピョウ（肥後ずいきの代用として使っている）輪ゴム、コンドーム、コンニャク等、八百屋や文房具店薬局で簡単に手に入るものばかりです。カンピョウは肥後ずいきのように四、五分水に浸して使います。

長さは三十センチ位あれば十分に巾広いものは細くタテに切ります。が四十円も買えば十分です。妻も最初はザラザラするなどと言っていましたが、この頃では、ネあれ使って——という位になりました。異物感と視覚的に異様な感じが昂奮させるらしいです。

コンドームを輪切りにした物や輪ゴムも使いようにしては有効な働きをするものです。しかし、何といっても、最も刺戟的なのはパイプレーターでしょう。

乳首から型通りに次第に下降して太いパイプの震動を十分に伝えブルンブルンという軽い音が快調に発すると、妻の口からも呻き声が洩れだします。

妻の身体がうねりだした頃、開股のまま上った肢を三面鏡の台の上にのせます。箒の柄を鏡の脚に固定すると高さも丁度適当です。

「ほら見ろよ、鏡にうつってる」三面鏡の方を向かせますと鏡の中の姿態を見た妻は、「いや、いやッ」と、すっかりうるんだ声で叫んでいます。

これが序曲で、動物的な姿態のまま縛られパイプ責めの喜悅にあえいで狂いまわってゆきます。これが髪を短く切って体のほ

そりとした、女子高生生の倅さえ持っていたあの可憐な妻なのかと私の淫虐の血は燃えさかります。

結婚して足掛け三年、二十二才になる妻はまだ子供を産んでいませんので、身体も気持もまだまだ娘のようなのですが、私の飼育によって、あの方面だけは結婚十年選手並のベテラン振りを発揮するのです。最近になって私が開発したのはワギナパイプに代ってアヌパイプなのです。これは勿論自作で古万年筆を使って私が接着剤で作った物なのです。

私は妻に対して最も淫らな言葉を吐くように訓練してきましたがこの二種のパイプを使用した時には、飼育係の私の方が驚くくらい妻は半狂乱になって叫び続けました。例によって、箒の柄と三面鏡が重要な役目を果たしたのですが箒の柄で思いきり捻げられた両足の間に妻の稚い顔があります。

「ほら、見てみるんだッ」

私の言葉にうつすらと目を開いた妻は鏡にうつる自分の異様な姿に思わず「ああッ」と驚きの叫び声を挙げました。

「これだ、この姿を見たかったのだ」私は自分に言いかけすようにそう独り言していました。

我が主観

縛りの美学(二)

ロマン派生

2、縄など

縛るために最もポピュラーな用具として縄が用いられる。縄に対する個人的な好みの中も甚だ広いだろうし、縛り方の流行や、素材(女)によっても、それに適する縄は変わってくるのだろう。

大まかにいえば、縄は細目で柔らかいが丈夫なものがよいように私は細いナイロンを束ねて編んだ紐を愛用しているが、これは、縄



……イメージ画……
『妖しい蝶』 小川茂正

というより紐であり、断面は丸ではなく扁平だが、肌にピッタリしてしかもゴロゴロせず、結び目が小さくて、素材を寝かせた時などにも不必要に肌を痛めないもので、具合がよいからである。

縄の太さは素材の肉付きの良さに関係していて、グラマラスな女には、太目の縄が似合い、やせた女には細目の縄を使っている。また、きびしく複雑な縄をかける時は細目に限っている。

しなやかな縄でなく、荒縄のようなトゲトゲしいものも、時としては使ってみるが、あまり丁寧に縛る時には適さないようだ。ロープ類もよく使うが、あまり

硬いものは良く締まらないし、新しいものは、いかにも素人臭くてよくない。

縄の色は濃い黄褐色から、やや黒ずんだものが好きだ。白い肌とのコントラストや、写真のうつり具合等からいっても白や、色の薄いものはよくない。素材の女の汗やなにかのしみ込んだ、汚れて匂いのついた縄が最高である。

芝居で使うというウコン縄などは、けんらんたる衣裳をつけたお姫様でないと全くマッチしないように思えて使わない。

しごきのような布を縛りに使うときは、真赤で、充分長さのあるものを選んで使う。短いのをつないで使うのは感心出来ないし、絹のような布地でないと手触りも悪いしすべりも悪い。時には紫やピンクもよいが、その際も色は濃目のものを使うことにしている。模様をついたものは、敬遠している。縛る時にしごいて細くして使ったり、広げて巾広く使うことも出来るのは良いが、緊縛感の出にくいのが欠点であるからである。

鎖は太目で重々しく、やや錆びたものがよいが、赤錆びでは具合が悪く、黒ずんだものが好きだ。鎖は細かい縛りは困難なのでどう

しても手錠、足錠、首枷等を併用しなくてはならない。これらも黒ずんで十分厚みのある重たそうなものが良く、あまり近代的でピカピカ光ったものは感心しない。鎖を使う時には、最近流行の貞操帯もつけてやりたいと思うが、貞操帯は小さくて頑丈な感じのものが好ましい。細い鎖でも金色のものはまあまあだが、軽金属製の軽いものは感心しない。針金や電気コード等は一寸なじめない。

革を使った拘束具も市販されるようになったが、デザインの点で好みのものがないのが残念なのである。これも色は黒で、あまり厚くなく、さりとて薄くもなく、且つしなやかなものでないと緊縛感が出ないように思うし、皮バンドの中もあまり広くてはいやだ。

透明で弾力性のあるプラスチックで作った緊縛用具が出来ないものかと思う。透明な貞操帯などとセットにしたなら、大変素晴らしいと思うのだが。

最後に木製の枷についてだが、これは、十分に厚いそして古びた板を使い、頑丈な鉄の金具や鍵をつけた枷が、素材の細い首や、手や足に重たそうにつけられているのは、大変に魅力を感じる。



—八第七十四回—

辻 村 隆

日本人は一つの言葉を、実に多種多様に、巧みに使い分ける。

プレイといえば元来は外来語であるが、もともとスポーツに使われるものとされていた。それがいつの頃からか、SMのゲームもプレイであるし、セックスもプレイの範疇に入るようになっていく。

我々同好者がプレイしようかといえ、それはもうSMのプレイに外ならない。私の書くカメラ・ハント中にも、しばしば単にプレイという言葉で、その状況を現わしていることが少なくない。

勿論日本語にも昔から「する」とか「やる」という言葉で、SMやSEXをズバリ示す言葉もあるが、これとても使う時の状況次第で、誠に多種多様に使えるのである。

する。

する、やるは、英語のDOに当たる。為すという言葉で、謂わば日常茶飯語である。それが使いようで、すぐく卑猥になるのは、以前はそれに代わる言葉がなかったからでもあるうか。SEXは元来は性である。それがいつしか行為を示す言葉に使われ始め、あるハレンチ女優が、ヌケヌケといった「SEXの時が最高よ」というのも、今ならもう可怪しく感じない時代になった。しかしこれも、昔風に「してる時が一番いいわ」など言おうものなら、やはりドギツ過ぎていやらしい。

サド・マゾをSMといい、コイトスをSEXと称し、逢曳、密会を堂々とデートといって憚からぬ

よき時代である。やはり日本は平和らしい。

× × ×

四月三十日のテレビ番組「三時のあなた」(山口淑子司会)に、いよいよフリーセックス、乱交パーティー経験の夫婦が登場した。最近本場のスエーデンの留学から帰国した東海大学の講師、石渡夫妻である。奥さんはスエーデン人ではないかなの美人——。

彼はそれをアウトセックス——

所謂婚姻外セックス——とよんでいた。テレビに登場した夫婦の勇気に敬意を表するが、日本ではやはり時期尚早を感じた。同席していた大空真弓が、露骨に眉をひそめて反撥の態度を示していたが、彼の謂う、夫婦の絆がすっかりしていたならば、それによって夫婦の愛情は益々濃やかになり、アウトセックスによって、夫婦別れた人々がいないという言葉も、私にはうなずける。

夫の浮気というより、それを妻にも認め、夫婦相和して、堂々と相互理解のもとに浮気するという論理も愉快である。私が過去に同好者として出会った夫婦プレイの方々は、SMに理解のある夫婦のWプレイ(これも、アウトセックス

スに繋がる)を望んでおられ、その実現は過去十指で足りぬくらい知っている。そこにはいろいろの条件もあるうが、夫婦間のSMのプレイのゆきつく処、相互理解のもとに交換プレイを望む風潮は急速に蔓延していることは事実である。

× × ×

又しても「家畜人ヤプー」で恐れ入るが、翌五月一日の午後七時半からのテレビクイズ番組、小泉博司会のクイズグランプリという毎夕十五分のミニ番組で、文学の問題としてこんな出題があつてビツクリした。

「謎の作家として騒がれている、正体不明の沼正三という人によって書かれた『幻の奇書』の題名は？」というのである。

一家団欒の食事をしながら、みるともなくみていた私はハッとす。長男も高校三年の末娘も、首をかしげて、そんなの聞いたこともないと口々に言う。知っているのは私と女房——。テレビの五人の若い一般解答者も、誰も知らない。ブザーがなって、小泉博が、「家畜人ヤプー」と解答を告げて、一様にキョトンとしていた。この一大名作が、未だ未だ一部

の同好者や、探奇を抄録する人々の、少数のものであることをつくづく感じた。茶の間の話題にしては、恐らくこの番組をみていた日本国中で、知らぬ人の方が圧倒的に多かったのではなからうか。

五月十九日の夜、相次いで意外な電話が二つ――。

一人は立川談志師匠で、伊丹飛行場から掛かってくる。これから青森へ行くつもりだが、時間の予定が狂ったので、一度会わないかと仰有る。突然のことだし、その為わざわざ伊丹までゆくのも憶劫で再会を約したが、先日、ドイツ人とならぬ争いがあつた時だけに、何とはなく人恋しくなつたのだらうか。彼のトラブルの時、いつも奇妙に私はその後関連していて、かつて心斎橋で暴漢に殴られた時も、その数日前、夜もすがら私宅でSM談義に刻の経つのを忘れたものであつた。好漢自重を望むや切である。

その電話がきれて一分も経たぬうち、又ぞろベルがなる。誰かと思えば、長い間音沙汰のない山原清子さんである。

「きよこ……分かる？」
といわれても咄嗟に思い出せな

い。やっと

「ああ、あのいれずみの――」
という、電話の向こうで笑つて、十数分の長電話になった。

先月から、大阪十三近くで、スナックバーを新規開店して、マダムに納まっているが、近頃妙にやるせなく、M性の方が段々強くなつて、誰かに思いっきり虐められたらスツとするだろうと、穏やかならぬ誘惑である。午前二時まで相当呑み喰いしても、五千円もあれば大丈夫、是非いらっしゃい、一度虐めて欲しいしと、商売気とSM気の両方で粘られて、近日中に行くことを約したが、あのSにもMにも強烈そのものの彼女が自分で相当変わったというのである。これもハントの回顧の狂い咲きの真赤なバラ一輪。
傍らで聞いていた女房が難かしい顔をした。

四月二十日から月末まで、奈良のスターミュージックに出演していた秋山夫妻が、打上げの翌日にひょっこりと立寄られたので、約東通り五月号「深夜の舞踏会」の奇巧を手渡した。感慨深げに読んでおられたが、読み終ると顔を挙げて、意外なことを切出した。

「これから一応九州の郷里へ帰るのですが、実は一年ばかり姿を消そうと思うのです」

「どうして又」と驚くと、

「私の残酷ショウも幾分マンネリズムだし、類型的なまやかしものも簇出してゐるので、この際思い切つて、ショウに新機軸を出すために勉強してこようと思つてゐるんです。ショウで、幾分の蓄財もありますから、海外へ逃避して、アチラの秘密ショウを参考に見歩き、体を休めて、思いきり嶄新奇技なアイデアで再び登場したいのです。まあ見ていて下さい――」

情熱をこめて語るのであつた。モーターによる回転逆吊り鞭打ち――、化学奇術をとり入れての火の責め――、緊縛のアダジオ舞踏――、黒ミサ的妖気漂う残酷ショウ――など、とうとうと憑かれたように喋る彼の構想はとどまるところを知らない。それには先ず研究と勉強だと強調し、それを西欧に求めて国外へ脱しようとしてゐるのであつた。その意気たるや壮。その潮気たるや烈。私は唯々聞き惚れて、彼等夫妻の前途に幸あれと祝盃を挙げた。沈黙を破つて一年後に再び懸星の如く現われた時、そこにどのような破天荒な

ショウが待ち受けてゐることであろう――。全国の秋山夫妻ファンの人々と共に、その日のために心より拍手を送りたいのである。

夫婦プレイの告白を書いた渡辺好美さんと、乳房の刺青の和泉五郎氏から相次いでお便りをうけ、又ぞろ忙しくなりそうである。

渡辺夫妻とは近日中にカメラ・ハントすることを約したが、折返し彼の撮つた、好美さんの近影の緊縛フォト数枚を送つてこられ、その赤裸々かつ強烈きわまるポーズに一驚すると共に、奥さんの美しさにみとれて、思わず私の胸は弾み出す。和泉氏の方は、交通事故によるムチ打ち症の恢復を待つて、弥栄夫人の乳房の刺青を拝見することになつてゐるが、彼の流暢な達筆の文面に、これがあの乱暴な告白の彼かと二度びっくり。自虐的にわざとあのよう荒々しい告白文を書いたに違いないと、改めて和泉氏の人柄に接した思ひであつた。箕田氏よりも電話があつて、モデル希望者が現在十人以上もあるが、どうするといわれ、嬉しい悲鳴をあげても体は一つ。内訳をきくと、九州二人、関東五人、関西三人、中部二人、四国

中国二人。ぼつぼつハントしてゆくより仕方ないが、塚本氏も大分張切っていることだし、かなり彼の方へ廻されそうであるが己むを得ない。といっても腰の重い彼のこと、果たしてどこまで消化出来ることだろうか――。

× × ×
 奇クが届く――。先ず目を通すのは私自身の書いたものである。これは懼らく投稿者すべての通念であろうか。

通読するうち、きわどい個所がうまく削除されていると、がっかりしたり、そのくせ、ちよっぴりホツとしたりして複雑な気持ちになる。が、それにも況して当惑するのは活字の誤りである。(浣腸)が(浣腸)になっけていても、読まれる方は、私が腸という字を賜わるなんて書きはしないから、判つきり誤植と認められるが、意味の通らないのは誠に困惑する。六月号のハント『孤独より遁れて』の文中、一二九頁中段の中頃に「別段他愛があるわけじゃないが、何しろ……」とあるが、私は「他意があるわけじゃないが」と書いたつもりである。

他愛もないことに目くじら立ててといわれればそれまでであるが

意味が全然、違ってくるから困るのである。印刷社の方も、それこそ、別段他意があつて、わざとやったわけでもなしと洒落てみたところで、まあこんな使い方の違いという意味であろうか。呵々。

同月号「楽我記」欄の末尾で川路叢子さんの件に触れた「人妻の豹変(ひょうへん)」が御丁寧に二個所とも貌変(ぼうへん)になつてゐる。引っくり返して変貌なら意味も通じようが……。

などと、偉そうにいうくせ、私も又よく間違つた熟語を書いて、編集部で訂正してもらつてゐるのである。その一例――ローソクを「蠟燭」と、かくらしい。正しくは「蠟燭」である。「恰好(かっこう)」を「格巧」と書いてみたし「格好」と書いたりして、しばしば訂正され、やっと恰好がついた往時もあるのだから、文句を云えた義理でもないのだが……とかく、漢字という奴はムツカシイ。

× × ×
 SM時代到来の今の御時勢に、何故他誌へも書かないのかと、同好者仲間からよくきかれる。慥かに過去二十数年間、私は奇ク一本槍で、他誌には変名をもつてしても、ついで投稿したことがない。

東映に関連していた昨年、テレビに出演した頃、週刊誌や二流雑誌に記者の要請もかなりあったのは事実である。現に奇ク誌に書いておられる方の中にも、或いはペンネームを変え、又はその俚の名で他誌に書いてゐる人も、かなり存じてゐる。私の場合、どういふものか、奇ク以外には書く気がしないのである。古いと笑われるかも知れないが、奇ク創刊間もなくより、箕田氏との友情、辻村隆という一野人の好事家を、一応アングラ的にでも今日まで育て上げてくれたその好意に対して、私はいつまでも奇クだけの辻村隆でありたいのである。

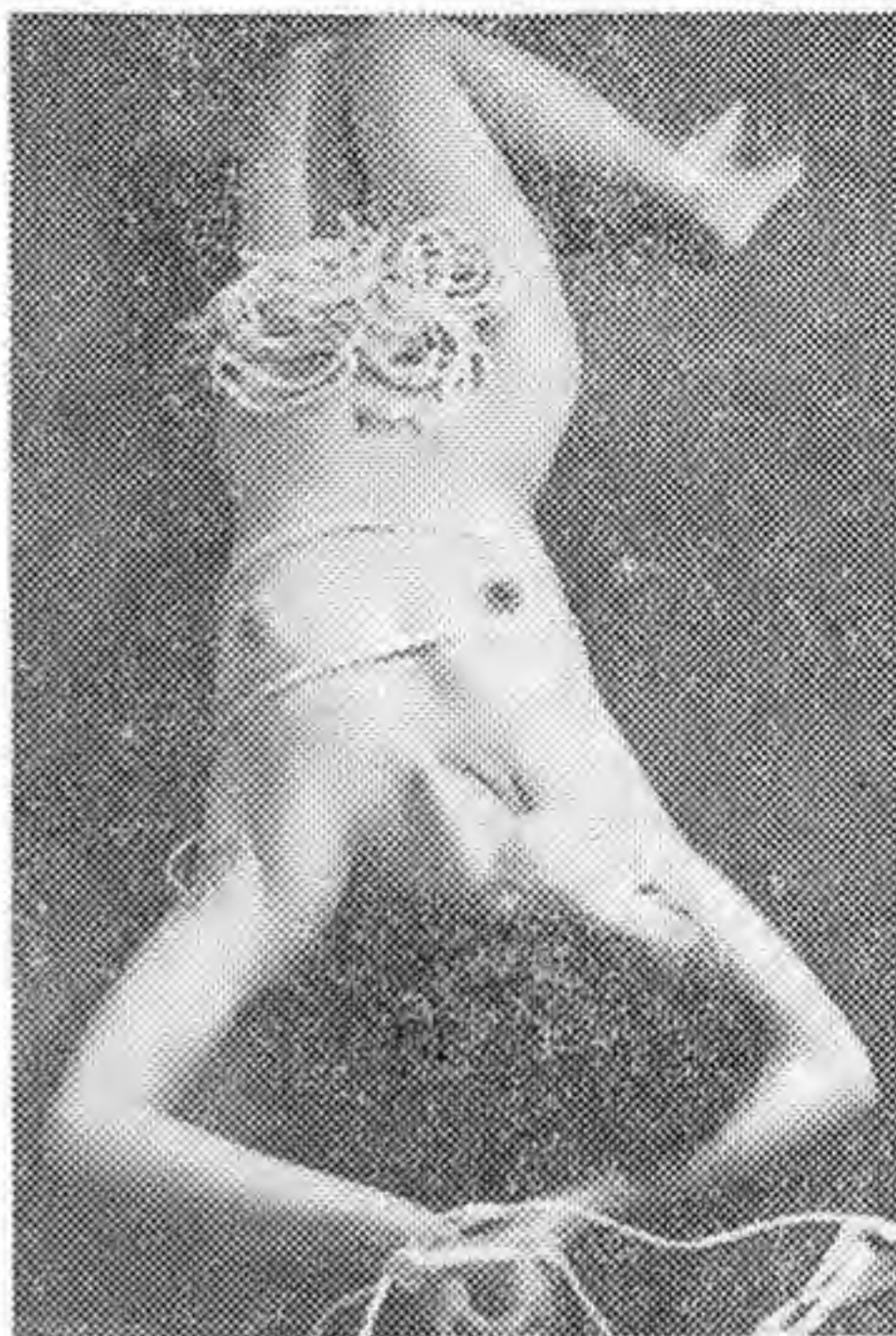
よく世の中に、芸能プロが散々苦勞し、大金を費い、マスコミを煽り立てて、やっとゼニのとれる歌手やスターに仕立て上げた時、今の若い連中は、それをしばしば自分の力だと過信し、慢心して、後足で砂をかける様な行爲に出てゐる。プロから見放され、マスコミが鳴りをしずめた時、あとに残るのは、愚にもつかない未熟な、何一つ自分の力で動くことの出来ない自分を見出すだけである。そんな連中が余りにも多すぎるだけに、浪花節めいたナンセンスと笑

われる義理人情かも知れぬが、私は私なりに、箕田氏の不変の友情を信じてゐるのである。投稿しても、掲載するせぬは奇クの権限にあるのである。いかに力作を書いたところで、人間不信の立場から陽の目をみないとなると、辻村隆という人間は、ごく市井のほこりにまみれた一人のチツポケな嗜好者に過ぎぬのである。己れを弁まえて我が道を行く――。こんな信念が私の処生訓に、過去二十数年來続いてきたのである。

箕田氏は、自分の得にもならぬ「家畜人ヤプー」の単行本の仲介を恬然と引受け、鬼六氏の「花と蛇」のH書房の単行本発行も、彼がそれによつて利を得るのならと泰然としている。その大陸的大人の風の彼に、私は改めて見直すのである。売れる、売れぬは別問題として、私のSMカメラ・ハントが一冊の単行本として、仮に某出版社が私にかけ合い、それに心動かされて、その承諾を求めても、恐らく彼は笑つていうだろう。「まあ、それで幾らかでも儲かるのなら、やったっていいよ――」ぐらいは……。

唯、今の処、私にそんな売名的なヤマ氣がないだけである。

初めて妻を縛って 丸木戸砂土



ポーズで撮りましたが、これでは自分達だけしか見られず、進歩が無いと思い一応発表出来るものにしたのが、ここに同封しました写

SMなど全然知らない妻は、最初非常にイヤがって、全然うけつけようとしませんでした。が、「お前の美しい身体を更に美しく見せるのだ。これはこれからの芸術になるものだ」ということで、説得におおわらわの努力を重ねた末やっと納得させました。

最初は誰もがそうであるように一糸も着けさせずに、いろいろの

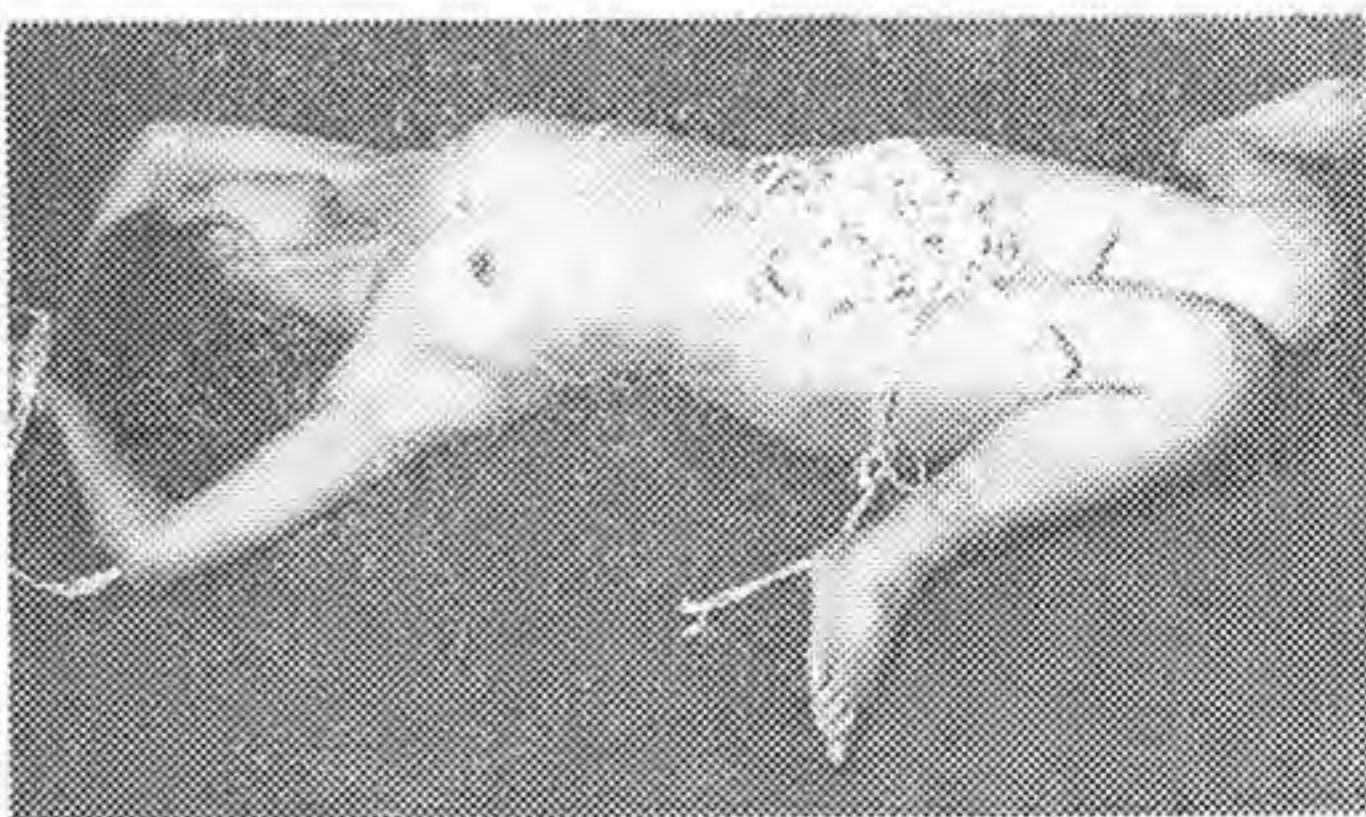


真です。その時感じた事は、パンティなどは出来るだけ着けさせずに、何かで代用するようにした方が趣が出るようです。

私は一回で大体三十枚から六十枚撮り続けますので、終りの方では妻もかなり疲れるらしく、ポーズによっては相当に苦しうでした。

初めての事で、縛り方など本当に幼稚なものです。が、これからいろいろ研究してゆきたいと思っています。

また今回は簡単な緊縛だけで、いささか物足りないものばかりでしたが、次回には何とかして種々の道具を使って、それなりに変化



のあるものを撮ってみたいものと思っています。

それから、私の念願の一つに、『フォトコンテスト開催』があります。

私案としては、各自のフォト作品を出品しあって、月間ごとに優秀作品を選んで掲載するというのが、ぜひとも編集部の方々の御一考をお願いしたいものだと思います。

では、今回はこの辺で――。

「S
M日記」に羨望する

△小竹氏ファンから▽
 山逸富

私はSMプレイフトを、毎号楽しみにしている者です。

五月号を買い、まず最初に目に入ったのが「S M日記」の小竹一浩氏の美しい奴隷(?)ユキさんでした。小竹氏の「S M日記」は以前から楽しみにしていたから大変うれしくなりました。

今回は伊豆の海岸と、大雨の時の野外プレイの報告でしたが、読んで毎回感じることは、あのグラマーなステキなユキさんのすなおさです。よくあそこまで飼育されたものと感心します。なぜなら、奴隷タイムとはいえ鎖の下着で、ワンピースだけの外出を承知させるのですから……。

私は夫婦プレイのフォトが大好きで、カメラハント、夫婦プレイの記事をまとめてありますが、今以前の小竹氏の「S M日記」外出プレイの報告を、読んでます。菱縄をかけ、そのうえ雁字搦目にし、て飲み屋へ入った時のことが書かれてありますが、あの飲み屋で下半身を裸にし、縄を解かせ、その

まゝ飲んだそうだが、その時のお二人のスリルがわかるような気がする。その時の小竹氏の飲まれた酒は、さぞうまかつたろうと思ひます。その後でのネクトプレイ。これ等は御夫婦でなければ出来ない、變つてて楽しいことだろう。

五月号には三条剛氏も野外プレ
イのフォトを投稿されていたが、
野外フォト撮影のスリルと、人目
があつてむづかしさがあるとのこ
と。……そうでしょうね。

又、東京Y・Y氏の告白も屋外プレイで、S傾向、とくに女性の羞恥責めを好むものには、このプレイはとくに興味あることでしよう。小竹氏の野外プレイフォトなどもぜひ実現させ、誌上を飾って欲しいものです。

○ 私の妻はSMに理解がないので
もちろん手製のフォトはありませ
ん。こんな私ですから、小竹氏と
交際願える資格はないかもしれま
せんが、もしSMプレイの先輩と
して御指導願えるなら、幸いなん

ですが……。

他のSMプレイをなさっておられる御夫婦の方、妻にプレイを理解させる方法を、お教え下さい。又、SMプレイの出来ない私に、プレイフォートを奇ク誌上で見せて下さい。

以前奴隷妻の投稿をされた山本武男さん、その後、奴隷妻はどうしてますか。近況の投稿を期待してます。

○ カメラハント、夫婦プレイの特集号をぜひとも刊行して下さい

とを編集部にお願いと共に、私の読後感に対して、ステキなフォトまでお送り下さったことにお礼申し上げます。川路さんの、ソファから逆さになってるフォトなど、誌上写真と又違ったスバラシさでした。五月号の塚本鉄三氏の文を読みながら見て楽しませていただきました。

○ 小竹一浩氏及び美しい奴隷妻の
ユキさんの御健康をお祈りし、今
後もフォトを誌上に発表されるよ
うにお願いします。



S・コンレクシ
『花開く季節』豪城二

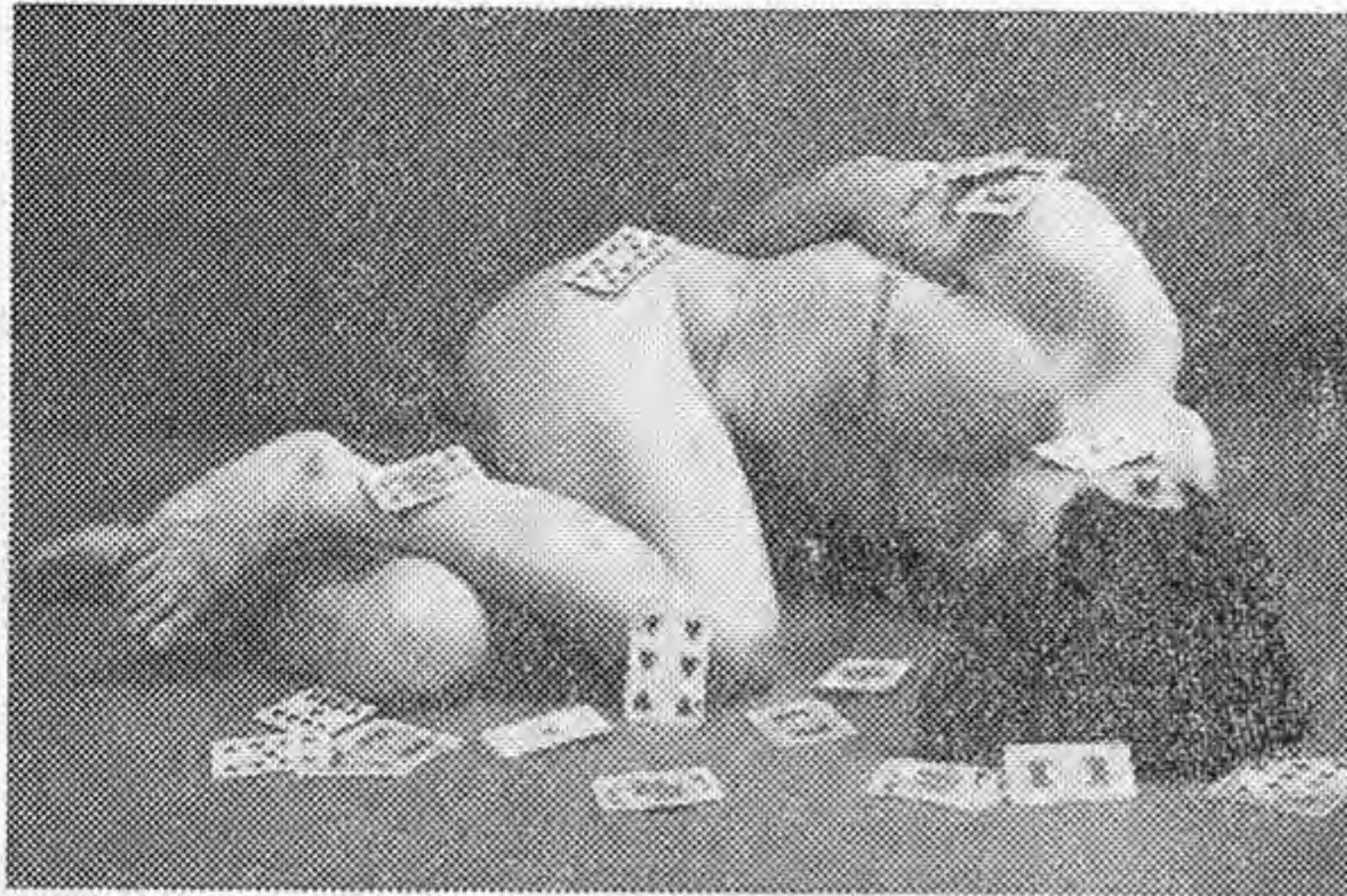
バツグン七月号を読む

国 川 栄 一

七月号は愛読者寄稿の写真が多くバツグンであった。

読む雑誌として充実完成した本誌が世相に従って眺めながら読む

雑誌へと転換を企てたとしても不思議ではない。それも煽情性を避けた愛読者の真摯な写真が文章の飾りに使用されるにとどめたあた



〔実写写真〕

「トランプ」

撮影・日夏高視

トランプに俺は俺の奴隷を賭けた。だが運悪く俺は負けた。

「チェッ、何て顔してんだッ。タッタ今からお前は、こちら様のモンだよ。フン、勝手にしゃあがれ！」

ムシャクシャまぎれで俺は、床に転がしてある奴の裸体へカードを叩きつけた。

△データ▽ドリマーフ
レックス、パンクロフィ
ルム、絞5.6、一秒、二五
〇Wフラッド二個。

りは見事な編集態度と思う。

三条剛氏のプレイ・レポ写真にみる耽美性、長井真暴氏のエミ子嬢写真、大橋美代子の菱紋縛りの極致、アヌス責めにまで進出したとの浅田守氏の写真を添えての報告。Mの快感を求めている写真投稿と告白する佐野みさ子夫人のむちむちと美しい肢体、日夏高視氏の美しい体の女性を緊縛して、その全裸を鉄路によこたえて写す大胆さ等々、控え目すぎるほどの小型写真ながら、本誌の意図する主旨が完全に表現されていた。

また最高の写真は関谷富佐子さんで、その告白文共に愛読者の心を奪ったに違いない。彼女のむっちりとした固肥りの姿は実に素敵でいくから見ても見あきない素晴らしい体だ。真のM女関谷富佐子の耽溺ぶりは正に七月号中の圧巻とみた。写真を添付しての告白こそ、隅々までM女の羞恥とナルシズムの交錯が滲み出ている。お風呂に入る時の様な姿のまま自分から三人の男の人達のいる部屋へ歩いてゆく方が恥かしかつたという彼女の真意が満ち溢れていた。

関谷さんと対抗したのは『花と蛇』と共に本誌の二本柱と称せられるSMカメラ・ハントの佐々木

真弓嬢であるが、ケメ子の際の真弓を知る者には二年間の彼女の成熟が興味深い筈である。美しい蝶に交身し、尚且つ湯殿にて立位開脚、正面からネクタールを浴びせる蝶と化した彼女の艶姿に、陶然とするのはひとり私のみではあるまいと思う。

懸賞入選作品、神戸MY氏の我が夫婦プレイの告白は、さすがに数多い応募作品から選ばれただけあって万人の共感を得たと思うが、SMに耽溺の余り露出しすぎて掲載不可能だった由、やっと編集部のお目に叶った、たった一枚の緊縛写真から推察できる御妻女の羞恥責めの悦虐甘美さに見とれて再度の御寄稿を願うのみ。

小型フォトの挿入によって、貧弱な私のような読者の読解力を助けて頂きたいと思う。七十年後半は世相の上でも、より激しい変化が予想され、脱皮(革新)と飛躍(創造)の時代になるであろうと考えられる。

本誌が小型フォトによってマンネリズムを打破し、周囲の環境の変化に気を配り、美しい緊縛女体を駆使し、大いに積極的に、大胆に取り組んで下さることを期待している。



「縛り」のモデルになってみたい

倉島辰子

私は昨年までヌードモデルをしていました。毎日午後三時から十一時までの勤めで約八時間になります。お客のない時は夕食がてら近くのスナックへ行ったりしていましたので案外楽な仕事で、まあ楽しくやっていました。

それが昨年の夏になって急にスタジオが閉鎖になってしまい、仕方なく今は知り合いのスタンドの手伝いをしています。私は身長は一米五八釐余りスタイルには自信はありませんが、乳房が大きいのでヌードとしては見栄えするとよく言われます。しかし、今市内ではスタジオが殆どなくて私もヌー

ドモデルとしては勤めることは出来ません。

それで縛りのモデルとして一度私を使ってみて下さいませんか。縛られたことは一回もありませんが、ポーズのと

り方なんかはヌードでやっていきますから、割合なんとか出来ると思います。

ヌードモデル時代に撮影してもらった写真数枚同封しておきますから参考に

して下さい。

スタジオに勤めていた頃、出張で縛りのモデルになったというお友達の話を聞いたことはありますが、私は経験はございません。指導して頂ければなんとかやってゆけるのではないかと思います。

現在、お友達のアパートに同居させてもらっていますので、お返事はすみませんが局留にして下さるよう頼みます。そのうち、電話のあるアパートへ移ろうと思っ

ていますので移りましたら又お知らせします。

今勤めていますスタンドはいつでも休めますので、前の日までにわかるようでしたら、どんな時間でも参ります。

よろしく、お願いします。

(大阪市天王寺局留 倉島辰子)



編集部だより

○各月号の「読後感」多数寄せられ編集上大いに参考になっていきます。早速緊縛フォトを贈呈しますが、何にしろ数が多く掲載分との区分けの為未入手がありましたら御手数ながら御一報下さい。

○塚本鉄三氏から「緊縛フォトの素顔」八据膳喰うは男の恥」を寄せられました。挿入写真の到着が遅れたため今月号の掲載には間に合いませんでした。次号に発表する予定です。御期待願います。

○Sファンの皆様から永らく要望されていきました「花と蛇」決定版が愈々発行されることになりました。これは過去四回に亘って臨時増刊号として発刊しました分、即ち発端から現在連載分に至るまでを一挙に登載した超弩級版です。

○北は北海道から南は九州に至るまで広くモデルの志願者が参っています。遠近に拘らず出張しますから御遠慮なくお申込み下さい。

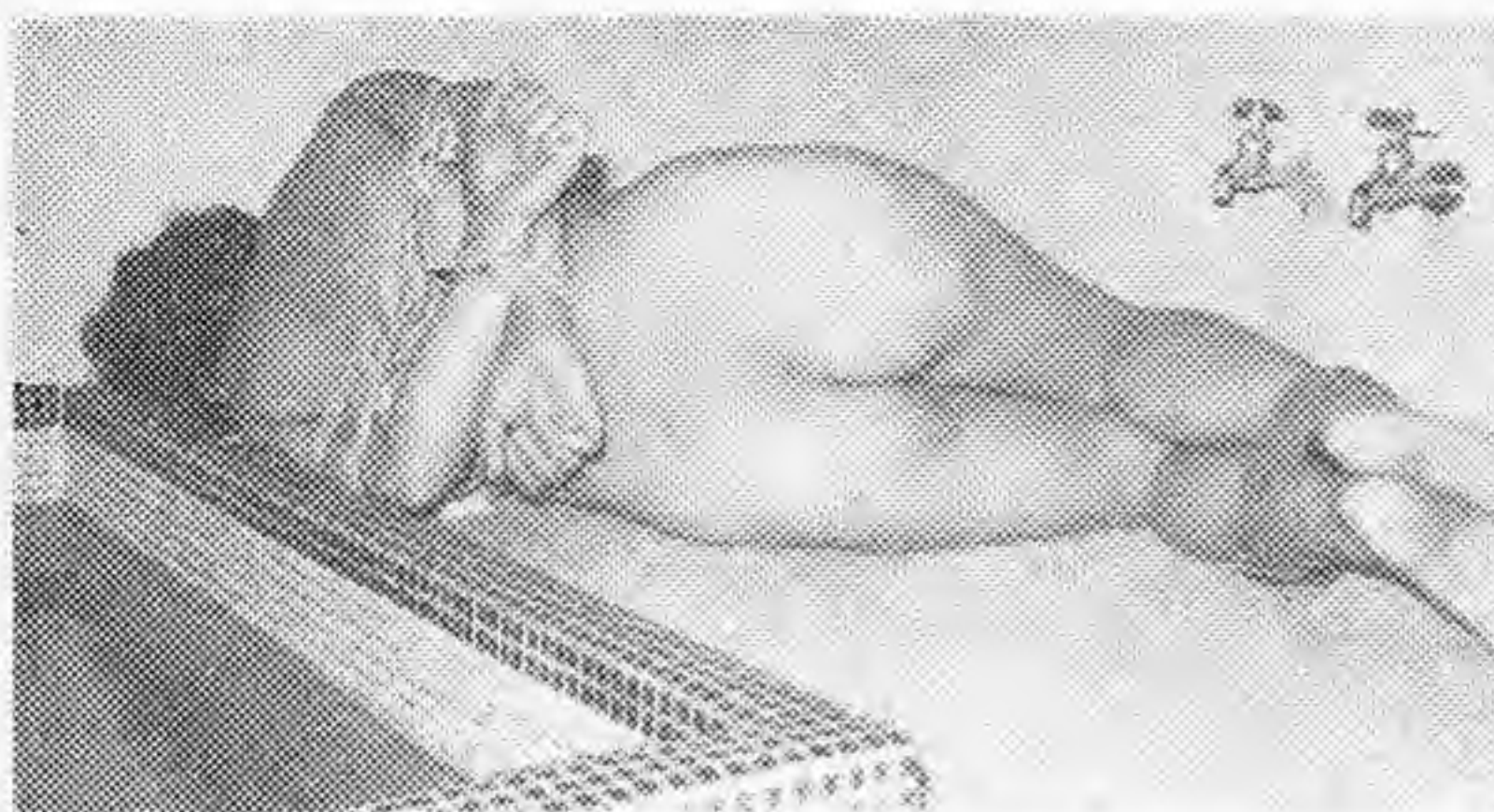
○プレイフォトを送付下さる方が増えているのは大変嬉しい事です。つとめて誌上に発表させて貰っていますが、掲載を好まれない分は

現 実 と ロ マ ン

川 口

治

5月20日付の朝日新聞(東京)夕刊に『少女にストリップ』という見出しで、風営法違反の店が摘発されたことを報じていた。



フォト 『狂い咲く湯の花』 大橋美代子

それによると、スナックなのに十七才までの少女六人をホステスとして使い、客席の近くでストリップをさせたり、彼女達が欠勤したり遅刻したりすると、苛酷な罰金を取り立てていたそうである。

更に同紙面には「就職早々の二少年焼死」というぬ仕事で熟睡中」という見出しで、就職少年の悲劇が報じられていたが、私はこの二つの事件で複雑な気持ちにさせられた。いろいろな意味で都会に憧れ、何かを求めて出てくる少年や少女たちは多く、この二つの事件はその中のホンの一部のホンの瞬間的な出来事ともいえる悲しい事件なのであるが、社会人として私も「悪」としてとりあげる新聞の意図も納得出来るし、現実の問題として憂えることも出来る。しかし反面、私は、少女

のストリップ問題から、さまざまなことを連想してしまうことも否定出来ないものである。社会的にどうあろうとも、私は「少女」という言葉に性的な魅力を感じてしまふのだ。この報道から、支配人の折檻を受ける少女達を連想し、活字の上の美津子や桂子を想像してしまふのをどうしようもない。

現実とロマンの間に私が立つとき、時としてその区別がつかなくなる想いが無いではないのだ。

当然、怒らなければならぬときに、独りSMめいた想像をして悦に入っている自分にハッとなって考えてしまふ。もし仮りに、私が遊客の一人として、その少女達のストリップを覗いていたとして、果たしてその少女に同情し、その状況を悪と判断したかどうか。

SMが、いわゆるSMとして認められるには、あくまでもロマンの世界でなければならぬ。現実とロマンの境界。ナチのユダヤ女性に加えた拷問と「花と蛇」の静子夫人の羞恥責めのそれとを、同様に考えてしまふ危険性を忘れてはならないとつくづく思うのだ。

私はまだ独身であるが、素晴らしい妻、即、奴隷と希うこと、これもまたロマンであろうか。

禁發表と書いて附箋願います。

○辻村隆氏のカメラハントはペンが益々冴えて満天下のSファンをうならせていますが、今月号では川路叢子さんを再登場させ、又この所毎月告白や写真を投稿している渡辺好美さんに触手を伸ばすなど、今後の活躍が楽しみです。

○長らく休養してました斎藤夜居氏が久々に伊藤晴雨の絵巻を引っ提げての登場です。私刊誌『愛書家くらぶ』が休刊の由ですが、捲土重來の復刊を切に祈ります。

○七月号で関谷富佐子さんの初めての告白を載せたところ大層好評でしたので、引続き書いて頂くよう依頼しておきました。最近の彼女からの連絡によりますます書きたい気持ちが十分の由、写真の撮影と共に心から期待したいものです。

○近頃はSM雑誌の花ざかり、そして一般誌でも専門誌並みかそれ以上に記事が即席でインスタントに作成される昨今です。マニア人口の増大はマニアにとっても喜ぶべき現状ではないでしょうか。

○編集参考資料を求めて久しいが相当量のコレクションが蓄積しました。高価に買い求めます故、手放してもよい資料がありましたら御一報下さるようお待ちします。

M派愛好者より見た 六月号読後感〜麻曾比須人〜

読者層といっても、ピンからキリ、いやMからS、フェチから、愛禪（ということばはあるかどうか知らないが）切腹、浣腸、レスなど千差万別。

それだけに、編集されるのも大変だと思うが、M派愛好の私にとって、率直に言って、六月号はあまり面白くなかった。まず六月号を手にして読んだの



イメージ画

『靴になりたい』

岡 たかし

は、芳野氏の「青春の陥罪・新妻飼育法」と、鬼山氏の「M派交友録」真砂氏の「壺中の園」の三編である。

「新妻飼育法」はいつもながら、芳野氏のうまい筆運びにつり込まれてしまう。特に、葉子が勇に、水？を飲ませるくだりは私にとって得がたい場面。今後の成りゆきが期待される。芳野氏の作品としては珍しく、Sの大崎、Mの傾向にある妻の絵里子が登場してきたが、勇、三田を加え、五人の男女の織りなす、妖しいMSの世界が展開することであろう。

「M派交友録」も鬼山氏ファンの私としては毎月、楽しみにしている。今月号の前半、花村と由紀夫人とのからみは、五月号からの引きつぎで、興味を盛り上げてくれた。

だが後半、大事件以降は、鬼山氏も「失敗談をも紹介して、後者の戒めとしたい」と書いているように、同氏の意図はわかるが、もっと簡略にして、その分だけ、花村と由紀夫人のプレーの説明に費して欲しかった。

なお、これはいろいろの制約があったと思うが、写真の二枚も挿入されていたらと望むの

は、あまりにも身勝手すぎるというものだろうか。勿論、仮名で書くくらいだから、顔のあからさまに写っているのは無理としても、以前の奇クの巻頭グラビアにのった程度のものがのっていたら、もっとすばらしいものになると思うのだが……。

真砂氏の「壺中の園」は第二回目にして、ようやく泥くさい娘郁子が、S的女性の片鱗を見せはじめてきたようで、以前、奇クをにぎわせたことのある真砂氏の、あやしいふん囲気が、たちのぼってくるようで、次回が待たれる。

このほか、六月号では、並木氏の「Mの道程」がよかった。体験からにじみ出るためか、かざり気のない文章から、迫ってくるものを感じ、共鳴出来る部分が多い。誰でも、こういう半生記が書けそうなのだが、どうしてもフィクションがはいってしまい、願望と現実がゴツチャになってしまっているのではないだろうか、その点この「Mの……」は体験にもとづくものとして、読みごたえがあった。

辻村氏のカメラハント「孤独から遁れて」は、いつもながら辻村氏の文章にひきつけられる。M派

—S男性の元へ行きたい—佐野みさ子

沢山の方々からのお便り並びにお呼びかけ本当に有難うございました。多くのS傾向の男性の方々に、私は自分の縛られた姿を見て頂きたいのです。恥かしいポーズであればあるほど私の心は喜

びに打ちふるえるでしょう。私を身動き出来ないくらい、強く縛り上げてから、S男性の方が私の身体にやりたいと思われるS Mプレイを心ゆくまで施して頂きたいと思います。私はそんな方の出現を心待ちしております。



の私としては、辻村氏の立場とは逆であるが、写真を見ながら読む辻村氏の文は、いたずらに説明に流れず、あまいムードと、時には詩的情緒さえ、ただよわせてくれるようだ。

千草氏の「一枚の写真」は、私には率直にあって、あまり興味ないテーマだが、現実と想像をダブらせながら進めてゆく、事件の展開ぶりは、非凡で、うまい。さすがだと思う。

この他では「花と蛇」「カテール」「女狐」がよかった。「女狐」も最終回で、正子がようやく女狐の本性をあらわし、康二をし

縛り映画鑑賞・・・

私の採点

岡田 康彦

『女体密猟地帯生体解剖』

責め場というよりサディスティックなSEXシーンがお目当て映画であるが、女の一人(星リナ)が全裸で天井から吊られて罵られるシーンは見ごたえがあったが、生体解剖はセリフだけである。題名に偽りあり……か。(七十点)

『H体験』

小川 欽也

ヤクザの情婦(林美樹)が、若い色事師との浮気現場を押えられてリンチされる。シュミーズ一枚にされて、皮ヒモで後手に縛られて鞭打たれたり、髪の毛を掴まれて引摺りまわされるが、それだけのことである。(五十点)

「レスビエンス」「三億円事件」「花の女斗美」「京子、受難記」「碧眼畏怖録」「猿ぐつわ……」「被虐の旅」と、いえる。今月号は、興味の湧かないテーマの作品が、他の月にくらべ、とくに多かったように思うが、M派愛好の方々、どうでしょうか。

『狂い責め』 高木文夫

結婚した女(清水世津)が、嫉妬した元仲間のホステスの計略で他の男に抱かれていたのを亭主が見て妻を狂い責めにかかる。

ネグリジェ一枚の妻を後手に縛りあげ、ハギ取ったパンティを噛ませて帯締めで猿ぐつわをし、ネグリジェを引き裂いてから、タンスの環に片足を高々と吊り上げて縛りつけた上、太腿をナイフでジワジワと切り裂いて行くシーンあり、なかなかの迫力。(七十点)

『色欲の野獣』

木俣 堯喬

蠟人形に興味を持つという男に捕えられた二人の女が「いろいろと拷問にかけた上で、気に入ったポーズで蠟づけにしてやる」等といわれながら、吊られたり、鞭打ちされたりする。相当長いシーンで見応えはあるが、セリフ程のものがないのが惜しい。(七十点)

『カメラ・ハント』に寄す

今

二

郎

待ちに待った二十五日、いうまでもなく奇ク発売日である。待ちに待ったなどと書くと、まるで小学生が遠足の日の来るのを待っていたような観があるが、事実、私の心境はそうであって、適当な語が見当たらないので、そう書くより仕方がない。

奇クにおける、私の第一のお目あてはカメラ・ハントである。それは私の心を満たしてくれるが、時として恋人とすれ違いになったような、佻しい気持ちにさせたりする。カメラ・ハントは、いうまでもなく、SMプレイの実態を文章とフォートによって、描き出すものである。とりわけフォートは、他に求め得ぬ貴重なものである。従って、プレイの生々しいムードが如実に伝わって来るところに、その価値がある。SMフォートはオブラートでくるまれた芸術ではない。カメラという非情な機械の目によって描かれた事実そのものである。私のような夫婦プレイ初心者にとっては、誠に得難い教材であり、刺激剤でもあるのだ。勿

論、そのすべてが私達に適しているとはいえないが、プレイに対する大きな先導力となっていることは確かである。

さて、六月号のカメラ・ハントは私にとっては、まさに我が意を得たりという観がある。それは先ず、フォートについてであるが、伊藤圭子嬢が自ら進んで提供した絵巻図は、私の求める被虐絵であった。今流行の羞恥責めの典型ともいふべきポーズの数々が、私の目を釘づけにしたのである。後手縛りで開股尻挙げ、うつ伏せに床に頭をつけた顔が股間からのぞき又、双球にくい込んだ布の白さが一段と、臀部の豊かさを示している。この体形は、私のような臀部責め愛好家にとっては、まさに垂涎のポーズである。又、これほど女性が「花と蛇」にいう完全な屈辱を示す姿はないであろう。屈辱と悦虐の典型的なものであり、SM人種ならずとも、白く豊かな双球に責めを施さずにはいられないであろう。私はカメラ・ハントを欠かさず見、読んで来たが、この



—僕のイメージ画集—

『女礼式・自害』 室井亜砂路

ようなフォートに殆ど接しなかったように思えるし、むしろ不思議な気さえする。

更に羞恥の極点を露わにするフォートが続く。椅子開股責め。私はこの責めのフォートを見る時、産婦人科医を連想する。診察台上った妊婦の心境は、女ならぬ私から見ても、これ程、羞恥的スタイルはあるまいと思うのである。直接感覚に与える責めよりも、心理的責めの最たるものである。このフォートは、残念なことには圭子嬢が目を開いているのが、欠点といえはいえよう。かつての小妖

精マスマ嬢の如く、顔をそむけ目を閉じて欲しかった。そうであれば、よりプレイの現実性を増し、SM人種の心を惹きつけるに違いない。

ともあれ数多いフォートは、このように悦虐の様を、まざまざと見せてくれたのであるが、一方、巧みな文章は単なるプレイの解説にとどまらず、その豊かな裸身を投げ出した圭子嬢という一人の女性の心理をも、適確に解明して見せてくれているのだ。これまでカメラ・ハントに登場した多くの女性性、一体どのような心理的動機



神 様 へ の 願 い

渡 辺 好 美

から、カメラの前に出現したのか
迂闊にも、私は詮索したことがな
かった。又それは男性にとって推
察しがたいものであり、プレイに
とっては、どうでもよいことでも
あろう。勝手な想像をするのが関
の山であるという理由から、考え

なかったのかも知れない。
しかし、今度の伊藤圭子嬢の場
合は無頓着な私にも、カメラ・ハ
ント登場の動機を考えないわけに
はいかななかったのである。タイ
トに示されているように、孤独か
ら遁れるためであるが、私の問題

結婚間もない若い夫婦が何か新
しい刺激がほしい、そんな思いで
初めた私達の夫婦プレイは、ある
時は激しくある時は平凡に二人の

感情の起伏にまかせて行なっ
てきた。しかし、それは二人だけ
がお互いに心の中にそっとしまっ
ておきたいものでした。なのに夫

にしたいのは、義兄に貞操をうば
われてからの、彼女の心理的変化
である。そして結婚に対する執念
というか、見栄というか、我々男
性とはまるで違うものを、今更の
ように感ずるのである。焦り、羨
望、そして操を失っていることの

婦の間に差し込んできたプレイへ
のマンネリ化に気付いた私達は、
あの頃の新鮮な刺激を求めている
した。
写真撮影も、その一つでした。
今日まで二人が秘密にしていた二
人だけの世界を、奇巧誌上に写真
と共にさらけ出す。そうして奇巧
ファンの方々とお友達になりたい
その願いをこめて、あの告白文を
書いたのです。あの告白文発表以
来、たしかに今まで忘れかけてい
たプレイへの楽しみがよみがえり
ました。私の心の片すみには、い
つも誰かが私のあられもない姿を
見ているのかと思うと恥かしくて
肉体は熱く燃え上がり、私の願望
は日増しに強まり、一度、主人以
外の男性とプレイがしてみたい。
主人以外の方に、責めてほしい。
神様がもし、私達夫婦のためにそ
れをお許しになるのなら、その夢
をかなえてほしいと願いました。

ひけ目。それらの葛藤が彼女を孤
独にしたのは記されている通りだ
が、このハレンチの横行する時代
にあっても、矢張りそれは重大な
心理的負担を与えるのだというこ
とを再認識せずにはいられない。
女心の妙は、憎まねばならぬ義兄
に思慕の念を起し、孤独に陥り
そしてカメラハントへ。その過程
の中に、私は彼女が自らを陥れて
いくような気持があるように思え
てならない。

しかし私としては、彼女が義兄
との関係が生ずる前に奇巧を読ん
でいたのであって、その救いをカ
メラ・ハントに求めた、と思いた
いのだ。あくまで、M的要素の故
に、心のうさの棄て所にしたと、
とりたいのである。

SMプレイは多くの愛好家がい
われているように虐待ではない。
殺伐陰惨なものではなく、自由な
快楽のための一手段と思う。やけ
くそに体を投げだしてするもので
はない。お互いがその共通の楽し
みを味わうべく、協力し合わなけ
ればプレイとはいえない。幸いに
して辻村先生という名伯楽は、巧
みなロープ捌きとフェミニストの
精神で、彼女の孤独の影を払って
くれたようである。

「やったぞ! ツカさん」 東 一郎

毎月発行日を期待して確実に購入しているものの、その日から二日、三日で私の好みの頁は読切ってしまう。それ以後は、いつでもどこでも読めるように鞆に入れて持ち歩いてはいるが、なかなか全部は読破できない。二月号の読後感も川路叢子のフオトが欲しいと思いつつ一カ月たってしまった。誠に残念だったとおもっていたやさき、今度は多数のモデルフオトの中から優秀な未発表作品を贈呈してくれるとあっては、ぐずぐずしてはいられない。と言っても気持ちばかり焦っても、毎日の仕事に追われ、ついつい締切り近くなつた今日、家族の外出したチャンスをつかみ、慌てて筆をとった次第である。

私は、羞恥責め、ローソク、パイプ等の責めが好きで、浣腸も多少興味あるがまだ実行したことはない。その他、切腹とか、他人のビール飲み、女装などは余り興味が無いので、貴誌新刊を手にするのと、前号は留金を外して分解し、カメラルポ、花と蛇、楽我記、読者通信、その他の四つに分類して

ファイルしているので興味の無い頁はその都度ゴミ箱入りとなつていく。(欲しい人が居ればさし上げた位、もったいないと思う) 扱て、六月号で私の心をゆさぶつたのは、塚本氏の「金髪碧眼の美女縛り」のルポだった。勿論、花と蛇、被虐の旅などの連載ものは一応対象外として、これをしたためている。

毎号辻村氏のカメラルポが大黒柱であった貴誌が、ヤッタゾッ! ツカサン! 最近のマンネリ化した内容を大空に飛ぶホームランのように、カーンと打球の音を響かせた。心にくい程痛快で、スカッとさせてくれたと思つてゐる。その、丁度内外野席を揺がす歓声が一時上つたように、私だけでなく殆どの読者も感じたことと思う。読者全員は、いや編集の方々も、おそらく「うまくやったナァー」と舌打ちしているのではないでしょう。か。万博というタイミングのよきもあつたとは言え、やはり持つべきものは良き友達ですね(ヘッヘッヘヘ)。どのように交渉して、縛つたのか、全く羨まし

い。英語が出来るとは言え、やはり最後は腕なのかなあ。

塚本氏の震える脚、手先などを想像するだけでも、六月号は豪快な、最近にないヒットであった。

一寸話がそれるが、仕事の関係で度々、名古屋や大阪へ出かけるが、先週二日ばかり、夕方のラッシュに揉まれて、阪急電車で十三と梅田を往復したが、どの女性も皆綺麗に見えたし、ピチピチした太股の見えるミニスカートの、それだけで東京人のような忙しさのないムードでの通勤姿をみたら、貴誌が大阪所在という観念から、どの娘もこの娘も縛つてみたい、いや縛つてもいい娘なのか、すぐにオーケーするのかなあと、いやらしい眼付きで歩いて来た。以前にも拙い文章を掲載してもらったが何か大阪へ行くと、貴誌(貴社)とはずつと昔から昵懇の間柄でもあるように思えてならず、出来れば夜を徹してでも(編集部には申し訳ない)訪ねてみたいと焦躁の念に駆られた次第である。

仕事の関係で夜おそくなるし、筆を持つのが億劫なので、読者通信に投稿して、それこそ良き友を得たいと念願しているが、まだ実現しない状態である。何とかしてオコボレでもいいから(伊藤圭子さんのようににはしない)廻して貰えないかと毎日夢をみている。大分、脱線したが本題に戻すと、次は、千草氏の「一枚の写真」だった。何だか作者(勿論小説であるうが)そのものの現実の社会を描いているようで、たった一枚のフオトでも、当事者には話せば長い物語りがあるようで大変おもしろかった。

一方、干部氏の「山中のプレイ場」は山中で知り合った女性が、責められることを夢みて、それこそ彼女の術中に陥つたのは(術中に陥つたようにみせた作者が賢者だったのか……)作者だったのではないか。と推理小説まがいのドンデン返しを、最後に(同封の写真はつまり英子です……云々)みせたところは実にお見事でした。

その反面、和泉氏の告白「乳房の刺青」、サロン楽我記のM七〇生のように世の中は十人十色。よく言つたものですね。辻村氏も言っているように、不可解な趣味にとりつかれ執念のように乳首に穿孔をつづけ……。

いやはや、オドロキ。ドギツイそれでいて平和な世の中でございますね。

和装讃美者の弁
振袖緊縛——山本五郎

現在のようないんスタント全盛の時代には、牧高志先生も仰有られるように、和服盛装だの日本情緒だのといった古典趣味は通用しないのでしょうか。花街に遊んでみても芸者らしい芸者は少なくなり、安直なバーやキャバレーの開放的女性が巾をきかしているように私のようなお座敷趣味者には物足りない淋しさを禁じ得ません。

好景気のせい、着物ブームとかで街には中振袖の娘さんをよく見かけることはせめてもの救いといえますが、青春時代からの「振

袖盛装緊縛姿”讃美者たる私には却って眼の毒ともいえます。

下賤の者は上淫を望み、高貴の人は下淫を好むとか申しますが、下賤の身たる私としては、美しい高貴な装いに憧れを抱いているようです。徳川時代よりこちら、昭和も戦前まで、振袖などは遠く庶民の手の届かぬ品であったからでしょう。

他の人の好みにケチをつけるつもりはありませんが、ハダカは河岸のマグロのようで、縄がけしてもあまりにもストレートの感じで



風情も夢もないように思えてしかたがないのです。見かたが違うのも分かりますが、私流を強調するなら、上等なものほど立派な包装が欲しいところですし、上等でないものでも、馬子にも衣裳というではありませんか。第一、ミニの活潑なお嬢さんでも、キモノ姿になるとオシトヤカになるそうで、私には好ましいことなのです。

現代娘のお嬢さん達でも、結婚式にはお振袖に打掛を希望する人が多いようですが、一生一度の晴れ姿が、一転して縄に悶えるのを想像した時、私の血汐は沸りたえます。思えば若かりし頃、時代小説の挿絵に電撃的ショックを受けたのが、凝結されて私の中で育っ

ているのでしよう。

暗い青春を過ごした私は、富貴高貴の象徴たる振袖姿の妻を足下に蹂躪して、その復讐を……いえ無上の快感をおぼえるのです。

妻の衣裳は全部とっていいほど誂えて作ったものばかりで、素材は主に絞りドンス。揃えるのにずいぶん苦労したのですが、着付や帯を結ぶのがまた大変です。

私も時々着てみますが、素肌に長襦袢のヒンヤリした絹独特の肌触りは、それだけでもゾクゾクさせてくれます。

着付けには何本も腰紐を使いますが、赤や水色のボカシ染や、鹿の子絞りの腰紐を見るだけでも、私は緊縛欲求を覚えるのです。

女体へのノスタルジア

△川路むら子とシーラーケニー△見対造△

六月号の話題の中心は川路むら子夫人に集中し、今や奇クSMマニヤの人気の絶頂に川路夫人が存在している感が深かった。

私もむら子夫人に強い魅力を感じた一人であるが、日常真面目に且つ平凡に振舞うことにのみ専念し続けていた貞淑な妻女が、心の奥底におさえつけ抑圧してきた女の業火を曝露させ、豹変を見せた

時の凄まじさに驚き、そして徐々に被虐の中に女のナルシスを見せつけむら子の耽美さに我を忘れさせられた。

私は六月号のうち、皆さんと異った視野から妖美なむら子を想像してSMを慰められた。即ち目次裏の広告の更に裏面に隠された被虐の人妻むら子の姿態を頭に描いたのである。各項のフオトの説明

を結べばあの耽美なむら子が脳裏で身悶えした。

一糸まとわぬむら子は泣き叫んだ。それは被虐を求める、悦びの涙なのか。むっちりとした脂肪を浮かべた素足が左右に引かれ妖気溢れる開股責め。

後手に縛られ高々とせりあがることを強調されて四つん這いの尻を持ちあげる人妻は、諦めきった表情で若々しい臀部を開き、肛門を晒せば、ゆっくりと恐ろしい浣腸器が接近してくる。

ありきたりのM女性で

あったなら、このような羞恥責めは許容しないものであるが、むら子はやはり違っていた。壮絶肛門責めの妙技が妖美にして耽美にくりひろげられた。

近頃、瞳目に値するのは塚本鉄三氏の活躍である。かつて臨時増刊号華やかにし頃の誌上をより一層華麗ならしめていた氏の再登場を大いに歓迎する。その頃より氏の年令によって加えられた重厚さを以て美の極致に近づいたと感ぜられるに十分な表現力をもって再現されている。

関谷富佐子撮影に於ても以上のことは充分に共感を得ると思うが、六月号の金髪美女の緊縛フオトで完全にSMの美を、鋭いカメラアイをもって表現し、氏のSMに対する美感覚を表明したと思う。

日本畳の上で縛縛りに縄を股間にかけてられ、若い白人女性特有の美しい臀部の双丘をここに区切るように縄を喰い込ませ、後手に縛られたまま身体を二つに折り曲げて畳に顔を伏せたシーラー嬢のフオトと同じく畳の上に膝立ちになって23才という柔らかな白い姿を晒し、異人種の男に責められると



いう被虐に悶え、あらがうかの如く体を斜めによじって全裸の羞恥をカメラから避けたとおぼしきフオトの二葉は、稀れに見る耽美であった。

欲望とは果てしなきもの、願わくば純日本式の田舎便所で、白い陶器もなく木の板のみの肥溜め式のトイレにシーラー嬢を屈ませた。腰掛けてしか用を足したことの無いシーラー嬢は死ぬ思いの表情を全身で露わにするに違いないのだ。

▽賞金△

選外佳作作品	佳作優秀作品	入選作品第五席	入選作品第四席	入選作品第三席	入選作品第二席	入選作品第一席
五	一	二	三	五	十	十
千	万	万	万	万	万	万
円	円	円	円	円	円	円
10	15	10	5	3	1	1
篇	篇	篇	篇	篇	篇	篇

▽内容△

意見、エッセイ、感想、手紙、隨筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最も得意とされるものを選んで御執筆下さい。一、いづれも模倣や亜流を排して、あくまでも新分野の開拓に意欲的な野心作を求めております。この際我と思わん自信のお持ちの方は奮て御応募下さるようお待ち致します。

▽規定△

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮っ

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい願います。御都合に依つて分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号

暁出版株式會社編集部宛

〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひV

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせV

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆV

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめV

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よすV

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よもV

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よきV

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさV

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もとV

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへV

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もにV

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もちV

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほV

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬV

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もりV

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もはV

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なのV

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむV

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあV

くすくす責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きすV

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせV

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそV

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きてV

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きとV

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きなV

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあV

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めくV

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆV

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めやV

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえV

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひV

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あはV

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふV

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこV

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るねV

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえV

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそV

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はねV

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はたV

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てらV

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いねV

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつV

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこV

可憐島田髷全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみV

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろV

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほかV

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほきV

〔最近版〕 粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z 組 百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円

十組十枚 一〇〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-19)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

☆ 一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛りを見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた拳句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒絲ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの撥り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

59 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
60 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
61 縄のブラジャー(左近麻里子)
62 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
63 逆エビで責める(ローズ秋山)
64 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
65 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
66 鞭で責める女体(ローズ秋山)
67 両手吊りで晒す(金原奈加子)
68 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
69 あどけなき表情(金原奈加子)
70 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
71 白肌にむごき縄(左近麻里子)
72 両手大の字吊り(関谷富佐子)
73 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
74 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
75 柱に繋がれた女(長井葉津子)
76 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
77 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
78 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
79 股裂きで責める(ローズ秋山)
80 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
81 後手に縛上げる(ローズ秋山)
82 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
83 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
84 S男がいたぶる(佐々木真弓)
85 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
86 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
87 開股縛りに羞う(左近麻里子)
88 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
89 尻立て股間縛り(木村 洋子)
90 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 (むら) 五〇〇円

足挙げ開股 略号 (あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態 略号 (いの) 四〇〇円

責 め衣縛り 略号 (せめ) 四〇〇円

強 烈エビ責め 略号 (ねむ) 四〇〇円

後 手首の高縛り 略号 (ねと) 四〇〇円

椅子 玉田美佐子 略号 (てい) 四〇〇円

全 裸アグラ縛り 略号 (てい) 四〇〇円

全 裸屈伸縛り 略号 (てい) 四〇〇円

強 烈エビ責め 略号 (てい) 四〇〇円

松本アサ子 略号 (ま) 四〇〇円

吊り打ち 略号 (やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境 略号 (ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛 略号 (りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り 略号 (ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人 略号 (ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人 略号 (ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り 略号 (へな) 四〇〇円

長野 良子 略号 (いな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト 略号 (もろ) 三〇〇円

強 烈エビ縛り 略号 (もた) 五〇〇円

乳 房責の苦悶 略号 (むち) 五〇〇円

全 裸ムチ打ち 略号 (むち) 五〇〇円

強 打に泣く裸身 略号 (むち) 五〇〇円

裸身の晒し 略号 (わあ) 四〇〇円

全 裸股間縛 略号 (せら) 五〇〇円

双 胸の強調縛り 略号 (そう) 四〇〇円

動 感海老責地獄 略号 (とう) 四〇〇円

色 輝の開股縛り 略号 (いふ) 四〇〇円

鼻 責めのアップ 略号 (はす) 四〇〇円

乳 房しほり 略号 (うは) 四〇〇円

鼻 責めと緊縛 略号 (うい) 六〇〇円

木 馬責三態 略号 (もく) 四〇〇円

椅子 責めの果て 略号 (いす) 四〇〇円

檻 に入れた女 略号 (もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青 略号 (よな) 六〇〇円

鼻 いじめ三態 略号 (はね) 四〇〇円

鼻 責め万華鏡 略号 (はた) 二〇〇円

碧 玉裸身緊縛 略号 (のん) 四〇〇円

くすくす責め地獄 略号 (きす) 四〇〇円

灼 熱の蠟涙責め 略号 (きそ) 七〇〇円

豊 満な乳房を責める 略号 (きと) 七〇〇円

女 奴隷を飼育する 略号 (きな) 三〇〇円

凌 辱されるマゾ女 略号 (な) 四〇〇円

鼻 責め悦楽 略号 (なむ) 四〇〇円

全 裸強烈羞恥縛り 略号 (なむ) 四〇〇円

猿 ぐつわにあえぐ裸女 略号 (ゆり) 五〇〇円

遠 藤百合子 略号 (ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ほは)

迸はしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 一三〇〇円
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 一二〇〇円
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 七〇〇円
大塚 啓子 略号 (けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 一五〇〇円
山原・東浦 略号 (かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 七〇〇円
大塚 啓子 略号 (けま)

浣腸後カパー装置

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原・東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原・東浦 略号 (かて)

シリントナーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原・東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原・東浦 略号 (かち)

ア・ヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 七〇〇円
山原・東浦 略号 (かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 (うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
美木乃々子 略号 (ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ると)



田の五務好生様、尼崎の藤田公一様、等全国のゴム愛好の皆様、何卒多くの告白文又は通信欄に投稿をお願い致します。
(広島県・呉務老)

貴誌は私個人にとって誠に良き起爆剤

○ 奇ク愛読の皆様には益々張り切っておられる事と思います。小生十年程前からの奇ク愛読のゴムマニヤです。四十二年十二月号の通信欄に掲載された事があります。

五月号の通信欄の加藤様、お願いがあります。文中の、ゴム輝の件について御紹介して頂ければ幸いです。ゴムマニヤは私だけかと思つて長い間悩んで愧しく思ひながらゴム輝等で一人プレイを楽しんでいましたが多く同好者が居られるのを知り気強く感じます。京都の梅川幸子様、南戸一郎様、道具作郎様、大阪の島野土夫様、吹

になつてくれます。歳も四十半ばに到ると妻の若さを充分に満たしてやれません。しかし、毎月二十六日、顔馴染みの古本屋の小母さんから、手渡して貰う貴誌を小脇にした時は別です。幸福を感じます。妻はM気皆無ですが、一緒に床で貴誌をながめる事はします。小生のS性はあくまでもプラトニックなもので、自分で実行する気持はさらさらありません。只々貴誌の世界だけで止っています。貴誌に期待するものは辻村氏、塚本氏の作品及び「奇クサロン」に紹介されるM性の人妻にあります。迫力と夢を与えてくれます。現実

性があり小生と妻とのセックスを充ててくれます。生来小生はS性をもつて内攻型に生きて参りましたので、レズ、女装、女斗、汚物愛好などは好みません。人妻たる身が夫以外の男性の前で全裸に剥かれ自由を拘束され苦吟し、攻略の可能性を想わせる体位を強制されてゐる写真には人間の美を最高に感じます。辻村さん、塚本さん大変でしょうが、今後も人妻を大いに撮ってほしい。苦吟の表情が欲しい。浣腸責めにされる人妻、手足を押さえられてパイプ責めにあう人妻、大の字礫で竹の先にパイプをつけて串刺しにされる人妻(腋毛の濃い人妻)こんなのをやって欲しい。貴誌の発展を祈ります。
(東京都・大崎勉)

○ 最近号は写真の掲載が多くなりSの私としては喜びにたえないところでは。六月号では佐野みさ子さん、渡辺好美さんなどが、女性自ら羞恥態を堂々と発表され、更に和泉五郎さん、宮城隆志さんなどは、自分の妻の写真を公表され文を読むだけでは十分実感がわかない私にとっては、非常にうれしいことでした。ただ、このように沢山の人が誌上で活躍されている

中で、独身女性の発表が少ないのは少々残念です。カメラハントに登場する女性も伊藤嬢を除いて殆ど人妻であるし、女性の投稿もやはり人妻が多いようです。人妻には一種のなめやかさは確かにありますが、独身女性の、自らの体験による発表は、もっとちがった意味での美しさがあるように思います。また最近号は写真が多くなつたのですから、一挙にグラビアで二、三頁の写真欄を作られることを希望します。大分前の関谷富佐子さん、川路叢子さんなどの被虐ポーズなどについては、カメラハント、カメラルポに文章とともに掲載されるのも、又それなりに価値があります。その一部の中で特にすばらしいフォトについてはグラビアで鮮明に大写しの形で掲載されるならば、もっとすばらしいものができるのではないかと思います。自粛されることは、それなりによいのですが、グラビアもぜひ必要だと思います。どうぞ御一考下さい。(富山県・山田進)

○ 小生は三十九才になる商店主で奇クの二十年近くの、渋沢竜彦につぐサドのファンだと自称しています。その昔、奇クのグラビア全

盛だった頃、小生は気に入ったものを切り取って製本し、二百ページぐらいのものを三冊、保存しています。小生はカメラに強く、現像、引伸しはプロ級の腕前です。グラビアの中の梨花女の緊縛写真を合成して迫真のボルノグラフィを作って、一人ながめ浮気心をくすぐっています。小生愚考するにセックスのともなわないプレイは気の抜けたビールと同じで、「花と蛇」が、すべての読者を魅了しているのが、それを証明しているし、それがまたプレイとしてのサジズムの神髄だと信じています。小生のいる横浜という土地がらのせい、西欧やアメリカのボルノも数多く手にはあります。ことに西欧のものは、細こそかけてありませんが、心理的なサジズムが多く、その殆どが複数で、男二人、女一人その逆もあり、中には男三

〓御送金についてお願い〓
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に「振替等」の方法もあります。ご利用下さいます。尚、便宜上「切手代用」にても結構ですが、必ず「割増」にてお願い致します。

人、女三人などもあります。

(横浜市・屋野英太郎)

○
ドライブウェイに勤務する三十才の男性。奇クファンになって十数年になります。私は映画や奇クなどで女性の緊縛場面を見かけますとたまらなくなります。全裸高手小手、海老責め、股間縛り、吊り責め、鞭打ち、顔が変型するほどの強烈な猿ぐつわ。羞恥と苦痛で身悶える女性の姿ほど美しいものはないと思います。塚本さんや辻村さん達のように、M女性を思う存分に責めることができたなら……と思っていますが、安サリマンでは実現しえない夢ではないでしょうか。カメラハントや読者通信などで色々なことが書いてありますが、ほんとうにM女性がおられるのでしょうか。六甲山の立木を利用してM女性と一度だけでよいからプレイができないものかと私は夢を見えています。人に見つかりはせぬかと心配しながらプレイをするのも、いいものではないでしょうか。近隣のサラリーマンの方達でSMについて話し合える会のようなものができるとを期待しています。

(兵庫県・有馬清)

○
伊藤圭子さんのごときことが起きる危険が多分にあるから、愛媛の鈴川露子さんをはじめ多くの女性たちは「操」の問題が災いしてまた逆に男性の場合は、大抵、社会的暴露を恐れて消極的になっていく。それにしても女性上位の現代風潮を受けてか、M女性の方がS性男性から相当に積極的の面が昨今の本書に見受けられるのはどうしたわけだろうか。いずれにしてもルール違反の危険が往々に現実化し、他方は自由の身ではないため危険はなまの問題となってしまうのであるが、やはりプレイヤ―はプレイヤ―として、あくまでも忠実であることが望ましい。しかし、ただ望ましいと言えるだけでだれもそれは保証はできない。とすれば、かえって安全が保証されていないところに、すなわち、そう言った危険が襲いかかってくるかもしれないというスリル、不安感というものが、ムードを盛り上げてくると受けとることができ。さすればハプニングもあながち否定、批判できないが、やはりそれは、あくまでもハプニングの域にとどめておくべきであって、先ずはルールにしたがってプレイ

は運行されるのが常態であろう。女性をいたぶるのを好む性向であるとはいえ、いたずらに傷をつけたりするのは好まない。おかしいことに血を見るのが嫌いで、内臓手術や交通事故の様子は、とてもいただけない。小生の好むプレイの一例を挙げれば、サポテンやバラのトゲを利用して痛めつけるものや、浣腸を利用する場合は多量に用いて強烈な苦しみを与えるよりは、少量の投入でジワジワと長時間、我慢させる仕方である。サポテンのトゲの入り乱れた下着を着用させて散歩させ、途中でさすったり叩いたりするのも、また面白い作業だろう。と、そんなことをよく考えることがある。チャンスがあつたら実行してみたいと思っているが、今のところそれが無いのが残念である。

(横浜・佐渡正治)

○
初めてお便りさせていただきました。私は川崎に住む二十才になる男です。未だプレイの経験はありませんが、私のSM感を申しますと、女性美の最大のポイントである乳房を如何に強く変形させるかという乳房責めこそ、女性が最高にきれいに見える責めではないで

しょうか。また女性を縛るときはオールヌードだと美しさが半減するのではないでしようか。赤いお腰、小さなパンティをつけた女性を縛って始めてきれいな緊縛姿を見る事ができると思います。女性性を全ストにするのは、股裂、足挙げ等、女性が最も浅ましく見える責めに限ります。私が常に思う責めは前記の他に流腸、鼻責め、毛剃り、蠟涙責め、恥辱責め等です。体に傷をつけずに如何に強く責めるか、これが私の信条です。最近、女斗美同好者の投稿や、またはフォトが減りましたが、残念でなりません。「二人妻」も終わりに淋しくなりました。他愛もないことを書きましたが、M女性の皆様、女斗美に興味のある皆様の御理解ある一報をお待ちします。

(川崎・物好男)

期待して見にいった「ミニミニ大作戦」L女性愛好の金塊強奪一味で電算機混乱担当のピーチ教授にまつわる女性達、女中、誘惑見本のオープンカー上の二人。中でも庄巻は市電同乗の女性。警察署？入口で難渋している超ヒップを押してやる教授のシーン。唯一の収穫は作戦会議も上の空の教授

が見ている本！これが色刷りのL女性グラフィック雑誌！外国には、こんな素晴らしい本もあるんですね。なにはともあれ、L女性ファン必見の映画！それにしても未だ目に残るは、あの巨大なるヒップ！

(滋賀・赤畑修造)

初めてお便りいたします二十一才の未婚女性でございます。前々からお便りしたいと思っていたのですけれど、何も経験のないことばかりなので、いつも皆様の書きになったものを読ませていただいていたばかりおります。でも先月初めて、嬉しい体験をいたしました。私が少し風邪をひいて近くの内科医院に参りました。そのとき私の順番より、二人ぐらい前の方が流腸されているらしく、ドア越しに、よく様子がうかがえるのです。「あなた今度も同じ？」どのぐらい便秘しているの？」「七日ぐらい前からです」「少しスポーツでもやりなさい」「家の人にいちじく流腸をしてもらったのだけど、やはり通じがなくて……」「流腸液をあげるから、流腸器を買って、もう一度、家の人に流腸してもらいなさい」「家の人に頼むのは恥かしいから嫌です」「同

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

片脚挙げて晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

流腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

流腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強制流腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

流腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

流腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

じじゃないの。じゃ浣腸してあげましようね。では横になって」などと聞こえてくるのです。もし私も便秘すれば、あの方のように浣腸してもらえらるのだと思うと何か嬉しいような気持ちになりました。それから数日たって、私も便秘になったので、その医院へ行きました。そして先生に「三日ぐらい、お通じがなくて……」と言いますと、「どうします。お薬を飲みますか、浣腸しますか」と言われるので思わず私は「浣腸をおねがいします」と言ってしまうました。私は初めて見る浣腸器の薬液に、まごまごしてしまいました。そして恥かしさと苦痛、それから粗相の不安で今までにない経験をしました。(川崎市・笹尾美子)

素敵な奇ク読者のみなさま。初めてお便りする二十才の女の子です。女の子なんかと馬鹿にしないで下さい。近頃の男の子より、わたし達の方が興味に対して積極的な風俗風習の時代ですから……。お便りしましたのは、素晴らしい中年紳士族とSMプレイをしたかと思つたからです。売り込むために自己紹介しますわ。身長は一五九、バスト八二、ウエスト五九、

ヒップ八五。肌は小麦色です。

(広島・絵川ルミ)

今、私の胸は小刻みに震えております。皆様私の悩みを叶えていただくようと勇気を出して筆を走らせています。私は異性から恥かしめられたい、責められたいという、いわゆるマゾの性癖に苦しみ続けています。学生時代は体操部に籍をおいた私です。うぬづかたもしれませんが、少なからず身体には自信を持っております。身長一六二、体重五六、バスト八二、ウエスト六〇、ヒップ八九のサイズから、お察し下さい。まだ一度もプレイの経験のない私は、空想だけの世界に想いを寄せ、あれこれ連想します。貴男の命令調の言葉におろおろと着衣を脱ぎ、ブラパンの状態になった私を後手にしつかりと縛って、貴男の手がブラパンに伸びます。いよいよ私は生まれたままの姿です。私の肌のぬくもりのあるそのパンティを無理矢理、口にねじ込み喰ぐつわを噛まされます。自由を奪われた私はもう貴男の思い通りです。後から抱きすくめるようにして貴男の手が乳房をもみほぐし全身を舐めまわすのです。また女の表情の象徴

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆろ

全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高手小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よた

ともいえる鼻をつまみ、鼻いじめに会うのです。そして恥かしいポーズをとる様、貴男は情容赦なく命令するのです。この他、交った趣向で私をいじめてやろうと思われる方は、その方法を発表して下さい。
(播州・栄山あつ子)

橋本義也様。お元気で過ごしのことと存じます。先日のお便り本当に嬉しく拝見させて頂きました。でも私は誰かに見られて浣腸されてみたいという願望が強くてこの頃は複数プレイばかりなのです。お求めの独りプレイのアイデアはなかなか思い浮かびません。橋本橋が恥かしそうに医院の一室で女医先生と看護婦さんから浣腸されているところや、また橋本様の自宅で、お母様やお姉様から、妹達の見ている前で浣腸を受けているところなどを想像すると、楽しい気分になります。それから浣腸器はできるだけ大型のものがよいと思います。アヌスにかかる重量感が感じよいからです。でも夢想で、あの時あの人からイチジク浣腸してもらったと、その折のイチジクをお使いになった方が、そのときの感触をお楽しみになられ

ると思います。これから暑くなる季節です。グリセリンの粘っこさが何となく嫌らしくなります。ドナンだと苦しすぎる気がします。そのようなとき、食塩浣腸が何となく、よいように思われます。人によって感じが違うかもしれません。量が、百CC〜二百CC以上の大浣腸ができて充分に効くからです。それからグリセリンなどが切れたとき、手軽に手に入ることです。お友達の家へ浣腸器を持参しただけで、簡単にプレイができます。橋本様。プレイの様子を、もう少し詳しくお知らせ下さい。
(大川恵子)

佐野みさ子様、ぜひ、美しい貴女とSMプレイをしてみたい。私のDPE技術を駆使して、恍惚とMに溺れるみさ子の美しさを永久に保存したい。望みが叶うなら、できうる限り最大の犠牲と代償を惜しまぬ。夫以外の男性の前で全裸を晒すだけで全身が快感にふるえるとおっしゃる貴女の感受性を最高に利用して、みさ子様が氣を失いそうになるような羞かしい記録を撮影して永久に貴女と私の宝物として秘蔵しようではありませんか。パイプや浣腸で悶える貴女

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もえ

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もゆ

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もよ

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もす

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もせ

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もれ

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もる

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もて

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もな

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もね

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もむ

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もう

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もき

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もこ

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もみ

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はゆ

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はよ

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はて

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はお

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はの

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はひ

を、できるだけ大きく引き伸した
フォトにして愉しみましょう。

(神戸市・乃見対造)

7月号でまず気づいた点は、奇
クサロンの充実では、ないだろう
か。以前から見ると、ページ数と
写真の増加、充実を感じる。浅田
氏の連載物は、いつも楽しく拝見
させていただいている。また須坂
氏の緊縛画は大変美しかった。ま
た和泉氏の文には迫力があつた。
今後ともこれをつけ、読者間の対
話をはかつて欲しい。言いかえれ
ば、編集者からのトップダウンば
かりでなく、一般読者からのボト
ムアップによって、ますますの発
展を願うものである。本文では、
関谷富佐子嬢の告白が読ませた。
華麗なる写真とも相まっての迫力
ある文章に、非常なる新鮮さを感じ
た。すべてのモデル嬢では不都合
があるかも知れないが、今後各
モデル嬢の告白連載をぜひお願い
したい。またこの他にひたむきの
夜、プレイ・レポなど、写真つき
告白も楽しかった。現代はマスメ
ディア時代とも言われているが視覚
に直接ひびく写真の増加も、今後
ぜひ望むところである。

(三重県亀山市・藤哲也)

橘京子様。七月号読者通信欄の

貴女の呼びかけにお応えします。

私は、三十五才のS男性です。貴
女の望まれる緊縛の姿態を、私も
又カメラに、是非納めたいと願っ
ております。大の字縛りはもちろ
ん、開股縛り、海老縛り、片足吊
り、股間縛り、開股両足挙げ等々
あらゆる貴女の若さに溢れる緊縛
姿態を、ファインダーに捉えてみ
たいと、思います。SMプレイも
二度程経験されたそうですね。私
も十数年の奇ク愛読にもかかわら
ず、五回行なったのみで、最近ほ
もっぱら、辻村氏のカメラハント
に夢を託しているような状態です
が、貴女の読者通信に強く刺激さ
れ、早速ペンを採った次第です。
お返事を待っております。

(大阪・大木喬)

五月号に載せていただいた写真
で私が着用している総ゴム製の力
バーは、ダンロップ印のものに自
分で股ぐりにゴム紐を入れたもの
で、健康者むきに見える唯一の品
として私の自慢の品です。これが
最近破れてしまい、予備品を使い
始めたのですが、手持ちが無いと
困ると思い、メーカーの営業所に

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はわ

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はふ

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はほ

悦唐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はあ

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はう

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はさ

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はめ

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はし

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はも

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はむ

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はめ

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はも

ムチ打ちの陶醉境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はさ

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はし

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はす

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はせ

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はゆ

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はた

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はち

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はつ

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はて

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はと

自分で買いに行きました。五月十八日のことでした。以前に一度行ったことがあるので見おぼえもあり、店はすぐ見つかり、ドアをノックして出て来た女性に前回のよう「おしめカバーをいただきましたいのですが」と言いました。ところが様子が変です。その女の子はびっくりした声で中の方に向かって「いやーね、おしめカバーだってさ……」と叫んだのです。すると奥の方で男の声が出て「宇都宮さんのお客だよ」女の子がだまって指さした入口のドアを良く見ると全く別の社名が木札で打ちつけてありました。シマッタと思って逃げるように退出し、すぐ近くのビルに移転していた宇都宮製作所の東京出張所を発見し、目的のMサイズ総ゴムカバーを二枚買った次第です。ところで私はこれでこの会社製のカバーを六枚買ったことになりました。そして、いつも恐れているのは、要需が少なすぎて生産中止になるのではないかということです。今までの所では無事ではっとしていますが、何分にもビニール全盛の現在、ゴムカバーの味を知らない世代が多くなってきているので心配です。ご自分でお使いにならずともプレゼントしたり

紹介してあげたりして、ただ一社だけになってしまったゴムカバーの伝統を、守りましょう。照会先は、東京都千代田区神田二丁目十六番十三号（神田ビル2階）宇都宮製作株式会社東京出張所、電話〇三一二五六―七八〇五番です。（東京都杉並区・岩手信夫）

ベタ惚れの七月号。読まれる奇クとしての快作は「花と蛇」を番外にしても、無題を二題のセトヨシヤ氏、愛の貞操帯（懸賞入選）工月玲子夫人、餌の味の浅羽やし氏等、正に価値ある文章。見る奇クとしては、佐々木真弓の美しさ最高、ひっかけられた辻村氏に羨望を感じ。私なら跡始末に犬と化すものも惜しい。関谷富佐子の成熟ぶりも、また真弓と違った甘味有り。が、パンティをずらせて欲しかった。三条剛氏のSMフォトも冴えて、5、6の正面フォト耽美。長井氏のエミ子も良し。菱紋様の大橋美代子も良し、しかしもう少し、下腹の丸味が見たかった。浅田守氏の奈津子良し。いつもながらの佐野みさ子、ひきしまった美しい肉体を大胆に開く、彼女に魅せられる。彼女とSMプレイをやりたい。良いフォトが多か

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号△てき▽	後手裸身柱縛り 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号△てか▽	縄目にあえぐ裸女 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号△てく▽	豊麗な裸身をくびる縄目 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号△てこ▽	後手高小手縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号△てま▽	長襦袢の緊縛色模様 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号△てみ▽	緋の腰巻緊縛色模様 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号△てむ▽	猿ぐつわに呻く女 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号△てめ▽	柱宙吊り強烈縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号△ても▽	ポリウムを縛りあげる 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号△てん▽	縄に苦悶する裸女を狙う 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号△てる▽
縄に悶える緊縛色模様 大手札二枚一組 略号八〇〇円 東浦・大塚 略号△うて▽	真紅の腰巻着用縛り 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号△うこ▽	華麗なる緊縛裸身 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号△るむ▽	みだらな開股縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号△るの▽	責めに疲れた諦観 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号△るお▽	真紅の腰巻姿で緊縛 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号△るま▽	羞らいの真正面縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号△るけ▽	若肌に喰い込む縄目 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号△るふ▽	高手小後手縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号△るや▽	股間縛りの開股姿態 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 中河 恵子 略号△るよ▽	羞らいの股間縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 中河 恵子 略号△るれに▽

ったためかカット絵少なし、春川ナミオ氏、豪城二氏良し。美女が排泄を強要されているカットを望む。
(神戸市・大西弘明)

わたくしが富山からおたよりし
てから半年以上になりましたが、
今度わたくしは大阪のスナックに
働きにやってきました。大阪はあ
んまりにぎやかで驚きました。わ
たくしが、またお手紙しましたの
は5月号がよかったからで、特に
「花と蛇」「女狐」が胸を打ちま
した。「女狐」がいいと思ったの
は、お腹にサラシを巻きつけられ
て、両方から端をひっぱられてお
腹を締められ、出してしまいう排
泄シーンでした。また、「花と蛇」
の方は珠江夫人に責めがまわって
新しい感覚が生まれそうで、良か
ったと思いました。静子夫人と珠
江夫人が開陳させられて並べて批
評されたうえで、肝心なところの
人拓をとられて恥しがるシーンが
読みたいと思います。静子夫人が
派手なバラなら珠江夫人は桜のよ
うに楚々たる花。わたくしは？で
すって。いやあね。ご想像にまか
せます。わたくしはS半分M半分
の女の子らしいです。どなたか若
い方で文通友達になって下さい。

文を書くのは下手くそですけれど
本当に誰か、文通のお友達になっ
て下さい。
(富山市・曾根葉子)

中村純子(?)さん、遅まきな
がらお便り拝見。私は貴方の御意
見と全く同調するものです。出来
得れば奇巧誌の一隅を載いて貴方
との「女装同志の責め」を展開し
たいものです。実際の私はフォ
トよりも随分と落ちる「女性」な
ので、若々しい貴方が相手ではひ
とつ鬼婆の役でもやりますか。だ
が、きつと一風変わった嬉しい責
め写真ぐらいは創れるだろうと思
います。さて私の厚かましい「挨
拶がわりの申し出で」を受けてく
だすってありがとうございます。残
念ながら他の方は受けてくださら
なかった。で其処は適当に選んで
拙い小型フォトながら数葉、本誌
宛回送願って送付しました。編集
部の方甚だお手数の事ながらよろ
しくお願ひ申しあげます。身勝手
の段、なにとぞお許し下さい。

(大阪・井風呂秋於)
左海敏江様、同じ西宮の空の下
に貴女のような女性が存在されると
いう事実が、つい私にペンを取ら

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れや▽

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れゆ▽

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れえ▽

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号△れぬ▽

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号△れね▽

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号△れの▽

豆絞りの猿くつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号△れむ▽

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やか▽

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やき▽

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やく▽

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やも▽

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やし▽

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やみ▽

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号△なる▽

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号△ぬめ▽

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号△ぬね▽

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しい▽

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しみ▽

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しけ▽

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しこ▽

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しら▽

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しれ▽

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しわ▽

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号天星社宛へ願います。

せました。私は三十才になるデザイナ―ですが、「奇ク」を愛読し始めて、数年になります。私はS傾向で、今迄プレイメイトに色々試みたのですが、やはり貴女のようにプレイに理解のある女性でないと仲々思う様に事が運びません。それに貴女の責めのプレイだけでなく人間的な面も大切にしたいと云う意見に賛成です。近過ぎる事が、かえってプレイの場合、逆効果になる場合もありますが、貴女のお返事、楽しみにしています。

(西宮・大川昌弘)

奇ク六月号読了。さっそく感想を書いてみたいと思います。鳴山能平氏の「猿ぐつわの……」における絵は、とてもすばらしい。しかし絵の中に出てくる男が女に比べてひんじやくであるのが気になった。内容については深夜放送の参考になるでしょう。自分では場合によりSMのどちらにもなり得ると思ってるが、Mの小説はどれも陰気でおもしろくないと思っ

いろんな傾向のバラエティにとんだ内容は賛成ですが、暗いじめじめした作品よりも、なんとなく生氣や夢がわいてくるような小説に比重をおいてくれませんか。S小説においても一種の明るさがあればよいと思います。(たとえば、「花と蛇」等)辻村隆氏の「SMカメラ・ハント」は塚本鉄三氏の「カメラ・ルポ」(金髪碧眼の美女を縛る——すばらしい写真をありがとう)のかげにかくれていたが、伊藤さんの羞恥は、すぐパッパッと、ぬいでしまう女より、よっぽど新鮮で親しさを感じたほどであった。読んだあとにはほのぼのとした明るさがあった。「花と蛇」については最近ページ数が少なくなってきたのでがんばって下さい。それでは来月号を楽しみにしております。

(東京都杉並区・堀真彦)

川の江市の越智かおり様のお呼びかけを読みました。秘密を守り心ゆくまでプレイ相手が出来る男性を、私が自信を持ってお世話したいと記されておりましたが、同月号のM派交友録の戒めのようなことになってしまふのじゃないでしょうか。三人プレイなんて、か

編集部特写緊縛女体資料

逆さ吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ 五〇〇円

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ 四〇〇円

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 略号△さい 四〇〇円

妊婦の全裸縛り全身

大手札三枚一組 略号△さい 四〇〇円

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 略号△さみ 四〇〇円

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 略号△さる 四〇〇円

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 略号△さま 四〇〇円

膨満の妊婦乳房責め

大手札三枚一組 略号△さむ 四〇〇円

臨月腹の全裸晒し

大手札三枚一組 略号△さち 四〇〇円

躍動する妊婦の裸像

大手札三枚一組 略号△さほ 四〇〇円

妊娠という異常美の女体

大手札三枚一組 略号△さへ 四〇〇円

見てほしい臨月腹

大手札三枚一組 略号△さと 四〇〇円

妊婦全裸の全身肢体

大手札三枚一組 略号△ささ 四〇〇円

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 略号△れろ 四〇〇円

柔肌の高手小手縛り

大手札三枚一組 略号△れほ 四〇〇円

後手首を縛られた少女

大手札三枚一組 略号△れへ 四〇〇円

飼育された美少女縛り

大手札三枚一組 略号△れと 四〇〇円

縛られた美女二人

大手札三枚一組 略号△とそ 四〇〇円

小池・松山二嬢

大手札三枚一組 略号△とれ 四〇〇円

白肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号△とわ 四〇〇円

一糸まとわぬ柔肌縛り

大手札三枚一組 略号△とら 四〇〇円

開陳した華麗縛り肢体

大手札三枚一組 略号△とゆ 四〇〇円

縄に喘ぐ諦観の相

大手札三枚一組 略号△とえ 四〇〇円

おりさんの夢でしょう。一糸もまとうことを許されないで仰臥させられ、茹玉子のようなお尻の下に枕を当てがわれて一人が私の乳房を吸い、一人がアヌに屈みこみながらガラス棒を、最後の一人が「駄目よ！ 汚いわよ、許して」と絶叫する私の一番恥かしい個所に唇を、と思うと。いやですわ。夢ですわね。ご紹介してあげるなんて、おっしゃりながら、ご自身のご経験に触れていらっしゃらない越智さんはずるい方だと思えます。再度のおたよりをお待ち致しております。

(神戸市・左根敏子)

貴誌の愛読者になって早や三年になります。社会的責任のある立場にあるため、みだらなことはできなくなりましたが、生来のSの願望は押えることはできません。貴誌に登場するMの女性を自分が代わって責めている場面を想像して、満足をしておりました。四月号の佐野みさ子様、前田カオル様を知り、いまや想像するだけでは満足できず、右の御二人にかぎらずM女性を思い切って責め抜いてみたい衝動にかられております。肌を傷つけることは好みません。

最も好むのは、女性に屈辱を与え、また逆、開股責め、バイブ責め、ク責めなど、ゆらめく光の中で、貴女の屈辱と欲びに満ちた顔が映し出されるとき、最高の耽美の世界が作り出されると思います。富山市、金沢市の近くにお住いのM女性の方々、SMという共通の話題をもって一度プレイをいたしませんか。貴女の押さえていた被虐の心理を満足させるような色々試みたいと思います。

(高岡市・山田進)

私は奇巧の長年の愛読者でM性の35才の妻帯者です。現在、某会社の役員をしており、社会的な立場もあり迷っておりましたが、同好者の雑誌故に、思いきって投稿しました。どなたか私を飼育して下さい。女王様は、いらっしゃいますか。さる女王様は、いらっしゃいますか。プレイとは、およそ次のようなものです。まず女王様の前で全裸にされ、ロープで縛られ、ムチ、ハイヒール、ローソク等、さまざま責めを受けます。声を出せば女王様の汚れた下着で猿ぐつわをかまされ更にムチが加わります。やがて失神状態となり、女王様の御

SとMの甘い一瞬	抱擁する美女二人
大手札三枚一組 略号△とさ▽	大手札三枚一組 略号△とや▽
松山・小池二嬢	ミキとマキ
縄に通う愛情の焰	柔肌と柔肌のレズ狂態
大手札三枚一組 略号△とけ▽	大手札三枚一組 略号△とよ▽
マキとミキ	ミキとマキ
相愛の極致を描く二女	緊縛麗姿に映えるライト
大手札三枚一組 略号△とな▽	大手札三枚一組 略号△こほ▽
マキとミキ	佐々木真弓
鞭に狂う悦虐表情	臀部強調後手縛り
大手札三枚一組 略号△らて▽	佐々木真弓
関谷富佐子	羞恥に悶える全裸緊縛
鞭打ちにうねる肢体	大手札三枚一組 略号△こに▽
関谷富佐子	佐々木真弓
足吊りの被虐肢体	ホステスの緊縛姿態
大手札三枚一組 略号△らえ▽	大手札三枚一組 略号△こち▽
関谷富佐子	二つ折りで責める女体
美しきマソの境地	佐々木真弓
大手札三枚一組 略号△らせ▽	佐々木真弓
関谷富佐子	脈打つ全裸の臨月腹
裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組 略号△こふ▽
大手札三枚一組 略号△こよ▽	中河恵子
佐々木真弓	臨月腹の革紐股間縛り
乳房強烈膨隆責め	大手札三枚一組 略号△こや▽
大手札三枚一組 略号△こわ▽	中河恵子
佐々木真弓	猿轡の臨月妊婦腹縛り
海老責めに苦悶する	大手札三枚一組 略号△この▽
大手札三枚一組 略号△こお▽	中河恵子
佐々木真弓	卓上の股間縛り狂態
全裸の緊縛全身晒し	大手札三枚一組 略号△こそ▽
大手札三枚一組 略号△こる▽	長井葉津子
佐々木真弓	羞恥の足挙げ責め
煙草責めに喘ぐ女	大手札三枚一組 略号△これ▽
大手札二枚一組 略号△こぬ▽	長井葉津子
佐々木真弓	

次号（九月号）は七月二十五日に発売いたします

神水を拝受して正氣をとり戻します。今度は女王様と数人の供女の前で自慰行為を強制されます。女王様は、さまざまなポーズを、カメラにキヤッチします。やがて恥かしい行為にふける私はエクスタシーに達します。つまり肉体的責めと同時に精神的な被虐を求めているM男です。どうか私の夢をかなえて下さい。

（名古屋・佐々木浩）

六月号のカメラハント「ひたむきの夜」佐々木真弓の巻、辻村氏独特の読物、楽しく読みました。ぼくの好きな乳房中心の縛りが多く、真弓の乳房の見事なこと、この写真集は乳房賞めファンや真弓ファンとしては、最高のものだろうと思います。関谷富佐子の「告白」（いけにえになった富佐子）は、自分のM性を赤裸々にさらけ出した富佐子の姿が、よく書きつくされております。これからもMの女性の体験として多くの読者の皆様に知らせて下さいませよう、おねがいします。

（埼玉・阪東太郎）

○

広田玲子さんの手記を読んで、その気持が良く分かり、楽しくなりました。貴女は女性との流腸プレイを望んでおられるようですが男性の流腸にも興味を持ってもらえることは、ほんとうに流腸が好きなのですね。今度は御自分の流腸日記を発表して下さい。たのしみにしていきます。流腸の好きな貴女と文通できたら、と思います。

「無題を二題」のセト・ヨシヤさんの文中、読者通信での呼びかけに対して、自由に交際できるようにしたら……というところ、大賛成です。宮城昌子さんの画は実感的で良いですね。イメージ画といっているけれど、何だか自分の写真を見ながら写しているようで楽しいです。これから、どんどん写真をとってかいて下さい。神戸MYさんの告白は、妻が他の男性とプレイするのを目撃したいという願いです。外国におけるスワップिंगの、前触れではないかと思えます。富士道子さんのふんどし談。貴女もアヌスの感覚が良いのでしょうか。彼にそう言って責めて

もらってごらん下さい。きっとまた別の世界が開けて来ましょう。流腸からアヌス責めへ、エスカレートするのは当然の姿です。流腸の好きな人は皆そうなることを願います。西条夏さんの「A感覚の世界」は最後の、最早アヌスエロティックは異常でも何でもなくなりつつある……その通りでこれからは当然のこととなるでしょう。

（高崎市・和田エネマ生）

○

京都の公立の大学に籍を置く学生です。別に何一つ不自由なことはないのですがM的な女性の友達がいらないのだけが残念です。ノーマルな女性と話をしても、何かしらもの足りなさを感じます。かといってノーマルな女性をSMの世界へひきずり込むことは、やはり罪な気がします。それよりも先天的にM的な方か、あるいはSMの世界にすでにいらっしゃる方と、お付き合いしたいと思っています。プレイだけでなく様々なことについて話し合いたいです。趣味は多彩ですが、特に絵が好きです。気が向いたら、おたより下さいね。お待ちしております。

（京都・松本保男）

○

大阪の清水民子さん。はからずも七月号誌上で、おたよりを拝見しました。お互いに好き合って結ばれ、夢多かるべき新しい人生がナンセンスな理由で破綻とは……ご同情にたえません。何事につけ進歩的な現代ですが、正直いって男性一般の感覚としてなら、毛ぎらいするという風潮もいまだに根強いものと思えます。ですが、あなたの誌上文を拝見したとたん、私は思わず目を輝かせて食い入るように見つめたものです。なぜって実は私、かねてよりあなたのような女性にあこがれ……というより飾りのない女体の礼讃者だからです。私みたいな者は数少ないはずですが、清楚な姿を希求する男もいるということをお伝えして、決して劣等感などお抱きにならないよう、励ましてあげたいなりました。私の憧憬心については、かつて本誌々上のエッセイでも触れたことがあります。楚々としたその部分に私は新鮮な個性美を感じます。残念ながら年々歳々、あなたのようなお方は減少していくよう、今日まで本当の姿を見たことがありません。だから、なおさらあこがれも強く、私にとっては貴重な存在だといえます。折あらば

あなたのようなお方をモデルに、その美しさを詠いあげたいと思っています。すでにテーマとして扱ったこともあります。ご希望でしたら読み物をさしあげますゆえ誌上でご連絡下さい。

(京都・保藤久人)

○初夏の風を身に受け乍ら奇ク七月号を手にも軽く身も軽く(買物をしたのでオケラ)足取りも軽く我が家に急ぐ。毎号楽しみにしている、「花の女斗美たち」頁を開けるなり読み出した。そのうち未完という字が終と出ているのに

気がついた。私はもう一度その終という字を眺めて、再び読み始めの頁に戻り挿絵の下を見た。最終回と出ている。瞬間に寂しさを感じた。毎号、楽しみにしている娘相撲物語も、本誌から去って行く時が来たのかと思うと、より以上に永い間、続いた「奮斗士好太」氏の努力が痛切に感じられてならない。奮斗士好太氏の物語が終ってしまうと、次はどんなのが連載されるのか、相撲マニアとして寂しく思う。何はともあれ、この頁をかりて、奮斗士好太氏の永い間の御苦勞を、心から感謝する次第

です。ありがとうございます。再び大作に取り組んで、相撲マニアと六尺揮愛好家を楽しませて下さい。絶体に約束して下さいさる様、念じます。

「花の女斗美たち」のカットに、未熟な挿絵を御使用戴いた一人として、感謝しております。今後、小生上に寂しく感じます。今後、小生も奇クの皆様に楽しんで戴けるような写真や絵なり通信を送らせて戴きます。奮斗士好太氏の今後の御健康と御活躍を祈ってペンを置きます。編集部の皆様、次回からの女斗美に期待してますよ。頑張

って下さい。奮斗士好太氏。バンザイ、バンザイ、バンザイ。

(真和志ノ男)

○六月号で並原新一様の「Mの道程」は興味深く拝読しました。特に同じような体験を持つ私は、充分に満足しました。私は幼いときのことを、まざまざと思い出しながら、この筆をとっております。似たような御経験のある方は、どうしお知らせ下さい。奇クもこういう面で新しい分野を切り開いて頂きたいと切に願うものです。

(東京都・服部庄一)

本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少なものとありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送申し上げます。

昭和40年7月号	(送共三二〇〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇〇円)

昭和41年7月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年4月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年5月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年6月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年7月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年8月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年9月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年10月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年11月号	(送共三二〇〇円)
昭和42年12月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年1月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年2月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年3月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年4月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年5月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年6月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年7月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年8月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年9月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年10月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年11月号	(送共三二〇〇円)
昭和43年12月号	(送共三二〇〇円)

昭和44年1月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年2月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年3月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年4月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年5月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年6月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年7月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年8月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年9月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年10月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年11月号	(送共三七〇〇円)
昭和44年12月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年1月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年2月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年3月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年4月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年5月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年6月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年7月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年8月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年9月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年10月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年11月号	(送共三七〇〇円)
昭和45年12月号	(送共三七〇〇円)

編集後記

○懸賞入選として、レポート『六つの性欲』
 三木京助を採り上げさせて貰いました。
 原書による自己翻訳であるそうで、楽しみな
 がらにしろ、その研究の労は多しなと思
 います。出来るだけ正確に訳したつもりだ
 が……との但し書きがついていたことをこ
 こでご紹介しておくと同時に、この作品が至
 極真面目な研究だけに整理部からも一言。即
 ち、折角の力作でありながら、引用文と自己
 意見との区切りが極めて不明確で、しかも口
 語体と文語体が混合していたため原稿の段階
 に於いては難解この上ない、といった過言で
 はなかったといえます。この傾向はまあある
 ことなのですが、こういう研究レポートの際には

明確度が特に欠くべからざることでしよう。
 従って三木氏のご投稿については、原稿上に
 於いてのみ整理部にて、出来るだけ正確に整
 理したつもりだが……の但し書きが必要だ
 と思います。右、念の為。……ナンテ四角張
 っているけれど、なんのことはない結局は不
 勉強な人間の間違った推定だった場合の逃げ
 口上、つまりは自信が持てないってわけ。
 それにしても、こういう種類のものは別個の
 面白さがあるようですが、妙に四角張ってし
 まうのは何故でしょう。ごくマジメな研究だ
 から？　あまり仲良くしていない横文字が顔
 を出すから？　海の向こうのヒトが書いて言
 葉が違ふ人種が読んでいるから？……同じ人
 間の欲求に大差はないと思うんですがネエ。

懸賞原稿募集

△体験、告白、手記△

読者の皆さまが自分で親し
 く体験されたことや、かくさ
 れた性癖や性向について語っ
 てみたいと思われたこと、或
 はこれだけ、どうしても書
 き残しておきたいと考えられ
 た事を大胆にお寄せ下さい。
 採用しました原稿には三千円
 以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語△

本誌の編集内容に適した特
 異な素材を駆使した力作をお
 待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これは
 と思う作品は必ず誌上に取り
 上げます。腕試しの意味で奮
 って御投稿願います。採用篇
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判△

本誌に関連したものでした
 ら話題の内容は問いません。
 忌憚なき皆さまの御意見を
 待ちします。採用篇には二千
 円以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、
 単行本或はその他見聞などで
 特に興味をお持ちになった事
 項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採
 用篇には本誌三月分以上又は
 二千円以上の賞金贈呈。
 ◎御送付下さいました原稿は
 原則として返却の求めに応じ
 ないことになっております。故
 悪しからず御諒承願います。
 ◎本文記事中に各種の「懸賞
 原稿募集」を致してあります
 故、御応募の方は項目を御明
 記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿△

巻末の読者通信欄は読者の
 皆さま方のための公共の広場
 として開放してあります。御遠
 慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の榮 ☆

に限り
 予約
 一月分(1冊)三五〇円△送20円△
 三月分(3冊)一〇五〇円△送共△
 半年分(6冊)二一〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書
 店にて一斉に発売いたしますが、入手困難
 の方は直接代金御送付の上、御予約下され
 ば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳
 重包装して確実に発送申し上げます。局留
 の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

八月号 (第二十四巻第八号)
 昭和四十五年七月二十日 印刷
 昭和四十五年八月一日 発行

編集人 杉原 虹児
 発行人 北村 俊夫
 印刷人 村 俊夫

郵便番号558
 大阪住吉郵便局私書函第四十一号
 発行所 暁出版株式会社
 (振替口座大阪四二七八三番)
 (昭和四十二年四月二〇日第三種郵便物認可)
 (昭和四十二年四月二〇日)
 国鉄大局特別取扱承認雑誌第二二〇号

☆ 書店の皆様方へお願い ☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵
 の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の
 健全なる育成に努める各条例に指定されな
 いよう充分に注意して編集いたしております
 ですが、本来成人向として発行を企図してお
 ります関係上、十八才未満の方には絶対販
 売下さらないよう、特にくれぐれもお願
 い申し上げます。